
ゼロの使い魔 ～使い魔は冒険者～

まほうつかい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔 ー使い魔は冒険者ー

【Nコード】

N2033N

【作者名】

まほうつかい

【あらすじ】

その日、ルイズが召喚したのは才人ではなかった。冒険者を名乗るその男が語ったのは、彼女が知らない生き方だった。正史から剥離したハルケギニアで、彼女達の冒険が今始まる！

第一話 来訪（いほうじん）

「諸君、決闘だ！」

薔薇の造花を掲げた金髪の男が高らかに宣言すると、鈴生りに並ぶ群衆がどっと沸く。

ここはトリステイン魔法学院の中庭、ヴェストリの広場。

昼食後の有閑なひと時を彩るイベントに群がる野次馬達の目前に、

『彼女』は内心の怯えを隠してしっかりと歩み出す。

とは言ってもその華奢な後ろ姿からは緊張と若干の恐怖がにじみ出ていた。

知らず己の得物を握りしめるが、『モノ』が『モノ』だけに今ひとつ信用が置けない。

しかし『この力』は本物だ。それを導いた『彼』もまた胡散臭くはあるが本物である。

ならば『彼女』に出来る事はひとつだけ。

この決闘に勝利して、自身の正義を証明するのだ。

けななしの勇気を振り絞り、『彼女』は金髪の男の手前五メートルで足を止める。

観衆にアピールしていた男が『彼女』に気付いて正対し———その手に握った得物を見て盛大に顔を引きつらせた。

「君は礼儀だけじゃなく、常識も知らないのかね？ 幾ら何でも『ソレ』は無いだろう」

男の言葉に思わず同意しかけるが『コレ』は間違いなく『彼女』の得物であり、生命線なのである。

言われっ放しも悔しいので、『彼女』は得物を男に突付けて挑発した。

「間違っていないですよ。貴族の……いえ、男の風上にも置けない汚物をお掃除するんですもの」

普段の『彼女』を知るものが見れば驚愕で顎を落とすに違いない。それは彼らが知るいつもの『彼女』とは何かが違う。

男の額に青筋が走るが音が成るほど強く歯を噛み締めてそれを抑え、気障な素振りで大仰に名乗りを上げた。

「成程、やはり君には教育が必要な様だ。

ならば僭越ながらその役目、『青銅』のギーシュ・ド・グラモンが仰せつかるでしょう」

男——ギーシュの名乗りを受け、『彼女』は踝まで隠すメイド服のスカートを摘んで腰を落として礼を返す。

そして『彼女』はそばかすの残る可憐な顔に微笑を浮かべ、その手に握った『モップ』を掲げて威風堂々と名乗りを上げた。

「ではその性根を、私こと『タルブ村のシエスタ』が叩き直させていただきますわ」

いつしか二人の放つ重苦しい空気に吞まれて静まり返った広場に一陣の風が吹く。

『彼』と『彼の主人』が共に固唾を吞んで見守る中、

「骨の一本二本は覚悟してもらおう！ いけっ！ 『ワルキューレ』っ！！」

「そんなものはとっくに覚悟の上ですよ、行きます！！」

二人の決闘は開始された。

さて、決闘の行く末も気になる所ではあるが、まずはこの奇妙な決闘に至った顛末を語らねばなるまい。

何故貴族とメイドが決闘などしているのか、メイドの自信は何処から来ているのか。

全てを説明する為にはやはり先日の『使い魔召喚の儀式』から始めねばならないだろう。

『使い魔召喚の儀式』とはこの学院の進級試験のようなものだ。

二年生の始めに行われるこのイベントは、魔法使い——古き慣習に習い、メイジと呼ぼう——が僕たる『使い魔』を呼び寄せると言うもの。

『使い魔』を呼び寄せる『サモン・サーヴァント』と言う魔法で召喚されるのは、そのメイジが最も得意とする系統に近い生き物である。

『火』ならばサラマンダー、『風』なら風竜。そのような幻獣でなくとも『水』ならカエル、『土』ならモグラ、と言う風に。

この世界、ハルケギニアに住まう獣を呼び寄せ、使い魔の契約たる『コントラクト・サーヴァント』で従属のルーンを刻み、一生のパートナーにするのだ。

繰り返すが、この儀式で呼び出されるのは主の系統に近いものである。

ならば自分の系統が不明のメイジが『サモン・サーヴァント』を行えばどうなるのか？

「ミス・ヴァリエール、残念ですがそろそろ時間が……」

「あと一回！ あと一回だけお願いします！

ミスタ・コルベール！！」

その答えは『失敗する』。

ひねりも何も無い回答だが少なくともこの少女、ルイズ・フランソワーズ・ド・ラ・ヴァリエールにとっては最悪な答えであろう。

「いい加減にしろ『ゼロのルイズ』！ 僕たちが帰れないじゃないか！！」

「どうせ成功しないんだから諦めろよ！ 『ゼロ』なんだから！！」

二人を取り巻いていた生徒達から上がる野次に、俯いて唇を噛み締めるルイズ。

その姿を見た指導教師のコルベールは運命と始祖を罵倒せずにはいられなかった。

ルイズは魔法が使えない。原因は不明ながらも、全ての魔法が爆発してしまうのだ。

このトリステイン王国屈指の大貴族、ヴァリエール公爵家に生まれながら魔法が使えないと言う現実。

それは彼女に『侮蔑』と『憐れみ』、そして『嘲笑』となって襲い掛かる。

メイジの性質を表す二つ名の『ゼロ』。意味は『成功確率ゼロのルイズ』。

何度失敗しても諦めずに努力を続ける彼女に付けられたそれは、正しく彼女を言い表すと同時に最大の侮辱でもあった。

コルベールも出来れば成功するまでやらせてあげたい。しかしそれは時間的にも忍耐的にも不可能である。

だから彼はルイズにこう言うしか無かった。

「解りました。ですがこれが最後です。

次で成功しなかったら大人しく諦めて下さい」

「そんな！ ……いえ、解りました」

真正正銘のラストチャンスに、ルイズはこれまで以上に気合いを入れる。

緊張でガチガチになった彼女を不安に思ったのか、コルベールは簡単なアドバイスを贈った。

「ミス・ヴァリエール。使い魔は一生を共にするパートナーだ。

『従える』のではなく、『共に協力し合う』ことを念頭に置きたまえ」

「あ…：は、はい、そうですね。

すみませんミスタ・コルベール」

そう言われて、初めてルイズは心の内で『従えてやる』とか『捕まえてやる』と考えていた事に気付いた。

これでは使い魔だって来るはずも無かろう。何せ自分の都合で呼び寄せるのだ。

それも一生拘束されるとなれば、どんな生物とて嫌がるに決まっている。

深呼吸して心を鎮める。

必要なのは使い魔への執着ではなく、生涯の友への呼びかけなのだから。

（お願い、誰でも良いの！ 私と一緒に歩んでくれる『仲間』にな
って欲しいの！）

心中で懇願を繰り返し、ルイズはルーンを唱えて杖を振る。

瞬間、彼女はこれまでとは違う手応えを確かに感じ、

ドカアアアアアアアン！！

今までに無い規模の爆発に瞬時に絶望に落とされた。

また失敗。

これでルイズは進級資格を失った。

留年など実家の姉や母が知れば、即座に実家に呼び戻されることだろう。

そして王国きつての名門を穢した彼女を、一族郎党が許すはずもない。

黒く塗り潰された未来にルイズが膝を屈しかけたその時。

「ん？……おお！ ミス・ヴァリエール、成功しておりますぞ！

ほら、あそこをご覧なさい！」

コルベールの言葉に目をやれば、爆煙の向こうに何やら大きな影が見えた。

ルイズの目が見開かれる。

成功だ！ 彼女は初めて、魔法に成功したのだ！

爆煙が晴れるのもどかしく、ルイズは影に向かって走り出す。

しかし影に近付くにつれその足は徐々に勢いを失ってゆき、遂には呆然と立ち尽くすこととなる。

そこに居たのは人間だった。

春だと言うのに外套を羽織り、黒いチュニツクのような物を着て青く染められた厚手のズボンを着ている。

この辺りでは珍しい黒髪と黒瞳をした顔立ちは目の覚めるような美形でも吐き気を催す醜悪でもない、極々平凡な造りをしていた。

背だけは高い。百八十センチを越えるだろうか？

だが背丈に身体が追いついていない。肉付きの薄い身体はどう見ても荒事に向いているようには見えなかった。

その手には杖も剣も無く、代わりに小さな背嚢を手になっている。どう見ても新品で、中身は入っていない。

硬直するルイズと目が合う。

その時になって彼女はようやく相手が歳若い男性である事に気付いた。

「あ、あ、あんた、誰よ？ 私の使い魔は何処に行ったのよ？」

「……人に名を尋ねるときは、まず自分から名乗るのが礼儀ではありませんか？」

震えながら名を尋ねるルイズに、男は肩をすくめながらそう返す。言葉遣いは慇懃ながら、そこには貴族に対する敬意が一片も含まれていなかった。

「な、何ですってえ！？ 貴族に対してなんて口を！！」

「貴族だと言うのなら尚更でしょう。」

人々の模範たる貴族が真っ先に礼儀を忘れてどうするんですか？

「い、言わせておけば、あなた何様の……！」

「ミス・ヴァリエール、冷静に！ 彼の言う通りですぞ！」

激昂するルイズとは裏腹に、男はあくまでも冷静に指摘する。

なおも言い募ろうとするルイズを押さえ、コルベールは男に歩み寄った。

「失礼、私はトリステイン魔法学院の教師で『炎蛇』のコルベールと申すものです。」

貴方は……？」

「わざわざありがとうございます。私はヤナギダ・トモと申します。ヤナギダが家名でトモが名前になります」

「見た所平民の方とお見受けいたしますが、家名があると言う事は貴族の方ですか？」

「いえ、平民が何かは存じませんが、少なくとも私は貴族ではありませんね。」

「……こちらからもよろしいでしょうか？ 何分突然の事で状況がつかめないのですが」

スラスラとコルベールの質疑に応えた男が初めて困った様子を見せる。

とは言っても眉根を寄せただけで、あまり表情に変化は無いのだが。

「ふむ……では、貴方はトリステインという国に聞き覚えはありますか？」

「……いえ、初めて聞く国名ですね。ええと、ここは日本ではないのですか？」

「ニホン？ ……ううむ、ではアルビオン、ガリア、ロマリア、ゲルマニア、これらの国はご存知ですか？」

「……アルビオンはイギリスの古名では？ 確か、ガリアはフランスの古名だったような……？」

「古名？ いえ、今もそう名乗っておりますが……？」

「……失礼ながらお聞きします。」

「ここはヨーロッパですか？ それとも南北アメリカのどちらか、あるいは中東、アジア、若しくはオーストラリアではありませんか？」

コルベールの答えを聞いた男が不安を滲ませながら聞いてくる。だがコルベールは元より、傍で聞いていたルイズも男が挙げた国名や地域に心当たりは無い。

二人揃って首を横に振るのを見た男は天を仰ぐ。
そして再び二人を見据え、男は最後の質問をした。

「……………今年は西暦何年になりますか？」

「「西暦？」」

「……………いえ、結構です。今ので解りました。信じ難い話ですが…………」

男は諦めたように溜め息を吐く。

それを見ていたコルベールは、ルイズに『コントラクト・サーヴァント』を一旦待つように命じた。

「そんな！ それでは私の進級が！」

「待ちなさいミス・ヴァリエール。どうやら彼は何も知らずに呼び出されたらしい。

この付近の住人では無さそうだし、もしかしたらロバ・アル・カリイエから来たのかも知れないな」

「まさか、エ、エルフ…………？」

「違うとは思うが、とりあえず学園長に相談してみよう。

『サモン・サーヴァント』は成功しているのだし、君の進級も掛け合ってみるから」

「！、お願いします！」

切実なルイズのお願いをとりあえず請け負い、コルベールは事態の推移を見守っていた生徒たちに儀式の終了を告げた。

「これで『春の使い魔召喚』を終わりにします！

皆さんは先に学園に帰っていて下さい！」

「やっと終わったよ…………『ゼロ』の所為で腹ぺこだ」

「ルイズ、お前は歩いてこいよ！ なんだって『ゼロ』なんだから

な！」

口々に悪態をつきつつ、生徒たちは『フライ』の魔法で宙に浮く。それを見ていた男が軽く目を見張って呟いた。

「……驚きましたね、全員『冒険者』とは。

空を飛ぶってことは『キャスター』ですかね？

『神器』の助けも無しに飛べるとは、相当『レベル』も高いのでしょう」

「ボウケンシャ？キャスター？シンキ？

……何の事か解らないけれど、メイジなら『フライ』で飛ぶのは当たり前よ？」

その呟きにルイズが返した言葉に、吃驚したように彼女を見た男は軽く頭を振る。

「どうも私の常識とこちらの常識にはずれがあるようですね。

それで、貴女は飛ばないのですか？」

「……うるさいわね！ 私の勝手でしょ、そんなの！！」

「……私は何か変な事を言いましたか？ どうしたんです突然？」

「うるさい！ 黙ってて！」

みるみる険悪になる空気——もっとも、ルイズが一方的に男に突っかかっているだけなのだが、それを止めたのはコルベールであった。

「お待ちせしました。

ではこの最高責任者である学院長の所へご案内しますので、着いて来ていただけますか？」

「すみません、私は生憎飛べないんですが」

「いえ、大丈夫です。少々歩きますが、それ程遠くありませんので。

……こちらです、参りましょう」

そして日の落ちかけた草原を、奇妙な一行は歩いていった。

トリスティン魔法学院の学院長、オールド・オスマンの名声は国内外問わず高く鳴り響いていた。

齡三百歳とも噂され、一説によると全ての系統を極めた際に虚無に目覚め、不老の魔法を獲得したとも言われているが、事実無根の噂話にしか過ぎない。

裏を返せばそんな噂が立つ程の実力者であると言う事であるが、実力者が人格者であるとは限らないのは世の常であった。

そう、秘書にセクハラを働いて折檻を受けるエロ爺を見て、即座に名声と結びつけるのは難しいだろう。

学院長室の扉を開くなり見せつけられた光景に、コルベールは黙って扉を閉めつつそんな事を思っていた。

「……今のは？」

「……良いから忘れなさい。それがこの学園で生活するコツよ」

呆氣にとられた男の呟きに疲れたように返すルイズの言葉を背に、コルベールは今度はノックをしてから扉を開ける。

先程の醜態が無かったかのように泰然とするオスマンと、その脇に控える秘書。

彼の衣装にはっきりと残る靴跡が無ければ満点だったろう。

「ふむ、ミスタ・アリエール、だったかな？　こんな夜更けに何用かね？」

「私はコルベールですオールド・オスマン。語尾以外原型留めてませんぞ。」

「……実は『使い魔召喚の儀式』で問題が起こりまして、学院長のご判断を仰ぎたく参上しました」

「む？　何事かね？」

「はい。……お二人とも、どうぞ中にお入りなさい」

コルベールの招きに応じ、学院長室に入って来た二人を見たオスマンの目が細められる。

「……おぬしは確かヴァリエール公爵の三女だったかな？」

後ろの御仁には見覚えが無いが、どちら様かの？」

「……ここでは名乗りも上げずに人に名前を尋ねるのが礼儀なのですか？」

先程と同じく肩をすくめながら返された言葉にルイズが爆発しかけるが、それを制したのはオスマンの謝罪だった。

「確かに、名も明かさずに名を尋ねるのは失礼じゃったの。」

儂はオールド・オスマン、このトリステイン魔法学院を預かっておるものじゃ。

隣にいるのは儂の秘書でミス・ロングビルと言う」

オスマンの紹介に合わせてお辞儀をする秘書。長い緑の髪が印象的な妙齡の美女である。

「こちらこそ失礼しました。私はヤナギダ・トモと申します」

「ふむ、ではミスタ・トゥオモ、事情をお聞かせ願いたい」

「……トモは名前です。家名はヤナギダの方ですが、敬称は要りません。」

そのような出身でもありませんし」

「おりよ、そうじゃったか。」

……では改めてミスタ・ヤナギダ。

何が起こったのか、何故お主がここにいいのか、聞かせては貰えんじやろうか」

「……まあいいでしょう。」

しかし……私にも何かなんだか解らないのですよ。こちらのミスタ・コルベールに着いて来ただけで……」

二人の視線がコルベールに向けられる。

それに応え、彼はそれぞれに対して事情を説明した。

ルイズが『サモン・サーヴァント』でトモを呼び寄せた事。

『サモン・サーヴァント』は一方通行で彼を帰す手段が無い事。

トモの話から、どうやらロバ・アル・カリイエの出身ではないかと当りをつけた事。

ハルケギニアの東方に位置するサハラに向こう側をそう呼んでいる事。

人間を召喚すると言う前例のない事態に『コントラクト・サーヴァント』を一時棚上げにした事。

『使い魔召喚』は神聖な儀式で取り消しが聞かない事。

『コントラクト・サーヴァント』こそしていないが、『サモン・サーヴァント』は成功しているのでルイズの進級を認めてほしい事。

ルイズが進級する為には使い魔を召喚せねばならず、やり直しも出来ないのだから彼女の使い魔になってほしい事。

コルベールが一通り説明を終えると、場に一瞬の静寂が訪れた。

耳に痛い無音。それを破るべくトモが口を開く。

「失礼ながら、そちらの……ミス・ヴァリエール、でしたか？
私は貴女の使い魔にはなれません」

無情にもきっぱりと切り捨てた言葉に啞然とする一同。

最初に我を取り戻したのは、やはり当事者のルイズだった。

「な、な、な、何ですってえ！！！！ 貴方平民の癖に貴族に楯突こうって言うの！？」

「そちらに事情があるように、私にも事情があります。

何より『冒険者』たる私が誰かに仕える事は出来ません」

「……ミスタ・ヤナギード。その『ボウケンシャ』とは何かね？
話を聞く限りでは何かの身分のようだが……？」

オスマンの疑問に、トモは「長い話になりますが……」と前置きしてから語り始めた。

昔々、名も無き神様は暇つぶしに世界を創り、沢山の生き物を造り出した。

空を飛ぶもの、海を泳ぐもの、地を這うもの。

様々な生き物が世界を覆う中で、人間は最弱の生き物であった。

空も飛べず、海で溺れ、獣たちに追われ、人間は身を寄せ合って生きていた。

しかし人間は諦めなかった。

足りぬ力を道具で補い、知恵を絞り敵を出し抜き、人間は大地の覇者となっていた。

それに怒った神様は人間を滅ぼそうとした。

だが人間は何度滅ぼされても諦めず、ついには神様に牙を剥きさえたのだ。

ここに至り神様は思った。

この弱い生き物は、もしかしたら自分より強くなるのではないか？
もしかしたら自分の孤独を終わらせてくれるのではないか？、と。

神様は唯一無二、永劫不変の存在である。故に永遠に孤独なまま在り続けるしかない。

ただ人間は短い生涯を精一杯生き抜いて、ほんの少しの間に成長を果たす。

成長と変化、それこそが人間の強みなのだ。

それを知った神様は自分に齒向かった人間に、ある力を与えてこう告げた。

「いつか、私より強くなって出直してこい。私はいつでもお前たちの挑戦を受けよう」

それ以降、たくさんの人間が神に挑む為に己を鍛え、様々な道具や技を生み出し、いつ果てるとも知らぬ無謀な挑戦を続けている。

人はいっしょに神に挑む彼らを冒険者と呼び、力を与えた神様を『運命の神』と呼ぶようになったと言う。
デウス・エクス・マキナ

「……それが冒険者のはじまりです。

神に挑むが故に、私たちは如何なるものにも仕えません。

冒険者は自由を旨とする存在ですから」

「……………なんとも、壮大な話じゃの……………」

トモが語った神話は余りにも荒唐無稽でスケールの大きな話であった。

終わりを望む神に挑む人間。

故に誰にも頼らず従わず、自分の手で運命を切り開く、けわし険きを冒す者たち。

壮大で愚かしく、無謀で何より自由な存在。彼はその一員なのだと言う。

「とは言っても最近覚醒したばかりで……これから冒険に出る、つて所でミス・ヴァリエールに召喚されたみたいですな」

その手の背囊を示してそう言うトモに、一同は苦い表情を受かべる。一瞬で重苦しくなった雰囲気^{きふき}に首を傾げる彼に、オスマンは苦りきった表情のまま事情を説明した。

「ハルケギニアでは系統魔法を創造した始祖ブリミルを崇めるブリミル教が一般的でな。

それ以外の神は異端として扱われとるんじゃないよ」

「……別にブリミル教と敵対するつもりはありませんよ?」

「それだけじゃないぞい。ブリミル教は長い間サハラのエルフ達と対立しておる。

故にエルフの使う先住魔法を、異端の存在をブリミル教は決して許さんのじゃ。

……まあ儂らはそこまで熱心な信者と言う訳でもないが、教師達

の中には快く思わぬ輩も多いでな」

「四面楚歌、って訳ですか……冒険者としては上等と言いたい所ですが、駆け出しの初心者には厳しい状況ですね」

溜め息を吐いて天を仰ぐ。どうやら天を仰ぐのが癖らしい。

その姿を見詰めるルイズからは、先程までの気の強さが失われている。

彼に取って公爵家の公女の肩書きは意味が無い。東方出身の彼にはハルケギニアの常識が通じないのだから。

そして誰にも従わないと宣言している以上、ルイズに従うことも有り得ない。

それはつまり、ルイズが使い魔を得られないことを意味していた。

一日千秋で待ち望み、不退転の覚悟で挑んだ使い魔召喚。

それが失敗に終わったのである。こんな悔しいことが他にあるだろうか？

大声で泣き出したくなるのを堪え、ただただ己の暗い未来に思いを馳せるルイズ。

潤んだ瞳は、だが次の瞬間トモが放った一言に目一杯見開かれた。

「……仕方ありません。

使い魔は無理でも、使い魔の振りをするくらいはいいでしょう。冒険者である事も可能な限り隠します。

ですが、私は冒険者です。いつまでもここに居られないことだけは理解して下さいね。

そうですね……卒業まででどうでしょう？」

「ほ、いいのなの？」

「構いません。人々の依頼を請け負うのも冒険者の仕事ですから」

そう言って、トモはルイズに向き直る。

「私はヤナギダ・トモと申します。貴女は？」

「る……ルイズ・フランソワーズ・ド・ラ・ヴァリエールよ」

初めての名乗り。その時になって初めて、ルイズは彼の首に下がる印に気が付いた。

三本の剣を組み合わせたそれは白銀に輝き、不思議な存在感を放っている。

それに手を触れ、祈るように目を閉じたトモは重々しく宣言する。

「冒険者ヤナギダ・トモはルイズ・フランソワーズ・ド・ラ・ヴァリエールを守り、共に運命を切り開く事をここに誓う。

クエスト
「宣誓！」

最後の言葉を力強く言い放つと同時に、印が一瞬だけ力強く輝く。そして目を開けたトモはルイズに向かって改めて頭を下げた。

「初めましてルイズ。そして初めてのクエストの宣誓の依頼者に、感謝を」

※ヤナギダ・トモ（柳田 智） 種属／ヒューマン…2

体力…5（+1）／知力…8（+2）／感覚…5／敏捷…6（-1）
／器用…3／魅力…3／精神…5／幸運…11

※○内は今回加算された補正值

HP…10／10 MP…11／11（+1） SP…10／1

0 ※数値は現在値／最大値

EXP・・15 所持金・・30,000円

保有クラスとスキル

・ネゴシエーター・・2 (※1)

・詐術 (※2)・・1／説得 (※3)・・1

アクセサリー
装備品

・厚手のコート (※4)／運命神の聖印

アイテム
所持品

・背囊 (※5)

進行中クエスト

・ルイズを守る (期限・・ルイズの卒業まで)

第一話 来訪（いほうじん）（後書き）

用語解説

（※1）交渉や説得に優れる一般技能系のクラス。知力に＋Lvのボーナス補正を加える。

（※2）他人を欺く話術。判定の達成値に（Lv）d6を加える。

（※3）他人を説得する話術。判定の達成値に（Lv）d6を加える。

（※4）物理ダメージを1d6＋2軽減するが、敏捷に－1される。
水属性ダメージを10％防ぐ。重量…1

（※5）アイテムを入れる袋。

所持品の重量を無視出来る（制限…20個まで）。重量…

1

第二話 技能(できること)

女性の部屋と聞いて何を思い浮かべるだろう。

ファンシーなぬいぐるみに埋もれた部屋だろうか？

淡いパステルに染まったメルヘンな部屋だろうか？

人によってはたぐさんの衣服に囲まれたファッショナブルな部屋だろうし、あるいは花に包まれたリラクゼーションな空間かも知れない。

そう、決して必要最小限のものしか置かれていない殺風景な部屋を思い浮かべるやつはいないはずだ。

「……これは、また……」

「何してんのよ？ 早く入って来なさい」

ベッドと鏡台、勉強机らしきものと本棚、そして衣装棚。

ルイズの部屋は驚く程質素であった。

無論それらの調度品は全て最高級品であるし、絶妙な配置は卓越したセンスを感じさせるのだが……

「年頃の女の子、というのは皆こうなんですかね？」

「そんなわけではないでしょ。私は無駄が嫌いな」

「……おお運命の神よ、今私の幻想が守られた事に感謝いたします」

「これから戦おうとしてる神に祈ってどうすんのよ？」

あんたの言う事は今イチ解らないわ」

学院長室での宣誓のあと、彼らは様々な取り決めに交わした。

今トモが女子寮にいるのもその一つである。

着の身着のまま連れてこられた彼に、ここでの生活拠点などあろうはずも無い。

故に、彼がルイズの部屋に居候する事は当然の成り行きと言える。
……本人が望んでいるかどうかはともかく、だが。

「はぁ……困りましたね」

「何でそんなに嫌がるのよ？ 別に鞭で打つとかは……しない、わよ」

「その間について問い詰めたい所ですが、別に嫌な訳じゃないんですよ。ただ……」

「ただ？」

「男女七歳にして同衾せず、つてのが故郷の風習でして。

兄弟姉妹でもない限り、年頃の男女が同居することは有り得ないんです」

最近はどうでもないようですけどね、と語るトモ。

随分慎み深い国なのね、と納得するルイズ。

一見すると穏やかな談笑。しかし会話が進むにつれ、段々雲行きが怪しくなってきた。

「じゃあ、もう一度確認するわよ。

貴方は私が魔法学院を卒業するまで使い魔の振りをする。

その間の滞在費その他の諸費用は全額私が負担する」

「そうですね、その通りです」

「使い魔の役割のうち、視界の共有は契約してないから問題外。

秘薬の原料は種類が解らないから不可能」

「まあ、生まれが違いますし」

「最後の主人を守る、これも現状ではてんで弱ちちくて駄目。

……結局、何にも出来ないのね貴方」

「新米の駆け出し冒険者に何をお求めで？」

そちらの都合で呼びつけておいて、その言い草は無いと思いますよ？。」

「そのくせ口だけは妙に達者なのよね、先生方もあっさり丸め込んでじゃうし。」

冒険者より詐欺師の方が性に合ってるんじゃないの？」

「あの方々が単純なんじゃないですかね？ あと詐欺師云々は余計なお世話です」

だんだん口喧嘩の様相を呈して来る二人の会話。

第三者が居れば胃を痛めそうな空気を打破したのは、やはり第三者であった。

いがみ合う二人の耳に飛び込むノックの音。

家主であるルイズが不機嫌に「開いてるわよ」と扉の向こうに声をかける。

恐る恐ると言った体で入って来たのは、黒髪黒瞳のメイド。その手にはパンが詰め込まれているバスケットがあった。

学院長室を辞する際、夕食を食べ損ねたトモがオスマンに頼んでおいたものだ。

「失礼します。お夜食をお持ち致しました。」

もう竈の火も落ちていたので、余り物のパンで申し訳ないのですか……」

「え？……そう言えば頼んでいたわね。」

誰かさんの所為で夕食に行けなかったからお腹ペコペコよ」

「それは私じゃなくてあの方々に言うべきだと思いますよ？

私も喰いっぱぐれたんですから」

再び始まりかけた口喧嘩は、しかしあるものを目にした途端に雲散霧消した。

「あ……あの……」

「……止めましょう。メイドさんが困っています」

「……そうね。いい加減お腹も空いたし」

そこに居たのは涙目でおろおろするメイドの姿。
何となく置いていかれた子犬のような雰囲気があった。

「……犬耳とか似合いそうですね」

「え?」

「……首輪も捨て難いわね」

「え? え?」

さっきまで険悪だった二人が突然意気投合する様を見せられ、メイドは混乱する。

どうやら自分の評価らしいが、その内容が全く理解出来ない。

さっきとは別の意味でおろおろするメイドからバスケットを受け取り、トモは会釈と共に感謝の言葉を述べる。

「ありがとうございます。」

私はヤナギダ・トモと申しますが、貴女のお名前は?

「えっ、あ、はい、私はシエスタと申します」

「ではミス・シエスタ。わざわざ届けて下さってありがとうございます
ました」

「あっ、そんな、ミスだなんて付けて下さらなくて結構です!

気軽にシエスタとお呼びください!」

「解りましたシエスタさん」

「で、では失礼致します!」

ぱたぱたと遠ざかっていく後ろ姿を見送り、扉を閉めるトモ。
そんな彼にルイズは胡乱気な目を向ける。

「何故か警戒されていましたね」

「……目を付けられたとしても思ったんじゃないの？」

「目を付ける？ 何ですかそれ、人聞きの悪い」

「さっきのメイドに名前聞いていたじゃない」

「人に何かをしてもらったらずまずお礼をしなさい、と言うのが故郷の風習でしてね」

「またそれ？ 貴方の故郷ってどんな所なのかしら……」

「極東の島国で日本って言う所です。」

四季が美しい事と変わった風習が多い事で知られた国ですよ」

「ニホン……ロバ・アル・カリイエにはそんな国があるのね」

「その事なんですが……」

突然改まるトモの態度。

目を白黒させるルイズに、彼は信じ難いことを告げる。

「私はそのロバ・アル・カリイエとやらの出身じゃありません。」

「……いいえ、このハルケギニアを含む世界の出身じゃ無いんです」

「は？ どういう事？」

切っ掛けはコルベールとの会話に出てきた国名である。

アルビオンとガリアは彼の世界において最も有名な大国の古い呼び名だった。

しかし両国ともその名を失い、今となっては知ってる方が少ないはず。

当初は時間を遡りでもしたのかと考えたらしいが、夜になった瞬間にそれは否定される。

窓から見える満天の星空、そこに輝く二つの月によって。

「私の世界では月は一つしかありません。その上、あなた方は冒険者を知らなかった」

冒険者と、それにまつわる神話は古くから老若男女国家民族種属の関係無く広く知られている。

だからこそ『冒険者』という肩書きがもつ影響力は大きいのだと言う。

少なくともそれを知らない人間はトモの世界には居ない筈だった。

「荒唐無稽な話ですが、ここ……ハルケギニアは地球ではないどころの星、若しくは平行世界ではないかと思うのです」

「……信じられないわね。違う世界？ 何よそれ、法螺話にも程があるわよ」

「普通はそうなりますよね。」

まあ異世界云々は置くとしても、私が此処の常識に疎いことに変わりはありません」

「……………最初っからそう言えば良いのよ。」

まあ、対外的には東方の出身と言う事で誤摩化せるでしょうけれど……」

ご迷惑をお掛けします、と頭を下げてくるトモを見ながら、ルイズが今後の事を考える。

とは言っても、彼について何も知らないのは彼女とて同様なのだ。まずは冒険者に何が出来るのかを知らなければ対策だって取れない。

「ねえ、冒険者って何が出来るの？」

ルイズの疑問に少し考えるトモ。何処まで話していいのかを吟味しているのだろう。

「ええと、全部は教えられませんよ？ 冒険者だけの秘密もありますから」

「いいわ。話せる事だけ話してちょうだい」

「解りました。そうですね……」

まずは、冒険者最大の特徴である『レベル』から説明しましょう」

神が冒険者に与えた力は大きく分けて三つ。

その内一つは冒険者の秘密とされ、冒険者以外に知るものは居ない。残る二つの内、冒険者を冒険者足らしめているのが『レベル』である。

冒険者は能力や技能を数値化して把握する。この数値を『レベル（以下Lv）』と呼ぶ。

経験を積む事でLvは上がり、様々な恩恵を得る。

Lvにもさまざまな種類があり、それぞれ得られる恩恵が違う。

まず基本的な能力を表す種属Lv。これはステータスと呼ばれる各種能力に影響を及ぼす。

肉体的な力の強さや耐久力を表す体力、頭の回転や記憶力を表す知力、五感や勘の鋭さを表す感覚、素早さを表す敏捷。

手先や身体の器用さを表す器用、他人を引きつける魅力を表す魅力、精神的な強さを表す精神、運の良さを表す幸運。

そして生命力を表すヒットポイント（HP）、精神力を表すマインドポイント（MP）、持久力を表すスタミナポイント（SP）。

種属によってそれは増減し、トモの種属であるヒューマンは突出した能力こそないものの全体的なバランスに優れていると言う。

一般人の平均値は大体3Lv。鍛えに鍛えて6Lv、それが限界だ。

だが冒険者には成長の限界がない。鍛えれば鍛えるほど彼らは際限なく成長していく。

それは能力だけでなく、技能に置いても同様である。

それがクラスとスキルだ。

クラスは職業ジョブとも呼ばれ、冒険者が『何が出来るか』を示す数値だ。そしてスキルとは『何が得意なのか』を表す数値であり、スキルLVの合計がクラスLVになる。

クラスは四つの系統に分かれており、それぞれに得意とする分野が違ふ。

肉弾戦を得意とするウォーリア系。

主なクラスはセイバー（剣士）、ランサー（槍兵）、モンク（拳士）など。

魔法を得意とするスペルマスター系。

主なクラスはキャスター（魔術師）、シャーマン（巫術師）、ヒーラー（治癒術師）など。

武器や道具の作成を得意とするマイスター系。

主なクラスはアルケミスト（錬金術師）、ブラックスミス（刀剣鍛冶師）、ウィッチドクター（薬師）など。

あまり冒険に関係はないが、あると便利な一般技能系。

主なクラスはハンター（猟師）、ファーマー（農夫）、シェフ（調理師）など。

ちなみに常人なら5LVでプロ、6LV以上だと達人と呼ばれると言う。

噂によればLV100に至った冒険者さえ居たらしい。そこまで行

くと最早神の領域だ。

クラスを習得、熟練する事で冒険者は無限に成長する。

そうしてLvを伸ばして成長するに従い、冒険者の能力はどんどん常人と掛け離れていく。

当然、常人の使う武器や道具では間に合わなくなる。

それをカバーするのがもう一つの力、いやシステムである『神器』であった。

お金や貴金属、宝石など『価値があると認められるもの』を運命神に捧げ、それに見合う価値の道具を得るシステム。

『神器』には装備する事で効果を発揮する装備品と、消費する事で効果を得る所持品アイテムの二種類がある。

そうして得られた『神器』は決して壊れたり朽ちたりせず、ものによつては所有者に絶大な力を与える事すらあると言う。

その代わり、『神器』は冒険者以外には効果が無く、更には特定のLvやクラスでないと使えないものもあるので注意が必要だ。

こう言った能力を駆使して、冒険者はいつか神を倒す為に研鑽を続けるのだ。

「……何よそれ。反則じゃないの」

トモの話を聞いたルイズは懽然としていた。

話のスケールは大きいものの、それらは冒険者でなければ意味の無

もののばかり。

実感出来ないのも当たり前だろう。

「レベルアップも相当だけど、神器は完全にインチキじゃない。

そもそも自分を倒させるためにそんなものくれるなんて、何考えてるのその神様」

「運命神が何考えてるかなんて、卑俗な人間には理解出来ませんよ。私たちはいつか神を倒す、それだけですから」

シエスタが持って来た夜食のパンを貪りながらルイズは愚痴をこぼし、トモはそれをのりくらりと躲し続ける。

先に根を上げたのはルイズの方だった。

「もういいわ。とりあえず、明日から貴方は私の使い魔ね」

「まあ嘘なんですが」

「嘘でも何でも良いのよ。魔法に成功した、って事実さえあれば」

「何やら事情がありそうですが、もうそろそろ寝ないと明日がきついのでは？」

言われてルイズも気付く。

もう既に夜半も過ぎている。ただでさえ朝が弱い彼女にとって、夜更かしは危険な行為だった。

ネグリジェに着替えようとブラウスを留めるボタンを外し、下着に手をやった所でルイズはトモがこちらに背を向けていることに気が付いた。

「……何やってんのよ」

「いえ、いきなり着替え出したんで驚いただけです。

最近の娘さんは慎みに欠ける、とは聞いていましたが……まさか男性の目前で着替えようとするとは思いませんでしたから」

ぐっ、と詰まるルイズ。

別に使用人如きに気を遣う事もないが、慎みを持ち出されては言い返せない。

この後、脱いだ下着の洗濯を命じるつもりでだったルイズだが、こう言われては頼みにくい。

何とかして他の切り口を見つけようとする彼女に、トモは追い討ちをかける。

「あ、朝ご飯は何処で食べれば良いんですか？」

「え、それはアルウィーズの食堂で……」

「いやいや、推測するにそこは貴族専用ではないですか？」

私は貴族じゃありませんし、下手に周囲の注目を浴びれば私の正体もバレかねませんよ？」

「そう言えばそうね、じゃあ厨房に行って何か分けてもらいなさい。私の名前を出せば分けてもらえると思うわ……!？」

言ってしまったから、ルイズはまた一つ手札を失った事に気付いた。何と言う事だ。由緒あるヴァリエール公爵家のこの私が、さっきからこの男の口車に乗せられっぱなしではないか！

必死になって打開策を捻るルイズに、トモはまたしても爆弾を投げ付ける。

「ああ、それと洗濯物は普段誰に頼んでるんですか？」

メイドさんに言えば良いんですかね？ 何と言っても専門家ですし、私がやるより奇麗にしてくれるでしょう」

「……その籠に放り込んでおけば掃除の時に持っていくわ。

わざわざ頼まなくても大丈夫よ」

「成程、まあ汚れ物を面と向かって渡すのは恥ずかしいものですね。

そう考えると良く出来た仕組みですねコレ」

互いのメリットを指し示しつつ矛先を躲し、躲した先に被害が及ばないように釘を指すと言う高度な交渉術に、ルイズは翻弄されっ放しだ。

（まあ、確かにコイツにやらせるよりメイドにやらせた方が確実だし……）

洩々自身を納得させるルイズ。

せめてもの反撃に毛布を投げ付けて「アンタは床で寝なさい！」と言いつ放ち、そのまま夢の世界に逃げ出すのであった。

学院の雑用を一手に引き受けるメイド達の朝は早い。

夜も明けたばかりの早朝、シエスタは山のような洗濯物を抱えて洗い場に向かっていった。

「……あら？」

洗い場には先客が居た。

正確には洗い場の傍で、誰かが何かを振り回していた。

長身の男である。黒いチュニツクのような服に藍染めのズボンを合わせたその姿に見覚えがあったシエスタは目を丸くした。

確か昨晚女子寮に夜食を届けに行ったとき、名前を尋ねて来た男だ

ったはずだ。

女子寮は基本男子禁制ではあるが、青い春に情熱を燃やす若人には意味がない。

夜這いに逢い引きは当たり前、ひどい時は部屋から漏れ出る嬌声を聞き流しながら職務を果たした事さえあった。

だからあの男もそう言った間男の一人だと思ったのだが……どうやら違うらしい。

「ふっ、はっ！ ……せいっ！」

貴族は杖を振れども剣を振るったりはしない。

衛士が好んで使うレイピアタイプの杖も、魔法との併用を念頭に置いた使い方をするのだ。

男が振るう棒切れは、明らかに剣を意識して振るわれている。

けれどその型はお世辞にも奇麗とは言い難い。

剣については素人であるシエスタから見ても、子供が力任せに棒切れを振り回しているようにしか見えなかった。

そんな男の動きが——唐突に変わる。

さっきまで適当に振り回されていた棒切れが突如鋭い斬撃に変わり、仮想の敵を斬り払う。

手にした棒切れは名匠に鍛えられた業物、振るわれるは一撃必殺の斬撃。

不意に男は手を止める。

左の腰だめに構えた剣、柄を握らず添えられた右手、体幹を捻り右半身を前に迫り出した異様な体勢。

細く長く吐き出される吐息。それが途切れた次の瞬間、その呼吸が爆発した。

引き絞られた弓から放たれる矢の如き一閃。

横薙ぎに振るわれたそれが幻の敵を一刀両断にする様を、シエスタ

は見たような気がした。

油断無く残心を払い、振り抜いた剣を正眼に戻して——男はそこで呼吸を戻す。

張りつめられた何かが雲散霧消したのを感じ、シエスタは思わずへたり込んでしまう。

その音に気付いたのだろう。

男……トモはこちらに振り返り、へたり込んだシエスタを見るとほんの少しだけ苦笑いのようなものを浮かべた。

「おや、貴女は……確か、シエスタさん、でしたね。いつから見ていたんですか？」

「え？ あ、いえ、ついさっきからです。すいません、お邪魔でしたか？」

「いえいえ、こちらこそつまらないものをお見せしました」

その答えにシエスタは驚く。

アレがつまらないものならば、一体何がつまるものだというのだろうか？

「そんなことは……、それよりも剣士の方だったんですね！ びっくりしました、私てっきり……あわわ」

「……何と勘違いしていたのかは敢えて聞きませんが、私は剣士ではないですよ？」

剣士ではない？ あれだけの剣技を持ちながら、剣士ではないと？ シエスタの顔に浮かんだ疑問を読んだトモは少しだけ考え込んだ後、名乗りを上げた。

「私はサムライ（侍）。サムライのヤナギダ・トモです」

聞き慣れぬ異国の言葉だと言うのに何故か郷愁をくすぐる名乗りを聞き、彼女は小首を傾げた。

「さむらい、ですか？」

「はい。カタナと言う特殊な剣に精通した、義に厚く忠を尊ぶ戦士の事です。

こちらで言う騎士のようなものですね」

「ええっ！？ 騎士様だったんですか！？」

「いやいや例えれば、ですよ。私はシエスタさんと同じ平民です」
「え……でも、昨日……」

ミス・ヴァリエールのお部屋に居たじゃないですか、と聞きかけたシエスタだが、ある噂を思い出してその口を噤んだ。

あの『ゼロ』が平民を召喚したらしい、と言う噂は使用人の間でも迅速に広まっていた。

彼女も多分に漏れず、ゴシップ好きな同僚から聞かされている。

『ゼロ』と言うのは確か昨晚、夜食を届けた先であるルイズの二つ名だった筈だ。

「じゃあ、ミス・ヴァリエールに召喚された平民の使い魔って貴方だったんですか？」

「ええ、そうなりますね」

噂の人物を目の前にして、シエスタがまず思ったのは『思ったよりシヨボい』である。

噂話に尾ひれが付くのは何処の世界も変わらない。

始まりはともかく人の口を伝って行くうちにだんだん歪んでいくものだ。

『平民を呼び出した』が『平民の傭兵を呼び出した』に変わるのは

序の口。

色々付けられた尾ひれは、シエスタの元に辿り着く頃にはこうなっていた。

『絶世の美男子で凄腕のメイジ殺しの平民が、呼び出したメイジを半殺しにして学院中の教師を相手取った拳げ句、あと一步の所で力尽きて取り押さえられた』

ここまでくると最早原形を留めていない。

しかし本人は上背こそあるものの顔立ちは平凡、もやしのような華奢な体つきは荒事に向いていなさそうで、メイジ殺しどころではない。

そこまで考えが進んだ処で、シエスタは先程の鍛錬を思い出してその考えを否定する。

あの見事な殺陣を見せた男が只者である筈が無い。実際にサムライという戦士がどのようなものかは知らないが、きっと凄い人々なのだろう。

やや強引に結論を導いたシエスタを余所に、トモは傍に引っ掛けてあったボロ切れで汗を拭いながら「朝食はいつ始まりますか?」と尋ねた。

「朝食ですか? もう間もなくだと思いますが」

「ふむ、ではそろそろご主人様を起こさねばなりませんね」

そう言って踵を返すトモだったが、途中で立ち止まるとシエスタに向かつて拝むような仕草をする。

「ああ、すいませんが後で食事を分けていただけますか?」

「え、食事ですか?」

「はい、ご主人様から厨房で分けてもらえと言われてまして」

「いいですよ！ 賄いで良ければいつでもいらして下さいね」

ありがとうございます、と言い残して今度こそ去って行くトモ。
その後ろ姿を見送りながら、シエスタは（変わった人だなあ）と思わずにはいられなかった。

所変わってルイズの寮室。

大きな寝台で惰眠を貪るルイズの枕元に、昨日までは無かった奇妙なものが置かれていた。

円形の胴体に数字を刻み、その中心に長さの違う二本の針が縫い付けられてくるくる回るようになっており、天辺には大きなベルが取り付けられている。

今、長い針が『12』と書かれた所を指し示す。途端にベルがけたましく鳴り始めた。

「ふぎゃっ！！ なに、何事！？」

その大音声にルイズが飛び起きる。と、同時に帰って来たトモが真直ぐベルを鳴らす物体に歩み寄ってその頭を叩く。

ビタリと止まるベルの音。そうしてトモはルイズに向かって優雅に朝の挨拶を贈った。

「お目覚めですがご主人様。もうすぐ朝食の時間ですよ」

「え、アナタ誰……って、昨日召喚したのよね私が。うん、覚えて

る」

「それは重畳。では、私は席を外しておりますので、お支度をお願い致します」

慇懃無礼の見本の如きわざとらしきで一礼すると再び部屋を出て行くトモ。

一人残されたルイズは、着替えの手伝いをさせるチャンスを失った事に気付いて落ち込むのであった。

一方、部屋を退出したトモは扉を背にして仁王立ちの構えを取る。そして待つ事数分。不意に隣の部屋の扉が開き、中から燃えるような髪の艶かしい女性が現れた。

「あら？ 確かそこはヴァリエールの部屋だったと思うけど。ねえ、貴方は？」

「人に名を尋ねる時は自分から明かすのが礼儀ですよ、お嬢さん」

昨日から繰り返している主張をもう一度繰り返すトモ。

それを聞いた女性は軽く目を見開いた後、笑いながら自らの名を告げる。

「あら失礼。

私はキュルケ、キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー。

二つ名は『微熱』よ」

そう言うと、女性——キュルケはチェシヤ猫の如き微笑を浮かべるのであった。

※ヤナギダ・トモ（柳田 智） 種属／ヒューマン…3

体力…6（+1）／知力…8／感覚…5／敏捷…7（+1）／器用…
3／魅力…3／精神…5／幸運…11

※○内は今回加算された補正值

HP…10／11（+1） MP…9／11 SP…9／10

※数値は現在値／最大値

EXP…9 所持金…8,510円

保有クラスとスキル

- ・ネゴシエイター…2
- ・詐術…1／説得…1
- ・サムライ…1（※1）
- ・居合い斬り（※2）…1

アクセサリ
装備品

- ・厚手のコート／手作りの木刀（※3）／運命神の聖印

アイテム
所持品

- ・背囊／サバイバルナイフ（※4）／目覚まし時計（※5）

進行中クエスト

- ・ルイズを守る（期限…ルイズの卒業まで）

第二話 技能(できること) (後書き)

用語解説

(※1) 刀を使うことに特化したウォーリア系のクラス。

HPと敏捷に＋LVのボーナス補正を加える。

(※2) 鞘に納めた刀を神速で振るって攻撃する刀技。

クリティカル値に－LVのボーナス補正を加える。

(※3) 薪を削って造られた粗末な木刀。

レンジ密着／近距離、物理ダメージに1d6を加算する。

判定にファンブルすると破損する(ファンブル値に＋3)。

重量…1

(※4) 大振りのナイフ。

レンジ密着、物理ダメージに1d6を加算する(クリティ

カル値に－1)。重量…0.2

装備していないので所持品扱いである。

(※5) バッドステータス『睡眠』を回復する(使い捨て)。

普通の目覚ましとしても使用可能(その場合は消費されない)。

重量…0.5

※バッドステータス…睡眠

・睡眠状態になったエネミーもしくはPCは(難易度) d6を振り、威力LVを決める。

この状態になるとイニシアチブフェイズで行動済みになり、一切の行動を禁止される。

この効果を解くためにはメインフェイズで威力LVを目標値とする精神抵抗判定に成功しなければならない。

エンドフェイズで威力LVから－1される。

またダメージを受けると威力LVから－(ダメージ)される。

威力LVが0になった時点で効果は失われる。

第三話 勧誘（なかま）

「あら失礼。私はキュルケ、キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー。二つ名は『微熱』よ」

そう言ってチェシャ猫の笑みを浮かべる女性——キュルケに、トモは居住まいを正して名乗りを上げる。

「初めましてミス・ツエルプストー。私はヤナギダ・トモと申します。」

先日よりこの部屋の主、ミス・ヴァリエールの使い魔を務めております」

「え？……じゃああの子、本当に平民を召喚したのね。」

うふふっ、面白くなって来たわ」

不穏な事を言いながらほくそ笑むキュルケ。

そんな彼女にトモは若干引きながらも注進するのを忘れない。

「お手柔らかにお願いします。主人はどうも精神面が弱いようですので」

「……からかわないで、じゃないのね？」

「素直に私の言葉を聞き入れて下さるのならそれでも良かったのでしようが……どうも一筋縄とはいかない方とお見受けしますので」

「あら、よく解ったわね。その通りよ」

少々酷い人物評に当の本人が相づちを打つ。

そんな二人の背後で扉が開き、学院の制服に着替えたルイズが顔を出した。

「待たせたわね……げっ！ ツエルプストー！？」

「朝から随分な挨拶じゃない、ヴァリエール。」

「少なくとも貴女の使い魔はまともな挨拶をしてくれたわよ？」

キュルケの言葉に硬直するルイズ。

壊れたブリキ人形のように首を動かすと、盛大に引きつった笑顔でトモに問いただす。

「ど、ど、どういうことかしら、釈明があるなら聞くわよ？ 処刑したあとで」

「処刑したら釈明出来るはず無いでしょうってツツコミは置いとくとして、普通に挨拶しただけですよ？ 人として当然の礼儀だと思いますが」

その答えにキュルケは同意するように何度も頷き、ルイズはぐつ、と小さく唸る。

『人として当然の礼儀』と持ち出されては否定出来ない。

貴族云々以前に人間の器が小さい事を晒す事になるからだ。

たった一言で反撃の機会を潰す恐るべき話術。

昨晚から翻弄されっ放しのルイズは内心の焦りを隠し、鷹揚に頷いてみせた。

「そ、そうね。私の使い魔ならその程度の礼儀はあってしかるべきだわ」

「お誉めに与り恐悦至極。では参りましょうご主人様、そろそろ朝食の時間です。」

よろしければミス・ツエルプストーも一緒にいかがですか？」

「あら、いいのかしら？」

「な、な、何言ってるのかしらこの使い魔は！

よりによってツエルプストーと一緒にですって！？」

「良いも悪いも、目的地は同じでしょう？ 察するにご主人様とは何かしらの確執があるようですが、それは朝食を取り損ねる程重要なもののですか？」

「ぬぐぐ……！」

ああ言えばこう言う。

実にやりづらい使い魔（偽）だが、確かに食事をすっぱかす程重要な事でもない。

流石に二食続けて喰いっぱぐれる訳にはいかないのだ。空腹のまま授業に出ると言う苦行を進んで受ける真似はしたくない。

葛藤を押し殺し、ルイズは慇懃無礼に頭を下げた。

「先程は失礼致しましたわミス・ツエルプストー。

使い魔の言う事ももつともですし、そろそろ参りませんか？」

「あら奇遇ですわねミス・ヴァリエール。私も丁度そのように思っていた所ですわ」

おほほうふふと張り付いた笑顔で心にも無いお世辞を交わす二人に、トモは呆れて行動を促す。

「お二方、お時間はよろしいので？」

言われてみれば随分時間が経ってしまっている。

これ以上睨み合っていたら本当に朝食を逃すことになるだろう。

「そうね、とりあえず続きは食後で良いかしらツエルプストー？」

「異論は無いわね。じゃあ行きましょうかヴァリエール？」

「いつてらっしゃいませ」

食堂に向かう二人を見送るトモ。

それに気付いたルイズは怪訝な顔をする。

「いってらっしゃい……って、貴方はどうするの？」

「昨日申し上げた通り、厨房で賄いでも分けて頂くことにします」

「貴方の分くらい用意させるわよ？」

「いえ、出過ぎた真似をして主人の顔に泥を塗っては使い魔の恥です」

トモの台詞に、ルイズはまたしてもやり込められたことを悟る。

あくまで主を立てる言い回しながら、自身の特殊な事情を匂わせつつ自らが譲歩する形でルイズの干渉を断ち切ったのだ。

昨夜の会話も伏線だったのだろう。食生活をルイズに頼っていれば、それを餌に言うことを聞かせるくらいは出来たかも知れないが、許可を出した事で彼女自身がそれを否定してしまった形になる。

これで使い魔を縛り得るカードがまた一枚手札から消えてしまった。その上今回は隣に天敵たるツェルプストーが居る。

彼女が証人となった以上、下手なことは出来ない。

（本当にコイツ冒険者なのかしら？ 詐欺師の方がよっぽどそれっぽいけれど）

結局、この場で出来ることは何も無い。

時間も押している以上、追求だって出来ないのだ。この絶妙なタイミングだって狙ったものだろう。

ルイズはこの使い魔（偽）が自分の手に負えないと認めざるを得なかった。

「……わかったわ。じゃあ食事が終わったらこの部屋で待機してて。次の授業には使い魔同伴が必須だから」

「了解しました。では、いってらっしゃいませご主人様」

深々と頭を下げる使い魔（偽）の見送りを受け、二人は今度こそアルウィーズの食堂へ向かう。

「そう言えば、貴女何を使い魔にしたの？」

「そうそう、聞いてよルイズ！ 何と火竜山脈のサラマンダーを引き当てたのよ！」

「へえ……そう言えば貴女『火』のメイジだったわね。良かったじゃない。

それに引き換え私は……はあ……」

「何言ってるのよ、貴女の使い魔だって『当たり』じゃない！

あんなに機転の効く使い魔なんて居ないわよ？」

「……手、出したらただじゃおかないわよ」

きやいきやいと雑談を交わしながら遠ざかる後ろ姿が見えなくなった頃、トモも朝食を確保するべく厨房へ向うのであった。

ルイズの後に着いて教室に足を踏み入れた途端、トモは驚嘆する。

「おおっ、これは凄い！ ここに居る全部が昨日呼び出された『使い魔』なんですね！」

トモの目前に広がる珍獣奇獣の大サーカス。

主らしき生徒の椅子に留まる鳥や足下で毛づくろいをする猫はまだ

しも、六本足の蜥蜴や宙に浮く目玉、下半身が蛸の異形に至るまで。古今東西ありとあらゆる幻獣が大学の講義室のような教室を埋め尽くしていた。

「いやはや、眼福眼福。よもや生きたバグベアーやスキュラをこの目に出来るとは！」

「貴方の故郷にはバグベアーとか居ないの？」

「バグベアーの目は加工すると良質の武器になるんです。

お陰で殆ど狩り尽くされてしまつて、野生ではまずお目に掛かれませんね」

「……狩っちゃ駄目よ？」

「加工スキルは持つてませんから大丈夫です」

じゃあスキルがあつたら狩っていたのかしら？

そんな不安を覚えたルイズは「狩り禁止！」と念押しして空いている席に座った。

当然のように隣に座るトモを少しでもだけ険しい表情で見るが、結局諦めて正面を向いた丁度そのとき、ふくよかな体型の中年女性が教壇に現れる。

彼女は教室を埋め尽くす珍獣達を見回すと、上機嫌で講義の開始を告げた。

「皆さん、無事に使い魔召喚を成功させたようですわね。

このシュヴルーズ、毎年この時期がとても楽しみなのですよ」

そう言つてもう一度教室を見回すシュヴルーズ。

ふと、その視線がルイズとトモに向けられた。

「ミス・ヴァリエール、学院長からお話しは窺っています。

ええと、ミスタ・ヤナギーダでしたね？ 初めまして、『赤土』

のシュヴルーズと申します」

シュヴルーズの言葉に、生徒達が一斉に二人に注目する。
だがそれに怯まず、トモは立ち上がると彼女に向かって堂々と返礼を贈った。

「わざわざのご紹介、誠にありがとうございます。

私はヤナギダ・トモ、ヤナギダが家名でトモが名前になります。

極東は日本国、こちらで言うロバ・アル・カリイエよりミス・ヴァリエールの招聘を受け、先日より使い魔を務めさせて頂いております」

実に堂々とした名乗りである。

トリストインのマナーとは少々違いもあるが、異国の礼節を感じさせる見事な態度であった。

一連の流れに生徒達は呆氣に取られる。

からかいの言葉を用意していた小太りの少年など、口を開けた状態で固まっていた。

(成程、これが狙いだった訳ね)

硬直する生徒達の中で唯一、ルイズだけが事情を理解していた。

この一連の流れ、実はトモが発案してオールド・オスマンに協力を要請した結果である。

昨晚、学院長室で話し合った際に彼が要求したのは

『トモがロバ・アル・カリイエ出身であると口裏を合わせる』

『ルイズの使い魔になることを了承する代わりにトモの身分を保障する』

『それらを学院の全教師に伝えておく』

の三つ。

おそらく教師と生徒に己の身分を偽証し、冒険者であることや異教徒であることを探られないようにしたかったのだ。

東方の出身であるならハルケギニアの常識に疎くとも仕方が無い。平民とは言え使い魔で、しかも大貴族たるヴァリエール預かりの身であるなら余計なちよっかいも出せまい。

身を守りつつ、自分の立ち位置を保ち、その上ある程度の自由すら獲得する。

まさに一石三鳥の計画だった。

（コイツやっぱり詐欺師だわ……）

全てが彼の目論見通りになったことにルイズは脅威を感じていた。

バラバラに吹き飛んだ教卓、割れた窓ガラス、煤けた石壁。

滅茶苦茶になった教室を、ルイズとトモは無言で片付けている。どれほどの時間が経ったのか、沈黙を破ったのはルイズだった。

「……可笑しいでしょう？ 魔法が使えないのに貴族だなんて。どんな魔法も爆発させる、だから『ゼロ』。成功確率『ゼロ』のルイズってわけ」

そう、この惨状を引き起こしたのはルイズの魔法だった。

ルイズの魔法は爆発する。そのことを知らずに指名したシュヴルーズの失態であった。

結果、爆発に巻き込まれた彼女はルイズに罰として教室の片付けを命じて失神したのである。

「昔からそうだった。どんなに努力しても、どんなに頑張っても、系統魔法どころかコモンマジックさえ使えない。ルーンはそらで唱えられる位勉強したわ。魔法の杖だって何本も使い潰すくらい練習した。

……でも、駄目だった。

お父様もお母様も凄いメイジだし、エレオノール姉様はアカデミーの研究員をしているわ。ちい姉様はお体が弱いけれど、魔法に関しては天才なの。

……家族の中で私だけ、私だけが使えない。本当に……嫌になるわ」

それは独白と言う名の悲鳴だった。

貴族は魔法をもってその精神と為す。それがハルケギニアの貴族のあり方である。

トリステイン有数の大貴族の家に生まれながら魔法が使えないルイズは、ずっとその矛盾に苦しんでいたのだ。

「……貴方が召喚されたとき、本当に嬉しかった。

やっと魔法が使えたんだ、もう『ゼロ』なんかじゃないんだ、って。

呼ばれたのが人間だったなんて、思いもしなかったけれど」

そこまで言うと、ルイズは手を止めてトモに向き直る。

彼もまた手を止め、ルイズの視線を受け止めた。

「使い魔になることを望まないものを召喚したのは、魔法が使えないくせに貴族を名乗る私に下された始祖の天罰なのかも知れないわね。」

——笑えるでしょう？ 私は結局、貴族にもメイジにもなれずに周りに迷惑を掛けるだけの落ちこぼれなんだもの」

トモは何かを言おうとして、それを目にして口ごもる。
血の気の引いた握り拳。

ルイズの小さな両手が真っ白になるほど力が込められたそれを見て、彼は少し躊躇ってから天を仰いで語り始めた。

「……昔々、ある所に一人の男が住んでいました」

突然おとぎ話調に語り始めたトモを怪訝な顔で見返すルイズ。

それに構わず、彼の語りは続けられた。

「男は幼い頃からツキに恵まれていませんでした。

人の手伝いをしようとすれば思いもよらないトラブルが起きて、結局手伝おうとした人の手を煩わせてしまったり。

試験に向けて勉強を頑張れば試験の前日に風邪を引き、結局試験を受けられずに努力が無駄になったり。

身体を鍛えようと鍛錬をすれば身体を壊し、結局以前よりもひ弱になってしまったり。

とにかく何かをしようとする度に不幸が起き、常に逆効果にしかならなかったのです」

ルイズは呆れる。なんだその男は。ツイてないにも程があるだろう。

「……ですが、周りの人は彼が悪いとしか思いませんでした。

もっと要領よくしろ、真面目にやれ、そんなことも出来ないのか、

努力が足りない、甘えるな、等々。

男は決して努力をしなかった訳ではありません。ですが努力しても報われない日々が続いたある日、とうとう男は全てを諦めました」

ルイズにも覚えがある。報われない努力は出口の無い迷宮のようなもの。

努力に費やした膨大な時間が徒労に終わった瞬間、それは絶望へと姿を変える。

それは生きる活力を容易く奪う。絶望が深ければ深い程、奪われるものもまた大きくなっていくのだ。

「人に何を言われようが、人にどう見られようが全く構わずに塞ぎ込んでいたある日、男はある事件に巻き込まれて死に掛けました」

報われない上に不幸の重ね塗り。何だか不運を通り越して喜劇のようにも思えてくる。

「ですが、男は九死に一生を得ました。たまたま居合わせた冒険者に助けられたのです」

ここまで聞いてルイズは気付いた。

これはもしかや、彼自身の話ではないだろうか？

「助けてくれた冒険者を、男はどうして放っておいてくれなかったんだ、どうして死なせてくれなかったんだと詰りました。

生きていても役に立たないんだから死んだ方がマシだと言う男に、冒険者はこう言いました。

『昔の自分を見ているようだったから』、と。

その冒険者も、冒険者になる以前は要領の悪い人間でした。で

すが男と違い、彼は決して諦めずに努力を続けたのです。

常人と同じ努力で足りないなら十倍の努力を、十倍で足りなければ百倍の努力を。

人に笑われようと、報われまいと、彼はひたすらあがき続けました。

そして遂にはその努力が運命神に認められ、彼は冒険者の道を歩み始めたのです。

彼は言いました。

『目標を持つのは大事だけれど、そればかりを見ていては前に進むことなど出来はしない。前に行くものに焦り、目標の遠さに心が挫ければ終わりだ。けれど、後ろを振り返って後に続くもの達を見下すものが目標に達することは有り得ない。』

大事なのは前に進むことだ。ほんの一步、周りがどんなに早く歩こうが構わずに自分の一步を確実に踏み出していけば、いつか目標に辿り着けるだろう？』

男は何も言えませんでした。気が付いてしまったからです。

自分は結果が出ない理由を不運の所為にして、どうせ駄目だと投げ出して、楽な方へ楽な方へと逃げていたのだと。

男は冒険者に尋ねました。『自分も冒険者になれるだろうか？』と。

冒険者は答えました。『諦めなければ』と。

諦めない限り、運命は変えられる。それが冒険者と言う生き物だったのです。

その日から男は冒険者を目指して歩み始めました。

余りにも遅いスタートに周りが嘲笑う中、男はがむしゃらに励みました。

冒険者を目指すものは多くても、覚醒出来るのはほんの一握りだけ。自分より先に行ったもの達が脱落する中、男はひたすら一步踏み出すことだけに全力を注ぎました。

一步進んだらもう一步に全力を注ぎ、更に一步進んだらもう一步

踏み出すことだけを考える。

辛い事も苦しい事も沢山ありました。もう止めてしまおうと考えたこともありました。

でも、男はひたすら前に進み続けました。周りに居たはずのものが全員諦めてしまっても、男だけは歩みを止めなかったのです」

それは何と言う激しい人生なのだろう。

報われる保障すらないにも拘らず、ひたすら前に向かって進む生き様。

これが――冒険者、なのか。

「男が冒険者に覚醒したのは随分経ってからでした。

けれど男が運命を切り開く旅に出ようとしたその時、目の前に大きな鏡が現れたかと思うとあつという間に男を飲み込んでしまいました」

ルイズの心臓が跳ね上がる。それはまさに『サモン・サーヴァント』の事であったから。

しかしトモは淡々と言葉を紡ぐ。そこには何の感情も見えなかった。

「そうして男は鏡の向こう側で、とても傲慢で高慢で我侭な女の子に出会いました」

ルイズはずっとこける。

そこまで言わなくても、と眉を吊り上げるが、トモの話が続いているのを見てとりあえず脇に置く。

「女の子は使い魔を捜していました。でも男は冒険者です。誰かに仕えることは出来ません。

断ろうとしたその時、男は見てしまいました。

……必死に涙を堪えている女の子の姿を」

ルイズは最早何も言えなかった。訥々と語るトモの言葉だけが教室の中に流れていく。

「女の子の頼み事を断り切れなくなった男は、冒険者への依頼と言う形で引き受けることにしました。

そして共に歩み始め、男は女の子が何故自分を召喚したのか、何となく理解しました」

そこまで言うと、トモはルイズに視線を合わせる。

ルイズもまたトモの視線を正面から受け止めた。

「……男と女の子は似た者同士だったのです。

報われない努力にあがき、それでも諦め切れない仲間だったのです。

だけど男は冒険者になりました。諦めることを止めて最後までやり遂げたからです。

ならば女の子だって出来るはずです。

こんなに似た者同士だったのですから、間違いありません。

男はせめて女の子が立派なメイジになるまでは傍に居てあげようと誓ったのでした。

めでたし、めでたし」

おとぎ話の常套句で話を締めくくり、トモは再び掃除に戻る。

その姿を見ていたルイズもまた片付けに戻り、教室は再び無言で埋め尽くされた。

「……ねえ、その女の子はどうしたら良いと思う？」

不意にルイズが投げ掛けて来た質問に、手を休めないままトモは答えた。

「さあ、生憎私は『お話し』しただけですので。ですが、そうですね……

恐らくですが、その男だったらこう言ったんじゃないかもしれませんかね。

『目標を持つのは大事ですが、それに囚われていては前に進めませんよ。ほんの一步、周りがどんなに早く歩こうが構わずに自分の一步を確実に踏み出していけば、いつか目標に辿り着けるでしょう?』、と」

「それって、冒険者の……」

ルイズが漏らした呟きに頷きながら、トモは言葉を続ける。

「女の子は諦めかけた時の男に良く似ているんです。ならば前に進む切っ掛けになった冒険者の言葉こそが、諦めかけた女の子に贈るには相応しいんじゃないでしょうか?」

「……お節介ね。本当に、その通りだわ」

「何のことでしょう? 私はただ『お話し』しただけですよ?」

わざとらしく白を切るトモに、ルイズが吹き出す。

再び教室が無言に満たされるが、それはほんの少しだけ温かいようにも感じられた。

教室を片付け終えたのは昼食の直前であつた。

アルヴィーズの食堂へ向かうルイズと分かれ、厨房を訪れたトモはシエスタの姿を探すが、彼女は配膳に出ているらしく見つからない。

「ふむ。……すいませんマルトーさん。賄いを分けて頂きにまいりました」

「おう、使い魔の兄ちゃんか！

すまねえな、今ちよつと手が離せないんで待っててくれ！」

朝食を貰いにいった際に知り合つた料理長のマルトーに声をかけるも、中々に忙しいようである。

トモは大人しく厨房の邪魔にならなそうな所に引込み、一段落するのを待つ事にした。

どうやらメインは既に終わっているらしい。今はデザートを用意している様だ。

配膳の盆にずらりと並んだケーキをぼんやり眺めていると、一仕事終えたらしいマルトーがシチューが盛られた深皿を持って現れた。

「よう、待たせたな！ ……なんだ兄ちゃん、覇氣が無いぜ？」

「ははっ、ちよつとご主人様のことで悩んでましてね。

マルトーさんはご主人様のことをご存知ですか？」

「うん？ 確かヴァリエールの三女様、だよな？ 貴族様なのに魔法が使えないとか」

「ええ、本人もそれを酷く気に病んでいたみたいでしてね。

どうやって慰めようかと考えていたんですよ」

「……まあ、こればかりは平民じゃあなあ……」

「それもあります、何分あの年頃の娘さんが苦手です……」

正直、どうすれば良いのか見当もつかないんですよ」

「なんか、嫁入り前の娘を持つ親父みたいな悩みだな」

「生憎独り身です……ん？ 何だかホールの方が騒がしいよう

ですが」

食事をしながらたわいもない会話をしていたトモの耳に、昼時のざわめきとは違う音が入ってくる。

様子を見に行ったマルトーだったが、すぐに青い顔で戻って来た。

「大変だ！ シエスタが貴族に絡まれてる！」

「何ですって！」

慌てて飛び出したトモが目にしたのは、何やら大声で喚き立てる金髪の男子生徒と、涙目になって頭を下げるシエスタであった。

「何をしているんですか！ か弱い女性を泣かせるなんて、紳士失格でしょう！」

「……何だね君は。退きたまえ、僕は今このメイドに礼儀の何たるかを教育しているんだ」

「トモさん！ いいんです、私なんかを庇ったら貴方まで……！」

生徒とシエスタの間に割って入り、仲裁を試みるトモ。

だが男子生徒は眼中に無いかのように追い払う仕草を見せ、シエスタはトモの腕を掴んで押しとどめようとする。

「……状況が分かりませんが、だからって無抵抗の相手を一方的に責め立てるのはおかしいでしょう？」

「なんだ、事情を知らないのに出しゃばって来たのか？ ……なら教えて上げよう、感謝したまえ」

気障ったらしい仕草で髪を跳ね上げ、男子生徒——ギーシュと言うらしい——の説明が始まった。

事の発端はギーシュが落とした香水の小壺をシエスタが拾って渡そ

うとしたことであった。

しかし彼は受け取りを拒否。

けれど落としたのは確実なので暫く問答していると、その香水がモンモランシーと言う女生徒の作であると誰かが看破した。

騒ぎが大きくなる中、一年のケティなる女生徒が現れてギーシュを非難。

どうやら件の香水の作者と二股を掛けられていたらしい。

鮮やかな平手を送って涙目で去るケティと入れ替わりに、今度は当のモンモランシーが登場。

ギーシュの頭からワインを浴びせ、絶縁を言い渡して去っていったと言う。

その後何を思ったのかギーシュがシエスタを詰り始めた。

最初にとぼけた時に素直に引っ込んでいれば二人のレディの名誉は傷つかなかった筈と、とんでもない言い掛りをつけたのだ。

突然のことに涙目になりながら頭を下げるシエスタになおも言い募ろうとした処で、トモが仲裁に入ったのだった。

「……と、言う訳なのさ。分かったら下がりたまえ給仕君、まだまだそのメイドには言い足りないからね」

気障なポーズを決めつつ世迷い言を吐くギーシュを捨て置き、トモはシエスタに確認を取る。

「彼の言うことは本当ですか？　だとしたらシエスタさんには全く罪が無いように思えるんですが」

「……はい、本当です。」

でも、貴族様に逆らったりしたら最悪無礼討ちで殺されてしまったりするんです。

どんなに理不尽であっても、逆らいさえしなければ命だけは助かるんです。だから……」

唇を噛み締め、俯くシエスタ。

スカートを握りしめる拳が震えているのを見たトモは、やおらシエスタの肩を掴んで顔を上げさせた。

先程から背後で「僕を無視するんじゃない！」と五月蠅いギーシュを意図的に無視して、彼はシエスタに問い掛けた。

「それで、いいんですか？　それが、貴女の本心なんですか？

貴女はそれで、本当に納得出来るんですか？」

それは問いただすと言うより言い聞かせるような、不思議に耳に残る言葉だった。

シエスタの黒い目にたちまち涙があふれる。自分が泣いていることすら気付かないまま、シエスタは思いの丈を吐き出した。

「だったらどうすればいいんですか！？」

魔法が使えない、たったそれだけで平民は生死すら握られてしまふんです！！

たとえそれが全くの逆恨みだったとしても、平民には逆らうことすら許されません！！！！

無力な私に、一体何が出来るって言うんですか！！！！」

彼女の激白に、野次馬達が鼻白む。

平民が、平民風情が貴族に楯突くのか。何様のつもりだ、平民は黙って貴族に奉仕すれば良いのだ！

そこかしこから注がれる視線に、シエスタは自分が何を口走ったのかを悟り、さあっと青褪める。

真っ暗な未来を思い浮かべ、足がガクガク震える彼女を目の当たりにながらも、トモはなお言葉を重ねて行く。

「……シエスタさん、貴女は正しい」

シエスタの両肩を掴み、正面から語り掛けるトモ。再びあの耳に残る不思議な旋律で紡がれる言葉が、徐々に彼女の頭に染み込んで行く。

「貴女はただ職務を果たしただけです。

なのに貴女は無実の罪を押し付けられて、膝を屈してしまいました。た。

それは貴女に力が無かったから。

貴女が『運命を切り開く』だけの力を持っていなかったから」

シエスタの心に染み込んでいくそれは、鼓舞。

「諦めは人を殺します。生きながらに死んだ人は何も生まず、何も為さず、ただただ与えられた運命に盲目的に従って、人生を棒に振ってしまいます」

理不尽な仕打ちへの怒りが。女性を辱めた不義への義憤が。己の正義を貫かんとする不屈が。

「貴女が諦めることを止めるのなら、恐怖に立ち向かう勇気があるのなら」

貴族への恐怖で無理矢理心の隅に追いやられた様々なものが、トモの言葉に目を覚ます。

「私は貴女に与えましょう。——『運命を切り開く力』を
！！」

今、運命に立ち向かう戦士がハルケギニアで産声を上げようとしていた。

※ヤナギダ・トモ（柳田 智） 種属／ヒューマン…3

体力…6／知力…8／感覚…5／敏捷…7／器用…3／魅力…3／
精神…5／幸運…11

HP…10／11 MP…5／11 SP…9／10 ※数値は

現在値／最大値

EXP…13 所持金…8,510円

保有クラスとスキル

・ネゴシエイター…2

・詐術…1／説得…1

・サムライ…1

・居合い斬り…1

アクセサリー
装備品

・厚手のコート／手作りの木刀／運命神の聖印

アイテム
所持品

・背囊／サバイバルナイフ／目覚まし時計

進行中クエスト

・ルイズを守る（期限：ルイズの卒業まで）

第四話 反攻（せんせんふこく）

トリステイン魔法学院の二年生、ギーシュ・ド・グラモンは『土』系統のメイジである。

二つ名は『青銅』。

その名の通り、彼は青銅を操ることに関しては天才的であった。

彼は青銅製のゴーレムを一度に七体も操ることが出来る。

ことゴーレムに置いては二年生随一と言えるだろう。

だが、裏を返せばギーシュはそれだけが取り柄のメイジでしかないのだ。

ドット、ライン、トライアングル、スクエアに分けられるメイジのランクにおいて、彼は最下級のドットである。

ギーシュは比較的早い時期に魔法に目覚めた。

にも拘らず、未だにランクはドットのままで成長していない。

では、何故ギーシュはいつまでも成長していないのだろうか？

その答えがここにあった。

「いい加減にしろ！　いつまで僕を無視しているつもりだ！！」

ギーシュは四人兄弟の末っ子だった。

厳格な父を持つものの、母と兄達から溺愛されて育った。

それが彼から精神力を培う機会を奪ってしまっていたのである。

甘えが残る精神は幼い子供と同じだ。

ストレスに弱く、些細なことで癇癪を起こす、魔法と言う危険物を持った子供。

目の前で訳の分からない会話を交わす二人を怒鳴りつける今のギーシュは、まさに幼い子供の姿そのものだった。

「私は貴女に与えましょう。」

——『運命を切り開く力』を！！』

トモの言葉を聞いたシエスタが目を見開く。

「力……ですか？ それは一体……？」

「その力を得られるかどうかは貴女自身が決めるのです。」

流れに身を任せ、欲しいものをただ待つだけでは何も得られませんが。

逆境に身を晒しても絶対に諦めない、そんな人間でなければ『運命を切り開く』事など出来ないのですから」

運命を切り開く。

随分な大言壮語だが、それが出来るのは一部の人間だけだろう。

そう、それこそ伝説の勇者でもなければ不可能だ。

「選ぶのはシエスタさん、貴女です。」

もしこのまま運命に流されることを選ぶなら、私の助力はここままで。

無論貴女の立場や職場は保障しましょう。オールド・オスマンや他の先生方に掛け合っても、必ず貴女を守り切ってみせます」

ああ、それがいい。

それでいい。

貴族様に目を付けられても、殺されるよりはマシだ。

(……本当に?)

「ですが、もしも貴女が運命に流されることを良しとせず、理不尽に立ち向かう決意を抱くのであれば、私は貴女に『新たな道』を示しましょう」

やめてくれ。

しがない平民に過ぎない私に、そんな大それた決意なんか出来る訳が無いだろう?

(……本当に、それでいいの?)

「その道は険しく、道程も長い。

踏破出来た人間は一人もおらず、何処まで続いているのかさえ分からない」

なんだそれは。

そんな危ないものに私を誘わないでくれ。

私はただ安穩に生きていたいだけだ。

(……本当に、そう思っているの?)

「けれども、大勢の人間がその道を歩いています。

辿り着けるかどうか分からないゴールを目指して、決して諦めずに」

うるさい。だまってくれ。

私はそんな道に行きたくない。

私は平穏な人生を送りたいんだ。

(……本当は、もう分かっているんでしょ?)

「その道を選ぶなら、最初の道案内は務めましょう。」

ですが、それを選ぶのは貴女です。貴女でなければなりません」

やめろ。

やめてくれ。

そんな道を指し示さないでくれ。

だって、このままでは――

「だって人生は、貴女自身の取り分なんですから」

その眩しく輝く道に、

(――踏み入りたくて、うずうずしているんだから!)

シエスタの瞳に炎が踊る。それに気付いたものは居ない。

……いや、たった一人だけ、それを見届けた人間が居た。

「……私の人生は私の取り分。そうおっしゃいましたね?」

内心の葛藤を制し、シエスタは頭一つ高いトモを見上げてそう尋ねる。

そして彼は、彼女の言葉を肯定した。

「そうです。」

それを元手にどんな賭けに打って出ようが、それは自由です。

勝てば億万長者、負ければ尻の毛まで糞られて素寒貧。

ただ一つだけ言えるのは、それは決して貯金出来ずに目減りしていくものだ、って事だけですかね」

「成程、それは大変ですね」

世間話のように気安い会話。

されど、そこに込められた意味は重い。

「ああ、それともう一つありました」

「何でしょう？」

「賭けに負けたツケを他人に押し付けてはいけない、ですね」

「それはまた何とも素敵なお話ですわ。では行って参ります」

それは何より重たい決断。

だけど、彼女に後悔は無い。

「宣戦布告ですね。精々派手に行きましようか」

「ええ、精々派手に行きましよう」

頷き合うと、二人はようやくそこに目を向けた。

視線の先には怒りで顔を真っ赤に染めた気障男、ギーシュが居る。

シエスタは先程までの怯えが嘘のように軽々と、そして堂々と歩み寄り、スカートの裾を摘んで一礼。

「……ごめんあそばせ!!」

「ぷべっ!？」

そして彼女の豹変に戸惑うギーシュに、目の覚めるような平手を叩き付けた。

「な、何をするだア——ッ!!」

「あら失礼。何分下賤な平民の身の上でして、貴族様方の作法は良く存じませので」

蒸気を吹き出さんばかりに怒り心頭のギーシュに、慇懃な態度でいなすシエスタ。

余りにも急展開過ぎて置いてけぼりの野次馬を余所に、二人は次の演目に差し掛かった。

「し、し、使用人の分際で、よくもこの僕を平手打ちにしたな! もう許さんッ!!」

「生憎手袋の持ち合わせがないもので。平手で代用してみたのですが、お気に召しませんでしたか?」

「お気に召すも何も……って、手袋の代わり!? 正気か君は!?!」

更に言い募ろうとしたギーシュが、彼女の言葉の意味を悟って愕然となった。

見れば周囲の野次馬の中にもそれを理解したものが居るらしく、あちらこちらでざわめいている。

「正気も正気、本気も本気ですとも。」

私ことトリステイン魔法学院の使用人シエスタは、メイジたる『青銅』のギーシュに決闘を申し込みます!」

シエスタの宣言を聞き、ざわめきは増々広がっていく。

「あのメイド、頭大丈夫か?」、「可哀想に、余りの恐怖で精神を……」等と言う呟きも混ざり始める。

「い、いや、幾ら平民とは言え、女性に手を挙げるのはグラモンの男としては……」

「おや、お逃げになると？ 武家の名門たるグラモン家の方が、たかが平民のメイドに挑まれた程度でお逃げになるのですか？」

「何だとッ！！ よし分かった、その決闘受けよう！」

ヴェストリの広場に来るがいい！ 君に貴族への礼儀を叩き込んでやろう！！」

流石に逡巡するギーシュだが、シエスタの挑発にあっさり引っ掛かると踵を返した。

友人らしき生徒達が諫めようとするが、彼は聞く耳も持たずに食堂から出て行く。

その姿を見送るシエスタとトモに、血相を変えたルイズが駆け寄った。

途中からではあったが一部始終を見ていた彼女は、これを引き起こしたトモに詰め寄る。

「何考えてるの！ け、決闘なんて……しかもメイドに！」

「ふむ、これでも一応勝算はあるんですが……」

ではシエスタさん、人目の付かなさそうな場所をご存知ありませんか？」

「はい？」

唐突に振られた話にシエスタが面食らう。

その質問の意味を取り違えたルイズが爆発した。

「あ、あんた！ まさかこの子を手込めにするつもり！？」

「ご主人……貴女は私を何だと思ってるんですか。」

単に『冒険者』関係のことなので、なるべく人に見られたくないんです」

「えっ！？」

「……ボウケンシャ？ 何ですそれ？」

初めて耳にする言葉に眉を顰めるシエスタ。
方やその意味を知るルイズは盛大に衝撃を受けていた。

「ち、ちよっと！ それってどういう……」

「申し訳ありませんが時間が余りありません。

あ、それとシエスタさん、お金か貴金属みたいな『価値のあるもの』をお持ちでしたら持って来て下さい」

「え？ ええ、持ってますが……何に使うんです？」

「説明してる暇がありません。今はとにかく動きましょう」

トモはそう言うが早いのか、シエスタに先導させて素早く食堂を出て行く。慌てて後を追うルイズ。

残された生徒達もまた唐突に開催されたイベントに惹かれ、ヴェストリの広場を目指すのであった。

学院長は多忙を極める役職だ。

故にオスマンと秘書のロングビルは昼食を学院長室で摂るのが慣例になっていた。

二人が遅めの昼食に手をつけようとしたまさにその時、学院長室の扉が猛烈な勢いで開け放たれる。

すわ何事か！、と視線を向けた二人が目にしたのは、酷く狼狽したコルベールの姿だった。

「おおおおオールド・オスマン！　ねねねね眠りの鐘の使用許可を！」

「落ち着きたまえミスタ・コルベツト。一体何事かね？」

「そそそそれどころではありません！　いい一刻も早くあれを止めなければ！」

オスマンが名前を間違えたにも拘らずツツコミが入らない。

それに見たオスマンとロングビルが思わず顔を見合わせた。

軽くボケることで会話を容易にするのがオスマンの常套手段である。コルベールもそれを知っており、彼の仕様もないギャグに毎回付き合っていた。

そのコルベールがツツコミを忘れる程の異常事態。

何かが起きていることを感じさせるには充分過ぎた。

「ミスタ・コルベール、いいから落ち着いて話したまえ。学院の秘宝を使うからにはそれなりの大義名分が必要なことぐらいは知っておるじゃろう？」

「これをどうぞ、ミスタ・コルベール。気を鎮めるには丁度良いと思いますわ」

オスマンが居住まいを正してコルベールを宥め、ロングビルが昼食に付いていたワインを差し出す。

差し出されたワインを一息で飲み干して気を落ち着かせたコルベールは、二人に事情を説明する。

「じ、実はヴェストリの広場で決闘騒ぎが起こりまして、それを止める為に眠りの鐘を使わせて頂きたいのです！」

「何じゃ、また貴族の悪餓鬼共が騒いでおるのか。そんなもん秘宝を使うまでも無かろうに」

事情を聞いて呆れるオスマン。

貴族同士の決闘は禁止されているが、決闘の名を借りた子供の喧嘩なら日常茶飯事だったからだ。

しかしコルベールは首を振ると、信じ難い言葉を吐き出す。

「決闘を受けたのは二年生のギーシュ・ド・グラモン、決闘を申し込んだのは……学院のメイドです！」

「……えっ？」

間拔けな声を漏らし、思わず惚けるオスマンとロングビル。それはそうだろう、何処の世界に貴族に決闘を申し込むメイドが居ると言うのか！

「……冗談じゃ、ないのじゃな？」

「冗談じゃありません！ 本当のことです！」

「な……何を考えているんですの、そのメイド！ 自殺行為ですわ！」

「私にも分かりません！ とにかく早く止めないと、彼女の命に関わります！」

二股が発覚した挙げ句その責任をメイドに押し付けようとした男子生徒が、そのメイドに決闘を申し込まれた。

経緯だけ聞けば何の喜劇だとは思えない話だが、その結末はどう考えても悲劇しか浮かばない。

「しかしじゃ。この学院に勤めておるメイドならその辺りのことは弁えておる筈。

何が彼女をそうさせたのじゃろうな？」

オスマンの疑問も当然だろう。

しかしコルベールの答えは彼の想像の斜め上を行った。

「そ、それが……昨日召喚された彼が『力を与える』とか何とか言
ってそそのかしたらいいのです！」

「何じゃと!?!」

昨晚学院長室を訪れた異国の男。

壮大な神話を語り、誰にも従わないと明言した彼がメイドを誑かし
たと言う。

しかし、オスマンはその言い様に疑問を抱いた。

「待ちたまえコルベール君! 彼は確かに『力を与える』と言った
のかね!?!」

「人伝なので正確ではないのですが、複数の証言もあったので本当
ではないかと……」

『力を与える』。

彼らメイジにとって『力』とは魔法を指すが、平民のメイドに魔法
は使えない。

ならば『力』とは何だろうか?

平民でも使える『武器』? それとも何らかの『戦術』?

否、昨晚ここに現れた彼は何と名乗っていただろうか。

そう、確か……

「よもや『冒険者』の力を与える、とても言うのか!?!」

「馬鹿な、彼女は平民ですよ!?! 神に挑むなんて大それた真似が

……」

「いいえ、ミスタ! 神に挑むと言うのであれば、貴族に逆らうな
んで大したことじゃありませんわ! それが彼女の自信だしたら……
……!」

運命を切り開き神に挑む『冒険者』の力。

それを与えられると言うのなら、メイドの態度にも納得は行く。オスマンは即座に壁に立て掛けられた『遠見の鏡』を起動させる。映し出されたヴェストリの広場にはギーシュと野次馬の姿はあれど、肝心のメイドと彼の姿は無い。

「メイドの名は？」

「確かシエスタ、だったかと」

「ふむ、タルブから来ていたメイドだったかな？　それならば……」

オスマンが杖を振ると、鏡に映る情景が変わる。

メイド達が寝泊まりする寮の一室で、件のメイドと昨晚の彼、そして彼を呼び出した女生徒が何かをしている姿が映し出される。と思った次の瞬間、メイドの手に銀色に光る何かが出現した。今度はその何かに小墮らしきものを押し付けると、今度は細長い何かが姿を現す。

「何じゃ今のは。どう見る、二人とも？」

「『練金』でしょうか？　にしては、杖を振る様子が……」

「そもそもミス・ヴァリエールは魔法が使えません。当然『練金』もです」

『練金』は土系統では最も初歩の魔法だ。

物質を作り替え、質量すら自在に操る魔法だが、あの場にそれが使えるメイジは居ない。

「と、言うことは……あれが『冒険者』の力、と言うことになるのかの？　何とも地味な……」

「それどころじゃありませんオールド・オスマン！　このままでは

彼女が……！」

「皆まで言うでない！」

ミス・ロングビル、すまんが眠りの鐘を準備しておいてくれ！

モートグニルが続けて三回鳴いたら鳴らすんじゃ！ 頼んだぞ

！」

「分かりましたわ！ すぐ準備します……！」

学院長の使い魔であるハツカネズミを肩に寄せ、ロングビルは大慌てで走り出す。

残った二人が『遠見の鏡』に目を戻すのと、メイド達が広場に現れるのは同時であった。

さて、学院長室から出歯亀されているなど思いもよらないトモ達一行が訪れたのは、シエスタの寮室であった。

四人部屋を同僚と共同で使っているが、今は皆出払っていてもぬけの空。

人目につかないと言う点では格好の場所と言える。

「さて、始めましょうか。

本当は高レベルの冒険者がいいんですが、駆け出しでも出来ますからご安心ください」

「始めるのはいいけれど、何する気？ これでこの子を傷物にでもしたら、責任は取れるんでしょうね？」

「……善処します。ではシエスタさん、利き腕の掌を上に向けても

「られますか？」

「はい……こうですか？」

ルイズが放つプレッシャーを背に、トモは差し出されたシエスタの掌に自分の手を重ねる。

「……これで準備は整いました。最後に確認しますが、本当にいいんですね？」

「今ならまだ間に合いますよ？」

「いえ、大丈夫です。」

神に挑むと言うのは怖いですが、このまま人生に流されたくはありませんから」

ここに来る道すがら、トモは冒険者の由来とその力のことを大雑把に説明している。

その余りに壮大で途方も無い目的に驚くものの、シエスタは決して怖れてはいなかった。

既に喧嘩は売ってしまったのだ。今更止めろと言われても止められない。

何よりも『運命を切り開く』というフレーズが彼女の心を捉えて放さない。

流されるままに生きたこれまでのツケ、清算出来るのなら清算してやりたかった。

「宜しい、その気持ちを忘れないで下さい。

『諦めないこと』、それが冒険者の基本にして極意ですから。

では私の後に続いて復唱して下さい。

心の底から『冒険者になりたい』、『絶対諦めない』、あるいは私のように『神様をぶん殴る』と強く念じながら」

言われてシエスタは思い浮かべる。

故郷の村で過ごした日々を、学院に奉公に出てからの日々を。

貴族に下げたくもない頭を下げ、反抗心を押さえつけて過ごした日々。

溜まりに溜まった鬱憤を晴らすべく、自らの中で暴れ狂うそれを解き放つ自分の姿を。

「大迷宮におわす運命神よ、我に運命を切り開く資格あらば、我を認め給え」

「だ、大迷宮におわす運命神よ、我に運命を切り開く資格あらば、我を認め給え！！」

朗々と響くその言葉。

ルーンの響きにも似た旋律ながら、そこに込められたのは全く異なる意志。

シエスタとて敬虔なブリミル教徒だ。異端の恐ろしさは肌に染みている。

けれど彼女は今、自らその異端に足を踏み入れた。

（私の人生を、運命を切り開けるのなら、始祖にだって喧嘩を売ります！！！
だから——！！！！）

「されば我、神に挑む冒険者なり！」

「されば我、神に挑む冒険者なり！！」

世界に宣誓が果たされる。

その瞬間トモとシエスタは、祝福の鐘の音を確かに聞き届けた。

そしてトモが手を離すと、残されたシエスタの掌には三本の剣を重ねた形の聖印が光っていた。

「これは……！」

「……まさか一回で成功するとは」

突然現れた聖印に見入るシエスタに、トモの不吉な呟きが聞こえる。それは傍で見届けたルイズにも聞こえたらしい。

「何よそれ！ 勝算があるとか言って、行き当たりばったりじゃないのー！！」

「い、いや……この『冒険者の洗礼』って、普通は一回じゃ成功しないんです。

私だって何十回も試してやっと成功したんですよ？

それが一発で……複雑な気分ですよ、本当に。

……あんなに苦労した私の努力は、何だったんでしょうね？」

「ええと、その……ご、御愁傷様です？」

これが才能の差ってやつですかね？ と落ち込むトモにずれた慰めを掛けるシエスタ。

彼の努力を知っているルイズは何とも言えず、微妙な空気が辺りを漂う。

だがいつまでもこうしているわけにはいかない。

トモは自らの頬を叩くと、気合いを入れ直して次のステップに進む。

「さて、それが運命神様の聖印です。

三本の剣はそれぞれ運命と未来、そして神に挑むことを意味しています。

それが得られたと言うことは、シエスタさんが冒険者として認められたという証明ですね。おめでとうございますシエスタさん」

「あ、ありがとうございます」

「では、次は神器を手に入れましょう。

シエスタさん、『価値のあるもの』はどれ位持ってますか？」

水を向けられたシエスタの顔が曇った。

彼女は稼ぎの大半を故郷に送っている為、あまり現金の持ち合わせが無いのだ。

その様子にルイズも事情を察し、おずおずとシエスタに申し出る。

「その……お金が無いなら立て替えるわよ？　元はと言えば私の使い魔が悪いんだし」

「いえ、ご主人様。それは駄目なんです。

あくまで神器を欲する本人が所有しているものと交換でないと」

「でもこの子、お金、持ってなさそうよ？」

「お金でなくてもいいんです。何らかの『価値がある』と認められるものであれば……」

主と使い魔（偽）との会話。

だがその内容にシエスタは一条の希望を見出した。

「あの、お金でなくてもいいんですよ？　一寸待って下さい」

そう言ってシエスタは私物を入れてある棚をひっくり返し、一本の小壘を引っ張り出して来た。

「これ、学院から貰った最初のお給金で買った香水なんです。

勿体無くてあんまり使ってないんですけれど、これでどうでしょうか？」

「どれどれ……ごめんシエスタ。これあんまりいい香水じゃないわよ？

そんなにするとは……」

「いえ、たとえ安物でも本人が価値を認めているのであれば大丈夫です。

ただ、入手出来る神器はお値段相当のものになります」

小壘の中身は少し前に平民の間で流行った香水だった。

平民向けだけにお値段もそれなりで、シエスタでも何とか入手出来た代物である。

目の肥えた貴族であるルイズからすれば安物にも程がある粗悪品だが、どうやらこれでも神器は得られるらしい。

随分安っぽい奇跡であった。

「では何にしましょう？ 武器、防具、あるいは何らかのアイテム……ここは無難に武器にしますか？」

「まあ、勝つ為には武器は必要だし、それでいいんじゃないかしら？」

「そうですね。まあ、貴族様に喧嘩売って骨の一本二本程度で済めば儲け物ですし、だったら全身の骨を碎かれる前に貴族様を叩きのめせる武器が欲しいですね」

「……可愛い顔して割と過激なのね貴女。ちょっとぞくつとしたわよ」

物騒なことを言い出すシエスタにルイズがドン引きする中、トモは神器の入手方法を説明する。

とは言ってもそんなに難しいことではない。

何が欲しいのかを思い浮かべながら神器に香水の小壘を押し付けるだけだ。

「武器が欲しいと念じながら小壘を聖印に触れさせて下さい。

そうすれば、貴女のクラスで使える香水と同じ価値の神器が現れる筈です」

「分かりました。

……武器が欲しい武器が欲しい武器が欲しいあの気障野郎をお掃

除出来る武器が欲しい……」

「……怖っ！なんか凄いいわよ！」

トモのアドバイスに従いぶつぶつ呟きながら聖印に小壇を押し付けるシエスタと、その姿にドン引きするルイズ。

しかし次の瞬間、その目が驚愕に見開かれた。聖印に吸い込まれるように小壇が消えたのである。

代わりに聖印から光が溢れ、収まったそこに現れたのは、

「「モップ……？」」

そう、そこにあったのは何の変哲も無いモップだった。

新品らしく、染み一つない毛先をだらんとぶら下げ、モップはそこに立っていた。

「な……なんで、モップ……？」

「え、私これで戦うんですか？ 冗談ですよね？」

啞然とするルイズと狼狽するシエスタ。

同じく呆然としていたトモがそれを見て我に返り、シエスタに確認する。

「すいませんシエスタさん！ ステータスを確認してもらえますか！？」

「え、ステータスって……どうするんですか？」

「聖印に触れてステータス確認って念じれば分かります！ 至急確認して下さい！」

言われてシエスタは聖印を祈るように両手で握り締め、念じる。するとじわっと滲み出るように、脳裏に何かが現れた。

※シエスタ 種属／ヒューマン…2

体力…4（+1）／知力…3／感覚…6（+1）／敏捷…3／器用…
6（+2、-1）／魅力…5／精神…4／幸運…14

※○内は今回加算された補正值

HP…10／10 MP…10／10 SP…10／10 ※数値

は現在値／最大値

EXP…17 所持金…20スウ

保有クラスとスキル

・ハウスキーパー（※1）…1

・清掃術（※2）…1

・ハンター（※3）…1

・解体術（※4）…1

アクセサリ
装備品

・メイド服（※5）／モップ（※6）／運命神の聖印

アイテム
所持品

・なし

進行中クエスト

・ギーシュと決闘（期限…本日で）

「は……はは……あはは……」

「しっかり！　しっかりしてシエスタ！」

「これは……酷い」

シエスタのステータスは想像以上に酷かった。

何しろ戦闘系の技能が全く無いのである。

ハウスキーパー（家政婦）？　掃除や洗濯でどうやって戦うのだ。

ハンター（狩人）？　ギーシュを狩った後なら役に立つかも知れないが、決闘では役に立たない。

与えられた神器がモップだった理由がよく解った。確かにメイドが使うならモップは相応しいだろう。

壊れたように虚ろな笑い声を上げるシエスタと、そんな彼女を何とか現実に取り戻そうとするルイズ。

ある意味修羅場だった。

「もういいんですミス・ヴァリエール。

冒険者なんて大それた真似、最初っから無理だったんですよ。あはは……」

「なに言ってるのシエスタ！ 貴女さっき諦めないって誓ったじゃない！
諦めない限り何とかするのが冒険者なんでしょう！？」

「そうですね。まだ手はあります」

その言葉を聞いた二人の手が止まる。

思わず向けた視線の先で、トモは力強く頷いた。

※ヤナギダ・トモ（柳田 智） 種属／ヒューマン…3

体力…6／知力…8／感覚…5／敏捷…7／器用…3／魅力…3／
精神…5／幸運…11

HP…10／11 MP…3／11 SP…9／10 ※数値は
現在値／最大値

EXP…15 所持金…8,510円

保有クラスとスキル

- ・ネゴシエイター…2
- ・詐術…1／説得…1
- ・サムライ…1
- ・居合い斬り…1

アクセサリ
装備品

・厚手のコート／手作りの木刀／運命神の聖印

アイテム
所持品

・背囊／サバイバルナイフ／目覚まし時計

進行中クエスト

・ルイズを守る（期限…ルイズの卒業まで）

第四話 反攻（せんせんふこく）（後書き）

用語解説

（※1）家事全般を得意とする一般技能系のクラス。器用に＋L Vのボーナス補正を加える。

（※2）掃除をする為の技能。判定の達成値に（L V）d 6を加える。

（※3）狩りの技術に精通した一般技能系のクラス。器用に＋L Vのボーナス補正を加える。

（※4）獲物を加工する為の技能。判定の達成値に（L V）d 6を加える。

（※5）文字通りただのメイド服（敏捷に－1）。

判定にファンブルすると破損する（ファンブル値に＋4）。

重量…0.5

（※6）頑固な汚れも一撃で消し去る清掃道具。

レンジ近距離～中距離、物理ダメージに1 d 6を加える（貫通効果あり）。

清掃の達成値に1 d 6を加算する。重量…1

第五話 決闘（しつけ）

ヴェストリの広場。

トリステイン魔法学院の中庭に位置するそこは生徒達の語らいの場であり、憩いの場でもある。

しかし今、ここは熱狂と興奮、そして戸惑いが渦巻くるつぼと化していた。

決闘と言う前時代的な、それでいてプライトをくすぐるイベントに熱狂するもの。

逸る心を抑え、命を懸けた戦いを今か今かと興奮しながら待ち望むもの。

そして最も多いのが——ここに至る経緯に戸惑うもの、だった。

「……なあ、ギーシュに決闘を挑んだメイドって、お前知ってるか？」

「ああ。黒い髪のメイドだろ？ 結構可愛かったな……」

「でさ、どう思う？ 正直な話、正気の沙汰とは思えないんだけれど……」

「……まあな。決闘を挑んだメイドもそうだけど、受けたあいつも大概だよな」

「しかも理由が二股がバレたから、だってさ。意味分かんないよ」

「貴族に逆らうだけでもヤバイのに、決闘までって、本気かな？」

「——おい、どうやら本気だったらしいぞ。あれを見ろ」

下馬評に花を咲かせていた野次馬達が注目する中、件の挑戦者……黒髪のメイドが現れる。

……その手に一本のモップを携えて。

「……まさか、あれで戦うつもりじゃないだろうな？」
「そのまさか、みたいだぜ」

メイドが持ち出して来た得物に顔を引きつらせたギーシュの指摘に、メイドは堂々と啖呵を切って見せる。

「……おいおい、随分勇ましいじゃないか。惚れそうだ」

「相手は平民だぞ？ それにお前、一年の子を狙っていたんじゃない？」

「……ああ、そうだよ。あのケティって一年生をな」

「……全面的に俺が悪かった」

そして互いに名乗りを交わす。決闘前の礼儀だ。

ギーシュの傲慢な名乗り上げに対し、慇懃に礼を尽くした名乗りを返すメイド。

可憐な容姿と裏腹に、苛烈な闘志を漲らせる少女の気迫に空気が張りつめる。

「……いいな」

「ああ、いいなコレ。この緊張感は癖になりそうだ」

「違えよバカ。あのメイドのことだよ」

「ああ言うのがお前の好みなのか？ 尻に敷かれそうだが」

「それもいいかも」

「……たった今、お前との友情を考え直したくなったよ」

両者の放つ覇気に押され、野次馬のざわめきが小さくなっていく。やがて完全に静まり返った広場に一陣の風が吹き、

「骨の一本二本は覚悟してもらおう！ いけっ、『ワルキューレ』っ！！」

「そんなものはとつくに覚悟の上ですよ！ 行きます！！」

二人の決闘は開始された。

ギーシュが造花の杖を振るう。

薔薇を形作る七枚の花弁、その一枚がひらりと舞い落ちて鎧を纏う女戦士の姿を形作る。

これぞギーシュの得意技、『ワルキューレ』であった。

彼は最大で七体の『ワルキューレ』を操れる。だが、この場に現れた『ワルキューレ』は一体だけ。

（メイドを叩きのめすには一体で充分過ぎるくらいだ！！）

ギーシュの目算は間違いではない。事実、平民への無礼討ちにしてもゴーレムを持ち出すのは『やり過ぎ』と言えるだろう。

けれどそれは失策であった。少なくとも今のシエスタに対しては。

『ギーシュの得意技？ 確か、悪趣味な形のゴーレムを使っていたと思うけど』

事前にルイズからもたらされた情報そのままの、捻りの全く無い行動。

何の警戒も無く、惰性で行ってしまった手順。

それは大きな隙となってシエスタの前に曝け出される。

そしてシエスタは走り出す。決闘の先手は彼女が取った。イニシアチフ

「えええいっ！！！」

「何いっ！？」

力任せに薙ぎ払われたモップの一撃は、けれど寸での所で『ワルキューレ』に弾かれた。

青銅の塊たる『ワルキューレ』に弾かれてなお傷一つ無いモップの頑丈さに驚きながらも、ギーシュは目の前のメイドへの認識を改めた。

（成程、大言壮語にはそれなりの理由があったという訳か）

魔法を使うには準備が要る。

杖を振るう、ルーンを詠唱する、あるいはマジックアイテムを起動するなどの準備はメイジにとって最大の隙でもあった。

そこを突かれれば如何にメイジとて平民に倒されることもあろう。それがメイドの狙いだったのだ。

（多分、ルイズ辺りの入れ知恵だろうな）

相手の弱点を突く的確な戦術の出所を推測するギーシュ。

この様子だと他にも策が在るかも知れないと気合いを入れ直し、傍らの『ワルキューレ』に構えを取らせる。

それは同時にシエスタの付け込むべき隙が消え去ったことを意味していた。

ギーシュの表情から油断が消える様を見て、シエスタは作戦が失敗したのを悟った。

彼が立てた推測は大体正解である。違うのはその策の出所がルイズ

ではなく、その使い魔であったことぐらいだ。

そしてトモから示された作戦とは「とにかく先手を打て」、それだけである。

所詮は平民と高をくくり、油断し切った相手なら初手を取るの易だ。容易だろう。

逆に言えば、それ以外で彼女が優位に立てる部分はないということだ。

（しまったなあ……、これじゃ『もう一つ』の方に賭けるしか無いじゃない！）

目論見通り初手を取ったまではないが、まさか防がれるとは思わなかった。

どうせやるなら『ワルク्यूレ』を造り出される前に片をつけねばならなかったのだ。

無論トモもそのつもりで策を授けている。だからこれはシエスタ自身の失敗であった。

これで彼女は文字通り『運を天に委ねて』決闘に望まねばならなかった。

この手番はお互いに悪手の指し合いとなっただけに終わる。

そしてお互い仕切り直しの第二戦、^{イニシアチフ}先手を取ったのはギーシュ。

踊り掛かって来る『ワルク्यूレ』の攻撃を見切り、ギリギリで躲したシエスタはモップを構えて突撃を敢行する。

術者狙いのその攻撃は、けれどそれを予測していた彼によって阻まれた。

攻撃すると見せかけたのは罠。そのまま一回転して叩き込まれた裏拳をどうにか避けた彼女に、ギーシュは容赦なく追撃を仕掛ける。

青銅の拳のラッシュ、ラッシュ、ラッシュ！ 風を切って振り回さ

れるそれを鋭い感覚で捉え、底上げされた器用さで何とか捌くシエスタ。

勝負は持久戦に持ち込まれた。

大方の予想を裏切り、意外に善戦する彼女に野次馬達がざわめき出す。

実の所、野次馬達が見たいのは『決闘』ではなく『貴族に楯突く平民が叩きのめされる様』なのだ。

平民がメイジに、貴族に勝てるなどとは思いつくことさえ出来ない彼らにとって、一連の戦闘は『シエスタの奮闘』よりも『ギーシュの不甲斐無さ』しか見えない。

野次馬のフラストレーションは徐々に高まりつつあった。

もう何度目になるかも判らない金属製のストレートパンチをモップで捌く。

木製にしか見えないモップの柄は、幾度となく『ワルキューレ』の拳が直撃したと言うのに罅一つ無い。

当然だ。見た目こそただのモップだが、これも立派な神器であり、

『壊れない』と言う祝福を受けた武器なのだから。

お返しとばかりに突き入れられたモップは『ワルキューレ』の青銅の肌に弾かれる。

曲がりなりにも金属、しかもメイジに操られるゴーレムだ。見た目よりは頑丈らしい。

防御と攻撃を繰り返すシエスタ、その目の前で『ワルキューレ』が唐突にしゃがみ込む。

何のつもりか、と訝しんだ次の瞬間、青銅の弾丸が飛んで来た。

陸上のクラウチングスタートのような、力を溜めて全身のバネを使う体当たりである。

突然襲い掛かって来た大質量の弾丸を咄嗟にモップで受け止めるシエスタ。しかし体格に劣る彼女にそれを止める術は無い。

そのまま跳ね飛ばされて地面に叩き付けられる。衝撃に肺が軋み、一瞬息が止まった。

咳き込みながら立ち上がろうとするシエスタに『ワルキューレ』が迫る。

両手を組んで振り下ろされる鉄槌。何とかモップで受け止めたものの、それは何度も振り下ろされる。

逃げ場が無い状況で繰り出される攻撃。ダメージが蓄積していくにつれ、モップを握る手が段々緩んでいく。

このままではジリ貧になると踏んだシエスタは一か八かの賭けに出た。

『ワルキューレ』が手を振りかざすタイミングに合わせ、真横に転がり込む。

突然目標を見失った『ワルキューレ』がたたらを踏む姿に、上手く行ったとほくそ笑んだ彼女の腹に途轍も無く重たい衝撃が走る。

寸前で彼女の目論みに気付いたギーシュが『ワルキューレ』の間接を無理矢理振じ曲げ、蹴り飛ばしたのだ。ゴーレムだからこそ出来る荒技だった。

容赦のない一撃であったが、シエスタは何とか堪え切った。とはいえ、彼女の受けたダメージは深刻である。

熱いものが胃を逆流する。耐え切れずに吐き出すと、吐瀉物に混じって赤いものが見えた。内蔵を傷付けたのだろう。

それでも尚、諤々と震える足を叱咤してモップを杖に立ち上がるシエスタに、ギーシュは驚愕しながらも降伏を迫る。

「……も、もういいだろう？ それ以上の抵抗は無意味だ、今すぐ

詫びれば許してやる!!」

「……………何を今更。むしろ詫びてもらうのはこちらの方では？」

口の周りを朱に染め、震える身体に鞭打って再びモップを構えるシエスタのことを、彼は全く理解出来なかった。

痛くない筈が無い。死ぬのが怖くない筈も無い。なのにそれでも尚立ち向かってくる彼女が、そこまで貴族に逆らう理由がギーシュには判らなかつたのだ。

「何故だ？ 何故、そこまでして貴族に楯突く？ 何の意味があつてこんなことをする!？」

「……何を勘違いされているのか存じませんが、私は貴族様に逆らっている訳ではありませんよ。」

「馬鹿な! ここまでやっておいてそんな詭弁が……」

ギーシュの問いに飄々と答えるシエスタ。

その言葉に激昂しかけ、しかしギーシュは続く台詞に言葉を失った。

「私はただ、自分のお尻も拭けない生意気な子供を全力で躰けているだけですもの」

満身創痍の姿とは対照的な晴れやかな笑み。そばかすの残る顔に似合いの可憐な表情にギーシュは一瞬だけ見惚れ、すぐに振り払う。

あれは敵だ。それも彼が全く理解出来ない未知なる敵だ。

ならば——遠慮はいらない!

「そうか、あくまでも僕を侮辱するのか。

……ならば最早手加減無用! 全力で君を裁いてやろう!!」

「お気遣いは無用です! 私はとくに手加減なんてしていませんから!!」

啖呵と共に、シエスタはモップを構えて突撃する。力任せの素人戦法だ。余裕を持ってギーシュは『ワルキューレ』でモップを弾こうとする。

けれど、迫るモップに掴み掛かった『ワルキューレ』の拳は宙を切り、そして青銅のゴーレムが空を舞った。

「……は？」

それを見たギーシュの目が点になった。野次馬達もまた、たった今目の前で起きた信じ難い出来事に啞然とする。

そんな観客達を余所に事態はどんどん進んでいく。

ボロボロになった『ワルキューレ』の姿に、ギーシュはそれが現実であることを知る。

それまで力任せだったモップが突然、歴戦の戦士が振るう槍のように鋭く動き、『ワルキューレ』を弾き飛ばしたという、冗談みたいな光景が。

冒険者のスキルはそれが必要とする時に目覚めるものである。

素振りや型稽古のような修行を積み、鍛錬を繰り返してようやく獲得するのが普通だ。

けれど極一部の例外として、危機に陥った冒険者が土壇場でスキルに目覚めることがあるのだとトモは語った。

『わざと決闘を長引かせて、スキルの獲得を待つ』

冒険者を名乗る使い魔が示した、奇跡と偶然に頼った策とも呼べない零か全かの大博打。

己の命を賭け金にした一世一代の大勝負に、シエスタは勝利したのだ。

「おおおおおおおおおっ!!!!」

シエスタが勇ましい雄叫びを上げ、目の霞む疾さで刺突を繰り出す。それは空中に放り出された『ワルキューレ』を少しずつ削り取っていった。

「はあああっ!!」

仕上げとばかりにモップを腰だめに構え、シエスタは『ワルキューレ』に向かって突進する。

「おりゃああああああああああああっ!!!!!!!!!!」

五メートルの距離を一気に駆け抜け、シエスタは『ワルキューレ』にモップを突き立てた。

必殺の気迫が籠ったその一撃は青銅で出来た『ワルキューレ』を易々と貫き、そのまま呆然と立つギーシュの腕を強かに打ち据える。

「ぐわっ!?!」

ギーシュにとって幸いだったのは、盾となった『ワルキューレ』のお陰で威力が半減していたことだろう。

それでも勢いの乗ったモップの一撃は彼の腕を痺れさせ、杖を取り落とさせるには充分であつたらしい。

彼が杖を手放すと同時に『ワルキューレ』の動きが止まる。慌てて杖に手を伸ばすも、横から伸びたモップが一瞬早くそれを弾き飛ばす。

自身を覆う影に見上げてみれば、そこには『ワルキューレ』を貫いたモップを振りかざしたシエスタの姿があつた。

（あ、死ぬ）

青銅のゴーレムすら貫いたモップだ。人間の頭蓋骨程度、素焼きの壺並みに容易く碎くに違いない。

ギーシュの脳裏に走馬灯が走る。

兄達に可愛がられた幼少時代、父に憧れ魔法に励むもドットを越えられなかった少年時代、志を抱きながら学院の門を潜った新入生時代、そして……

（志？ はて、僕は何を志していたんだろうか？）

引き延ばされた時間の中、彼が思い浮かべたのはそんな疑問だった。だがその答えを得るよりも早くシエスタの右手が閃き——
ギーシュの頬を打った。

「はぶっ!？」

「……悪い事したら、まず『ごめんなさい』でしよう？」

呆然とするギーシュに向かい、子供を諭すように語るシエスタ。突然の事態に混乱した彼が黙り込んでいると、彼女はもう一度その手を閃かせた。

「ひぶっ!？」

「……悪い事をしたら、まず『ごめんなさい』でしょう？」

頬の痛みで涙目になったギーシュに対し、シエスタはあくまで口調を変えなかった。

その様にルイズは厳格だった母を思い出し、思わず震え上がる。

「へぶっ!？」

「……悪い事をしたら、まず『ごめんなさい』でしょう？」

未だ現実に戻ってこないギーシュに三度閃く平手打ち。

その段になって、やっと観客達も理解した。

……彼女は、シエスタはギーシュを叱っているのだ、と。

四度目の平手を喰らわせるべく振り上げられた右手を見て、ようやく現実へと帰還したギーシュは慌ててそれを遮った。

「分かった! 謝る! 謝るからもう止めてくれ!!」

「……じゃあ、自分の何が悪かったのか、誰に謝らなければいけないのか、きちんと分かっていますか？」

振り上げられた手が下ろされるのを見て安堵したのも束の間、シエスタの言葉にぐっと詰まるギーシュ。

貴族が平民に頭を下げるなど前代未聞、出来る訳が無い。

しかし再び沈黙する彼に向かい平手が構えられると、安いプライドは呆気なく崩壊した。

「君に八つ当たりした僕が悪いんだ! こう言えればいいんだぶびやっ!？」

「……全然理解出来てないじゃないですか」

渋々口にした反省は平手に遮られた。

返す手の甲で反対の頬を打ち据え、もう一度平手を打ち付ける。所謂往復ビンタを喰らったギーシュは訳が分からず呆然とする。己の非を認めて謝罪したではないか。何故、更に責められねばならないのだ！

だがその疑問は、続くシエスタの台詞にガラガラと崩れ去った。

「貴方が謝るべきは私じゃなくて、貴方が泣かせた二人のレディの方ですよ。

あの方達が貴方に寄せた好意を、貴方は最低の行為で裏切った。

その上、自分の非を認めず他人に責任転嫁した。

貴方は貴族云々以前に、男として最低の不義理を働いたんです！」

男として最低。その言葉はギーシュの自尊心に鋭い槍となって突き刺さった。

グラモンの男は代々女性を大切にする。だがそれは決して女性を弄ぶことではない。

『命を惜しむな、名を惜しめ』という家訓は体面を守れと言う意味ではない。

か弱い女性を守り抜く為に死ぬことこそ、グラモンの男にとって最大の名誉なのだ。

ギーシュはよりによって、その家訓に自ら泥を塗ったのである。

絶句するギーシュに、シエスタは「ちゃんと謝っておいて下さいね！」と念を押し、踵を返す。

その後ろ姿にハッと我に返り、ギーシュは慌てて引き止める。

「どこへ行くんだ！ まだ勝負はついていないぞ！」

「いいえ、既に決着はつきました。貴方の負けですよ、ギーシュ君」

だがそれは第三者の横槍によって妨げられた。
いつの間にかギーシュの傍に立っていた男……トモが決闘の終了を告げたのだ。

「ふざけるな！ 僕はまだ戦える！！！」

「貴族の決闘は杖を落とした方の負け。そうですね、ご主人！」

「えっ……あ、そ、そうよ！」

ギーシュ、貴方とつくに杖を落としたじゃないの！ だから貴方の負けよ！」

いきなり水を向けられたルイズは、それでも冷静に指摘する。
言われて初めて、ギーシュは杖を落としたことを思い出した。

あの時、シエスタの攻撃で杖を取り落とした時点で既に決着は着いていたのだ。

にも拘らず彼は決闘を続行しようとした。

もし杖を拾っていたのなら、彼は決闘の作法を穢す卑怯者の誹りを受けていたことだろう。

結果としてギーシュはシエスタに誇りを守ってもらったのである。

「あ……ああっ！ なんて事だ、僕は……僕は……！」

己が何をしでかそうとしていたのかを知り愕然とするギーシュ。

決闘の高揚も、自己への陶醉も、怒りの熱狂すらも冷め切った今ならば、それを冷静に受け入れられる。

そんな彼をルイズは痛ましく思う。だが彼がここまで追い詰められたのは自業自得であった。

二人の女生徒に真摯に接していれば、あるいはシエスタに責任を押し付けなければ、こうはならなかっただろう。

故に彼女は彼を哀れに思うものの、同情するつもりは全く無かった。

ボロボロと涙を零しつつ己の行いを悔いるギーシュに、トモは無慈悲にも追い討ちをかける。

「……いかがですか？　自分が信じたものの脆さを突きつけられた感想は？」

「ちよっ！」

「……君も僕を笑うのかい？　笑いたければ笑いたまえ。

貴族の誇りを持ち出しながら、自分で誇りを傷付けた愚かな僕を」

無慈悲な台詞にルイズは咎めようとするが、それよりもギーシュが自嘲気味に答える方が早かった。

決闘が始まる前までの自信に溢れた姿は何処にも無く、ひたすら己を卑下する小物と化した彼に、トモは溜め息を一つ吐いて語り始めた。

「かつて一敗地に塗れ、玉座から引きずり下ろされた王様が居ました。

王様は自らの栄光を取り戻す為にとある国の皇帝に仕え、一軍の司令まで上り詰めました」

突如始まったお伽話にキョトンとするルイズとギーシュ。それに構わず、トモの語りは続けられた。

「しかし、王様は敗北します。再び王様に土を付けた敵に、王様は復讐を誓いました。

幾人もの部下を送り込み、策略を練って罠を仕掛け、最後には卑怯にも闇討ちを仕掛けてまで敵を追い詰めました。

……けれど、敵はそれら全てを乗り越えてしまったのです。そう、まるでお伽話の勇者のように」

それを聞いた二人の脳裏にある存在が浮かび上がる。

平民に伝わる伝説、『イーヴァルディの勇者』。

その敵のあり方は正しく伝説の勇者そのものだった。ならば、それに立ち塞がる王様とは一体何者だろう？

「その戦いの最中、武人の誇りを失った王様に向かって敵の一人がこう言いました。

『男の戦いには、勝ち負けより大事なものがある』、と。

結局卑怯な手すら破れ、再び敗北してしまった王様はその言葉に酷く動揺しました。

王様も分かっていたのです。

王様はまた王様に戻りたかったのではなく、自分が敗北した敵に一矢報いたかっただけなんだと。

——地に落ちた自分の誇りを、取り戻したかっただけなんだと」

ルイズとギーシュは見た。全身を朱に染め、悔し涙を払って再び立ち上がる武人の姿を。

トモの語りは続く。

「王様は全てを捨てました。栄光も名誉も身分も何もかも。

王様は闇雲に自らを鍛えに鍛え、そして正々堂々最後の一戦を挑んだのです。

……そして王様は負けました。

全てを捨てて尚勝てなかったにも拘らず、王様は満足していました。

全身全霊を込めた戦いに臨めたことに、最後には敵にすら自分を認めさせたことに。

——失った誇りを、取り戻せたことに」

それは苛烈な生き様を誇った武人の物語。

目的を見失い誇りを投げ捨て、けれど最期には誇りを取り戻した男の生涯だった。

お伽話を語り終えたトモは、ギーシュをピタリと見据える。

その真摯な眼差しに、ギーシュは言葉を失った。

「……貴方はそこで何をしているんですか？ 一度負けたくらいで、貴方の人生は終わったんですか？

間違えたのなら正しなさい。罪を犯したなら償いなさい。何が間違っていたのかは、もう分かっている筈です。

誇りを失った王様がそうであったように、一敗地に塗れた今からこそが貴方の本当の人生なんですよ」

その言葉は何よりも重くギーシュの魂に響いた。

彼が失ったものはまだ取り返せる。けれどここで躊躇っていてはいつまで経っても取り返せないだろう。

ギーシュは己の手に目をやる。そこに杖は無かった。

シエスタに弾かれた杖を拾い上げる。青銅の薔薇は花卉を二枚失っていたが、残った五枚はしっかりとくっ付いていた。

「……………重い、な。僕の杖がこんなに重いとは気付かなかったよ」

暫く己の杖を眺めていたギーシュがぽつりと漏らす。

そのまま薔薇の造花を高く掲げる。そして観客達が見守る中、ギーシュは杖を手放した。

彼の足下に落ちた杖に観客達がざわめく。どよめきが収まらぬ中、ギーシュは高らかに宣言した。

「……諸君！ この決闘、僕の負けだ！

勝者、ミス・シエスタの求めに応じ、僕は僕が傷付けた三人のレ

デイに謝罪したい!!

——ミス・ロツタ、ミス・モンモランシー、そしてミス・シエスタ。

僕の不甲斐無さで傷付けたことに対し、心よりお詫び申し上げる
「!!」

その宣言と共に頭を下げた彼に、ざわめきが一層大きくなる。

貴族であるケティとモンモランシーはともかく、平民のシエスタに
さえ謝罪したと言う前代未聞の出来事に野次馬達の度肝が抜かれた
のだ。

「……君たちにも迷惑を掛けた。済まなかったな」

「え? いや、いや、私たちは——」

「私たちは何もしていません。ただ、あなた方の背中を押しただけです。」

それよりも……」

慌てふためくルイズとは裏腹に、あくまで冷静に念を押そうとする
トモにギーシュは頷いてみせる。

「分かっているさ。三人のレディには改めて謝罪に「納得がいくか
あつ!!」「!?!」

ギーシュの台詞を遮ったのは一人の男子生徒の叫び声だった。

血走った目で観客から抜け出し、ずんずんと歩み寄って来る生徒を
呆氣にとられて見るトモとルイズ。

ギーシュはその生徒に見覚えがあった。確か、同じ二年生で風のラ
インメイジのド・ロレーヌだった筈だ。

「何事かねミスタ・ロレーヌ。見ての通り決着は着いている筈だが

……？」

「引っ込んでいろ負け犬が！ 貴族に楯突いた平民に頭を下げるなんて、正気か貴様！？」

余りの言い草にギーシュとルイズの眉が跳ね上がる。

言い返そうとしたルイズを押し止め、トモは一步踏み出してド・ロレーヌに相對した。

「何が不満なんですか？ 当人同士で決着が着いた以上、第三者が出て来る理由は無い筈ですよ？」

「喧しい！ ドットメイジ如きに勝った程度で平民風情が調子に乗るな！！」

「平民風情、ですか……。では、どうなさるおつもりで？」

あくまで慇懃な態度を崩さないトモに、すっかり逆上したド・ロレーヌが杖を突きつける。

「決まっているだろう！

貴族の矜持を傷付けたお前達を叩きのめしてやる！

——決闘だ！！」

かくして当事者達の望まぬ第二幕は切って落とされた。

体力…6(+2)／知力…3／感覚…6／敏捷…5(+2)／器用…
6／魅力…5／精神…4／幸運…14

※○内は今回加算された補正值

HP…2／12(+2) MP…7／10 SP…9／10 ※数
値は現在値／最大値

EXP…3 所持金…20スウ

保有クラスとスキル

- ・ハウスキーパー…1
- ・清掃術…1
- ・ハンター…1
- ・解体術…1
- ・ランサー(※1)…2
- ・連続突き(※2)…1／突撃(※3)…1

アクセサリ
装備品

- ・メイド服／モップ／運命神の聖印

アイテム
所持品

- ・なし

進行中クエスト

- ・ギーシュと決闘(期限…終了)

エネミーデータ

- ・『青銅』のギーシュ(LV…1) 敏捷値…5／攻撃値…6／防

御値…4 HP／MP…10／14

土のドットメイジ。精神的に脆く、挑発に乗り易い。杖を手放すと戦闘不能になる。

・保有スキル…練金Lv1（※4）／ゴーレムLv2（※5）

・ワルキューレ（Lv…1） 敏捷値…2／攻撃値…9／防御値…5 HP／MP…20／1

ギーシュによって作り出されたゴーレム。ギーシュが杖を手放すと戦闘不能になる。

第五話 決闘（しつけ）（後書き）

用語解説

（※1） 槍や長柄武器の扱いに長けたウォーリア系のクラス。

HPと敏捷に＋LVのボーナス補正を加える。

（※2） 単一の目標に連続して攻撃出来る槍技。攻撃判定をLV回追加出来る。

（※3） 助走を付けて威力を増す槍技。物理ダメージに（移動距離（m）×LV）を加算する。

代償として、難易度に（移動距離（m））が加算される。

（※4） 土属性の物質一つを違う物質に変化させる『土』魔法。生物に対しては使えない。

ギーシュが錬金出来る金属は青銅までである。

（※5） ゴレムを作り出して操作する『土』魔法。1ターンに1体生成可能。

ギーシュは最大7体まで生成・操作が出来る。

※選択ルール…貫通（採用にはGMの許可が必要）

・ 槍や弓矢、銃などの貫通効果のある武器を使ってクリティカルした場合、クリティカルごとに隣接する1体を攻撃対象に追加出来る。

この場合、与えるダメージは1体ごとにエネミーの防御値を引いた値になる。

例…防御値5の対象Aに貫通が発生し、隣接していた対象Bを攻撃対象に加えた場合、

Aに与えたダメージが12点とすると、Bには12－5＝7点のダメージが与えられることになる。

※選択ルール…シナリオ中のスキル獲得（採用にはGMの許可が必要）

・ゲーム内時間で一日に一回、SPを1点消費することでスキル獲得判定が行える。

判定の難易度は対象のクラスLV＋スキルLVとなり、そのスキルが補正する能力値で判定する。

成功しても失敗してもSPは消費される。

第六話 恫喝（きょうはく）

『遠見の鏡』を通して決闘を見守っていたオスマンとコルベールは、詰めていた息をようやく吐き出した。

「ふうっ、寿命が縮んだぞい。何と心臓に悪い……」

「ええ、あのメイドが蹴り飛ばされたときなど、思わず止めたくなりましたからな」

ヴェストリの広場ではギーシュが高らかに掲げた杖を落とし、敗北宣言を行っている。

それを見た教師達は思わず顔を綻ばせた。

「……まあ、プライドの塊だった彼を説得出来たことだけが幸いじやの」

「そうですね。この敗北は彼の人生にきっと良い影響を与えてくれるでしょう。

ですが……」

そこまで言うとかルベールに影が差す。

そして彼は苦渋の表情を浮かべながら絞り出した。

「……本当は、私たちがその役目を担うべきでした。

決闘などと言う野蛮な方法ではなく、日々の授業で教え諭すべきでした。

結局私たちは彼に憎まれ役を押し付けてしまった。……何とも不甲斐無い話ですな」

「……それを言うなら僕も同罪じゃよ。

魔法を教える以前に、僕らは『貴族』を教えねばならなかった。

それは学院の教師全員に言えることじゃがな」

溜め息を誤摩化するように水煙草の煙を吐くオスマン。その言葉にコルベールも深く頷く。

大分前から、学院は魔法を通じて貴族のあり方を教えると言う建前を失っている。

生徒は聞く耳を持たず、教師も勘違いしたまま。これでは教え導くどころではない。

「貴族とは民の上に立ち、民を守り導くもの。決して民を虐げる存在ではない。」

民と共にあってこそその貴族……儂らはそれを教えられなんだ」

「ですがこのトリステインの、いやハルケギニアの貴族ではそれを変えることは出来ません。内側から変えることが出来ないのなら、外側から変えていけばいい。」

……彼がミス・ヴァリエールに呼ばれたのは始祖のお導きかもしれませんな」

魔法の使えない大貴族の子女に、『冒険者』と言う未知の可能性を秘めた使い魔。

ハルケギニアに相容れない、故にハルケギニアを変えうる二人の出会いには貴族に、引いてはハルケギニアに変革を齎してくれるだろう。それが自分達の手でなされた訳ではないことに一抹の寂しさを覚えながら、何気なく『遠見の鏡』を見やったコルベールの目にとんでもないものが映る。

「ん？ ……！、お、オールド・オスマン！ あれを！..！」

「なんじゃ？ ……！..！？、何をやっておるんじゃ！

折角纏まりかけていたものを！ 馬鹿者が！！」

二人の教師が向けた視線の先。
そこには野次馬から抜け出して来た生徒が杖を振り上げ、ルイズ達に挑む姿があった。

「決まっているだろう！ 貴族の矜持を傷付けたお前達を叩きのめしてやる！」

決闘だ！！」

ド・ロレーヌの宣言が静まり返ったヴェストリの広場に空しく響いた。

決闘を申し込まれたルイズとギーシュは目を丸くさせ、トモは溜め息を吐いて空を仰ぐ。

三人の反応の薄さに、ド・ロレーヌの堪忍袋の緒はあっさりと千切れた。

「何を惚けているんだ！？ さっさと杖を構えろ！！」

「「……誰と？」」

だが精一杯の気迫を込めた台詞はあっさり流される。誰一人ド・ロレーヌを怖れていない。

ギーシュは先刻走馬灯を見たばかりだし、ルイズはもっと恐ろしい人を知っている。

トモに至っては冒険者だ。怖れる道理が無い。

それ故の気の抜け切った返事だったのだが、ド・ロレーヌはそれを

虚勢と見たらしかった。

「決まっているだろう！ お前達『全員』とだ！

さっさとあのメイドも呼んでこい！ まとめて片付けてやる！！」

「「……はぁ！？」」

「……随分余裕ですね。幾ら何でも一人では無理でしょうに」

ルイズとギーシュはド・ロレーヌの言い草に驚く。

シエスタがもうギリギリなのは見て分かるのに、追い討ちをかける気かこの男、と。

一方、トモは呆れ顔で戦力の違いを指摘する。

メイジ二名に冒険者二名、たった一人で相手取るには荷が重いのは自明の理。

しかしド・ロレーヌはそれらを一蹴した。

「ふん！ 決闘でボロボロになった平民に貴族の体面を穢した弱虫、魔法の使えない無能に口ばかり達者な平民！

何処に僕が負ける要素があるんだ？」

「なぁんですってえ！？」

「……ド・ロレーヌ！ 君は……！」

その台詞にルイズとギーシュがいきり立つ。あれ程の戦いをその目にしながら、この男は結果しか見ていなかったのだ。

その上関わりの無かったルイズまで一括りにしている。ド・ロレーヌが如何にルイズを見下しているのかが丸分かりだった。

「ちよつと貴方！ どういうつも「……待って下さい」り？」

問い詰めようとしたルイズの行く手を、そっと差し出された腕が阻む。

腕の持ち主に目を送れば、そこにあったのは血色すら無くした無表情。

激怒するルイズを、トモが押し止めたのである。

「……ええと、ミスタ・ロレーヌで宜しいですか？」

「軽々しく僕の名を呼ぶな平民！ 頭が高いぞ！！」

名乗りも上げずにこの態度。ふんぞり返るド・ロレーヌに、トモは変わらず無表情のまま確認する。

「それは失礼。一応確認なのですが、ミスタは私たちに決闘を挑んだ、と言うことで宜しいですか？」

「誰が平民なんかに決闘を挑むものか！ 僕が挑んだのはこの貴族の恥さらし二人だ！」

お前達は黙って僕に仕置きされていればいい！」

トモの質問をまともに取り合わないド・ロレーヌ。馬鹿にされた二人が爆発しそうになるのを宥めるトモ。

けれども再びド・ロレーヌに顔を向けた時、彼から飛び出したのは辛辣極まりない台詞であった。

「成程。決闘で弱まった今ならば、楽しんで止めが刺せると踏んだ訳ですか。」

……そんなに自信が無いんですかね？」

「何だと！？」

「だってそうでしょう？ シエスタさんはもう限界、ギーシュ君も疲弊しています。」

ご主人に至っては戦力外。唯一残ったのも平民の私。正しく漁父の利じゃないですか。

……自分が確実に勝てそうな相手にしか喧嘩を売れない弱虫さん

に、そんな勇気がある訳無いでしょう？」

それを聞いたルイズとギーシュは思わず納得してしまった。
言われて見れば今の今まで傍観していたド・ロレーヌに割り込まれる謂れは何処にも無い。

それでも手を出して来たのは今なら勝てると踏んだからである、と考えるのが自然だった。

「貴様あ！ 平民の分際で僕を侮辱するか！

いいだろう、まずはお前から叩きのめしてやる！！」

「構いませんよ。

弱虫小虫を相手取るのに、わざわざご主人の手を汚す必要もありませんから」

わざわざ挑発しながら、トモは粗末な木刀を手にして正対する。

「いつ始めます？」

「無論、今からだ！！」

宣言と同時にルーンを唱えるド・ロレーヌ。

そしてトモが身構えるよりも早く、彼の魔法は放たれた。

「『エア・ハンマー』！！」

「うおっとお！！」

轟音を上げて迫り来る風の塊を、素早い身のこなしで避ける。

「ええい、ちょこまかと！ 避けるだけしか能が無いのか！！」

「避けられるのにわざわざ当たる人は居ません、よっ！」

『エア・ハンマー』は風系統の魔法ではポピュラーな攻撃呪文である。ハンマーの名の通り、風の塊を打ち出す魔法だ。

真直ぐ飛んでくる不可視の風を避ける。難業のはずだが、トモはひらりひらりと鮮やかに躲けてみせる。

彼の敏捷は7、そろそろ人類の限界を超え始めた値だ。多少攻撃が見辛くとも、避けるだけなら問題ないレベルであった。

「くっ、この！ いい加減当たれ！！」

「敵に懇願してどうしますか！ 悔しければ当ててごらんさい！」

ド・ロレーヌの罵声に挑発で返すトモ。

散々煽られたド・ロレーヌはいともあっさり逆上した。

「もう許さん！ 『エア・カッター』っ！！」

「うひゃあっ！！」

ド・ロレーヌが放ったのは風を刃にして飛ばす『エア・ハンマー』の上級版である。けれど殺傷力は比喩にならない。

ギリギリで身を捻り、風の刃をやり過ぎすトモに再び放たれる『エア・カッター』。

「どわああああっ?!?!?!」

「ちよっと、やり過ぎでしょ!? 殺す気!」

「ド・ロレーヌ、それ以上は駄目だ！ 本当に殺してしまうぞ!」

先程までのように軽口を叩く余裕すら失い、必死に避けるトモ。

それを目の当たりにしたルイズとギーシュが、慌ててド・ロレーヌを制止しようとする。

相手が平民とは言えど、流石に殺してしまっただけは大問題だ。けれど、

怒りに囚われた彼に聞く耳は無かった。

「黙れっ！ 負け犬と無能の分際で、貴族に指図するなっ！」

「なっ!？」

「ロレーヌ！ 貴様!!！」

余りの暴言に激怒する二人。

それを尻目に、ド・ロレーヌは三度ルーンを唱えて『エア・カッタ
ー』を放つ。

「南無三!……ぐあっ!!！」

迸る血飛沫。悲鳴を上げて倒れる人影。それが自らの使い魔である
ことを、ルイズは一瞬遅れて理解した。

何故か眼前で腕を交差させて身構えたトモが、避けもせずに迫り来
る風の刃をまともに喰らったのである。

「い、いやああああああああっ!!！」

「馬鹿な！ やり過ぎだぞド・ロレーヌ!!！」

貴族と言えど人の子、目の前で人が傷つけば動揺するのは当たり前
だろう。

まして彼らは未だ少年少女、思春期を迎えたばかりの若者だ。

貴族の責務たる軍役とて、就学中の彼らには遠い未来の出来事だっ
た。

血飛沫舞う生の暴力を目の当たりにしたルイズは悲鳴を上げてへた
り込み、事態の推移を遠巻きに見守っていた観客達のざわめきも悲
痛な色を隠せない。

その点、曲がりなりにもやり過ぎを指摘したギーシュの対応は及第
点と言えた。

（あ……あれ？　僕は今、何を……？）

だが、この場で一番動揺していたのはド・ロレーヌ本人であろう。彼は確かに殺すつもりで魔法を放った。しかし殺すつもりはなかった。

彼はただ逆上して煮えたぎった怒りのままに魔法を放っただけである。

生まれ持った魔法の力。それが人の命を容易に奪い得る暴力であることを、彼は知らなかったのだ。

「は、はは……あーっはっはっはっ！！」

ざまあみろ、平民風情が貴族に楯突くからこうなるんだ！！」

突如壊れたように笑い出すド・ロレーヌ。

愉快だったからではない。笑わなければ自分の中の何かが切れてしまふ、それだけの事。

「あ痛たたたた！　結構洒落にならない攻撃でしたね」

「はっはっは………はあっ！？」

だから倒した筈のトモが平気な顔で起き上がるのを見た瞬間、彼の中の何かが切れたのは至極当然と言えた。

「き、君！　大丈夫なのかね！？」

「ちょっと！？」

「大丈夫ですよ。この外套も神器ですし、私も一応冒険者の端くれですので」

立ち上がったトモを気遣い、容態を尋ねてくるルイズとギーシュに

切られた部分を見せた。

着ていたコートには傷一つなかったものの、その下のチュニツクは血まみれで腹の部分が大きく裂けており、素肌が覗いている。

だが、そこには大きく引き皺れたような傷痕が残っているだけで、たった今斬られたようには見えなかった。

「……馬鹿なっ！？ 確かに『エア・カッター』が当たった筈だ！」

「ええ、凄く痛かったですよ。そのままだと動けそうになかったので、薬を使っただけです。」

……初心者向けの安物とはいえ、残ったお金の殆どを使っちゃいました」

驚愕に目を丸くするド・ロレーヌに、手にした三角フラスコを見せるトモ。

そのまま投げ捨てられた三角フラスコは地面でバウンドすると、空気に溶けるように消えてしまった。

謎の怪奇現象に周囲がざわめく中、当事者二人は再び相対する。

「水の秘薬か……死に損ないが！」

「万一に対する供えは必要ですよ？ 特に命が懸かった場合は」

苛立ちも露に吐き捨てるド・ロレーヌと飄々と答えるトモ。

正反対の二人だったが、よく見ればド・ロレーヌのそれはただの強がりであること、トモのそれが苦痛を押し殺したものだど気付けただろう。

尤も、遠巻きにしている観客達はおろか、間近で見ている二人もそれを見抜く程の観察眼は持ち合わせていなかったが。

睨み合う両者、最初に動いた……否、最初に口を開けたのはトモの方だった。

「しかし、随分剛毅なお方ですね。よりによって私に決闘を申し込むとは」

「……ふん、命乞いか？ 散々貴族に楯突いて今更何を……！」

トモの軽口にド・ロレーヌが鼻息荒く噛み付いてくる。
しかしトモは首を振り、ド・ロレーヌをキッと睨み付けた。

「貴族？ 貴族と言いましたか、今？」

「そうだ、僕は貴族だ！ 敬え！」

這いつくばって許しを請え、そうすれば……」

捲し立てるド・ロレーヌ。

トモはそれを遮るように指を突きつけ、その言葉を言い放った。

「貴方は、領民の人口を把握していますか？」

「……何？」

決闘の最中に突きつけられた唐突な質問にド・ロレーヌは一瞬詰まった。

だがトモはそれに構わず質問を重ねる。

「領地の特産物をご存知ですか？ 昨年の税収は？ 予算の使い道は？」

書類の書式や宮廷への陳情の仕方は？ 謁見の作法は？」

ド・ロレーヌは答えられない。

トモが並べたそれは貴族なら知っていて当たり前のことである。
にも拘らず、彼はそれらを一切知らなかった。

「貴族の責務も果たせない半人前の分際で、よくも貴族を名乗れますね」

「う……五月蠅い！ 僕は由緒あるロレーヌ家の嫡男だぞ！！
代々続く名門だぞ！！」

言い返せない彼に掛けられた追い打ちにド・ロレーヌは癩癩を起こす。

しかしトモは肩を竦めて反撃した。

「成程。ならばその名誉に、貴方自身は何の貢献をしたのですか？」

ド・ロレーヌは予想外の攻撃に絶句する。

貢献？ 何を言っているんだこの男は。

まだ学生の自分が手柄を立てられる筈も無いだろうに！

けれどその思いは言葉に出せない。彼がロレーヌ家の名誉に何の貢献もしていないのは事実だったのだから。

「……貴方の言う名誉も誇りも、貴方のご両親やご先祖様のものではないでしょうか？」

ならば貴方自身は、ロレーヌでない貴方自身は何処に居るのですか？」

「五月蠅い！ 五月蠅い！
うるさああああああいいいいいいっ！！！！！！！！！！」

貴族である。

その事実がド・ロレーヌにとって誇りであり事実であった。

けれども、トモが突きつけた真実は彼にとって受け入れ難いものだった。

『自分は、貴族に成り切れていない』

それを受け入れるにはド・ロレーヌは幼過ぎた。
彼を支える歪なプライドが、彼に現実を認めさせなかったのだ。

「そ、そんなもの、誰かに命令すれば良い！　そう、僕は貴族なのだから！！」

あくまで貴族であることに固執するド・ロレーヌに、傍観していたルイズ達は呆れる他無い。
ルイズ達とてトモが指摘したことを全て把握している訳ではない。
しかし自分がやらねばならぬことを他人に丸投げする卑怯者ではなかった。

「ふうむ……。あくまで貴方は貴族であると、そうおっしゃる訳ですネ？」

「くどい！！！」

ド・ロレーヌは念を押すトモを一蹴する。

しかしその時、トモの目に一瞬光が走ったことにルイズは気付いた。

（あ、あれは何か企んでるわね……？）

昨日から翻弄され続けたルイズは何となく察する。

出会ったときから殆ど動きのない彼の表情だが、決して無表情ではない。

ほんの少し眉が寄ったり、ちょっとだけ眦が下がったりと目立つような動きがないだけで、実際には表情豊かなのだ。

そして今の顔、薄い冷笑を浮かべるあの顔のとき、ルイズは散々にやり込められた。

あれは何かをしでかす顔だ——それは付き合いの浅い彼女にも

分かる。

けれども、彼が落とした爆弾の内容までは予測出来なかった。いや、出来る訳が無かった。

「いやはや、爵位を継ぐ前からおとり潰し覚悟で誇りを貫くとは！
貴族の誇りとやらは平民の身では理解が出来ません！」

「——え？」

余りにも意外な一言にド・ロレーヌのみならず、間近で見ていたルイズ達や遠巻きに見ていた野次馬の思考が止まった。

ざわめきが治まり、ヴェストリの広場に静寂が下りる。そのタイミングを見計らい、トモは言葉を続けた。

「だってそうでしょう？」

貴族でありながら、トリステイン屈指の大貴族たるヴァリエール家とグラモン家に、あれ程の暴言を叩き付けたのですから！」

トモの言葉が頭に染み込むにつれ、ド・ロレーヌから血の気が引いてゆく。その意味に気付いた野次馬からも悲鳴が漏れた。

ラ・ヴァリエールはトリステイン屈指の、と言うよりトリステイン最大の名門である。

ヴァリエールには劣るものの、グラモン家とてトリステインの元帥杖を預かる身だ。

図らずともド・ロレーヌの暴言は、王国屈指の名門二家に唾を吐きかけたのだ。

「う……あ……！」

子供の責任は親が取るもの。当然彼の責任はロレーヌ家が被ることになる。

世間を知らぬ子供の戯言で済ませておけば、実家まで責は及ばなかったかも知れない。

けれど彼ははっきりと貴族の格式を持ち出して来た。即ち彼の発言は、そのままロレーヌ家の発言となるのだ。

今更取り消そうにももう遅い。

ロレーヌ家もそれなりの格式を持つ家だが、流石に大貴族とは比較にならない。

ならばどうなる？

決まっている。良くて降格、悪ければトモの言う通りとり潰し、だ！生まれたての子鹿の如くガクガク震えるド・ロレーヌに、容赦のない追い打ちが掛かった。

「しかも私の身分は学院長のオールド・オスマンに保障されております！

シエスタさんも所属は学院、自らの所属する学院にすら逆らってまで誇りを貫くとは！

素晴らしき覚悟です！ いや天晴！」

既にド・ロレーヌの顔色は青を通り越して蒼白になっていた。

オスマンの名声は国内外に広く知れ渡っている。

宮中での扱いもそれに準じているし、必要とあらば王に謁見することも出来る程度には身分も高い。

そのオスマンが保証人である以上、トモへの扱いもそれなりになってくる。

平民とは言え、オスマンが保護している人物を傷付けたとあらば彼の体面に関わるからだ。

シエスタに至っては学院の奉公人、即ち学院の財産だ。

もし瀕死の彼女に止めでも刺していれば学院に損害を与えたとして現罰が下るのは確実。

見ればギーシュもその事実思い至ったのかガタガタ震えている。

一体自分達は何を考えて決闘なんかしたのだろうか？
ド・ロレーヌが内心で数刻前の自分を罵倒していたその時。

「隙有りっ！」

「ぎゃっ!？」

右手に走った激痛に悲鳴を上げ、彼は思わず杖を取り落とした。
バラバラと飛び散る木片、その向こうに柄だけになった木刀を振り
抜いた姿勢のトモが見える。

「……うわぁ、えげつない……」

「流石にあれはどうかと……」

全てを見ていたルイズとギーシュが引き攣る。

茫然自失となったド・ロレーヌに素早く近付いたトモが腰だめに構
えた木刀を一閃。

右手ごと杖をへし折ったのだ。

「ぐわぁぁぁっ!？ 僕の、僕の手がぁぁぁっ!？」

「……その程度で喚かないで下さい。さっきのシエスタさんの方が
余程重症でしたよ？」

技の威力に耐え切れなかったのか、柄を残して碎け散った粗末な木
刀を手に嘆息するトモ。

大事な杖を壊されたことにも気付かず、人目を憚らず泣き喚くド・
ロレーヌ。

この決闘の勝者がどちらであるか、傍目にも分かり易い構図であっ
た。

「さて、貴族の決闘は杖を落とした方の負け、それで良いんですよ

ねご主人？」

「……ええ、そうよ。何だかすっきりしない決着だけどね……」

かくしてヴェストリの広場で繰り広げられた決闘は、平民達の勝利で幕を閉じたのであった。

※ヤナギダ・トモ（柳田 智） 種属／ヒューマン…4

体力…6／知力…8／感覚…5／敏捷…8（＋1）／器用…3／魅力…3／精神…5／幸運…11

※○内は今回加算された補正值

HP…8／11（※1） MP…8／11（※2） SP…7／10 ※数値は現在値／最大値

EXP…10 所持金…110円

保有クラスとスキル

・ネゴシエイター…3

・詐術…1／説得…1／挑発（※3）…1

・サムライ…1

・居合い斬り…1

アクセサリ
装備品

・厚手のコート／運命神の聖印

所持品^{アイテム}

・背囊／サバイバルナイフ／目覚まし時計／回復薬（小）（※4）

進行中クエスト

・ルイズを守る（期限…ルイズの卒業まで）

エネミーデータ

・ド・ロレーヌ（LV1） 敏捷値…3／攻撃値…4／防御値…4
HP／MP…10／10

風のラインメイジ。非常に高慢だが、権威に弱い。杖を手放すと戦闘不能になる。

・保有スキル…エア・ハンマーLV1（※5）／エア・カッターLV1（※6）

第六話 恫喝（きょうはく）（後書き）

用語解説

（※1）回復後の数値になる。

（※2）SP消費による回復後、スキル使用による消費を算出した値になる。

（※3）標的を挑発して怒らせる話術。

エネミー1体に『激怒』を与え、攻撃目標をスキル使用者に限定させる。

（※4）HPを1d6回復出来る。使い捨て。重量…0.1

（※5）風の塊を打ち出す『風』魔法。

回避の達成値から－LV、風属性ダメージに（LV）d6を加算する。

（※6）風の刃を放つ『風』魔法。

回避の達成値から－LV、風属性ダメージに（LV）d6を加算する（クリティカル値から－2）。

※SP消費によるMP回復

・SPを1点消費することにMPを（1d6）点回復することが出来る。

戦闘ターンにおいてはメインフェイズを使用する必要がある、この回復でMP最大値を越えた分は切り捨てられる。

※バッドステータス…激怒

・激怒したエネミーもしくはPCは（難易度）d6を振り、威力LVを決める。

あらゆる判定に威力LV分のペナルティが与えられるが、攻撃ダメージに威力LV分加算する。

この効果を解くためにはメインフェイズで威力LVを目標値と

する精神抵抗判定に成功しなければならない。

エンドフェイズで威力L Vは-1され、威力L Vが0になった時点で効果を失う。

第七話 日常（せいかつ）

「トリスタニアに行くわよ」

虚無の曜日、週に一回訪れる休日の朝。

朝食を終えて戻って来たトモにルイズはそう提案する。

「トリスタニア、ですか？」

「そう！　ここトリステイン王国の首都にして姫様のお膝元！

あそこならきつとあるわ！」

いきなりのことに面食らっていた彼も、ルイズが何を言いたいのかを察したらしい。

納得した後、ほんの少しだけ眉根を寄せてトモは苦しい懷事情を暴露する。

「成程。ですが、お金がありませんよ？」

「それくらい私が立て替えるわよ！　……神器って結構不便よね」

「……言わないで下さい」

呆れ顔のルイズに諦め顔のトモ。一通り嘆息すると、彼女達は頭を切り替える。

「それで、いつ行くんです？」

「勿論今からよ。厩舎には連絡してあるから、準備もそろそろ終わってるでしょう」

用意周到なことですね、と呟いた後、トモは首を傾げた。

「……厩舎？ 準備？」

決闘から数日、ルイズ達主従を取り巻く環境は激変したと言って良い。

決闘の直後、学院長室に呼び出された当事者達にはそれぞれに罰が下された。

ギーシュは禁止された決闘に応じた罰として、ルイズはそれを止めなかった罰として謹慎三日。

ド・ロレーヌは決闘を挑み、学院の財産である使用人を傷付けようとした事を鑑みて謹慎十日を言い渡された。

問題はシエスタである。

平民が貴族に決闘を申し入れ、しかも勝利するなど前代未聞。

事態を重く見た教師たちにより馘首にすることも検討されたが、発端であるギーシュ自身の弁護もあってそれは免れた。

とは言え、流石にお咎め無しでは体面が悪い。

その上オスマン達しか知らぬことだが、彼女は冒険者だ。

『冒険者は何者にも従わない』と言う大原則がある以上、今まで通りの奉公は出来ない。

異端であることがバレれば学園にとっても拙いことになる。そこである提案がなされた。

「体裁上は馘首と言うことにして、実質オールド・オスマン預かりとすれば良い」

要するに立場だけ変えて名目を保ち、現状維持を貫こうと言う先送りの提案である。

だがそこに物言いをつけたのは秘書のミス・ロングビルとルイズだった。

「オールド・オスマン預かりは問題がありますわ。主にセクハラ的な意味で」

「オールド・オスマンにシエスタを預ける位なら、ヴァリエール家が預かりますわ！」

「……儂ってそんなに信用無いのかの？」

学院長室の片隅でいじけるオスマンを尻目に、女性職員一同の圧倒的賛成を得てシエスタはヴァリエール家預かりとなった。名目上はこうである。

『不埒な行いをしたギーシュをシエスタが諫めた。

本来なら厳罰ものであるが、その命を賭した献身に感動したルイズがその身を引き受ける事にした。

しかし未だ卒業すらしていない彼女ではその資格が無いため、卒業までは学院で面倒を見ることにする。』

詭弁全開な言い訳だが、とりあえず筋は通っているので問題は無い。異端云々もルイズにとっては今更である。

だから問題は既に居る異端、トモの存在であった。

その彼に対する尋問はルイズとオスマン、コルベールとロングビルと言う事情を知るものだけで行われることになった。

「まずは状況を説明して頂きたい。

シエスタ嬢を冒険者にした真意と、冒険者に関わる全てを」

普段のおちやらけた雰囲気捨て、大魔法使いの威厳を持って尋問に当たるオスマン。

それに臆すること無く、トモはいつも通りの態度を崩さない。

「最初に確認しておきたいのですが、シエスタさんには何も責任が無いことは保障して頂けますか？」

「……難しいがな。」

冒険者とは言え、彼女はブリミル教徒じゃ。ブリミル教の教えに従っているうちは異端指定も有り得まい。シエスタ君が自ら異端に走らない限り、儂らも彼女を神官共に告発したりはせんと杖に誓おう。これでよいかの？」

「今はそれで結構です。ありがとうございます」

オスマンの言葉にその場に居合わせた全員が頷くのを確認したトモは、礼を述べた後居住まいを正して本題に入る。

「さて、『冒険者の洗礼』は資格のあるものにしか行えません。方法も今の所シエスタさん以外に教えるつもりはないのでご安心を」

「そ、その洗礼とはどうやるのですか？」

「もしや、それを受ければ誰でも冒険者になれるとか!？」

「落ち着きたまえミスタ・コルベール。それで、どうなのかねミスタ・ヤナギダ？」

「儂らも洗礼を受ければ冒険者になれるのかの？」

好奇心剥き出しで質問を飛ばすコルベールを押さえるオスマンだが、その目の輝きは隠し切れない。

あの壮大な神話に語られた冒険者の姿。伝説のイーヴァルディの勇者の如きそれに、若き日の情熱が甦る。

けれどトモは少年の目をした教師二人に、残酷な事実を告げた。

「多分無理でしょうね」

「「「えっ？」」「」」

目を丸くする一同に、トモは洗礼について語った。

『冒険者の洗礼』、それは運命の神に祈りを捧げ、冒険者に相応しかどうかを審判してもらうと言うもの。

運命神が認めれば証たる聖印を賜るが、資格を持たないものには何も与えられない。

その判断は運命神が下すため、洗礼を受ける側はただ委ねるだけ。一応『諦めずに努力するもの』が認められるとは知られているが、死ぬ程努力したものでさえ認められない事例も少なくない。

シエスタは一発で認められたがこれは希有な例で、普通はトモのように何度も何度も繰り返しようやく認められるものだと言う。

「洗礼自体は簡単です。ただ運命神様に祈りを捧げるだけです。でも認められるかどうかは運命神様次第ですので、確実なことは何も言えませんね」

「な、なら……」

「ですが、ただ祈るだけでは意味がないんです。

肝心なのは『神を倒す』、そのためにあがき続けること。

……お二方はそのようなあやふやな目的の為に人生を賭けられますか？」

「「むう……」」

超人とも言うべき冒険者の力。それはあくまでも神を倒すと言う目的を成し遂げる為の布石に過ぎないのだ。

オスマンもコルベールも教師として、あるいは貴族としての責任が

ある。それを捨ててまで憧れに挑む真似は出来ない。

「……ふむ、そうか。しかしみだりに『冒険者の洗礼』を広めても
らっては困るからの。」

「今後は自重してほしいのう」

「ええ、私としても軽々しく洗礼を行ってほしくありませんし、冒
険者の力を悪用されたくはないですから」

「ちよつと待って！ 冒険者の力って、悪用出来るの？」

「アンタ達の神様はそれを許してるの？」

残念そうに自重を促すオスマン。

それに答えたトモの台詞に含まれていた見逃せない言葉に、ルイズ
が反応する。

「ええ、冒険者に認められるものには善悪の区別はありません。

求められるのは『神を倒す』と言う目標ただ一つ。

それを諦めない限り、どんな悪党であろうとも冒険者になる資格
があるんです」

それを聞かされた一同に何とも言えない沈黙が下りる。

善悪の区別なく与えられる能力、もしそれが大悪人の手に渡りでも
したら？

——結果は火を見るよりも明らかだ。

「……その力、ますます広めるわけにはいかないようじゃ。

既に冒険者になってしまったシエスタ君は仕方無いが、これ以上
冒険者を目覚めさせてはならぬ！ これは厳命じゃ！！」

「私とてこの国に混乱をもたらすつもりはありません。

この場に居る方々以外にこの話はしないと誓いましょう」

そして話は彼らの処遇に変わっていく。

シエスタの扱いは先に述べた通りであるが、トモはそうはいかない。何せ彼は何処にも所属していない。学院はおろかトリスティン王国とも無関係、あえて言うならヴァリエール家であろうが、それだつて『使い魔』という扱いなのだ。

それ故に自由ではあるが、何処にも助けを求められないのである。だが彼はその異様に回る口をもって、あれよあれよと言う間に己の無罪を勝ち取ってしまった。

「そもそも事の発端はギーシュ君にありますし、ミスタ・ロレーヌの件では私が被害者です。何より私を処罰するのであれば、彼の暴言が世間に晒されるのは必至でしょう。

そうなれば彼の家にも累は及びますし、ひいてはこの学院の教育方針にも影響は出るのは確実。ここは一つ、何も無かったと口裏を合わせるのが得策かと」

詭弁を振るい、丸め込まれた教師達から言質を取って煙に巻き、気が付けばトモは決闘の関係者の中で唯一お咎め無しとなっていた。

「……アンタやっぱり詐欺師じゃないの？」

いつの間にか終わっていた尋問に、妙に疲れたルイズの残した一言が全てを表していた。

さて、ルイズ主従の朝はベルの爆音から始まる。

正確には『ルイズだけ』なのだが。

夜が明ける前に起き出したトモは手作りの木刀（二代目）で鍛錬に励む。

レベルが低いうちは鍛錬が効果的だ。彼は一心不乱に素振りを繰り返す。

鍛錬を終えたトモが部屋に戻ると、目覚まし時計に叩き起こされたルイズが顔を顰めて出迎えた。

「おはようございますご主人様。今朝も良いお目覚めのようで？」

「……ええ、気持ちの良い朝ね。この騒音が無ければだけど」

部屋に満ちる騒音をBGMにしながら、朝の挨拶を交わす二人。

神器を使えるのが冒険者のみである以上、がなり立てるベルを止められるのは冒険者であるトモだけ。

故に彼が戻って来るまで目覚まし時計は鳴りっ放しで放置されることになる。

その間、ルイズは部屋を満たす騒音の中で過ごすしかない。

「……毎朝毎朝こう五月蠅いんじゃ、おちおち寝てられないわよ」

「その代わり寝坊はしなくて済んでるんですから良いでしょう？」

朝から口喧嘩の様相を見せる主従が部屋を出る。

するとタイミングを合わせたかのように隣人も顔を見せる。

「……毎朝毎朝こう五月蠅いんじゃ、おちおち寝ていられないんだけど？」

「本当は貴女方、仲が良いんじゃないありませんか？ 同じ台詞を先程聞いた気がします」

「五月蠅い（わね）！！」

目覚まし時計の恩恵は、半ば強制的にキュルケの生活にも及んでいた。

壁で遮られているとは言えど仮にも神器、惰眠を貪る彼女を叩き起こす位の威力はある。

かくしてキュルケの生活サイクルはルイズのそれとほぼ一致するようになっていた。

不満たらたらでアルヴィーズの食堂へ向かうルイズ達を見送り、トモは朝食摂るべく厨房へ向かう。

「お邪魔します。マルトーさんはいらっしゃいますか？」

「おう、来たか『我らの棒切れ』！」

厨房に顔を見せるや否や、料理長のマルトーが満面の笑みを浮かべて呼び掛けて来た。

しかし、呼び掛けられた本人はその呼び名に顔を顰める。

「マルトーさん、何度も言いますがあれは棒切れじゃなくて木刀でして……」

「朝飯か！ 朝飯は一日の活力を蓄えるのに必要だからな！
すぐ用意してやるから待ってな！」

トモの抗議を聞き流し、マルトーは彼の朝食を作り始めた。

無然としながらもそれ以上突っ込まず、おとなしく待つトモに厨房のあちこちから苦笑と励ましが掛けられる。

「よう『我らの棒切れ』、朝から大変だな！」

「……そう思うんだったらその呼び名を止めて下さいよ」

「あはは、無理無理！ おやっさん、ああ見えて結構思い込み激し

いから」

「まあ、良いんですが……それより、手元がお留守ですよ？」

「……やべっ！ 焦げる、焦げる！」

決闘の一件以来、トモとシエスタは学院の使用人達から英雄のように扱われた。

粗末な木刀を振り回す彼を、マルトーは『我らの棒切れ』と呼ぶ。その都度訂正はするのだが、結局聞き入れてくれないので半分放置の状態だ。

ちなみにシエスタは『我らのモップ』だ。本人は割と気に入っているらしい。

忙しく働く料理人達を眺めていたトモの目の前に、ふわりと湯気を立てる皿が置かれる。

温野菜と鶏の笹身の炒め物をメインにしたプレート料理。

添えられた米がボリリューム感たっぷりの逸品であった。

「おお、これまた美味しそうなメニューですね！ 新作ですか？」

「おうよ、お前さんが言っていた『チャーハン』は米が足りなくて無理だったが、こうすればそこそこ喰えるだろう？」

ハルケギニアにも米はあった。ただし主食としてではなく、珍しい野菜の一種と認識されている。

それ程出回ってはいないのだがトモから米を使った料理の話を聞かされて以来、マルトーが時々取り寄せてはアレンジしつつ賄いに出すようになっていた。

「本当は『カツドン』とやらにも挑戦したかったんだがな、材料が揃わなかったんだ。

すまねえな」

「いえいえ、私の我俣を聞いて下さったんですから、それだけで充分ですとも!」

「いやいや、そいつはお互い様ってモンだ!

お前さんから教わった『医食同源』って奴には本当に驚かされたからな!」

決闘の後、マルトー達はトモ達の功績を讃えてご馳走攻めにしたことがあった。

それに辟易したトモが栄養学の触りを伝えたのだ。

教えたとは言ってもせいぜい『三大栄養素とビタミン等の効能』や『カロリーと塩の過摂取の弊害』程度だが、マルトー達料理人にとってはまさに革命であった。

ボロボロと目から鱗を垂れ流しながら感謝とお礼を迫るマルトーに、ならば代わりに自分用のメニューを作ってほしいと申し入れ、今に至っている。

「朝はタンパク質を多めに、ってんで鶏の笹身を使ってみたんだ。どうやら正解みたいだな?」

「鶏の笹身は脂肪が少ない良質のタンパク源ですから。

故郷でも武術の達人とかが主食にしたりしますし」

「それに身体を冷やさないう、温野菜にして栄養を素早く吸収する、か。

……どうして今まで知られなかったんだろうな?」

「貴族様は基本、食道楽っぽいですからね。その割には味音痴が多いみたいです」

「その通り!

この間も素材を活かした味付けにしたら、味が無いって怒鳴り込まれてな……」

世間話だか仕事の愚痴だかを交わしつつ、食事を終えたトモは部屋

に戻る。

そして同じく朝食を終えたルイズと合流、授業に向かうのだが……二人が足を踏み入れた途端、ざわめいていた教室が水を打った様に静まり返る。

誰も近寄ろうとせずに遠巻きにルイズ達を囲む生徒達の姿に、二人とも嘆息した。

「いい加減ほとぼりも冷める頃だと思うんですが」

「……私もそう思うけどね。こうなったのも貴方の所為なのよ？」

何故こんな状況になったのか、原因はあの決闘でトモが使った脅しにあった。

『ヴァリエールの公女に暴言を叩くことは、即ちヴァリエールを敵に回す事と同義』

余りにも当たり前な事なのだが、ルイズの級友達はそれをすっかり忘れていたらしい。

散々彼女に暴言を叩き付けてきた彼らは報復を怖れ、彼女達を避けるようになっていた。

好んで王国有数の大貴族を敵に回す輩は居ない。

今のルイズに近付くのは同じ立場に立つものか、好んで敵に回る変わり者しか居ないだろう。

「やあルイズ。相変わらず君の周りは静かだね」

「ハーイ、ルイズ！　ひとりぼっちで寂しそうだから来てあげたわよ」

そう、決闘で同じく脅しに利用されたギーシュと、元より敵対関係にあったキュルケのように。

散々脅されたド・ロレーヌは未だ謹慎中だ。

と、言うより引きこもっているようで、今も寮室の片隅でガクガク震えながら「ごめんなさい」と繰り返しているだけでろくに返事もしないと云う。

「別に悪口くらいで実家を頼るつもりはないわ。そんなことしたら母様に殺されるもの」

「……ご主人様のご家族については深く突っ込まない方が良さそうですね」

「それは僕も同じだよ。っていうか、あの決闘の原因は僕にあるからね。」

女性に罪を擦り付けようとしただなんて知られたら、父様と兄様に半殺しにされるのは確実だよ」

「……貴族様って皆こんな感じなんですか？」

「家はそうでもないわよ？」

まあ自分のツケは自分で払うのがツエルプストーの教育方針だから、助けてはくれないでしょうけれど」

「……平民で良かったと思うのはこう言うときかも知れませんか」

ルイズ曰く、ツエルプストーとは代々殺し殺され、奪い奪われの間柄らしい。

尤も、トモから見る限りではキュルケは気の良い姉貴分にしか見えない。

最近はルイズがツンケンしなくなったり、キュルケも度を過ぎるからかいをやめたとかで落ち着いているんだとか。

時折トモに対して色目を使う事はあるものの、どうも本気ではなくルイズをからかう為のフェイクのようだ。

そんな現状を詳しく説明してくれたのは、時々キュルケにくっ付いて来る青髪の女生徒だった。

「こんにちはタバサ。ご機嫌良さそうで何より」

「……………」

無言のまま頷く生徒の名はタバサ。あからさまな偽名なのだが、何故かこれで通じている。

口数の少ない彼女がトモに色々教えてくれた理由はちゃんとある。そしてそれは、この場に現れたもう一人の女生徒も同じであった。

「……随分おもてになるのね、ギーシュ？」

「げえっ！？モンモランシー！？ 違うんだ、これは浮気じゃない！ 信じてくれ！」

「ミス・モンモランシー。流血沙汰は勘弁して下さいね？」

トモが教えた東方の謝罪「DOG E Z A」を繰り返すギーシュの頭を踏み付けているのは、あの決闘でギーシュに三行半を叩き付けたモンモランシーであった。

なりふり構わぬ謝罪に憐れみを覚えてよりを戻したらしいが、嫉妬深い彼女はギーシュの浮気を監視する為に四六時中張り付いている。微妙にルイズとは距離を置いているが、他の生徒達のように村八分にしないだけマシなのかも知れない。

「ふう……まあいいわ。それよりミスタ、そろそろあの秘薬について教えて下さるつもりはないかしら？」

「……私も、興味ある」

「あれは東方の特別な製法で作られた秘薬でして、私にしか効果はないんですよ」

この二人がトモに絡む理由、それは決闘の際に使った秘薬にあった。モンモランシ家は代々優秀な水メイジの家系で、水の専門分野である秘薬については一家言を持つと言う。

タバサの方は身内に重病人が居るとかで、効果の高い秘薬は喉から手が出る程欲しいとのこと。

とは言っても彼が使った秘薬は冒険者のみが使える神器。成分製法は彼も知らないし、冒険者ではない彼女達には使えない。

何より冒険者のことはルイズ以外誰も知らない。学院長自ら他言無用を言い渡した以上、それを教えるわけにはいかなかった。

二人の追求を躲しつつ、ギーシュの泣き言を聞き流し、ルイズとキユルケの仲裁をする。

日中のトモは概ねこれの繰り返しであった。

夕食の後、トモはシエスタと模擬戦を行う。

冒険者がレベルアップのための鍛錬に挑めるのは一日一回と定められている。

運命神による制限だとも、冒険者同士の取り決めだとも言われているが、実際それ以上は伸びないので実質シエスタのための修行であった。

「……お見事。もう木刀では相手になりませんか」

「い、いえ偶然です、まぐれです！ 私なんてまだまだ……」

シエスタのモップを受け止めた拍子に碎け散った手作りの木刀（二代目）の柄を眺めつつ、トモは一人ごちる。

謙遜するシエスタだが、実際に二人の実力は伯仲していた。

そして今日、愛刀（二代目）がへし折れて啞然とするトモの隙を逃さず、シエスタが一本取ったのである。

これで二人の戦績は二対二のイーブンとなった。

「でも、神器は壊れないですよ？ だったら何で……」

「いえ、これは神器じゃなくて私の手作りですので。それに刀って結構高いんですよ」

刀は神器でも高額の部類に入ると言う。

一番安い『数打ちの刀』でもエキューに換算して百を越えるらしい。ほぼ素寒貧状態のトモにそんな金はない。

借りた金では本人のものと見なされないので、神器を得ようにも得られないのだ。

「これは早めに金策を立てないといけませんね。とは言え、どうしたものか……」

「げ、元気出して下さい!」

シエスタに励まされつつ、模擬戦を終えた彼が向かうのは使用人用の蒸し風呂である。

「……これはこれでいいんですけど、やっぱり湯船が恋しいですね……」

湯船を調達する手段をあれこれ模索しつつ、ルイズの部屋に戻る頃には夜もすっかり更けている。

けれど彼の一日はまだ終わっていない。寮室の扉を開けた途端、トモはそれを実感した。

「あら、お帰りなさい。待ってたわよ?」

「……お邪魔している」

「毎晩毎晩いい加減にしないよアンタ達! 特にキュルケ!」

手に持ったワイングラスを掲げてみせたのはキュルケ、その後ろにちょこんと座り込んでいたのはタバサ。

家主の非難も何のその、毎晩押し掛けてくる二人を交えて東方にある(と言うことになっている)故郷の話をするのが、トモの日課に

なりつつあった。

「……魔法の代わりに技術が発展した国、ねえ……」

「貴族政治が廃止された国……興味深い」

六千年の歴史を誇るハルケギニア諸国に比べれば、自称二千六百年程度の彼の祖国の歴史は浅く感じる。

しかしその密度はハルケギニアの国々とは比較にならない程に濃い。技術重視のゲルマニア出身であるキュルケは、魔法に取って代わった科学技術に興味を引かれると言う。

一方、タバサは未知の社会制度である民主主義に興味津々のようだ。専門外だから、とぼかして伝えられたそれらについて語り合う二人をいなしつつ、トモはルイズに武器の調達を陳情する。

「……え？ でも貴方、神器を「ご主人！」……ごめんなさい。

でも今更普通の武器が必要なの？」

「お金がないんですよ。『あれ』を手に入れるには手元不如意でしてね」

現在無職のトモには収入の当てが無い。

身分的には『使い魔』なので衣食住は保障されているものの、仕事として成立している訳じゃないので給金など存在しないのだ。

「シエスタさんみたいに手に職がある訳じゃありませんし、かと言って長期間ご主人の元を離れるのも問題ですし、どうにかありませんかね？」

「ケチ臭いわねヴァリエールは。剣くらいポーンと買ってあげれば良いじゃないの」

「五月蠅いわねツェルプストー！ 使い魔の教育方針にケチ付けるんじゃないわよ！」

キユルケの茶々に噛み付くルイズ。
それを傍観するタバサに、どうにかして収めようと奮闘するトモ。
ドタバタ主従の一日はこうして過ぎていくのである。

※ヤナギダ・トモ（柳田 智） 種属／ヒューマン…4

体力…6／知力…8／感覚…5／敏捷…8／器用…3／魅力…3／
精神…5／幸運…11

HP…11／11 MP…11／11 SP…3／10 ※数値
は現在値／最大値

EXP…14 所持金…110円

保有クラスとスキル

- ・ネゴシエイター…3
- ・詐術…1／説得…1／挑発…1
- ・サムライ…1
- ・居合い斬り…1

アクセサリ
装備品

- ・厚手のコート／運命神の聖印

アイテム
所持品

・背囊／サバイバルナイフ／目覚まし時計／回復薬（小）

進行中クエスト

・ルイズを守る（期限…ルイズの卒業まで）

※シエスタ 種属／ヒューマン…4

体力…6／知力…3／感覚…6／敏捷…5／器用…6／魅力…5／
精神…4／幸運…14

HP…12／12（※1） MP…10／10 SP…5／10

※数値は現在値／最大値

EXP…7 所持金…—（※2）

保有クラスとスキル

・ハウスキーパー…1

・清掃術…1

・ハンター…1

・解体術…1

・ランサー…2

・連続突き…1／突撃…1

アクセサリ
装備品

・メイド服／モップ／運命神の聖印

アイテム
所持品

・なし

・なし
進行中クエスト

第七話 日常（せいかつ）（後書き）

用語解説

- （※1）回復薬（小）に休憩による自然回復を加算した値である。
- （※2）回復薬（小）を購入、使用したので残高0である。

※HP、MP、SPの自然回復

- ・HP…ゲーム内時間で6時間の休憩を取ることにより1点回復する。
 - ・MP…ゲーム内時間で1時間の休憩を取ることにより1点回復する。
 - ・SP…ゲーム内時間で1日の休憩を取ることにより1点回復する。
- ここで言う休憩とは一切判定を行わない未行動状態を指し、一回の休憩で回復出来るのはいずれか一種のみである。

※トレーニングによるEXP獲得

- ・ゲーム内時間で一日1回、SPを1点消費することで任意のスキル判定を行うことが出来る。

ただしトレーニングを行った日は他の判定を行うことが出来ない。

第八話 入手（おしゃべり）

トリステイン魔法学院から首都トリスタニアまでは馬で約三時間程掛かる。

大体徒歩で約二日掛かる距離と言えば分かって頂けるだろうか。故にトリスタニアに向かう為には馬が必須であるのだが……

「馬に乗れない？」

「ええ、まあ」

乗馬技術を持たない人間にとっては不自由極まりない立地条件だった。

学院から貸し出された二頭の馬の前で、ルイズは呆れ返っていた。

「……貴方ねえ、そう言うことはもっと早く言いなさいよ。準備が無駄になったじゃない」

「いやあ、よもや馬での移動が一般的とは思いませんでしたから。

日本じゃ、乗馬は趣味人の道楽扱いだったもので」

厩舎から連れ出された馬に跨がってさあ出発、と言う所で暴露されたトモの弱点。

けれどもそれを突いてる暇はルイズには無かった。休日には限りがあり、トリスタニアに向かうには馬は必須なのだ。

しばし首を捻り、相乗りと言う手段を思い付いたルイズに大きな影が掛かる。

「ハイ、ルイズ！ トリスタニアに行くなら乗ってかない？」

「……馬よりは早いし、乗馬出来なくても問題ない」

見上げれば、小憎らしい笑顔を浮かべたキュルケといつも通り無表情なタバサを背に乗せた、立派な風竜がそこに居た。

「個人で空輸手段を持てるとは、故郷でもこんな経験はありませんでしたね」

結局往復で一時間掛からないと言うセールストークに負け、ルイズ達一行は短い空の旅に臨むことになった。

少女三人と男一人を背中に乗せた幼竜は、些かも衰えずに力強い羽ばたきで大空を舞う。

この竜の名はシルフィード。『春の使い魔召喚』の儀式で呼び出された、タバサの使い魔である。

「あら、貴方の故郷に竜は居なかったのかしら？」

「東方では既に絶滅してるんです。」

竜から取れる素材を加工して作られた道具はお宝扱いだったもので

『きゅい い いっ!?!?』

キュルケが振った話題に酷い答えを返すトモ。

それを聞いたシルフィードが驚愕と怯えの混ざった悲鳴を上げた。

「……竜を狩り尽くすって、物凄い所ねロバ・アル・カリイエって……」

「……そう言えばベアードも乱獲し過ぎて絶滅寸前って言ってたわね……」

「興味深い」

呆れるルイズとキュルケとは対照的に、瞳を爛々と輝かせるタバサ。キュルケ曰く、彼女がここまで他人に興味を示すのは初めてらしい。秘薬のことを抜きにしても、トモの話はタバサの知的好奇心を刺激する様だ。

「具体的な話を聞きたい。竜のどの部分をどのように加工する？」

「ふむ。記録によれば倒した竜から剥ぎ取った素材と、特殊な鉱石とかを掛け合わせて作っていたようです。」

何でも素材になった竜の性質や特徴を反映した武器になったらしく、それらの武器を使ってまた竜を狩っていたんだとか」

「竜の性質？」

「ええ。尤も実物にお目に掛かったことは一度も無いんですが」

和気あいあいと弾む会話に反比例する内容の殺伐さに、横耳で話を聞いていた二人がげんなりする。

「ねえキュルケ。あの子、何であんな物騒な話で楽しそうにしてるの？」

「言わないでルイズ。……でも良かった。あんなに楽しそうなタバサ、久しぶりに見るわ。」

「ここ最近塞ぎがちだったから……」

そう言って話し込む二人を温かく見守るキュルケに、ルイズは内心でおばさん臭いなと失礼なことを考える。

そうこうしている内に一行はトリスタニアに到着したのであった。

ブルドンネ街、トリスタニアで一番の大通りだ。

幅五マイル程の道の両脇に露店が建ち並び、大勢の人でごった返している。

竜舎にシルフィードを預けた一行は先にトモの買い物を済ませることで一致。

人込みをかき分けつつ目的の店に向かっていった。

「結構狭いんですね。これでは拘摸だって横行するでしょうに」

「実際横行してるわよ。メイジが魔法で拘摸を働くこともあるし、注意はしとくべきね」

「……っていうか、これで狭いって……貴方の故郷ってどんな所なのよ一体」

「……………」

美少女三人について歩く冴えない男。従者にしては態度が横柄だし、友人にしては身分が釣り合わない。

アンバランスな一行は人々の注目を集めながら路地裏に消えていく。表通りの華やかさとは一転、汚物に塗れた狭い道を踏み分け、ルイズ達はようやく目的の店を発見した。

「ピエモンの秘薬屋の近くだから……、あ、あれだわ！」

「ようやく見つけたの？ ……やれやれ、これようやく小汚い所から出られるわ」

「衛生面がしっかりしてなさ過ぎますね。これではいつ疫病が発生してもおかしくないですよ？」

「……この辺りは平民の中でも特に貧しい階層が集まる場所。衛生観念までは手が回らない」

「五月蠅いわね！ ほら、早く行くわよ！」

不衛生な環境にぶつくさ文句を付ける三人を一喝し、ルイズは武器

屋の戸を押し開けた。

様々な武器がびっしりと立ち並ぶ薄暗い店内の奥で、暇そうにパイプを吹かしていた店主が慌てて身を起こす。

「お嬢様方、うちは全うな商売をしてまさあ。

お上に目をつけられることなんざありませんぜ？」

「客よ。私の従者に使わせる武器を探しに来たの」

使い魔と言う身分を吹聴するのは拙かろう、と事前に口裏を合わせた設定を口にしながら、ルイズはトモを前に押し出す。

「へえ、剣をお使いになるのはこの方で？」

「そうなりますね。とりあえず手頃な得物を一通り見せて頂けませんか？」

トモの外見は一言で言えば『貧弱』だ。

上背だけはあるが、それが一層彼をひ弱に見せている。

とても武器に精通しているようには見えない彼を、店主は鴨だと考えた。

（こいつはまさに鴨葱って奴だ！ 精々高く売りつけるかね）

ほくそ笑みながら持ち出して来たのは見事な細工を施された大剣だった。

1. 5メートル程の両刃の刀身は鏡のように輝き、刃毀れ一つ無い切っ先が鋭い切れ味を感じさせる。

「この店で一番の業物ですぜ！ かの高名なゲルマニアのシュペー卿の作で、魔法も掛かっているから鉄だって一刀両断！ 貴族のお供をさせるならこれ位は……」

「ああ、これじゃ駄目です」

満面の笑みで売り込んでくる店主。だがトモは一目見るなり駄目出しを放った。

「何言ってるんでさあ！？　これ以上の得物はそうそうありませんぜ！？」

「言葉が足りませんでしたね。」

私が欲しいのはバスタードソードくらいの大きさで片刃の曲刀です。

カタナって言うんですが、ご存知ありませんか？」

「……知らねえな。曲刀なら幾つかある。少し待ってろ」

店主の態度がいきなり横柄に変わる。折角の売れ筋が潰された腹いせだ。

しかし、トモの言う『カタナ』には心当たりは無い。とは言え仮にも武器屋を営む店主、この道にはそれなりに精通している。

初めて聞く武器の名にプロ意識がくすぐられた彼は、在庫からそれらしき剣を幾つか引っ張り出して来た。

「この店にあるサーベルとシミターはこれだけだ。人気のないシロモンなんぞな」

「ううむ……」

ハルケギニアで曲刀と言えばサーベルかシミターが定番である。勿論、『カタナ』とは似ているようで全然違う。

カタナ——所謂『日本刀』は適度な厚みと重さで押し斬る剣である。独特の製法による粘りを持ち、基本は両手で扱うものだ。

一方、サーベルやシミターは騎兵や盾持ちが使うことを前提とした軽めの剣であり、基本的に片手で扱う代物だ。

どちらも西洋剣のような重さで叩き切る剣ではなく剃刀のような切れ味を誇る剣ではあるが、背景となる文化の違いから両者は全く違う進化を遂げている。

早い話が、サムライの剣技をサーベルで再現するのは不可能だということである。

その上サーベルは儀杖としての側面が強く、実戦には向かないことが多い。

シミターは山賊が好んで使うため印象が悪く、殆ど流通していない。つまり人気のない商品なのだ。

当然品揃えも悪く、この店の在庫も到底業物とは言い難いものばかり。

「……駄目ですね。刀とは違い過ぎます。これじゃ私の技は使えません」

「あら、剣ならホラ、さっきのスーパー卿のが……」

「ちゃんと聞いてたキュルケ？ あの剣は使えないって言ってたじゃない！」

「……両手で使う片刃の長剣なんて、ハルケギニアには無い……」

『はんっ！ そんな生白い腕でいっちゃまえに得物を選ぶたあな！』

諦めな、お前さんには棒切れがお似合いさ！！』

諦め切れずに曲刀の山を囲み、あれやこれやと試しているトモ達に割り込む謎の声。

全員の目が声の方に向く。店主だけが「あちゃあ……」と頭を抱えた。

「……誰も居ない、わよね？」

「見た限りでは剣が積んであるだけのように見えますが……」

「……………」

「え？　どうしたのタバサ、いきなり抱きついてきて？」

怪訝な顔の三人と青い顔の一人が首を傾げる中、声は再び語り掛けて来た。

「手前えらの目は節穴か！　俺様はさっきからここに居るぜ！！」
「「「「え？」」」」

そう言われても、そこには人影らしきものは無く、人が隠れる隙間も無い。

ただ乱雑に積み上げられた剣の山があるだけだ。
更に首を捻る一行。その脇をすり抜け、店主は一本の剣を掴み取って怒鳴りつけた。

「やい、デル公！　それ以上客に喧嘩売るならこちらの貴族様に頼んで溶かしてもらおうぞ！」

『面白え！　どうせこの世にゃ飽き飽きしていたんだ！』

いっそ溶かしてもらった方が清々するぜ！！』

「インテリジェンスソード！？」

店主が驚掴みにしたのは薄手の長剣だった。

先程の大剣と長さは変わらないが緩く湾曲した片刃の刀身は錆が浮いており、お世辞にも見栄えが良いとは言えない。

その鏝元に付いた金具がカタカタ動く度に『やれるもんならやってみな！』だの『やるんだったら早くしろ！』だのという罵声が漏れる。

「……喋る剣？　何の利点があってそんな加工を……」

正直、意味ないのでは？」

「そんなことは無い特殊な魔法を掛けるから通常より頑丈になった

り攻撃力を上げたり話し相手になったりオバケのフリをしたりといろいろ有利な点があるし平民でも扱える数少ないマジックアイテムでもあるから需要は多い」

「あら、いつになく饒舌ねタバサ？」

首を捻るトモにメリツトを語るタバサ。

いつも通り鉄面皮な表情に、ほんの少しだけ焦燥と安堵が浮かんでいるように見えるのは目の錯覚だろうか。

そんな一行を余所に店主と剣の口喧嘩は段々ヒートアップしてくる。そしてとうとう「そんなに言うならやってやらあ！」と飛び出した店主を引き止め、トモは取引を持ち掛けた。

「まあまあご主人、それよりその剣を処分するくらいなら譲ってはいませんか？」

無論ただとは言いませんよ」

「む？ ……まあ、出すもん出してくれるなら良いけどよ。いいのかい？」

こいつは口は悪いわ喧嘩っ早いわで、碌なもんじゃ無いぜ？」

『やい若造！ まともに剣も振れなさそうな手前が俺を買うだと？ ふざけんじゃねえ！』

折角纏まりかけた取引は、当の剣本人が否定した。

その言葉に「ふむ……」と考え込んだトモは、剣に問い掛ける。

「なら、私が君を使えることを証明すれば異論は無いんですね？」
『ハッ！ 出来るもんならな！！』

剣が切った啖呵に、トモは満足そうに頷いて店主から剣を受け取った。

ルイズ達に少し離れるように言うと、彼は太剣を正眼に構えて息を

整える。

見慣れぬ構えに店主を含んだ一同が見守る中、トモは気合いを込めて剣を振り上げた。

「イエアアアアッ！！」

裂帛の気合いと共に振り下ろされた剣はそのまま左に流れ、横薙ぎの軌道に変化する。

振り抜かれた剣が即座に袈裟斬りとなって引き戻された。かと思えばいつの間にか正面への刺突に変わり、再び正眼に戻る剣。

流れるような一連の剣技を一息のうちに為したトモ。そしてゆっくりと剣を左の腰だめに据え、右の半身を突き出す構えを取る。

細く吐き出される息が、引き絞られた弓のような緊張を生み出す。それが最高潮に達した瞬間、彼の呼吸が爆発した。

「チェストオオオオオッ！！」

奇妙な掛け声と共に振るわれる神速の斬撃。

そこに居ない筈の敵が、構える暇さえ与えられずに一刀両断にされる様をその場に居た誰もが幻視する。

それは初めて彼の剣技に触れたシエスタが見たものと全く同じであった。

残心を払い、再び正眼に戻した構えを解いてトモは溜めていた息を吐き出す。

途端に店内を満たしていた空気が弛緩し、観客達も一斉に息を吐いた。

「……ふむ。打刀に比べれば取り回しに難がありますが、まあ野太刀のようなものと思えば良いでしょう。で、どうですか？ 満足して頂けましたか？」

『…………おでれーた。俺様の目もどうやら錆び付いていたみてえだな。』

旦那を見くびっていたのは謝る。これから宜しく頼むぜ、『相棒』！」

どうやら剣の方も納得出来たらしい。

先程の喧嘩腰とは打って変わって敬意すら含んだ会話を交わす剣と使い魔（偽）の姿に、空気に吞まれて惚けていたルイズが我に返る。

「……あれはおいからかしら、ご主人？」

「へえ、厄介払いも兼ねてますんで、百エキュで結構です」

告げられた金額は決して安いものではないのだが、ルイズは気にせず支払おうとする。

だが、その手はトモの言葉に止められた。

「冗談言っちゃいけません。鞆と砥石を付けて三十、それ位が適当でしょう？」

「それこそ冗談じゃありませんや。大負けに負けて九十ってのが限度ですぜ？」

店主とトモの間に火花が散る。

「鞆と砥石、手入れ用の小物を付けて四十」

「馬鹿言うない、小物だけでも十は取るぜ？ ……鞆と小物込みで八十」

「十は取り過ぎでしょう。精々1エキュもしない筈です。……四十五」

「おいおい、剣士の相方を手入れするんだぜ？
命を値切るようなものじゃねえか。……七十五」

「売れ残りを引き取るんですよ？　もう少し勉強しても罰は当たりません。……五十」

「元手って知ってるか？　そんな額じゃ食っていけないぜ！……七十」

「強欲は身を滅ぼしますよ？　……五十一」

「……いきなり細かくなったな……」

強欲とは人聞きが悪い、これ位は商人にとっちゃ当たり前だぜ？

……六十九」

「あんな鈍らを店一番の業物と言い張る貴方がそれを言いますか？

……五十二」

「鈍ら！？　冗談じゃねえ、あれはシュペー卿の手による一点物だぜ！

言い掛りは止してくれ！……六十八」

「ふむ。ではご主人様、ちよつと先程の剣にどんな魔法が掛かってるか調べてもらえますか？」

突如始まった熾烈な値引き合戦に完全に置いていかれたルイズ達に、これまた唐突に話を振ったトモ。

財布を取り出したまま固まっていたルイズが目を白黒させているのを尻目に、タバサがシュペー卿の大剣に向かって杖を振る。

「……簡単な固定化が掛かっているだけ。それ以外に魔法の反応はない」

「馬鹿言っちゃいけませんぜ！？　そいつはシュペー卿の紹介状を持った代理人が直接売りに来た代物ですよ！　偽物の訳が……」

「シュペー卿の紹介状？　……ああ、貴方騙されたんだわ。

シュペー卿がそんなもの付けたって話はゲルマニアでも聞かないもの」

「……『ディティクトマジック』は魔法を探知する魔法。嘘は吐けない」

タバサの探知結果に、ゲルマニア人のキュルケの駄目押し。

それでも尚諦め切れない店主の耳に、ルイズとトモの会話が飛び込んて来る。

「何でその剣が偽物だっと思ったの？」

「……奇麗すぎるんですよ。」

剣ってのは消耗品ですから何かを斬れば刃毀れますし、脂が付けば刀身は曇ります。刀身に曇り一つ無く刃毀れも無しって時点で何も斬ったことの無いというのが丸分かり、でも鉄さえ斬れると言う謳い文句。恐らく装飾用の儀杖だったんでしょう。それに……固定化？ でしたか、その魔法を掛けてペテンに掛けたと言うのが真相じゃないですかね」

理路整然と判断理由を挙げていくトモに膝を屈する店主。

それも当然だろう。彼はこの剣を仕入れる為に相当な額を出資していた。

いつか高値で売れると踏んだが故の先行投資だったが、一瞬でそれがただの鉄くずに早変わり。脱力するのも無理は無い。

「そ……そんなぁ……俺の、俺の剣が……」

「え、ええと……元氣出しなさい！ 大丈夫、何とかなるわよ！……多分」

落ち込む店主を慰めるルイズ、けれどもその使い魔（偽）は容赦なく追い打ちを掛けた。

「御愁傷様です。ですが、貴族にまがい物売りつけようとした事実は消えません。」

……打ち首で済めば良いほうじゃないでしょうか」

「そんな！ 後生です旦那方、助けて下さい！！」

「ならば鞆と小物一式付けて五十。呑んでくれますね？」

「はいっ！！」

容赦ない追い打ちに絶句するルイズから財布を受け取り、トモは金貨を金額分カウンターに積み上げる。

慎重に枚数を数えた店主が、鞆と手入れ用の小物を一揃えて彼に渡した。

「……どうしても煩いと思ったら、鞆に納めれば大人しくなりますんで」

『……親父、元気出せよ。いつかきつと良いことあるぜ？』

遂には剣にさえ気遣われる程落ち込んだ店主に、トモは一言囁いた。

「……装飾剣としては極上ですし、どこかの物好きなら二千は出すでしょう。」

実剣として出さなければ詐欺じゃありませんよ」

「ああっ……！、そうか、そうだな！ まだ売れなくなった訳じゃ無え！！」

これで元手は取れる！！ ありがとうよ！！」

元氣を取り戻した店主に別れを告げ、店から逃げるように出て行く一行。

大通りに辿り着いた瞬間、ルイズは大きな溜め息を吐いた。

「……やり過ぎよ。あの店主、泣きそうだったわよ」

「……あれは流石に可哀想だったわ」

「……哀れ」

女性陣からの抗議に、トモはたじろぎもせずに反論する。

「あのまま剣を売りに出し続けていたら、いつか本当に命を落としかねません。」

忠告する機会としては妥当だと思いますよ」

『まあ、あの親父にはいい葉だったんじゃないか？ ……やり過ぎだとは思うけどよ』

「ふむ、君もそう思いますか、デル公君？」

『デルフリンガーだ、そう呼びな。……で、旦那は何者だ？』

体格に力と技量が合ってねえ、『使い手』でも無いくせにこんな奴は初めてだぜ』

「自己紹介は後ほど。さてご主人様、買い物続きと参りましょうか？」

喋る剣改めデルフリンガーを鞆に納め、ルイズ達を促す。

妙に疲れた顔の彼女達が一転、明るい色に染まる。古今東西、若い女性の買い物好きは変わらない様だ。

デルフリンガーを背負い、トモはきゃぴきゃぴとはしゃぐ彼女達の後ろを着いていった。

「ちょっと買い過ぎたかも知れないわね」

「……これが、ちよつとの量ですか？」

シルフィードを預けていた童舎の前で、トモはうずたかく積まれた

箱の山を見上げた。

三人分の買物物は流石に多過ぎたらしい。帰る段になってようやくシルフィードの積載量を思い出したルイズ達が明後日の方向を向く。それでも動揺を隠し切れずに彼女達の頬に伝わる冷や汗を冷ややかに眺め、彼は溜め息と共に対策を提言する。

「……後で届けてもらいましょう。宅配業者とかは居ないんですか？」

「「「あっ!!」」」

かくして身軽になった一行を乗せたシルフィードは、軽々と羽撃き帰還の途についた。

荷物の山を前にした時の絶望的な表情とは一転して、妙に晴れやかに大空を舞う風竜の背で、トモとデルフリンガーは自己紹介を交わしていた。

『じゃあ、旦那はそのサムライってやつで、あれはサムライに伝わる剣技なんだな?』

「ええ、尤も普通は打刀って言うバスタードソードくらいの大きさの刀を使うんですが、デルフリンガー君位の大きさの刀もありますしね」

『ほう、そうなのか?』

「野太刀って言うんですがね、戦国乱世辺りではよく使われていたみたいです。」

鹿島の大宮に祀られている布都御魂剣も二メイルを超す長剣ですし」

『カシマノオオミヤ? フツノミタマ? ……よく解らんが、今度の相方は変わっているな!』

「自称始祖の時代から存在する魔剣の君程じゃありませんよ」

朗らかに互いを貶す一人と一本を横目で見つつ、ルイズは今日までの出来事を振り返る。

魔法学院に入学してからこっち、ルイズの周りには敵しか居なかった。

憐れみ、侮蔑、その他諸々の悪意が渦巻く中、彼女は常に一人だった。

そんな環境がここ最近になって変わりつつある。

相変わらずキュルケはからかってくるし、ギーシュは気障でモンモランシーは嫉妬深いのは変わっていない。

でも、キュルケのからかいからは嫌みが抜け、ギーシュやモンモランシーからは侮蔑の色は感じられなくなっている。

タバサはよく解らないが、全く会話のなかった頃からすれば格段に話す機会は増えたし、仲は悪くないと思う。

シエスタはルイズ専属として働いている。中々に『出来る』彼女に、これは良い出会いだったと思わずにはいられない。

(……あの胸だけは気に入らないけど……)

若干黒い思考が挟まるが、ルイズが彼女を高く買っているのは事実だ。

オスマンやコルベールとも接する機会は増えた。

オスマンのセクハラぶりには辟易するが、よく見ると決定的な間違いは犯していない事が分かる。

あれもくだらないギャグと同じで、コミュニケーションを円滑にする手段なのだろう。

コルベールは元々学院一の変人教師として知られており、ルイズも敬遠していた。

だがその人となりを知るにつれ、それらの噂が事実を表していないことに気付く。

彼は火の系統を平和的に利用することを目指している。

それに時々、平和ボケした他の教師とは違う剣呑な空気を漂わせていることがあった。

おそらく過去に何かあって、それが彼の目的を産んだのではないかとルイズは推察している。

それを直接本人に確認するのは躊躇われたが。

（こうやって考えてみると、それぞれに背負うものがあるのよね…）

ルイズ達は貴族だ。

だから貴族の責務を背負う義務があり、故に平民を統べる権利がある。

だけどあの決闘で、ルイズ達は義務を忘れて権利だけを貪ろうとしていた醜い姿を突きつけられた。

そんな貴族達にどれ程平民が追い詰められていたのかも。

シエスタの叫びは決して彼女だけのものではない。

彼女の嘆きはそのまま平民達の慟哭でもあったのだから。

もしあの決闘が起こらず、その事に気付かないまま貴族として民を導く立場になったとして、ルイズは果たして彼女の望む貴族になれただろうか？

今、ルイズの意識に大きな変化が訪れようとしていた。

それを導いたのは間違いなく彼女の使い魔であった。

自由闊達、奔放無頼、皮肉屋で口が達者な『冒険者』。

いつか神を殺す、そんなあやふやな目的に人生を捧げた彼の生き様はルイズには理解出来ない。

理解出来ない筈だった。

けれど彼女は夢想する。彼とシエスタと仲間達と共に、迷宮を踏破し怪物達を倒し、見たことも無い神に戦いを挑む己の姿を。

その姿はルイズを強く惹き付けて止まない。けれど、彼女は始祖に

帰依する貴族なのだ。

冒険者と言う異端に踏み込むわけにはいかなかった。

（止めよ、止め。益体もないこと考えても仕様がないわ）

頭を振って思考を停止。何かを訴え続ける心を無視して視線を正面に向ける。

そして視界に飛び込んで来たそれに、彼女は呆氣にとられた。

「……………は？」

五つの塔に囲まれた学院の本塔、それを殴り付ける巨大なゴーレムと言う非日常の光景に。

※ヤナギダ・トモ（柳田 智） 種属／ヒューマン…4

体力…6／知力…8／感覚…5／敏捷…8／器用…3／魅力…3／
精神…5／幸運…11

HP…11／11 MP…9／11 SP…3／10 ※数値は
現在値／最大値

EXP…16 所持金…110円

保有クラスとスキル

・ネゴシエイター…3

・詐術…1／説得…1／挑発…1

・サムライ…1

・居合い斬り…1

ア
ク
セ
サ
リ
ー
装
備
品

・厚手のコート／デルフリンガー（※1）／運命神の聖印

ア
イ
テ
ム
所
持
品

・背囊／サバイバルナイフ／目覚まし時計／回復薬（小）

進
行
中
ク
エ
ス
ト

・ルイズを守る（期限…ルイズの卒業まで）

第八話 入手（おしゃべり）（後書き）

用語解説

（※1） 錆の浮いた古びた大刀。レンジ密着、近距離、物理ダメージに1d6+5、クリティカル値に12。

神器ではないので判定にファンブルすると破損する。重量..

2

第九話 奪還（くえすと）

ゴーレムとは本来『形なきもの』を意味し、土塊から産まれた人間の原型たる泥人形のことを指すとされる。

それが転じて土から創られ、魔法によって動く人形を総じてゴーレムと呼称するようになったと言う。

（それが本当なら、差詰め『アレ』は巨人の原型ってところかしら？）

魔法学院の強固な『固定化』を掛けられた本塔を蹂躪する巨大ゴーレムを目の当たりにしながら、ルイズはそんな豆知識を思い浮かべていた。

皆、唐突に起きた非現実な出来事に呆氣にとられている。

だが一行の中でただ一人だけ、即座に行動を開始した人物が居た。

「タバサさん、シルフィードを『アレ』の手が届かない高度に上げて、『アレ』の上空を旋回させて下さい！ ご主人、キュルケさん！ 二人とも『アレ』に見覚えはありませんか！？」

トモの台詞に我に返ったタバサがシルフィードに指示を出す。

急上昇するシルフィードの力強い羽撃きに、ルイズとキュルケが続けて我に返った。

「ちょ、ちょっと待って！ キュルケ、あれは学院の関係者じゃないわよね？」

「そ、そうね。少なくとも学院をすすんで壊そうとする関係者は居ないと思うわ」

全長三十メートルはありそうなゴーレムは、上空を舞う風竜などおかまいなしにひたすら本塔を殴り続けている。

そこに何があるのかを思い出したキュルケは、ゴーレムを操る人物の目的に思い至った。

「……ねえ、あの辺って、宝物庫のある辺りじゃない？」

「まさか、賊？ 有り得ないわ、ここは魔法学院なのよ？ いったいどれだけのメイジが詰めていると思ってるの！？」

「実際に襲われているじゃないですか、ならそれは有り得ないことじゃありません！」

まだ混乱しているらしいルイズを一喝し、トモはゴーレムの様子を窺う。

相変わらずゴーレムは壁を殴り続けていた。だっ子のような力任せのそれは、しかし微笑ましさなど一切持ち合わせない純粋な暴力であった。

ゴーレムの肩に人影が見える。恐らくあれがゴーレムを操る術者なのだろうが、有効な攻撃手段が手元に無い。

トモは接近戦が専門だ。キュルケ達の魔法も、この距離では精密さに欠ける。

かと言って攻撃出来る距離までルイズ達が近付こうものなら、瞬く間にシルフィードごと挽肉にされてしまうのがオチだ。

「……とりあえず、この場は見逃す他は無さそうですね」

悔しさを滲ませつつ、トモはそう結論付ける。無論、それは諦めると言う意味ではない。

この場は見逃して泳がせることで逃亡先を突き止め、先廻って捕縛するのだ。

とりあえずもっと高度を上げるように指示を出そうとしたトモは、

ルイズが杖を振り上げるのを見てギョツとした。

「ご主人！ やめ——」

「魔法を使えるから貴族じゃないわ！ 敵に背中を見せないから貴族なのよ！」

『ファイヤーボール』！！』

ルイズはトモの眩きを額面通りに捕らえてしまっていた。

言葉が足りなさ過ぎたのである。

何より、ルイズはトモに失望していた。

『決して諦めずに運命を切り開く』、その言葉が口先だけだったと思ってしまったのだ。

（見てなさい！ 私は決して諦めないわよ！！）

もしも彼がその思惑を全て語っていれば、ルイズとてこんな勘違いはしなかっただろう。

あるいは思わず眩きを漏らさなければ、状況は変わっていた筈だ。ここに來てから初めてとも言える、トモの失態であった。

勇ましく振るわれた杖からは何も出なかった。代わりに本塔の壁が爆発四散する。

そこへゴーレムの腕が突き込まれた。固定化の掛かっていた壁が碎け、大穴が開く。

人影はゴーレムの腕を伝い、悠々と宝物庫の中に消える。

再び姿を現した時、人影は大きな箱を抱えていた。

それを見ていたルイズの頬に冷や汗が伝う。

「も、もしかして……やっちゃった、かしら？」

「「「……………」」」

「だ、大丈夫！　今度は外さないから！！」

ジト目の一同から顔を逸らし、ルイズはゴーレムに向けて再び杖を向ける。

しかしゴーレムは学院の城壁を突き崩し、猛然と逃走を開始した。

「大変！　逃げるわよ！！」

「……追って」

『きゅい　い　い　い　っ！』

タバサの簡潔な命令に、シルフィードは一声鳴くとゴーレムを追いはじめた。

ゴーレムは鈍重な見掛けとは裏腹にかなりの速度で走っていたが、竜種中最速を謳われた風竜たるシルフィードには関係無い。

瞬く間に追い付き、ルイズが再び杖を振り上げた目の前でゴーレムは突然崩れ落ちた。

「え……？」

突然のことに目を白黒させる一同。

ゴーレムはたちまち土の塊に姿を変え、小山のように降り積もる。そしてその肩にいた筈の人影は、煙のように消え失せていた。

魔法学院の宝物庫、いや『元』宝物庫に集まった教師の数は驚く程

少なかった。

「なんじゃ、これっぽっちしかおらんのか！ この非常時に何たることか！

腑抜けるにも程があるじゃろうに！」

「お、お言葉ですがオールド・オスマン。何分今日は『虚無の曜日』でして……

教師の方々も出払ってしまい、残っていたのは私たちしか……」

不甲斐無い教師達に憤慨するオスマンに、残っていた数少ない教師の一人であるシュヴルーズが青い顔で事情を説明する。

しかし内心で彼女は安堵していた。

今晚の当直は自分である。もし賊が夜に現れたのなら、全責任を負わされていた筈だ。

全く、近頃世間を騒がせている盗賊に立ち向かうなんて真似、この学院の教師達に出来る訳が無いのに自分だけが責任を負わされるなんて納得出来る筈が無い！

罪深くも盗賊が白昼堂々学院を襲ったことに、始祖へ感謝を捧げるシュヴルーズ。

その内心を知ってか知らずか、オスマンは壁に残された賊のメッセージを読み上げた。

「破壊の杖、確かに領収いたしました。土くれのフーケ、か……。

近頃噂になつとる盗賊が、とうとう学院に狙いをつけたというところかの」

それはトリステイン中の貴族にとって恐怖の代名詞な名前であった。主にマジックアイテム、魔法の付与された物品を専門に狙う盗賊で、盗みに入る際に『練金』でどんなに強固な壁や扉も土塊に変えてしまふことから付けられた二つ名である。

性別すら不明なほど謎に包まれており、唯一判明しているのは土のトライアングルメイジらしいと言うことだけ。

そして犯行現場にふざけたメッセーじを書き残していくことでも知られた盗賊であった。

「嘗められたものじゃな。

言わばメイジの総本山たる学院に白昼堂々襲い掛かるとは……。

もっともこの様では嘗められても仕方無いのかも知れんの」

「何を呑気な……！　すぐに王室に連絡して、衛士隊を差し向けてもらわないと……！」

怒り半分に自嘲半分のオスマンに、駆けつけたコルベールが叫ぶ。しかしオスマンは首を横に振った。

「それはいかんぞミスタ・コルベール。これは魔法学院の問題じゃ。身に掛かる火の粉を己で払えずして、貴族は名乗れん。

それに、ここには王家からの預かりものもあるのじゃ。

信頼して預けたものが盗まれましたでは学院の信用に関わってしまうぞい」

故に自力で解決するんじゃないよ——そう言うと、オスマンは目撃者の方へ目を向けた。

そこに居たのはある意味で馴染みの面々。

ルイズは何故か悲壮感すら漂う程の緊張を漲らせ、逆にトモは憎らしいほどいつも通りの態度で一緒に呼び出されたキュルケ達と談笑している。

そんな対極的な姿の主従に、オスマンは普段は隠している威厳を纏って報告を求める。

「詳しく説明したまえ」

その言葉にトモが反応するよりも早く、ルイズが進みでて説明を始める。

トリスタニアから帰って来た途端、襲撃に出くわしたこと。

使い魔の機転を自ら潰してしまったこと。

ゴーレムを狙った魔法が誤爆して宝物庫の壁を破壊したこと。

それが盗賊に宝を盗み出される隙を与えてしまったこと。

逃げる盗賊を追いかけて結局見失ったこと。

「……ゴーレムは崩れて土の塊になってしまいました。

賊の姿も一緒に消え失せ、その人となりも全く分からず仕舞いでした」

「成程、よく解った。ミス・ヴァリエール、下がって宜しい」

話を聞いたオスマンは内心で嘆息する。

事情を話している間、ルイズは俯いて血の気が引く程握り締めた拳を震わせていた。

それは責任を被ることへの恐れではなく、自らが起こした失態を悔いてのもの。

ゴーレムを見失った後、トモから話を聞いたルイズは自分の思い込みが全ての原因だと感じていたのである。

無論、そんなことは無い。鮮やかな引き際を見せたフーケをあのまま泳がせていても、結局見失っていただろうことは想像に難くない。けれど立派な貴族たろうとするこの誇り高い少女は、自らの過ちを許せなかった。

もし、あの時血気に逸って攻撃したりせずに泳がしておいたなら？

もし、あの時壁を破壊しなかったなら？

後から後から湧き出る後悔が彼女を押し潰す。しかしルイズはそれから目を逸らさず、当事者としての義務を果たそうとしていた。

故にオスマンはルイズの責任を追及しなかった。

だが、その心遣いは一人の教師によって無駄に終わった。

「なんて事をしてくれたのかね、ミス・ヴァリエール！

君が余計なことをしなければ学院の秘宝は盗まれずに済んだのに！」

口角に泡を飛ばしてルイズを糾弾したのはギトーと言う教師である。学院でも珍しいスクウェアクラスの教師で、本人もそれを笠に着て自分の系統である風が最強と言って憚らない。

直情径行の気があり、非常に感情的で物事を自身の尺度で図ると言う小物の条件を満たす男でもあった。

風と言う自身の系統を裏切り空気を読まぬ発言が得意で、よりにもよってそれが今この場で炸裂したのだ。

「そもそも魔法も満足に使えない劣等生の君に何が出来ると言うのかね！？

ミス・タバサにでも後を任せて、さっさと引っ込んでいれば良かったものを！」

蒼白になったルイズの目が潤む。けれども彼女は反論もしないでじっと耐えた。

ギトーの台詞はルイズの後悔をピンポイントで穿つ。それに彼女は反論出来ない。

零れ落ちそうになる涙を堪え、ひたすら投げ掛けられる罵声を受け入れる。

それが過ちに対する罰であると思っていたから。

それに気付かず、ただ一方的に捲し立てるギトー。

それにオスマンとコルベール、そしてタバサとキュルケも苛立ちを募らせていく。

更にルイズを追い詰めようとする彼を一喝せんと皆が口を開きかけ

たその瞬間、

「大体、『ゼロ』の分際で「お言葉が過ぎるんじゃないですかね、先生？」！？」

止まらぬギトーの口を塞いだのは、オスマンでも、コルベールでも、キュルケでも、タバサでもなかった。

一歩進み出てルイズを背後に庇ってギトーの説教と言う名の責任の押しつけを妨げたのは、正体不明の平民の使い魔、トモであった。

「何だ貴様は！ 平民風情が邪魔をするな！！」

青筋を立てて怒るギトーを無表情に一瞥し、トモは慇懃に一礼する。

「申し遅れました。私はミス・ヴァリエールに招聘されて使い魔を務めておりますヤナギダ・トモと申すもの。

極東は日本国、こちらで言うロバ・アル・カリイエより召喚の儀にて呼び出され、オールド・オスマンの保護を受けて学院にお世話になっております」

「使い魔だと？ ……そうか、『ゼロ』に召喚された平民とは貴様のことか！」

あくまで慇懃な態度を崩さないトモに、ギトーは見下し切った目を向ける。

何も珍しいことではない。平民は貴族に仕えるもの、その固定観念は生徒のみならず教師にとっても常識だったからだ。

むしろオスマンやコルベールの方が異端なのである。

六千年の貴族優位社会が育てた偏見は、余りにも強固に貴族自身を縛っていた。

「その使い魔が何の用だ！ まさか主人を庇い立てするつもりか！？」

「いいえ、賊に付け入る隙を与えてしまったのはご主人の落ち度。それに付いては異論はありません」

その言葉を聞いたオスマン達が目が驚愕に染まり、ルイズの目は絶望に染まった。

遂に使い魔にまで見放されてしまった。

仕方が無い、自分はそれだけの事をしでかしたのだから。

諦観に沈み込む彼女の耳に、使い魔の言葉が飛び込んでくる。

だが、ルイズはその意味を一瞬理解出来なかった。

「私はただ、先生の思い違いを正して差し上げようとしたまでです」

(……思い違い？ 一体、何のこと……？)

ルイズの動揺を余所に、トモとギトーの対決は始まった。

先制を取ったのはトモである。

「ところで、先生は他の先生方のようにお出かけにはなっておられないのですね？」

「当然だ！ 学院の危機に備えずして何が教師か！」

実際には誰にも誘われなかったただけなのだが、ギトーは見栄を張る。だがその見栄は、致命的な弱点となってトモに指摘された。

「成程……いえ盗賊を迎撃している際、お姿を見掛けなかったもので」

「ぐっ!？」

そう、何と言おうがフーケに立ち向かったのはルイズ達だけなのだ。ちなみにギトーはその時、パニックになって普段着から正装に着替えていた。

同じパニックであっても、ルイズのそれに比べれば全然無意味な行動である。

言葉に詰まるギトーに、トモは更なる追撃を掛けた。

「それにご主人は少なくとも貴族の義務を果たそうとしておりました。

結果的に賊にしてやられましたが、その件について追求される筋合いはありません」

「うぐっ!？」

貴族の義務を持ち出して来たトモに、ギトーは何も言い返せない。実際はともかく、建前として『高貴なるものの義務(noblese obligé)』は未だに残り、貴族はそれに準じた行動を取るべきと教えられている。

ルイズはそれを実践しただけだ。

それを否定すれば貴族の名誉を穢したと思われるでも仕方が無い。再び詰まるギトーに、トモは止めの一言を放つ。

「何より私とご主人への暴言は、そのままヴァリエール家とオールド・オスマンの名誉に直結します。取りようによっては、貴方の家名に泥を塗ることになりますよ?」

「ぐはっ!!」

それはド・ロレーヌにも語った事実の再確認でしかない。

けれど、それはギトーの頭に昇った血を一気に引き下げるには十分な威力を持っていた。

ルイズとトモにうかつなことを言えば、ギトーは爵位と名誉と職を

一気に失う事になる。
最早彼に逃げ場所はない。

「おのれ、虎の威を借る狐如きが……！」

憎々しげに吐き捨てるギトー。その言葉を聞いたトモは、彼に向かって言い放った。

「虎からすれば卑怯者かもしれませんが、狐からすれば生き残る為に必死に生み出した知恵ですよ？ 力の振るいどころを間違えた貴方に、狐を誹謗する権利があるのですか？」

虎に喰われかけた狐が咄嗟に吐いた嘘、『自分は獣の王様である』を証明する為に狐の後を着けた虎。

狐を見る度に逃げ出す獣達に嘘を信じ、狐に礼を尽くした虎は結局最後まで獣達が狐ではなく、その後ろに控えた虎に怯えていた事に気付けなかったと言う故事。

『強者に媚を売ってその名を悪用する卑怯者』の代名詞と化した有名な故事だが、見方を変えれば『危機をチャンスに変えた知恵者』となりうる。

狐はただ自分の力を存分に振るっただけ、力を持ちながら使いもしなかったものにそれを否定する権利は無い。

完全に言葉を失ったギトーに一瞥をくれ、トモはオスマンに向き直る。

「失礼しました。何分、聞くに堪えない世迷い言だったもので」

「いや、謝るのはこちらの方じゃ。」

ミス・ヴァリエール、ミスタ・ギトーの暴言、全教師が変わって儂が謝罪しよう。

……済まなんだな」

「い、いえ、そんな！　お顔を上げて下さいオールド・オスマン！」

ルイズは自らに向かって下げられた頭に慌てふためく。

ギトーの言葉は刺があったとは言え、概ねその通りだと彼女は思っていた。

だから、オスマンが謝る理由が分からないのだ。

一方、オスマンはギトーの浅慮に腹を立てつつ、トモの言葉に驚嘆していた。

確かにルイズのしでかしたことは問題であろう。

けれど今のルイズはいいっぱいいっぱい、これ以上追い詰めれば彼女がどうなってしまうのか分からなかった。

だからオスマンは一旦突き放して事件から遠ざけ、適当な罰を与えて罪悪感を軽減させようとしたのだ。

しかしその思惑はギトーによって潰された。このまま彼女を遠ざければそのまま責任感に押し潰され、二度と立ち直れなくなってしまうかもしれない。

けれどトモはルイズの罪を肯定した上で、責任の所在を分散することで彼女の名誉とその心を守ってみせたのだ。

（……敵わんなあ。これでミス・ヴァリエールは少なくとも己の罪業に潰されることは無くなるじやろうて。

その上、ギトー君を生贄にすることで学院や教師にも責任を負わせおった。これで儂の提案も説得力を持つ事になる。

……ここまで読んでおったのかの？）

碌に顔を合わせたことの無いギトーの心理をここまで読み切って仕掛けたのなら、トモは最小の犠牲で自分と主に有利な展開を引っ張って来れる一級品の戦術家である。

敵に回すにはもっとも恐ろしい部類の人物であろう。

とは言え今はその支援砲火が有り難い。オスマンが提案しようとし

ていた策にこれほどの説得力が産まれたのだ、使わない手は無い。

「……こほん。えー、先程も言った通り、フーケの一件はあくまで『学院の問題』として処理せねばならん。故に儂ら自身で解決するのじゃ。」

そこでフーケの搜索隊を編成したいと思う。我と思うものは杖を掲げよ」

有志を募ってフーケを追撃し、秘宝を取り返して襲撃の事実を隠蔽する。

それがオスマンの策であった。

破壊された本塔は魔法の暴発とでもすれば良い。

肝心なのは宝物庫の中身が揃っていることなのである。

「……どうした？ 何故、誰も杖を上げんのかね？」

しかし、彼の思惑は沈黙によって否定された。

あれほど調子の良いことを言っていたギトーですら、青い顔で首を左右に振るばかり。

コルベールは思い詰めた様子で何度か杖を上げようとするも、すぐに手を下ろす。

他の教師に至っては困ったように顔を見合わせるだけで、誰も杖を掲げる素振りすら見せない。

皆、怖れていたのだ。

日が傾きかけていたとは言え、白昼堂々と巨大ゴーレムで魔法学院に乗り込んでくる盗賊に、尻込みしていたのだ。

「おらんのかね、フーケを捕まえて名を上げようとする勇敢な貴族はおらんのかね!？」

オスマンは舌打ちをしたくなった。

数が少ないとは言え、ここに居るのはメイジを養成する為に国中から集められたエキスパートの筈だ。

それがこの体たらく。この様では折角のトモの援護も意味を成さず、盗賊を逃した学院の名誉は地に落ちるだろう。

だから震えながら掲げられた杖を発見した時、彼が杖の主を確認せずに搜索を命じたとして無理はあるまい。

「おお、行ってくれるのか！　ならばお主に頼もう……って、お主は！？」

「馬鹿な、ミス・ヴァリエール！？　君は……！？」

そう、高く掲げられた杖はルイズのものであった。

驚愕する一同を見渡し、彼女は吼える。

「誰も掲げないなら、私が行きます！　元を正せば賊に付け入る隙を与えたのも私の責任、ならばその汚名は自分で返上してみせますわ！」

「いけません、貴女は生徒なんですよ！？　こんな危険にさらす訳には……！？」

コルベールがルイズを説得しようとするが、続けて掲げられた杖を見て絶句した。

そこに居たのはキュルケとタバサ。片や不敵な微笑みを浮かべ、片やいつも通りの無表情で、ルイズよりも高く杖を掲げている。

「な……！？　君たちまで……！」

「ヴァリエールに遅れをとるのはツェルプストーの恥ですもの」

「……二人が心配」

何でも無いことのように言っただけの二人に、ルイズは黙って頭を下げる。

キュルケもタバサも、フーケの件には直接の関係が無い。

たまたまその場に居合わせたただけだ。二人を巻き込んでしまったのはルイズの独断専行の所為だった。

だが二人とも彼女を責めたりはしなかった。その上、彼女の雪辱戦を援護するとまで言ってくれている。

その心遣いにルイズはただただ感謝するしか出来なかった。

「……やっぱり私は反対です！ 今からでも衛士隊に……！」

「お待ちくださいミスタ・コルベール。この件、私とご主人にお任せください」

教え子達が危険に晒されることを良しとせず、コルベールが再度衛士隊への連絡を提案しようとする。

それを止めたのは、ギトーをやり込めてから一言も発しなかったトモであった。

「馬鹿な、君までそんなことを！？」

コルベールは驚愕する。彼の行動は少なくともルイズを守る為だった。

そのトモがルイズを止めない理由が分からない。

「分かっているのかね？ このままでは彼女達が……！」

「全部理解しておりますとも。だからこそ、止めるべきではないと思うのです」

そう言うと、トモはコルベールにだけ聞こえるように囁く。

「……今のご主人は自信を喪失しています。それも以前のような上辺だけのものでは無く、魂とも言うべき大事な部分の、です。」

多少の危険はあっても、何らかの形でご主人自身が解決に関わるようにしなければ、ご主人は今度こそ限界を迎えてしまうでしょう」
「う……、しかし！」

「何も盗賊本人を捕らえずとも良いのです。犯人に繋がる重要な証拠やアジトの手掛かりを見つckerだけでも、ご主人の救いになるはずですから」

「う、ううむ……」

トモの言うことも分かる。

だがいくら彼女の為と言えど、教え子をむざむざ危険な所へ向かわせるのは躊躇われる。

苦悩するコルベール、その迷いを断ち切ったのはオスマンの言葉であつた。

「ならば君たちに頼むとしよう」

「そんな！ オールド・オスマン、私は反対です！

生徒を危険な目に遭わせる訳には……！」

事態の推移に置いていかれたシュヴルーズが悲鳴じみた反対意見を叫ぶ。

しかしオスマンが「では、君が行くかね？」と尋ねた途端、彼女は火が消えたように口籠った。

「まあ、コルベール君やミセス・シュヴルーズの心配も分かる。

じゃが、彼女達は犯人を見ておるのじゃ。搜索においてこれほど有利なものはない。」

その上、ミス・タバサは若くしてシュヴァリエの称号を持つ騎士じゃと聞いておるし、ミス・ツェルプストーはゲルマニア随一の軍

閥の家系じゃろう？」

それを聞いた教師達にどよめきが走る。

シュヴァリエは序列こそ最下位ではあるが、他の爵位とは違い相應の功績を挙げたものだけに与えられる称号だからだ。

タバサの歳でシュヴァリエに叙勲されるのは異例である。

キュルケも思わず「それ本当!？」と本人に確認したくらいだ。

そのキュルケも優秀な軍人を多数輩出したことで知られる名門の出だ。

戦争の度にヴァリエール家と戦って来た経験は伊達ではない。

「本人達も二年では珍しいトライアングルメイジじゃ。系統は違うとは言え、同じトライアングルのフーケにそうそう引けを取ることはあるまい。

ミス・ヴァリエールもトリステイン最大の大貴族の息女だし、何よりフーケと交戦した唯一のメイジじゃ！ 杖も掲げんボンクラ共より余程信用がおけるわい！」

そう言って居並ぶ教師陣を睨み付けるオスマンに、気まずそうに視線を逸らす教師達。

「その使い魔であるミスタ・ヤナギーダも優秀な『メイジ殺し』じゃ！」

さあ、彼女達に優ると思うものがあるなら、一步前に出て代わりに志願したまえ！」

冒険者であることを伏せるため『メイジ殺し』——武器や策略でメイジを出し抜く平民の傭兵の総称——であることにされたトモが教師達を睨め付ける。

たじろぐ一同が一步も動かないのを確認すると、オスマンはルイズ

達に向き直った。

「魔法学院は諸君らの努力に期待する。ただし、自身の命を第一にすること！ 死ぬような真似は決して許さぬ、これは厳命じゃ！！」
「「杖にかけて！！」」

ルイズとキュルケとタバサは直立不動で答えた後、恭しく一礼を贈る。

トモだけは何も言わない。

「頼んだぞい。ところで、ミス・ロングビルはどうしたのかね？
姿が見えんようじゃが……」
「そう言えば、襲撃直後から姿が見えないようですが……どこへ行
ったのでしょうか？」

オスマンとコルベールが互いに首を捻り合う。
丁度その時、件のロングビルが慌てた様子で現れた。

「何処へ行っていたんですか！？ 大変なことが起こったのですぞ
！？」

「承知しています！ オールド・オスマン、賊の居場所が分かりま
した！！」

「何じゃと！！」

コルベールの詰問を流し、彼女はオスマンに報告をする。
その衝撃的な内容に、オスマンのみならずその場にいた全員が驚愕
した。

「ゴーレムが逃走した時、私は偶然黒ずくめのローブ姿の男を目撃
したのです！

さてはコイツが賊に違いないと後を着けたところ、近くの森にあった廃屋へ入っていくのを確認しました！」

「でかした！ おそらくその廃屋がフーケの隠れ家じゃろう、そこは近いのかね？」

「馬で四時間程といった辺りでしょうか。

今から向かうと恐らく夜になってしまおうと思いますが……」

思わぬ知らせに考え込むオスマン。こんなに早く見つかるとは思っていなかったのだ。

何しろ相手は名うての盗賊である。先刻はああ言ったが、危険な相手には違いない。

実力者揃いとは言え、未だ学生に過ぎない彼女達に危ない真似はさせたくなかった。

「よし。ミス・ロングビル、馬車を用意させる。彼女達をその廃屋まで案内してほしい。

君たちにはフーケを見張ってもらいたい。無理にフーケを捕まえようとせんで良いぞ」

「では私たちの命が最優先で、次点は秘宝の奪還。

フーケの捕縛はおまけとして考えれば良いのですね？」

オスマンが下した命を簡潔にまとめたトモが念を押す。

「そうじゃ。あくまで目的は秘宝の奪還なのでな」

その言葉に頷いたトモは姿勢を正し、胸元の聖印にその手を重ねて重々しく宣言する。

「冒険者やナギダ・トモは搜索隊の身を守り、学院の秘宝を奪還することをここに誓う。」

クエスト
「宣誓！」

三本の剣を重ねた聖印が銀光を放つ。
一行を乗せた馬車が学院を出立したのは、それから少し経った頃だった。

※ヤナギダ・トモ（柳田 智） 種属／ヒューマン…4

体力…6／知力…8／感覚…5／敏捷…8／器用…3／魅力…3／
精神…5／幸運…11

HP…11／11 MP…7／11 SP…3／10 ※数値は

現在値／最大値

EXP…18 所持金…110円

保有クラスとスキル

・ネゴシエイター…3

・詐術…1／説得…1／挑発…1

・サムライ…1

・居合い斬り…1

アクセサリ
装備品

・厚手のコート／デルフリンガー／運命神の聖印

所持品^{アイテム}

・ 背囊／サバイバルナイフ／目覚まし時計／回復薬（小）

進行中クエスト

・ ルイズを守る（期限…ルイズの卒業まで）

・ 『破壊の杖』の奪還（期限…翌日まで）

第十話 作戦（ねまわし）

『破壊の杖』、それは名に反してどう見ても杖に見えない外見をしている。

鉄でも銅でも無い未知の金属で作られたそれは非常に軽く、1メートル程の太い筒に精密な小物がくっ付いた形状だが、それを振っても魔法は発動せず、『ディテイクトマジック』を掛けても全く反応が無い。

幾人ものメイジが『破壊の杖』を調べてその秘められた力を解き放とうと目論んだが、杖は黙秘を保ったまま今日まで死蔵されていたと言う。

「……それ、本当に杖ですか？ 使えない道具ほど意味の無いものはありませんよ」

「私もそう思うけど……、学院長が一度だけ使われる所を見たらしいわ。」

『破壊の杖』って名付けたのも学院長だったし……」

「まあ、そんな訳で『破壊の杖』は学院の秘宝とされたんですが……まさか、フーケに狙われるとは思ってもありませんでした」

すっかり日も落ちて薄暗がりが周囲を覆い隠す黄昏時、フーケの隠れ家を目指す馬車の上でルイズ達は夕食代わりの弁当を囲みながら会話をしていた。

話題は『破壊の杖』の由来について。但し、この場にいる誰もが詳しい話を知らなかった。

手綱を握るロングビルも交え、ああだこうだと憶測をする一行。そんな中、ルイズだけが険しい顔で考え込んでいる。

（……どうしよう。どうしたら勝てるのかしら？ あのフーケに）

皆が談笑するのを横目で見つつも、ルイズは一人焦っていた。彼女には彼らのように戦う力が無い。剣も魔法も扱えないルイズはただの無力な小娘だ。

オスマンはフーケとは無理に戦わなくて良いと言っていたが、それも相手の出方次第で変わってくる。交戦になればルイズは足手まといに早変わりだ。

(……『貴族は魔法を持ってその精神とする』、か)

ルイズは常々両親や教師達が口にする言葉を思い返す。

彼女はそれを『貴族は魔法を使えなければならない』と言う意味に取っていた。

いや、恐らく貴族達は皆そのように受け止めていることだろう。

しかし、ルイズはこの言葉の真の意味を理解した。すなわち――

(――貴族の誇りを貫くには、それ相応の実力がいるって事なのね)

それは『高貴なるものの義務』を前提とした、余りにも重い言葉である。

ならば、今のルイズは貴族と言えるのだろうか？

いざフーケとの戦闘に及んだ場合、彼女に出来ることなど何も無いのだ。

自分の無力がこれほど恨めしく思えたのは初めてだった。

落ち込むルイズの目の前に、香ばしい匂いを漂わせるものが差し出された。

焼きたてのパンに切れ目を入れて肉や野菜を挟んだ見慣れない料理だったが、彼女の胃袋を刺激するには充分な威力を備えている。

「賄い料理で申し訳ありませんが、食べておかないと持ちませんよ？
腹が減っては戦が出来ぬと言いますし」

「……いただきますわ。ありがとう、シエスタ」

それを差し出していたのは、何故か着いて来たシエスタであった。

それは彼女達が出立する直前のこと。

慌ただしく準備を整える一行の前に、いつものメイド服にモップを
抱えたシエスタが現れて同行を申し出たのだ。

「お願いします！ 私も連れて行って下さい！！」

「分かりました。良いですよねご主人？」

「「「「ちょっ！？」」」」」

あっさり同意したトモに驚くルイズ達。

シエスタもこんなに簡単に許すとは思ってなかったようで、目を丸くしていた。

「何考えてるの！ シエスタはメイドなのよ？」

「ですが冒険者でもあります」

慌てるルイズの抗議に、トモは至極冷静に答える。

「冒険者は一人で戦う訳ではありません。仲間と組んで戦うこともあるんです」

冒険者が数名寄り合って作る集団のことを『ギルド』と呼ぶ。

ギルドを組むと様々な恩恵が得られるらしい。

ただし、冒険者一人につき一つのギルドにしか所属出来ず、ギルドを解散するとその恩恵も失われてしまう。

現在、トモの周りにいる、いやこのハルケギニアにいる冒険者はシエスタのみ。

必然的に彼がギルドを組む相手は彼女しかないのだ。

「ギルドを組む利点は色々あるんですが、今一番重要なのは『耳打ち』ですね」

同じギルドのメンバーが聖印を通じ、どんなに離れた場所であっても意思疎通が可能になる恩恵を『耳打ち』と言う。

地味な効果だが、様々な場面で役に立つので最も重宝される恩恵である。

「例えば……、先行した偵察と連絡を取り合う、離れた所にいる別働隊に指示を送る、等ですね」

「……………!?!」

言わば人数限定の携帯電話や無線のようなものである。

情報が未だ人伝にしか行き渡らないハルケギニアにおいて、一瞬にして情報伝達を可能にする恩恵は計り知れない。

「頭数を揃えて行くなら、固まるよりも分散した方が有利です。私とシエスタさんがギルドを組み、二手に分かれて連絡を取り合う。」

そうすれば、賊がどういう手に出ようと対応が可能ですから」

それは未知なる戦術が完成した瞬間だった。

タイムラグの無い、完全な情報共有を軸にした二面作戦。

軍略に疎いルイズでさえ、それがどれほど有用かが解るほど画期的な作戦である。

ただ、問題があるとすれば……

「……それって、キュルケ達にも事情をばらすことになるんじゃない？」

「……あっ！」

「……成程、事情は解ったわ。

確かに学院長に誓ったんじゃ、本当のことも言えないでしょうし。

それにしても……」

「………危機に陥っても決して諦めない……まるで『イーヴアル
デイの勇者』……」

結局、トモはキュルケ達にも冒険者のことを明かすことにした。

見送りに来ていたオスマンに事情を説明して許可は得たものの、『冒険者の洗礼』などの深い部分は教えてはならぬと厳命されている。故にトモが語ったのは冒険者の由来とその目的だけだったのだが、余りに荒唐無稽な話にキュルケは呆れ、タバサは何故か瞳を輝かせた。

「神を倒す、ねえ……。」

そんなあやふやな目的の為に一生を台無しにするなんて、私には考えられないわ」

「冒険者の目的はそこに集約しますからね。そこを諦めないのが冒険者なんですよ」

「……シエスタが冒険者になったのはギーシュとの決闘のとき？」

あんなに強かったのは冒険者になったから？」

「はい。ですが、無我夢中だったもので詳しいことは何も……。」

その辺りはトモさんに聞いた方が早いと思います」

呆れ顔のキュルケとは対照的に興味津々のタバサ。

彼らの出自を元より知っていたロングビルはひたすら手綱を握るのみ。

もつきゅもつきゅとシエスタお手製のサンドイッチを頬張りながらそれを眺めていたルイズは、口の中のものを飲み込んでからトモに尋ねる。

「それで、どういう作戦で行くの？」

「ふむ、とりあえず隠れ家までは纏まって行動します。何分現場を確認しないと作戦の立てようがありませんし。ですが、基本は私とご主人とロングビルさん、シエスタさんとキュルケさんとタバサさんに分かれるつもりです」

それを聞き、ルイズの脳裏に閃きが走る。

「……タバサ達はシルフィードで空中警戒、私達は地上から隠れ家に突入ってところかしら？」

「正解です。よく解りましたね？」

ルイズの推論に、トモは軽く驚いて賞賛を送る。
だが当の本人は褒められても余り嬉しくなかった。

「だって、ミス・ロングビルは土のラインでしょ？」

貴方だって接近しなければ戦えないし、私の爆発も遠距離向きじゃないわ」

「あら、貴女のそれって失敗なんじゃないのルイズ？」

混ぜっ返すキュルケに鼻を鳴らし、ルイズは落ち着いて反論した。

「失敗だろうがなんだろうが、フーケに有効なら使うまでよ。」

私の攻撃手段はこれしか無いんだから」

その言葉を聞いたキュルケはルイズを見直した。

少なくともコンプレックスからではなく、自身を戦力にする為の手段として魔法を見ているのは良い兆候だった。

「どっちにしろ空中からならキュルケの火が最も有効よ。だったら後は消去法。」

わざわざシエスタを連れて来たこともそうだし、そんなの見抜けないほど私は間抜けじゃないもの」

元々座学は優秀だったのだから、彼女の頭の回転は決して遅くない。そこに状況を冷静に見据える精神力が備わったことで、ルイズは一級の軍師足り得る人材へと成長していた。

（——面白くなって来たわね）

本来なら強敵の誕生は歓迎出来ない筈かも知れない。
だがツェルプストーの家系は代々情熱を燃やすことに命を懸ける一

族である。

恋であれ、戦であれ、全身全霊を掛けて倒すべき強敵がいる幸運を喜びこそすれど、それを不運に思うことは決して有り得ない。

使い魔召喚までのルイズは傲慢とも言えるプライドに凝り固まっていた。

魔法が使えないことも相俟って、キュルケの目には強敵足り得ない小物に映っていた。

そのルイズが目覚ましい進歩を遂げていた。少なくとも、ライバルと呼ぶに相応しい人物になりつつある。

このまま行けば、きっと彼女は自分の情熱を燃え上がらせる強敵となるだろう——キュルケはそれが楽しみだった。

だが、まずは目の前の脅威から生きて帰らなければならない。キュルケは自分の頬を叩いて気合いを込め直す。

「……何やってるのキュルケ？ いきなり自分のほった叩いたりして？」

「ん〜っ？ そうね、ルイズがいきなりまともな事言い出すから、これは夢じゃないかなって思っただけよ」

「な、な、何ですってえ!？」

まあ、今はからかい甲斐のあるお隣さんで充分かしらね——キュルケはじゃれつく子猫のようなルイズをあしらいながら、そんな事を思っていた。

じゃれ合うルイズとキュルケを尻目に、タバサはトモに疑問を呈していた。

「……教えて。学院長に誓う時、貴方は何故条件を細かく設定した？」

確かにオスマンの命令は『秘宝の奪還』であつたから、『賊の捕縛』は別な任務であると言えなくもない。

しかし通常ならこの二者はワンセットで捉えられるだろう。タバサはそう認識していた。

だからわざわざ優先順位を決めたトモの行動は、彼女にとって不可解だった。

「ああ、あれですか。あれは冒険者の誓約クエストの為ですよ」

「……誓約？」

曰く、冒険者は何者にも仕えないとは言っても限度があるらしい。

働かねば喰えないのは冒険者であつても同じこと。だが、働くと言うことは雇用主に仕えることでもある。

かつては狩りの得物を売ったりして生計を立てていたそうだが、乱獲が祟って獲物がめっきり減った今ではその手段は使えない。

そこで考え出されたのが『誓約クエスト』であつた。

これは要するに『依頼を果たすことを運命神に誓う』ことで、雇用者に仕えているのではないとこじつける形なのだ。

冒険者に出された依頼を受け、それを果たすことで報酬を得る。それが現在の冒険者の主な収入源だそうだ。

「依頼を受ける際に仕事の優先順位を決めるのは、冒険者の常識ですから」

確かにわざわざ戦わなくとも、フーケの隙を見て秘宝を取り返し、学院に逃げ帰った方が安全と言えよう。

シルフィードと言う足を持つ自分達ならば、『秘宝の奪還』だけに狙いを絞って行動した方が成功率は高くなる。

「それに誓約自体にも意味はあるんですよ」

神に立てた誓いを守り、見事クエストを達成した冒険者には運命神から報賞が得られる。

それは珍しいアイテムだったり見えない加護だったり新しいスキルだったり様々だが、依頼人から得られる報酬よりもこちらを優先する冒険者もいるくらい重要なものらしい。

その代わり、クエストに失敗するとペナルティが課せられる。

ペナルティの内容は様々だが、中にはそれが原因で命を落とすものもいたりする。

まさにリスクを負って生きる冒険者を体現したシステムと言えるだろう。

「……と、言う訳です。あのまま命令を受諾すれば、それはオールド・オスマンに恭順することになってしまいます。

ですからクエストを受ける形に持って行く必要があったんですよ。それならこちらにもメリットはありますし」

「メリット？」

「ああ、利点があるって意味ですよ。……ふむ、どうやら通じる言葉と通じない言葉があるようですね。これは興味深いです。この件が片付いたら言語比較表でも作って、共通する部分を調べても面白いかもしれません」

「……冒険者はそんなことまでする？」

意外なものを見た顔のタバサに、トモは頷く。

「ええ。冒険者の能力は天井知らずですから、鍛えれば鍛えただけ能力も上がります。

それは体力や素早さのみならず、知力や精神と言った部分にも及びます。

セージ（賢者）やリサーチャー（探求者）などの学者系クラスもあるくらいですし」

それはタバサに取って驚きの連続であった。

ただ戦うだけじゃなく、様々な恩恵を得て運命を切り開き、いつか神に至るというあやふやな目的の為に命を賭ける冒険者。

それは彼女に、ある伝説を思い起こさせるには充分だった。

（……『イーヴァルディの勇者』、彼らの生き様はまさにそのもの……）

平民の間に伝わる勇者の伝説。地位や名誉の為になく、救いたいものの為に勇気を振り絞って困難に立ち向かう英雄の逸話。

目的こそ違えど、彼らの生き方は『イーヴァルディの勇者』を彷彿とさせる。

それはタバサの内にある希望を秘めた情熱の明るい炎と、怨嗟を上げ続ける昏い炎の双方を燃え上がらせた。

「……一つ尋ねたい」

だから彼女がそれを欲したとて、何らおかしくはないのかも知れなかった。

「私も、冒険者になれる？」

「無理ですね」

思わず口をついて出た願望に即、叩き付けられた拒絶に驚くタバサ。そんな彼女に構わず、トモは言葉が続けた。

「冒険者になる方法はオールド・オスマンから嚴重に口止めをいただいてます。

それがなくとも、私は冒険者を増やすつもりはないですよ」

「どうして？ 何故シエスタは良くて、私は駄目？」

「シエスタさんは運命に立ち向かう意志を無理矢理押さえつけられていました。

ですが……」

そこまで言うと、トモはタバサを正面から見据えた。

その眼光に込められた鋭い意志の輝きに怯むタバサに、トモはその言葉を突きつける。

「自分から立ち向かう意志を殺している貴女に、冒険者を名乗る資格はありません」

「!!」

タバサはその台詞に狼狽えた。

彼女にはそれが、自分を取り巻く事情を指した言葉のように聞こえたのだ。

「……何処まで知っている？」

「知る知らないじゃありません。貴女の目がそう言っているんです」

「……目!？」

「目は口ほどにものを言い、と言うくらいですからね。その人を推し量るのに、目はとても重要なんですよ」

どうやら自分の事情を知られた訳ではないらしい。そのことについて安堵するも、タバサは別件で悩まされることになった。

『目を見て』そこまで解ると言うのなら、他の部分を含めて分析されれば彼女の事情くらい簡単に割りさせるのだろう。

だとするとこれ以上親しくするのは考えものだ。けれどあの秘薬にまつわる話も含め、タバサはこの主従に深く関わり過ぎている。

今更離れるのは不自然だし、そこから事情を分析されかねない。そしてそれがお節介な赤髪の友人にでも伝われば、彼女はタバサの為に奔走するだろう。

この学院に来てから初めて出来た友人達を、自分の為に危機に晒したくはない。

（今は現状維持に務める。それしか無い）

この妙に勘の鋭い使い魔は、タバサにとって毒にも薬にも成り得る存在だ。

故に切り札でもあり、奥の手でもある。

今後の基本方針を固め、タバサは馬車の進行方向に目を向けた。当面の心配事は、その先にいる筈だったから。

『土くれ』のフーケは大胆不敵、神出鬼没を売りにする盗賊だが、決して警戒心に疎い訳ではない。むしろ盗みに入る際は下調べを入

念に行い、確実に盗める確信が付いてから実行に移すタイプだ。噂になるほど派手に働いても、その尻尾さえ掴ませない手管がそれを証明している。

そのフーケは現在——滅茶苦茶焦っていた。

（不覚……やっぱりいい加減な情報を元に動くモンじゃ無いね）

魔法学院の宝物庫はスクウェアクラスのメイジが数人掛りで『固定化』を掛けており、フーケが得意とする練金が通用しなかった。ならば他の手段を、と情報を集めていた矢先に『宝物庫の壁は物理的な力に弱い』と言う情報を入手。

既に下調べにかなりの時間を割いていたフーケはそれを聞き、即座に行動に移したのである。

『フリッグの舞踏会』の衣装合わせを兼ねてトリスタニアに足を伸ばすと言う一人の教師を焚き付け、教師の大半を外出させたフーケは早速ゴーレムを用いて宝物庫の破壊を試みたのだが……

自慢の巨大ゴーレムの拳は宝物庫の壁に全く歯が立たなかった。

いくら殴り付けてもびくともしない壁にフーケが諦めかけたその時、たまたま現場に居合わせた生徒の得体の知れない魔法が誤爆、宝物庫の壁に大穴が開いた。

これ幸いと宝物庫の中に侵入し、見事目的の『破壊の杖』を手に入れたまでは良かったのだが、その後がいけない。

せっかく盗み出した『破壊の杖』であるが、その使い方がさっぱり見当もつかなかった。これでは売り物にはならない。

その為、教師陣をおびき寄せて使い方を探ろうと罫を仕掛ければ、引っ掛かったのがなんと生徒だったと言う体たらく。

さらに言えば、あの得体の知れない魔法を使った生徒がフーケ追撃に参加している。慎重を期するフーケに取って、イレギュラー要素満載の事態は頭痛の種でしかないのに。

（その上、あの連中が付いて来たとなれば……苦戦は必死だね）

あの自称『冒険者』なる輩を敵に回すのは避けたかった。

武器による直接戦闘しか出来ないとは言え、ああも見事に青銅のゴ
ーレムを粉碎してみせた彼奴らと事を構えるのはリスクが大き過ぎ
る。

かと言って『破壊の杖』を諦めるにはかけた苦労が割に合わない。

（全く……どうしたモンかねえ……）

もうすぐ追撃に出た生徒達が廃屋に辿り着いてしまう。フーケは焦
りながらも、事態の解決に向けて必死に頭を捻っていた。

「あれです。あの廃屋にフーケが入って行くのを見ました」

そう言ってロングビルが指差したのは、空き地にぽつんと建つ樵小
屋らしき建物である。

鬱蒼と茂った森は月明かりさえ遮り、夜闇が辺りを覆う様は中々に
不気味だった。

明かりが漏れないよう黒い布で覆ったランタンを囲み、作戦を練る
一行。

「要はフーケを出し抜くこと……ならば囚が効果的」

タバサが提案したのは、偵察兼囷を使ってフーケを誘い出す作戦だった。

フーケの使うゴーレムには土が必要である以上、フーケは外に出てこざるを得ない。

本来なら外に出て来た瞬間に集中砲火を浴びせる所だが、今回はあくまで秘宝の奪還が目的である。余計なリスクは負いたくないのが実情だ。

「ふむ。……ならばその役目、私に任せてもらえますか？」

囷を買って出たのはトモだった。そのまま彼は自分の腹案を明かす。

「タバサさん、シルフィードにシエスタさんとキュルケさんに乗せて空中で待機して下さい。

キュルケさんはシエスタさんから合図があったら魔法で空爆をお願いします。

シエスタさんは常に『耳打ち』に注意して下さい。聞き逃しがあつたら大変ですから」

そしてトモはルイズとロングビルに、廃屋を挟んだ反対側に向かうよう指示を出した。

「私が正面から近付いて中の様子を伺います。

フーケが居た場合は挑発しておびき寄せますので、気付かれないように廃屋に侵入して、『破壊の杖』を探して下さい。

『破壊の杖』を見つけたら爆発で合図を。

決してフーケやゴーレムに攻撃しないように！ 別働隊がいることに気付かれてしまいます」

『破壊の杖』が見つかったらキュルケ達とトモが遅延戦闘を仕掛け、

その間にロングビルとルイズは馬車の位置まで後退する。

そうしたら再び爆発で知らせ、それを合図にタバサはトモを回収して退却、合流してシルフィードで学院まで全速力で退却するのだ。

「馬車は置いて行くことになりますが、後で回収すれば良いんです。とにかくこの作戦の肝は如何にフーケを出し抜くか、ですから」
「でも、私がミス・ヴァリエールと一緒に行動しても意味ないので
は？」

周囲を偵察していた方が……」

「ミス・ロングビルは土のメイジでしょう？」

ならばゴーレム出現の予兆を察知することは出来ませんか？」

「それは……出来なくもありませんが……」

「どの道明かりも無しじゃ偵察の意味がありません。」

ご主人の護衛も兼ねて一緒に行動するのがベター……多少ましだ
と思います」

ルイズは作戦の内容を吟味する。

出来ることならフーケの捕縛もしたい所だが、現状の戦力では危険の方が大きい。

何より戦闘が始まれば、彼女では足手まといにしかなくなる。
ならばトモの言う通りにここは秘宝の奪還に絞った方が良いだろう。

「私に異論は無いわ。その作戦で行きましょう」

「……異議なし」

「わ、私もそれが良いと思います」

「私も賛成ね。無駄な労力は払わない方が良いわ」

「……………仕方ありません。了解しました」

ルイズの賛成を皮切りに、一同が頷く。

それに頷きを返し、トモは聖印をシエスタに差し出した。

「今のうちにギルド結成を済ませておきましょう。」

シエスタさん、聖印を重ねて頂けますか？」

「あ、は、はい！」

トモの差し出した聖印にシエスタの聖印が重ねられる。

そしてトモは宣言の言葉を謳い上げた。

「我ら、苦楽を共にせんことを誓う！ さすれば我ら、共に歩む仲間なり！」

「わ、我ら、苦楽を共にせんことを誓う！ さすれば我ら、共に歩む仲間なり！」

トモの台詞をなぞるようにシエスタもまた謳い上げる。

その瞬間、一瞬だけ聖印が輝くのをルイズは見届けた。

「……これで良し。『もしもし。シエスタさん、聞こえますか？』」

「わっ!？」

突然聞こえて来た声に度肝を抜かれるシエスタ。

まるで耳元で囁かれたかのようににはっきり聞こえたその言葉は、けれどもトモは声に出していなかった。

「これが『耳打ち』です。」

声を伝えたい相手を思い浮かべて聖印に話し掛ければ伝わります。慣れてくると声に出さずに会話も出来ますが、とりあえず今はそこまでしなくても良いでしょう」

「……内緒話とかに便利な力よね……」

少し呆れるルイズだが、これで作戦が遂行出来るようになったのだ。

とにかく今は目の前の脅威に立ち向かうことを考えなければならぬ。

「ではご主人、森伝いに回り込んでもらえますか？」

タバサさんは皆を連れてシルフィードの所へ。

用意が出来たらシエスタさんは私に『耳打ち』をお願いします」

「解ったわ。行きましょうミス・ロングビル。」

ゴーレムの予兆を感じ取ったらすぐ教えて下さいね」

「解りました。ではミスタ・ヤナギダ、私達はこれで……」

「お願いします。……では始めましょうか」

皆が行動を始めたのを見送ると、トモはデルフリンガーを抜き放つ。

「おっ、いよいよ出番か!？」

「静かに！ いざと言うときは頼りにさせてもらいますよ、デルフ君」

鞘から解放された途端に喋り出すデルフリンガーを嗜め、トモは一足飛びに廃屋に近付いた。

現在のトモの敏捷は8、常人の限界が6であることを考えれば驚異的な数字だ。

例えるなら短距離の世界記録保持者を鼻歌混じりでぶちぎる早さ、と言えば理解してもらえらるだろうか。

とにかく目にも留まらぬ早さで廃屋に取り付き、トモは窓から室内を窺う。

埃の積もったテーブル、足の折れた椅子、崩れた暖炉、積み上げられた薪、中身の入ってない酒壺、大小様々なものが雑多に転がる小屋の中に人間の気配はない。人が隠れられそうな場所も見つからなかった。

「……居ませんね」

「逃げられたか？」

ぽつりと漏らした一言を、デルフリンガーが混ぜっ返す。
だが、トモの表情は険しさを増した。

「お宝を置いて逃げ出すとは思えません。十中八九、罠でしょう」

積み上げられた薪の隣に廃屋に不釣り合いな真新しい箱が置いてあるのを確認し、トモはそう断じる。

トモは少し考えると、シエスタを通じてタバサに幾つかの指示を出す。

そして廃屋の裏に回り、ルイズ達を手招きして呼び寄せた。

「……どうしたの？ 作戦変更？」

「どうやらフーケは居ないようです。ですが意味も無く留守にするとは思えません。」

追っ手を撒く為の罠と考えた方が自然でしょう」

『あら、良く感づいたわね』

「「!」？」

周辺を警戒しながらおそろおそろ近寄り、打ち合わせに無い行動に疑問を呈するルイズと罠の可能性を指摘するトモ。

二人の会話に第三者が割り込むのと、廃屋が粉々に吹き飛んだのは全く同時であった。

「来ました！ 至急救援求むだそうです！」
「解った」

同時刻。シルフィードに乗って上空を旋回していたシエスタが『耳打ち』の着信を報告すると、タバサは即座に使い魔を急降下させた。眼下ではあの時の巨大ゴーレムが廃屋を殴り飛ばしている。そして、その手にあるものを見た彼女達は驚愕に顔を引き攣らせた。

「ちよっ！ あれって……！」

「……不覚」

「な、ミス・ロングビル!？」

三十メイルを越す巨大な土ゴーレム。

握り締められたその手に囚われていたのは、間違いなくミス・ロングビルその人であった。

※ヤナギダ・トモ（柳田 智） 種属／ヒューマン…4

体力…6／知力…8／感覚…5／敏捷…8／器用…3／魅力…3／
精神…5／幸運…11

HP…11／11 MP…7／11 SP…3／10 ※数値は

現在値／最大値

EXP…18 所持金…110円

保有クラスとスキル

・ネゴシエーター…3

- ・ 詐術…1／説得…1／挑発…1
- ・ サムライ…1
- ・ 居合い斬り…1

アクセサリ
装備品

- ・ 厚手のコート／デルフリンガー／運命神の聖印

アイテム
所持品

- ・ 背囊／サバイバルナイフ／目覚まし時計／回復薬（小）

進行中クエスト

- ・ ルイズを守る（期限…ルイズの卒業まで）
- ・ 『破壊の杖』の奪還（期限…翌日まで）

※シエスタ 種属／ヒューマン…4

体力…6／知力…3／感覚…6／敏捷…5／器用…6／魅力…5／
精神…4／幸運…14

HP…12／12 MP…10／10 SP…5／10 ※数値は

現在値／最大値

EXP…8 所持金…-

保有クラスとスキル

- ・ ハウスキーパー…1
- ・ 清掃術…1
- ・ ハンター…1

・解体術…1

・ランサー…2

・連続突き…1／突撃…1

アクセサリ
装備品

・メイド服／モップ／運命神の聖印

アイテム
所持品

・なし

進行中クエスト

・『破壊の杖』の奪還（期限…翌日まで）

ギルド名…未定

・ギルドスキル…耳打ち（※1）

第十話 作戦(ねまわし) (後書き)

用語解説

(※1) どんなに離れていても、聖印を通じて会話が出来る。

この効果は同一のギルドメンバーのみに適用される。

第十一話 覚醒（けつゐ）

『あら、良く感づいたわね』

「「!?!」」

その言葉が聞こえた瞬間、咄嗟にトモはルイズを抱えて飛び退る。廃屋を粉碎しながら現れたのは三十メートルを越す巨大なゴーレム。その肩には黒いローブを纏った人影が見えた。

「フーケのゴーレム？ いつの間に!?!」

「……どうやら、私達はまんまと罠に嵌ったようですね」

驚愕するルイズを庇い、手にしたデルフリンガーを構え直すトモ。

「今、上空の三人に救援を要請しました。

私が時間を稼ぎますので、とりあえずご主人は三人と合流して下さい」

「何言ってるのよ！ 私も戦うわ!?!」

突然の戦力外通告にルイズは異議を唱える。

対するトモはゴーレムから目を離さないうまま、彼女に言い聞かせた。

「私が囷になってる間に、あの廃屋から『破壊の杖』を探し出して下さい！

発見次第、最初に決めた通り学院に逃げ帰ります！

皆と合流したらシエスタさんを通して合流地点を指示して下さい！

森の木々を上手く使えば、私一人なら何とかかりますから!?!」

それを聞いたルイズは更に抗議しようとして、トモの足の速さを思

い出した。

彼女の足では彼に着いて行けない。ならばここは二手に解れ、トモの行動を邪魔しないのがルイズに出来る最大級の支援になる。そう決まったなら善は急げ、ルイズは素早く踏ん切りを付けて背後に居る筈のロングビルに声をかけた。

「……解ったわ。ミス・ロングビル、私達は一旦引きましょう！
………ミス・ロングビル？」

呼び掛けに返事が無いことを不審に思い、後ろを振り返るルイズの目に映ったのは鬱蒼と茂る森の木々だけ。
そこに居る筈の緑髪の麗人は煙のごとく消え失せていた。

「え、ミス？ 一体何処に「危ない！ ご主人！！」！？」

戸惑うルイズを突き飛ばし、自らも飛び退るトモ。

一瞬遅れて二人が居た場所にゴーレムの拳が突き刺さった。
響く轟音、立ち上る土煙と飛礫が飛び交う中、ルイズはそれを見て顔色を変える。

「………こう来ましたか」

「な………人質ってわけ！？ この卑怯者！！」

二人の目前に立ち塞がる三十メートルを越す巨大な土ゴーレム。握り締められたその手に囚われていたのは、間違いなくミス・ロングビルその人であった。

その手の中のロングビルの存在を殊更強調するように突き出された腕。

気を失っているらしく、ぐったりと俯く彼女を気遣い、地上のルイズ達はおろか上空のキュルケ達も手を出せずに居た。

「腕に集中砲火を浴びせてやれば……！」

「駄目。あの高さではミス・ロングビルがただでは済まない」

「ゴーレムの足を斬りつけて倒すとか……」

「一撃じゃ無理です！ 樵みたいは何回も斬り付ける暇があるとしても！？」

ルイズ達を追い回すゴーレムを追うシルフィードの背で、キュルケ達はあだこうだと対策を練るが、一向に良い案は浮かばない。

試しにと飛ばした魔法はゴーレムの表面を削っただけで、足止めにもならなかった。

ならばシエスタの槍術で、と竜騎士のごとくモップを構えて突貫するも、接近する度に駄々っ子のように振り回される腕が邪魔をする。地上のルイズ達も逃げるのが精一杯らしく、とても反撃に出る余裕は無いようだ。

キュルケが挙げる対策に駄目出ししながら、タバサは状況の打開を検討していた。

「そうよ！ あのゴーレムを操ってるフーケを見つけ出してふん縛ってやれば……！」

「……！、その案採用！ 森の外周沿いに『ファイヤーボール』を打ち込んで炙り出す！ シエスタ、連絡を」

「え？ あ、はい！」

苦し紛れにキュルケが出した作戦とも言えない提案を、タバサは採用した。

突然指示を出されたシエスタが慌ててトモに『耳打ち』する。が……

「えっ!？ でも、それじゃ……はい、わかりました。」

ミス・タバサ、トモさんからの伝言です!

『予定に変更なし、先程の指示通りに行動されたし』だそうです
!」

「……!？」

「どうして!？ このままじゃどうにもならないじゃない!!」

何故かトモはその提案を蹴ったのだ。道理に合わないそれにキュルケのみならず、シエスタもタバサも戸惑う。

だがタバサは事前の打ち合わせ通り、シルフィードをゴーレムの攻撃範囲ギリギリで旋回させながらその後を追いかける。

「ちょっと、タバサ!？」

「……彼が何の考えも無しに指示を出すとは思えない。多分、何らかの策を立てている。」

だとしたら独断専行は彼の作戦を破綻させてしまう。今は指示通りに動くのが賢明」

タバサの推察を聞いたキュルケとシエスタは揃って嘆息する。

「……仕方無いわね。ねえシエスタ、彼からの指示に変更は無いのね?」

「はい、そのまま続けて欲しいとしか聞いていません」

シエスタの返答に、キュルケは増々渋面になって行く。

無理も無い。ゴーレムが出現する直前にシエスタを通じて出された指示は、『何があっても手出しは無用。魔法を温存しつつ、緊急に備えられたし』、だったのだから。

「どうして？　今がその『緊急』じゃないの？」

（それとも、今以上の何かを警戒しているのかしら？

それこそ、ゴーレムに追い回される以上に危険な何かを）

キュルケは台詞の後半を飲み込み、口には出さなかった。何となくではあるが、それが良いような気がしたからだ。

「……来ました！　森に逃げ込んだら二手に分かれるので、ミス・ヴァリエールを回収して欲しいとのことです！」

「ルイズを？　……そうか、彼の足なら一人で逃げた方が効率が良いんだわ！」

ルイズを回収するまでの囹になるつもりね！」

シエスタに入った『耳打ち』とキュルケの推察に頷き、タバサはシルフィードを森の上空へと向ける。最初の予定では馬車のある辺りを集合場所に使っていたが、とてもそこまで戻ってられない。

そうとなればルイズを探し出す必要があるのだが、それは非常に困難であった。

唯でさえ鬱蒼とした薄暗い森の中を、月明かりだけを頼りに搜索する苦労は並大抵のことではない。その上、彼女達の背後にはあの巨大ゴーレムが居る。あまりにも悪条件が揃い過ぎていた。

「キュルケ、シエスタ、森の中に注目して。彼女を見つけるには足下が暗過ぎる」

タバサの要請を受け、キュルケ達は目を皿のようにして森に注目する。

ルイズ達が森に逃げ込んだのは、丁度その時であった。

「右です！」

「うひゃあああああっ！！！」

「今度は左！」

「うきやあああああっ！！！」

ルイズは走っていた。時折背後を着いて走るトモから方向を指示される度、淑女にあるまじき悲鳴を上げながら必死に逃げ惑う。

その度に、ゴーレムの足が直前まで彼女の居た辺りを踏みこむ。まさに命懸けの鬼ごっこ。捕まってしまうばきつと彼女の艶やかなピンクブロンドの髪も、可憐な美貌も、ささやかな胸も、全部挽肉にされてしまうだろう。

一目散に森の茂みを目指す二人。廃屋のある空き地はそう広くもないのに、森の木々がやけに遠く見える。

その木々を翳めるように飛ぶ大きな影。先程シエスタに『耳打ち』した通り、ルイズを回収しようとシルフィードが低空飛行しているのだ。

「ご主人！とにかくタバサさん達と合流を！」

「ここは一旦引いて体勢を立て直します！！！」

夜の闇より尚暗い森の暗がりに数マイルとなった所で、トモが新たな指示を出す。

指示自体は先刻伝えた作戦と変わらない。ルイズもそれは了承している筈だった。

「駄目よ!!」

だから、彼はルイズが拒否するなどとは考えても居なかったのだ。予想外の展開に驚愕するトモに、彼女は畳み掛ける。

「さっきまでなら撤退も有り得たかも知れないけれど、今はミス・ロングビルが囚われているのよ! 彼女を見捨てる訳にはいかないでしょう!？」

「ですが、このままではジリ貧です! 勝てる相手では——」
「勝てる勝てないじゃないの! 仲間を見捨てるなんて、私には出来ない!!」

それは『貴族』でも『メイジ』でもない、『ルイズ』自身の心からの叫びだった。

『敵に背中を見せないのが貴族』だとか、『メイジの責任だから』とかではなく、ルイズと言う人間が自ら選んだ選択肢。

「私に出来ることなら何でもやるわ! だから——彼女を救いなさい!」

トモはルイズの使い魔ではない。あくまで使い魔の振りをしているだけだ。

だから、彼女には彼に命令する権利はない。

けれどその命令にトモは目を見開き、嬉しそうに頷いた。

「解りました、とにかくご主人はタバサさん達と合流を！ 私が囧になりますから！」

言うが早い、トモは身を翻してゴーレムの足下に走り寄る。

「デルフ君、出番です！」

言うが早い、デルフリンガーを振るい、足を深く斬りつけるも切断には至らず。

しかも元が土だけにさっくりと開いた刀傷は見る間に小さくなってゆく。

「自動修復？ お手軽な外見のくせになんて高性能な！！」

「大きさを考えろよ旦那！ あれっぽっちじゃかすり傷にもならねえぜ！！」

すかさず二の太刀を振るうトモ。だがその刃は甲高い金属音を立てて止められた。

いつの間にかゴーレムの足が鋼鉄に変わっている。

呆然とする間もなく飛んで来た拳を避け、トモは大きく間合いを取った。

追撃に備えて構えるが、ゴーレムはその場から一步も動かない。

「どうやら鋼鉄の足では動けないようですね。もう一度斬り付けてやりましょうか」

「いやいやいや、斬れないから！ 俺っちそんなに丈夫じゃないから！！」

「ごたごた言ってる暇はありません！ 行きますよ！」

「いやあああああっ！ 折れる折れる折れるうううううっ！
らめえええええっ！！」

泣き喚くデルフリンガーを構え、トモはゴーレムに再び走り寄った。唸りを上げて飛来する拳をかくぐり、鋼鉄と化した足にデルフリンガーを叩き付けるべく居合いの構えを取る。

それが、致命的な隙となった。

居合いの体勢で立ち止まったトモの脇腹に、ゴーレムの足刀が突き刺さる。

足払いをかけるように振るわれたゴーレムの右足が、立ち止まったトモをまともに打ち抜いたのだ。

「ぐはっ!!」

「だ、旦那あああっ!?!」

小石のように弾き飛ばされ、トモは数回バウンドしてから大木に激突した。

激痛で霞む視界にゴーレムの姿を捉え、彼は賊の思惑に嵌められた事に気付く。

いつの間にかゴーレムの右足が土に戻っている。

鋼鉄と化した左足は囷。動けない振りをして油断を誘い、ロングビルの握る左腕をこれ見よがしに見せびらかして誘導したのだろう。

「……………これは参りました、ねえ……………」

「旦那?　くそっ、初陣で相方を失うなんて冗談じゃねえぞ!!」

デルフリンガーを支えにしてよろよろと立ち上がるトモ。

そんな彼にとどめを刺すべく地響きを立てて近付いてくるゴーレム。最早彼の命は風前の灯。けれどもその目に込められた闘志は些かも曇ることなく、ゴーレムを睨み付ける。

そんな彼の目前で、突然ゴーレムが燃え上がった。

目を瞬かせるトモの目の前で、今度はゴーレムが凍り付く。

かと思いきや再び炎上するゴーレム。

そしてもう一度凍り付いたゴーレムの動きが止まった次の瞬間、強烈な爆発がゴーレムを揺るがした。

右足の股関節に当たる部分が粉々に吹き飛んでバランスを保てなくなったゴーレムが、自重を支え切れずに倒れ込んでいく。

そのままゴーレムはただの土くれに戻ってしまった。

「……何事ですか？」

呆然とする彼の目の前に大きな影が舞い降りる。キュルケ達を乗せたシルフィードだ。

そしてその一行の中に気絶したままのロングビルと、それを支えながらこちらに手を振るルイズの姿を見つけたトモは、何が起きたのかを理解した。

「大したもんだ！ あの嬢ちゃん、えれえ事を考えついたもんだぜ！！！」

「……選んだんですね。いろいろ小細工をした甲斐がありました」

大喜びのデルフリンガーががなり立てる大声に紛れ、トモの呟きは誰にも聞かれることなく宙に溶けていった。

「解りました、とにかくご主人はタバサさん達と合流を！ 私が囧になりますから！」

言うが早いか踵を返してゴーレムに向かって行くトモを見送りながら、ルイズは己の無力を噛み締めていた。どんなに偉そうな啖呵を切った所で、結局最後はこうして彼に任せるしかない。

歯痒い思いを抱えながら、森に逃げ込もうとしたその時。

「ルイズ、こっちよ！ 早く！」

すぐ傍で聞こえるキュルケの声。声が聞こえた方向へ目を向けたルイズは、そこで信じ難いものを目撃した。

そこには確かにキュルケが居た。墜落と見紛うばかりの急降下をしながら、シルフィードに足を掴まれて逆さまにぶら下がった状態で、度肝を抜かれて思わず立ち止まったルイズを、キュルケの両腕がしっかりと抱きとめる。

それを確認したタバサはシルフィードを急上昇させた。ゴーレムの手が届かない高度になったのを確認すると、タバサが『レビテーション』で二人をシルフィードの背中に乗せる。途端にキュルケの全身からぶわっと脂汗が湧き出した。

「こ……怖かった……！」

「怖かったじゃないわよ！」

あんな無茶して、もしもアンタの身に何かあったらどうするのよ……！！」

今頃になってがたがた震え始めたキュルケに、ルイズが詰め寄る。

「あ……あら、心配してくれるのルイズ？」

「ばっ……べ、別にアンタのことなんか心配してないわよ!!」

蒼白な顔に無理矢理笑みを浮かべたキュルケのからかいに、真っ赤な顔でルイズがツンデレを炸裂させる。

そんな二人のじゃれ合いを止めたのは、シエスタの絶叫だった。

「それどころじゃありません! あのままじゃトモさんが……!!」

その言葉に現状を思い出したルイズは慌てて地上に目を向ける。それは丁度トモが一の太刀を入れた瞬間でもあった。

ケーキにナイフを入れたかの如くさっくりと斬り付けた一撃は、けれどもゴーレムの大質量の前ではかすり傷も同然らしく、大した痛みにはなっていない。

すかさず振るわれた二の太刀は、なんとゴーレムを鋼鉄に『練金』する荒技で防がれる。

彼を挽肉にせんと迫るゴーレムの拳を避け、一旦距離を取るトモ。だがゴーレムはその場を動かず、追撃しようとはしなかった。

「……もしかして、動けないんじゃないの? あのゴーレム。だったら凄い間抜けなんだけど……」

トモもキュルケと同じ結論に至ったらしく、居合いの構えを取る。剣を腰に据えて半身を突き出すようなそれが、いつかの武器屋で見せたものだど理解するよりも早く、高速で飛来した足払いがトモを弾き飛ばした。

彼がまるで人形のように地面を弾み、森の大本に叩き付けられる姿をルイズは見た。見てしまった。

「い……いやああああああああっ!!!!」

くずおれるトモの姿に、ルイズは絶叫した。

恐怖、悔恨、悲哀、激怒、ルイズの脳裏を様々な感情が駆け巡る。彼をあんな目に遭わせたのは誰だ？ ……決まっている。『自分のせい』だ！

自分があんな命令を出さなければ、彼も絶望的な戦いに臨んだりはしなかった。

自分が学院を襲った盗賊を逃さなければ、彼もこんな搜索に出ることはなかった。

……自分が彼を召喚しなければ、彼はこんな目に遭わずに済んだのに！

全ての責任がルイズにある訳ではない。

彼女はただ自身の責任を果たそうと願っただけなのだから。

だがルイズの矜持はそれを許さない。

ぐるぐると渦巻く後悔が彼女を押し潰す寸前、キュルケの叫びがルイズの耳を打った。

「ちょっと、何してるの貴女！？ 止めなさい！！」

悲鳴染みたキュルケの台詞にぼっと振り返れば、あろう事かシエスタが飛び降りようとしているではないか！

「駄目よシエスタ、貴女まで死んじゃうわ！！」

「トモさんは死んでません！ まだ諦めるには早過ぎます！！」

慌てて引き止めようとするルイズに、シエスタは指を指しながら怒鳴りつける。

その指が示す先には、デルフリンガーを杖によりよると立ち上がるトモの姿があった。

「トモさんはまだ諦めていません！　だったら私達も諦める訳には
いきません！」

「馬鹿言わないで！」

冒険者だか何だか知らないけれど、あんなのに勝てる訳が――
――」

シエスタの啖呵に、キュルケが諫めようと口を挟む。

しかし、シエスタはそんなキュルケに向かってきつぱりと言いつ
た。

「勝てる勝てないじゃありません！」

仲間がまだ諦めていなくて、私にもまだ出来ることがある！

だったらやるしかないでしょう！？

「！！！」

その言葉は、ルイズの魂を揺さぶった。

シエスタはルイズとトモの会話を知らない。何を語り合ったのか、
どんなことを言ったのか、彼女が知る由もない。

けれども、シエスタの言葉はルイズがトモに語った言葉を彷彿とさ
せた。

『勝てる勝てないじゃないの！　仲間を見捨てるなんて、私には出
来ない！！』

『私に出来ることなら何でもやるわ！　だから――彼女を救い
なさい！』

そうだ、彼はまだ諦めていない。

――諦めずに、自分の無茶な命令を遂行しようとしている。

いや、違う。彼は自らが立てた誓いを遂行しようとしているのだ。

『搜索隊の身を守り、学院の秘宝を奪還する』と言う誓いを。

（そうよ、まだあいつは諦めていない……私にも、出来ることはある！！）

思い返すのはあの決闘の日、ルイズの目の前で行われた誓いの儀式。シエスタは一回で認められたが、トモは認められるまで何回も繰り返ししたと言っていた。

自分がシエスタのように一回で認められるとは限らない。

いいや、そもそも認められない確率の方が高い。

それは異端の力。異世界の神への誓いであり、祈りでもある。大貴族たるヴァリエールの息女が踏み込むべきものではない。

（——それが、どうしたってのよ！！）

貴族の責務も、始祖の教えも、今のルイズには関係がなかった。

彼女の脳裏にあったのはただ一つ。

（私は、諦めたくない！ あいつと一緒に、運命を切り開いてやるのよ！！）

召喚の儀の日、学院長室で交わされた誓い。

『冒険者ヤナギダ・トモはルイズ・フランソワーズ・ド・ラ・ヴァリエールを守り、共に運命を切り開く事をここに誓う』

彼は、トモは見ず知らずの自分の為に誓ってくれた。

そして今、彼はその誓いを守ろうとしている。

ならば自分は、ルイズはその誓いに相応しい人間にならなければな

らない。

命を賭けて、人生を賭けて、その誓いに応えなければならない。だって――

『だって人生は、貴女自身の取り分なんですから』

私の人生を賭けるなら、これくらいの大博打が相応しいのだから！

「大迷宮におわす運命の神よ！ 我に運命を切り開く資格あらば、我を認め給え！！」

「え！？」

「何？」

「ミス・ヴァリエール！？」

突然叫び出したルイズに、キュルケやタバサのみならず、シエスタまでもが驚く。

キュルケとタバサは突然叫び出したルイズに、そしてシエスタはその内容に。

だがそんな彼女達に構わず、ルイズは滔々とその言葉を紡いだ。

（私の人生、全部くれてあげる！ だから、アンタをぶちのめす力を超越しなさい！！）

「されば我、神に挑む冒険者なり！！！」

世界に宣誓が果たされる。その瞬間シエスタとルイズは、荘厳な鐘の音を確かに聞いた。

いつの間にか祈るように組まれたルイズの掌に、熱い何かが生まれる。

両手を開いたそこには、三本の剣を重ねた形の聖印が光っていた。

「は、はは……認められたわ……！」

「ミス・ヴァリエール、貴女まで……！！！」

「えっ？　なに、何が起きたの！？」

「まさか……！？」

何が起きたのかを知り、シエスタは狼狽えた。

平民の彼女とは違い、ルイズは大貴族だ。ブリミル教との関わりも、精々食前のお祈り程度のシエスタとは段違いに深い筈。

それは取りも直さず、異端とされた時の責任も段違いに深いことを意味する。

冒険者は明らかな異端だ。本来ならこのハルケギニアに存在しない彼らの一員になると言うことは、ルイズもまた異端の道に足を踏み入れたことに他ならない。

「言いたいことは解るわシエスタ！」

でも、今はそれよりも優先しなきゃいけないことがあるでしょう！？」

「……はい！！！」

しかし、ルイズの表情は晴れやかであった。そこには異端に踏み切った事に対する後悔は無い。

彼女はただ、自分に出来ることをしただけなのだから。

「確かステータス確認って、これ持って念じるのよね？」

「はい、そうです！　『ステータスが見たい』って思えば見えて来る筈です！」

シエスタのアドバイスに従い、ルイズは聖印を握り締めて念じる。

するとじわつと滲み出るように、脳裏に何かが現れた。

※ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール
種属／ヒューマン…3

体力…3／知力…8（+2）／感覚…4／敏捷…3／器用…3（+1）／魅力…6／精神…6／幸運…12

※○内は今回加算された補正值

HP…10／10 MP…13／13（+3） SP…10／10

※数値は現在値／最大値

EXP…15 所持金…150 エキュー

保有クラスとスキル

・セージ（※1）…2

・魔法知識…系統魔法（※2）…1／戦術（※3）…1

・ライダー（※4）…1

・乗馬術（※5）…1

アクセサリ
装備品

・魔法学院女子制服（※6）／魔法の杖（※7）／運命神の聖印

アイテム
所持品

・なし

進行中クエスト

・『破壊の杖』の奪還（期限…翌日まで）

「……これは酷い……」

ルイズは軽く絶望しかけていた。

セージ（賢者）？、ライダー（騎兵）？、何だそれは。
よりによって戦闘系のスキルが何一つ無いとはどういうことだ！

（何で魔法系のスキルが無いのよ！ 知識だけあったってなんの意味も無いじゃない！）

所詮自分は何処まで行っても『ゼロ』なのか——余りにも非常な現実には膝を屈しかけたその時、ルイズの脳裏に閃くものがあった。

（ん？ 『魔法の知識』？）

慌ててステータスを見返すルイズ。そこにあったのは『魔法知識…系統魔法』の一文。

魔法の知識はメイジなら誰でも持っている。けれど、それが何故かセージ（賢者）の技能として独立していた。

（魔法が使えないからセージの技能になった？ ……いいえ、違うわ）

シエスタの初期スキルはメイドとしての彼女を踏襲したものだった。それを考えれば、このスキル構成は何だかおかしくはないだろうか？魔法が失敗するとは言え、ルイズは一応メイジだ。なら、スキルもそれに沿って設定される筈である。

ならば、このスキル構成が意味するのは一体何だ？

（……もしかしたら、メイジの魔法はスキルに入らない？
違う、メイジはスキルじゃないんだわ！）

あの草原で『フライ』を使った生徒達を見て、トモは何と言っていただろうか？

『空を飛ぶってことは『キャスター』ですかね？』

そうだ、あの時トモはメイジ達をキャスター（魔術師）と呼んだ。それを踏まえるのなら、ルイズのクラスはキャスターになるべきである。

だが実際にはキャスターではなくセージが付いた。

それはもしかしたら、『魔法が使える』ことと『魔法の知識』は別物と言う意味ではないだろうか？

（だとしたら——何とか出来るかも知れない！）

ルイズは高速で考えを纏め上げる。

元々頭の回転は速い彼女だったが、それが異常なまでに冴えていた。瞬く間に答えを出し、彼女は啞然としていたキュルケに指示を出す。

「キュルケ、あのゴーレムの右足の付け根に、貴女が出せる最大火力の魔法をぶつけて！」

「何言ってるの！？ ああのゴーレムにはミス・ロングビルが捕まっていたまなのよ！？」

彼女の豹変に驚きながらも、キュルケは人質の存在を指摘する。
しかし、ルイズはそれも計算に入れていた。

「だから右足を狙うのよ！ タバサ、シルフィードをゴーレムの背後に回して！」

「了解！」

ルイズの指示に従い、シルフィードがゴーレムの背後を取る。

「いい？ 右足を狙って、あのゴーレムを右後ろに転がすの！
それならミス・ロングビルに及ぶ被害は最小限に抑えられるわ！」
「そうか、ミスが捕まってるのは左手だから……！ そう言うことなら任せなさい……！」

ルイズの言いたいことを理解したキュルケは、ありったけの精神力を込めた『ファイヤーボール』をゴーレムに叩き込む。

それは狙い過たずにゴーレムの右脚、股関節に当たる部分に直撃して燃え上がる。

だがゴーレムはびくともしない。

「なんて頑丈な！」

「いいのよアレで！ タバサ、キュルケが狙った所に氷の魔法を、貴女が出せる最大の威力でぶち当ててちょうだい！」

「……承知！」

ルイズの狙いに気付いたのか、タバサが全力の『ウィンディ・アイシクル』を放つ。

燃え上がるゴーレムに叩き込まれた氷の矢は、即座にゴーレムを凍り付かせた。

「キュルケ、もう一度お願い。そうしたらタバサももう一度あいつを凍らせて」

「貴女はどうするの？」

次々と指示を出すルイズに、タバサが疑問をぶつける。

その言葉に、ルイズは笑顔で応えた。

「決まってるでしょ、私の特大の爆発でとどめを刺すのよ!!」

「……………あっ！ 成程、そう言うことか！」

「えっ？ ということなんですか？」

何かに気付いたらしいキュルケと、事態に着いていけずにおろおろするシエスタ。

そんな彼女に、ルイズは極上の笑みを浮かべつつネタばらしをする。

「ねえシエスタ。例えば熱々に熱した陶器の壺をいきなり氷水の中に突っ込んだら……………どうなると思う？」

「……………あっ！」

ようやくルイズの言いたいことを理解したらしいシエスタをさておき、ルイズは止めを刺すべくありったけの精神力を込めてルーンの詠唱に入る。

本来攻撃用ではない魔法だが、彼女が使う限りにおいて『それ』は最強の破壊力を産む攻撃魔法に変わるのだ。

再び燃え上がり、再度凍り付いたゴーレム目掛け、ルイズは杖を勢

い良く振り下ろす。

「『練金』!!!」

夜闇に包まれた静寂な森の中に、耳を劈く爆音が轟く。

ゴーレムの右脚の付け根がバラバラに吹き飛び、バランスを崩したゴーレムはゆっくりと右斜め後ろに向かって倒れ込む。

「熱疲労って奴よ」

制御を失ったのか全身に罅が入り、ただの土くれに戻りつつあるゴーレムを見ながら、ルイズは誰に聞かせるでも無く呟いた。

「どんなに頑丈だろうと所詮は土の塊。」

『固定化』でも掛けていない限り、その強度は土に準じるわ。

だから熱した陶器を高速で冷やすように、炎と氷を交互にぶつけてやれば脆くなる。

そこに私の爆発をぶつけてやれば、砕くのは決して難しいことじゃない」

罅はとうとう左腕にまで及び、捕われていたロングビルが空中に投げ出された。

「タバサ！」

「解ってる！」

タバサはシルフィードを走らせて、未だ気絶したままのロングビルを空中でキャッチ。

そのままシルフィードをトモの目前に着地させる。

「背後から狙ったのはミス・ロングビルを救うため。

右後方に転がせば、左手の彼女まで被害が及ぶ前に救出できるから」

シルフィードの背に乗った面々を見て、ルイズ達は何をしたのかを悟ったらしいトモ。

表情の薄いその顔に満面の笑みを浮かべた彼に手を振りながら、ルイズは満更でも無さそうに呟いた。

「賢者か……。まあ悪くない、かもね」

※ヤナギダ・トモ（柳田 智） 種属／ヒューマン…4

体力…6／知力…8／感覚…5／敏捷…8／器用…3／魅力…3／
精神…5／幸運…10

HP…3／11 MP…5／11 SP…3／10 ※数値は現在値／最大値

EXP…23 所持金…110円

保有クラスとスキル

・ネゴシエーター…3

・詐術…1／説得…1／挑発…1

・サムライ…2

- ・居合い斬り…1

アクセサリ
装備品

- ・厚手のコート／デルフリンガー／運命神の聖印

アイテム
所持品

- ・背囊／サバイバルナイフ／目覚まし時計／回復薬（小）

進行中クエスト

- ・ルイズを守る（期限…ルイズの卒業まで）
- ・『破壊の杖』の奪還（期限…翌日まで）

エネミーデータ

- ・巨大ゴーレム（Lv…3） 敏捷値…1／攻撃値…20／防御値…20 HP／MP…30／－

『土くれ』のフーケによって造り出されたゴーレム。動きは遅いが大質量故の破壊力は脅威。

- ・保有スキル…自動回復Lv1（※9）

第十一話 覚醒(けつゐ) (後書き)

用語解説

(※1) 広く世の中の知識全般に精通した一般技能系のクラス。

知力に＋Lvのボーナス補正を加える。

(※2) 系統魔法に関する知識。知識判定の達成値に(Lv) d6を加える。

(※3) 戦闘を有利にする知識。任意のPLの達成値または攻撃値に(Lv) d6を加える。

(※4) 様々な乗り物を操縦する一般技能系のクラス。器用に＋Lvのボーナス補正を加える。

(※5) 馬を乗りこなす技術。馬の敏捷値に＋Lvのボーナス補正を与える。

(※6) トリステイン魔法学院の女子が着る制服(敏捷に＋1)。
判定にファンブルすると破損する(ファンブル値に＋2)。

重量…0.2

(※7) メイジが魔法を使うために必要なタクト杖の杖(ルイズ専用)。

判定にファンブルすると破損する。重量…0.2

(※8) そのターンのエンドフェイズにHPを(Lv) d6回復する。

この効果は最大HP以上にはならない。

第十二話 尋問（わるだくみ）

夜更けの森に明かりが灯る。

空き地のあちこちに焚かれた篝火が、廃屋から廃墟へグレードアップしたフーケのアジトを煌々と照らしていた。

「キュルケ、見つかったあ？」

「まだよ、タバサは？」

「……こつちも同じ」

粉碎された瓦礫を手分けして漁るルイズ一行。

瓦礫の下に埋もれているであろう『破壊の杖』を探して右往左往する少女達を眺めながら、トモはフラスコに入った青白い液体を呷る。青汁を酢と炭酸水で割ったような、何とも言い難い味と喉越しに顔を顰めて嚥下する彼に黙って水筒を差し出すシエスタ。

「……ありがとうございます」

「……どういたしまして」

彼女もこの薬のお世話になっている。それだけに、あの人類の味覚に挑戦してくる味には何とも言えぬ思いがあった。

口を濯ぐトモ。それでも炭酸特有のゲップが青臭過ぎる味を反芻させるので、眉間の皺は中々取れない。

「……何であんな酷い味なんですか」

「一説では運命神様の嫌がらせだって言われてるようです。

妙に説得力有り過ぎて嫌ですね」

用を終えたフラスコが消えていく。

それを見たシエスタは（何度見ても慣れないなあ）と内心一人ごちた。

見慣れないと言え、彼が背負う背囊もかなり変わっている。

どう見ても入り切らない大きさのデルフリンガーが丸々収まってしまった時には、一体どういう顔をすれば良いのか解らなかった。

トモ曰く、二十個までならどんな大きさのものでも入ると言う。

大きさよりも個数制限が優先される背囊、こんなマジックアイテムは初めて見る。

かと思えば秘薬が子供の悪戯染みた理由で酷い味になったりと、運命神とやらは一体何を考えているのだろうか？

シエスタが運命神の思惑について首を捻っていると、応急処置が終わった事に気付いたルイズが搜索を一旦切り上げて近付いて来た。

「……もう大丈夫なの？ 怪我の具合は？」

「全快ではありませんがね。もう一戦ぐらいならいけるでしょう」

その答えを聞き、ルイズは眉根を寄せる。

「……貴方も、そう思うのね？」

「フーケの罠がこれ一つとは思えません。他にも何か企んでいると思うのが自然ですね」

ゴーレムを打倒して以降、フーケの足取りがぱったりと途絶えてしまった。

盛大に篝火を焚いているのはフーケの来襲に備えてである。しかし待てど暮らせど、フーケは一向に姿を見せない。

そこでルイズ達はトモの休息とロングビルの復活を待つのを兼ね、同じく行方不明の『破壊の杖』搜索に乗り出したのだ。

「現状である巨大ゴーレムとやり合うのは危険過ぎます。」

さっさと逃げ帰るのが得策でしょう」

「……ええ、そうね」

一行が危惧しているのは再び巨大ゴーレムを持ち出された時のことだ。

ルイズの機転で上手く切り抜けたものの、同じ手がそう何度も通じるとは思えない。

未だ目を覚まさないロングビルを抱えての立ち回りは危険に過ぎる。けれどもルイズは違う事に頭を悩ませていた。

（……何か、おかしいわ。何かを私達は見逃しているのよ。

なのに、それがなんなのか解らないなんて……）

ルイズの胸中を占めていたのは違和感。今までのフーケの行動に、何か引っ掛かるものを感じているのだ。

けれどそれは具体的な形にならない漠然としたもの。言葉になるようでならない苛立ちが彼女を襲うが、それを皆に明かすのには根拠が曖昧過ぎる。

腕を組んで違和感の正体に思考を巡らせる彼女を、シエスタは不安そうに見ていた。

彼女は彼女でまた違った不安に悩まされていたのだ。意を決して話し掛ける。

「……ミス・ヴァリエール。良いんですか？ 私達と違って、貴女は……」

「トリステイン有数の大貴族の息女が異端認定されたら大問題になる。

そう言いたいのかしら？」

だが、その不安をあっけらかんと言つてのけるルイズに開いた口が

塞がらなくなる。

何故なら彼女がいま口にしたのは、シエスタが抱いた危惧そのものだったからだ。

咄然とするシエスタを余所に、ルイズは予測される問題点を次々と挙げて行く。

「どんな大貴族とて、異端認定を受ければ審問と言う名の処刑が待っているわ。

身内に異端者が出ればヴァリエールはお取り潰し確定。

最悪、アルビオンのモード大公のように討伐されることだって有り得るわね。

異端を領主に持った家臣団は職を失うし、領民も異端視されて迫害されるかも。

……それに今のトリステインがヴァリエールを失えば、国家を維持することすら難しいでしょうし、ね」

先王の崩御以降、トリステインの玉座は空席のままだ。

本来の序列から言えば先王の妃たるマリアンヌか、先王の一人娘であるアンリエッタが就任する筈である。

しかしマリアンヌは先王の喪に服すと称して国政に関わろうとせず、家臣や官僚達に一切の口を挟まなかった。

アンリエッタに至っては政治に興味すら示さず、ただ官僚達が定めた国事をこなすだけ。

その上、貴族達はほぼ無政府状態であることに付け込んで私腹を肥やし、自己の権益を確保することに夢中であった。

それでもトリステインが国家の体裁を保っているのは、摂政であるマザリーニ枢機卿が見せる粉骨碎身の働きに加えて、数少ない良識を持つ貴族の努力があるからだ。

そしてその数少ない良識を持った貴族こそ、ルイズの父であるラ・ヴァリエール公爵その人なのである。

今ヴァリエール公爵が失脚すればトリステインは自らを維持することすら困難になり、隣国ゲルマニアやハルケギニア最大の国家であるガリアの侵略を退ける事も出来なくなる。

そこまで極端でなくとも国内有数、いやトリステイン最大の大貴族の衰退が未曾有の大混乱を起こすのは想像に難くない。

ルイズが挙げて行く問題点を聞いたシエスタの顔色は真っ青だった。次々と上がる問題点もそうだが、何よりそれを語るルイズがまるで他人事のように語るのが恐ろしかったのである。

「そ、それが解っていて、何故……？」

諤々と震えながらも、シエスタは必死に堪えてルイズを問い詰める。だが彼女は会心の微笑みを浮かべて言い切った。

「馬鹿ねシエスタ。そんなのバレなきやいいのよ」

「……ほへ？」

シエスタは一瞬、ルイズの言葉を理解出来なかった。

国家を揺るがすであろう大事件を、まるで子供の悪戯のように扱うルイズ。

どうしていいのか解らず啞然とするシエスタを余所に、彼女の口は止まらない。

「だって、異端審問ってロマリアの許可が無ければ出来ないのよ？ そのロマリアだって確実な証拠が無ければそうそう動けないもの。だったら幾らでも誤摩化しようはあるわ。」

幸い、ミス・ロングビルは気絶していたから私が冒険者になったって事は知らないし、学院長も私達が黙っていれば問題なし。

………まあ、その前にキュルケ達をどうにかしなきやいけない

みたいだけど」

先程からこちらを窺いながら何事か話し合っているキュルケとタバサを見ながら、ルイズは心底面倒事になったと溜め息を吐いた。

「……気付かれてるわね。まあ、あからさまにあの子達を見ながら話し込んでれば当然か。

しかし面倒臭いことになっちゃったわ。タバサもそう思うでしょ？」

「……………」

キュルケが漏らした台詞に、タバサは無言のまま頷いて肯定する。正直な所、キュルケがルイズ達にちよっかいを出すのは『面白いから』だ。

未知の国からやって来た使い魔に、メイドでありながら凄腕のメイジ殺し、そして最近角が取れて可愛くなって来たお隣さん。キュルケの認識はその程度だった。

しかしいざ踏み込んでみれば『運命を切り開く』だの『神を倒す』だのと言う物騒極まりない言葉のオンパレード。

あまつさえ学友が異端に堕ちたとくれば、彼女とて付き合いを考えしてしまう。

腕を組み、普段なら決して見られないであろう渋面を作るキュルケ。だが彼女の親友たるタバサは、その内心を見抜いていた。

「……でも見捨てられない？」

「まあね。冒険者だろうが異端だろうが、結局ルイズはルイズだし。それに中々刺激的じゃない？」

キュルケとタバサは過去、とある事件が切っ掛けで友情が生まれて以来の付き合いである。

和解が成立したとは言え敵対していたタバサを親友と呼ぶ彼女が、一旦懷に迎え入れたルイズ達を見捨てるなんて有り得ない。

その上キュルケは『微熱』の二つ名の通り、情熱を燃やすものが大好きだ。

何人もの男と浮き名を流すのも、『恋』と言う情熱を求めているもの。そんな彼女が『冒険者』と言う、ある意味情熱の塊みたいな存在を無視出来る筈がない。

「何よりタバサがご執心なんだもの。略奪愛のコツなら幾らでも教えてあげるわ！」

「……それは間違い。私の目的は……」

「解ってるわよ。あの薬でしょ？」

キュルケの言葉にこくと頷くタバサ。

詳しくは解らなくとも、彼女が深い事情を抱えていることはキュルケも気付いている。

先刻もルイズ達が離れた隙に『冒険者の洗礼』を試していたのを彼女は見た。

だが荘厳な鐘の音も、光り輝く聖印も、タバサの元には訪れなかった。

「彼は私に『冒険者の資格が無い』と言った。

それがどんなものか、もっと詳しく知る必要がある」

「……ねえ、タバサ。貴女まで異端に堕ちることは無いわ。」

あの葉が必要なら、彼に協力を頼むのも一つの手よ？」

ほぼ怨念と言って良いほどの執念を燃やすタバサを、キュルケがやんわりと諭す。

けれど首を横に振る親友に、キュルケは内心で溜め息を吐く。

何故かは知らないが、この小さな親友は他人を頼ろうとはしない。故に何でも一人でこなそうとするのだ。

（こんな危なっかしい親友を放っとく訳にはいかないわよ）

それがどんな理由であろうとも、親友を見捨てる選択肢なぞキュルケには無い。

頼られないなら頼れるようになればいい。どんな小さなことでも、彼女の力になれるならキュルケはどんな手段でも取ってみせる。

（それが例え異端の力であったとしても、タバサの為なら私は躊躇わない！）

気合いを入れ直し、キュルケは『破壊の杖』の搜索に戻った。タバサもそれに続く。

屋根であつたろう板切れや壁や柱だったらしい丸太、炭焼き用の窯らしきレンガを除けるキュルケの手がふと止まる。

全体的に古ぼけた建材の中にあつて、真新しい木箱はよく目立つ。それが頑丈そうな形状であれば尚更だ。

「……チェスト（宝箱）？」

ゴーレムの猛攻を凌いだらしきその箱に、キュルケは『アンロック』を掛ける。

鍵開けのコモンマジックは彼女が得意とする魔法であつた。気に入

った相手に夜這いを仕掛ける為に磨かれた、と言う経緯にはこの際目を瞑ろう。

達人級の『アンロック』を受け、小さな音を立てながら空箱の鍵が外れる。蓋を開けて中を覗き込んだキュルケ達の目に、ずんぐりした筒状の塊が飛び込んできた。

一年の頃、授業の一環で宝物庫を見学した時に見た時と同じ形をしたそれは、紛れも無く『破壊の杖』である。

見たことも無い素材で出来た『破壊の杖』の表面にはこれまた見たことの無い文字が並び、持ち上げると意外に軽い。

余りにあっさり取り返せたことに拍子抜けしつつ、キュルケはそれを取り上げてルイズ達の元へ向かう。

「取り返したわよ。呆気ないけれど」

「……フーケが来ないうちに退却した方がいい」

そう言いながらキュルケが掲げた『破壊の杖』を見たトモが目を見開いて驚く。

「……それ、本当に『破壊の杖』なんですか？」

「そうよ。前に宝物庫の見学をした時に見たことあるもの」

「成程。……まあ、これが使われる所を見たのなら、確かにそんな名前が付いてもおかしくないのかもしれないですね」

それは思わず漏らしたただの呟きだったのだろう。

だが、その言葉はその場に居た全員の度肝を抜くには充分過ぎた。

「え？　この事、知っているの!？」

「ええ、知っています。実物を見たのは初めてですが」

驚愕する一同を代表するかのようなルイズの質問に、トモはキュル

ケが持った『破壊の杖』を検分しながらそう答える。

そんな彼に、いつの間にか目を覚ましたロングビルが勢い込んで尋ねて来た。

「そ、それでは使い方とかは……!？」

「詳しくは知りませんが、大体なら解りますよ」

そう言ってトモは『破壊の杖』の先端に付いたピンのようなものを指し示す。

「この安全ピンを引き抜いて、中に収められている筒を伸ばします。で、ここを立てて狙いを定めてからこの部分を押すと対象を破壊するんです。」

確かベトナム戦争で使われた携行破壊兵器でM72 LAW、ロケットランチャーと言う名前だった筈ですが……」

大雑把だが、長年の謎であった『破壊の杖』の使い方が解明された事には違いない。

キュルケはその手にした『破壊の杖』をまじまじと見つめ、タバサは以外に簡単な使い方に驚いていた。

シエスタは『破壊の杖』を恐ろしげに見やり、ロングビルも驚いて口を押さえている。

ただ一人、ルイズだけが鋭い目つきで『その人物』を観察していた。

『土くれ』のフーケはこの幸運を始祖に感謝していた。

誰も知らなかった『破壊の杖』の使い方が、まさかこんなところで解明されるなんて思っても見なかったのだ。

何しろ『ディティクトマジック』を掛けても一切の反応が無い上に幾ら振っても魔法が出てこない。うかつに弄くって壊してもしたら目も当てられないので分解して調べる訳にもいかず、途方に暮れていたのである。

（最初は学園の教師か、オールド・オスマン辺りを引っ張って来るつもりだったんだけどねえ

……こりゃ大当たりだったよ！）

東方で使われていた兵器だと言うのなら価値は倍増するだろう。好事家に売れば一財産くらいにはなるかも知れない。

（……これで『あの子たち』にも楽をしてあげられるね）

フーケは故郷に残して来た『彼女たち』の事を思い浮かべる。いきなり大金を送ったら『彼女』は吃驚してしまうだろうか？

「危険なことはしないで」と言うのが『彼女』の口癖だった。もしかしたらその鋭い勘で何となく気付いているのかも知れない。

いつもの額に色を付けたぐらいがいいのだろうか？　だがそれではいつまで経っても『彼女たち』の生活環境は改善されないままだろう。

（……いっそ、私が持ち込んだ方がいいのかも知れないね）

考えてみればトリステインに来てから一度も里帰りをしていない。ならば逆に「トリステインで一山当てた」とか言って全額一氣に持ち帰れば、かえって怪しまれずに済むかも知れない。

(……とりあえずこの餓鬼共をどうやって撒こうかね……?)

異様に弁の立つ男にモップでメイジを倒すメイド、そして得体の知れない魔法で自分のゴーレムを粉碎してくれた小娘。

メイジ二人組も脅威ではあるが、やはり『冒険者』共は一筋縄ではいかない様だ。

先程の『芝居』をもう一度やってみようか？　だが流石に今度は疑われるだろう。

(休憩を提案する？　……駄目だね、こいつら最初っから退却を前提にしているからかえって怪しまれる。

ならどうにかして誤摩化しながら別れるしかないね。問題はどうかやって別れるかだけど……)

必死で知恵を巡らせるフーケ。

そんな『彼女』を冷徹に見定める視線にフーケは全く気付かなかった。

無事に学院の秘宝を見つけ、一行の気が緩んでいたのは間違いない。だから突然ルイズが出した指示に戸惑ったのも仕方が無いのかも知れなかった。

「トモ、シエスタ！　ミス・ロングビルを逃がしちゃ駄目！！」

「「「えっ!?!」」」

何のことだか解らず呆然とするキュルケとタバサ、そしてロングビル。

だがルイズの指示が出るや否や、トモとシエスタは素早くデルフリンガーとモップをロングビルに突き付けていた。

「ちょっと? 何、何なの!?!」

「……何事?」

意味が分からず狼狽えるキュルケとタバサ、そして鼻先に刃を突きつけられたロングビルは涙目で抗議する。

「こ、これはどう言うことですか!?! 一体どうしたって言うんです!?!」

「え、ええと、説明してくれますか? 何だかよく解らないんですが……」

「同感です。これはどういうことなのか詳しく教えてください、ご主人?」

しかしこの場で一番混乱していたのは武器を突きつける二人であった。

事情が理解出来なかったのは二人とも同じだ。ただ、ルイズが命令すると同時に自然に身体が反応したのだ。

困惑する一同を睥睨し、ルイズはロングビルに向かって言い放つ。

「お芝居はもう止めましょうミス・ロングビル……、いえ『土くれのフーケ!?!』」

「「「!?!」」」

一同の時間が止まった。

キュルケは驚愕で、タバサは得心で、シエスタは困惑で、そしてロングビルは衝撃で。

それぞれがそれぞれの理由で絶句する。変わらないのはルイズと、腑に落ちた表情のトモだけであった。

「な……何を言い出すんですか？　よりによって私がフーケだなんて……」

何を証拠にそんなこと……！！」

わなわなと震えながら詰め寄るロングビルに、ルイズは理由を淡々と語り始めた。

「そうね、理由は色々あるんだけど……」

最初に疑問に思ったのはゴーレムの襲撃の時だったわ。罠を仕掛けているのは予測していたの。でも貴女は直接襲って来た、そんな必要なんて全然無かったのに」

「どうということ？」

ルイズの推理にキュルケが首を傾げる。

「私がフーケなら来るかも知れない追撃に備えるより、全力で逃げる方を選ぶわ。」

衛士隊に連絡して実際に動くまでの時間はとても貴重なもの。

罠だって落とし穴とか、虎鋏みたいな仕掛けを使って時間を稼ぐでしょうね。

追撃が来るっていう確信が無ければ、待ち伏せなんて出来ないわよ」

通常、泥棒に入られたらまず衛士隊に連絡するものだ。しかし衛士

隊も連絡を受けてすぐに動ける訳ではない。

どんなに迅速に人数と装備を整えても、必ずタイムラグは発生する。連絡にかかる時間と、衛士隊が出動出来るようになるまでにかかる時間。その僅かな時間を待ち伏せで消費するなぞ自殺行為だ。

「ですが、フーケだって休憩や睡眠は必要でしょう？ たまたま休んでいた時に私達が来たので仕方無く戦ったのではなくて？」

焦ったように、もう一つの可能性を持ち出すロングビル。
だがルイズは慌てずに切り返した。

「貴女がフーケの足取りを追った時間と、とんぼ返りして学院長に報告した時間。」

そして私達が此処まで来るのにかかった時間。

これを全部合わせると、どんなに短くても八時間以上経っている計算になるわ。

逃亡中のフーケがそんなに長い時間ここに留まっているなんて、絶対に有り得ない」

ルイズの指摘を受けたロングビルが言葉に詰まる。

それを見たルイズが駄目押しとばかりに一層声を張り上げた。

「何より一番の理由は『偶然が続いたこと』よ。」

『偶然』先生方が大勢外出して手薄だった。『偶然』逃げ出すフーケに気が付いた。『偶然』フーケが一カ所に留まり続いていた。

『偶然』フーケがアジトを留守にしていた。『偶然』接近するゴレムに気付かずに入質になった。そして『偶然』秘宝の使い方が明かされた時に気絶から覚めた。

……これだけ『偶然』が重なるなんて有り得ないわ。
それこそ人為的なものを疑わずにはいられない程に」

そしてルイズはぴたり、とロングビルを指差して断言する。

「もう言い逃れは出来ないわよ、『土くれ』のフーケ！」

ギリツと言う音が響く。ロングビル、いや『土くれ』のフーケの歯軋りの音だ。

彼女の計画自体は完璧だった。しかし、今回は余りにも想定外のことが多過ぎた。

強固過ぎる宝物庫、使い方の解らない『破壊の杖』、尻込みする教師陣、頭の切れ過ぎる生徒達、焦り過ぎた自分。

そして何より目の前に立ち塞がった『冒険者』達。

未知の敵を侮った訳ではない。彼らの実力が彼女の警戒を上回った、そう言うことだ。

（言い逃れる？ 無駄だ、こいつの口には敵わない！

……なら隙を突いて逃げ出す？ 無理だ、あの風竜からは逃げ切

れない！

……だったら此処で戦う？ 駄目だ、精神力に余裕が無い！

どうしよう、どうすればいい！？）

追い詰められて焦るフーケ。どんなに思考を巡らせても、この状況から逃れる術が見つからない。

だがこのまま黙って従っていれば悪名高きチェルノボーグの監獄行きは確定だ。

行くも地獄、戻るも地獄の選択肢。フーケは最早自分の人生に王手チェックメイトが懸かったことを知った。

（い……嫌だ！ 私が居ないと『あの子』が！

『あの子たち』を守れるのは私だけなんだ！！）

脳裏に浮かぶ故郷の『家族』達の笑顔。そして『彼女』の優しい微笑み。

自分が死ねば『彼女たち』の笑顔を誰が守ると言うのか！

（死ねない！ 死ぬわけにはいかない！）

ならば敵わないまでも、せめて最後まで抵抗を――！！

覚悟を決めて腰に差した杖に手を伸ばす。けれど一瞬早く、峰を返されたデルフリンガーが杖を弾いた。

「……無駄な抵抗は止した方がいいわよ？」

跳ね飛ばされた杖がルイズの足元に落下する。

トモがいつ動いたのか、フリーケには全く判らなかった。

（――勝て、ない）

フリーケの目に涙が溢れる。

それは抵抗出来ない悔しさでも、知謀を見抜かれた怒りでもない、家族との別離を知って流す哀惜の涙だった。

（ごめんよティファニア！もう会えない！！）

涙に暮れて頷れたフリーケを、キュルケとタバサは冷たい目で見下ろしていた。

どんな理由があるにせよ、彼女は犯罪者である。その上、彼女はキュルケ達の友人を殺しかけた仇でもある。情けをかける理由が見つからなかった。

一方シエスタは複雑だった。不謹慎だとは解ってはいても、彼女の活躍は平民にとってある種の娯楽でもあったからだ。

貴族を出し抜く大胆不敵なフーケの犯行は爽快の一言に尽きる。

ざまあみろ、いい気味だ、あんなに威張っているから天罰が下ったんだ等々……。

平民達は被害者が増える度にフーケへ拍手喝采を浴びせ、その被害者に嘲笑を浴びせた。

無論市井でのみ広まった、酒の席での噂話の類いではある。

それでも彼女を英雄視するものは決して少なくない。

けれどフーケが学院を襲った時、シエスタはそれが幻想にしか過ぎない事を知った。

巨大ゴーレムが壁を突き崩したとき、彼女の同僚が巻き込まれたのだ。

降り注ぐ瓦礫から間一髪助け出した際の、同僚の恐怖に歪んだ顔が忘れられない。

もしシエスタが『冒険者』で無かったら？　もしあの場に居合わせなかったら？

……ほんの少し運命の歯車がずれていただけで、彼女は助からなかっただろう。

そして賊の正体があのだと知ったとき、シエスタは悟った。

『土くれ』のフーケは噂のような平民の味方じゃない。ただの盗賊に過ぎないのだ、と。

噂の怪盗への失望、その正体への困惑、そして目の前で泣きじゃくる女性への同情。

色々な感情が混ざり合う。それでもシエスタはモップを引こうとは

しなかった。

さて、一見フーケを追い詰めた様に見えるルイズだが、実の所追い詰められていたのは彼女も同じである。

（困ったわ……。どのみち縛り首になるんなら、口止めだって効果は無いし……）

そう、フーケの正体がロングビルだったことが拙いのだ。

何せ彼女は『冒険者』に深く関わり過ぎている。

『ルイズ達が冒険者である』ことを知る彼女をそのまま衛士隊に突き出す訳にはいかない。

縛り首確定とは言っても裁判自体はきちんと行われるのだ。そして裁判をすると言うことは、それだけルイズ達のことを語る機会が多いと言うことでもあった。

フーケの証言と言う証拠があればロマリアだって動くだろう。異端審問官がダース単位で送られて来てもおかしくはない。

先程シエスタに語った最悪の状況が急激に現実味を帯びてくる。

いっそのまま口封じを……と考えていたルイズの脳裏に、ある疑問が湧いた。

「……ねえ、貴女どうして逃げなかったの？ わざわざ追手を招く必要なんて無いのに」

先刻の推理でも語った通り、フーケに待ち伏せの必要は無いのだ。
なのに彼女は一旦学院に戻ってわざわざ追手がかかるよう仕向けて
いる。

襲撃だってもっと早い段階で仕掛けることも出来た筈だ。

何故自ら窮地に陥るような真似をしたのか、ルイズにはそれが解ら
なかった。

「ぐすつ……そ、それは……『破壊の杖』の使い方を知りたかった
からよ……」

本当は貴女達じゃなくて、オールド・オスマンか教師の誰かを呼
ぶつもりだったの……

使い方が解らないアイテムなんか、売れないから。

……貴女達が使い方を知らなかったのなら、ゴーレムで踏み潰し
て次の追手をつれて来る予定だったわ。……もう意味は無いけれど
………ううっ」

ルイズの詰問に、しゃくり上げながら恐ろしい計画を語るフーケ。
それを聞いて色めき立つキュルケ達を宥めながら、ルイズの頭脳は
めまぐるしく回っていた。

（使い方が解らないから追手を？）

……そうか、あのゴーレムで私達を追い詰めて『破壊の杖』を使
わせようって魂胆ね。

……あれ？　じゃあ何で使い方の解らないものを盗んだりしたの
かしら？

………いえ、そもそもどうしてフーケはマジックアイテムを狙う
のかしら？）

マジックアイテムは確かに高額で取引される。けれど珍しいアイテ
ムは足が付き易い。

売ると言うからにはフーケの目的は金銭なのだろう。だが、わざわざリスクを負ってまでマジックアイテムを狙う必要があるだろうか？手っ取り早く金そのものを奪えば、足は尽き難い筈だ。

狙いを貴族に絞っているのも不自然な点だ。

確かに貴族は贅沢三昧に見えるが大半の貴族は見栄を張っているだけで、一部を除けば火の車というのが実情だ。

しかも無駄にプライドが高いので執念深く追いつがってくるのは必至。

相手の立場や状況によっては国軍すら動かしかねない。ハイリスクにも程がある。

(……けど、もしもそれに見合う動機があったとしたら？)

あれほど見事なゴーレムを操るからには、フーケはトライアングルメイジなのだろう。

学院長の秘書を務めていたのだから能力は高いであろうし、貴族らしい気品も十分。

おそらく没落貴族なのだろうが、そう言う優れた家臣は王家、領主問わずに欲しがってもおかしくはない。

だが、仕えた家の問題が家臣にまで及んだとしたのなら？

郎党にまで責が及ぶ罪は二つだけ、即ち『謀反』と『異端』である。ルイズはシエスタに語った言葉を思い出す。

『異端を領主に持った家臣団は職を失い野に下り、領民は白眼視されて迫害される』

もし、フーケがその『野に下った家臣』であったとしたら？

本人に何の罪も無く、ただ仕えた貴族が愚かだったと言うだけで地位も領地も領民も全て奪われたとしたら？

そしてトライアングルに届く才能に溢れていたとしたら？

「――成程、復讐ってところかしら？ 盗みを働く理由は」
「「「「……えっ？」」「」」」

突然のルイズの言葉に、フーケを含めた一同が呆気にとられる。
その微妙な空気に構わず、ルイズはフーケに話し掛けた。

「ねえ、もしかして貴女アルビオンのモード大公に縁がある家の出身？」

「なっ！？ ……何のことかしら、私はトリステインの出身よ？」

予想外の台詞にフーケは一瞬取り乱すも、即座に冷静さを取り戻して取り繕った。

しかしその仮面は続くルイズの言葉にあっさりと剥ぎ取られる。

「だって、貴女の立ち居振る舞いはきちんとした教育を受けた貴族のそれよ？」

それも低い身分のものじゃない、有力貴族の振る舞いだわ。

貴女の年でそれほどの大貴族が受けた改易はモード大公ぐらいですもの」

フーケは内心で舌打ちする。そこまで読まれているとは思わなかった。

これ以上ボロを出せば、ルイズは簡単に『あの子』に辿り着いてしまいかねない。

剥ぎ取られた仮面を強固に被り直すフーケ。これ以上ルイズに踏み込まれる訳にはいかない。

ポーカーフェイスの下で何とか誤摩化そうとする彼女に、今度はトモが口を出す。

「ああ、前々から少し癖のある話し方だなあとは思っていたんですが、アルビオン訛りだったんですね。言われて見れば顔つきもあの国の色が濃い。トリステインの民にしては少し色白ですし」

「え？ そんなこと解るの？」

トモの講釈にルイズが食いつく。そんな彼女に頷いてみせると、彼は『アルビオン人の特徴』とやらを列挙し始めた。

曰く若干堅苦しい発音で話し、やや皮肉っぽい台詞が多い。やたらと天候を話題に出したが、強情なまでに頑固。

曰く何かに付けて批判的で、内気なくせに気難しく、ちょっと排他的な部分もあり、それでいて腹黒さは一級品だと言う。

曰く酷い味覚音痴で、どんな材料を使っても素材の風味さえ消し去って味の無い料理に変えてしまう、等々……。

アルビオン人が耳にしたら激怒すること間違いなしのとんでもない情報の羅列。

くだらない挑発。そう思って無視していたフーケでさえ、段々エスカレートして行く内容にこめかみが引き攣り出す。

「……そして女性は二十代を過ぎると急激に太り出し、やたら厚かましくなるので婚期を逃す、とか……」

「だあれが行き遅れかああああああっ！！！！」

とうとう我慢出来なくなってツツコミを入れるフーケ。それを見たルイズとトモがにやりと笑みを交わす。

「おや、どうかしましたか？ 私はアルビオンの民のことを言っているのですが？」

「貴女トリステイン出身じゃなかったの？ なんでアルビオン人の

事で怒るのかしら？」

「ぐ、ぎいいいいいいっ……!!！」

「……これは酷い」

「なんか、フーケに同情しちゃうわ……」

「あれは、ちよっと……」

飄々としたルイズとトモに、へし折れんばかりに齒軋りするフーケ、その様を見てドン引きするキュルケ達。

トモの語りは更にエスカレートしていく。

アルビオン人が『三枚舌で周囲を混乱させ、都合の悪いことはしらばっくれ、緊急事態でも香茶を手放さない、変態と言う名の紳士』にされた辺りで、フーケの堪忍袋は限界を超えた。

「貴っ様ああああああああっ！」

誰が味音痴の腹黒変態淑女で年増の行き遅れだってえええええええええっ!？」

「おやおや、私はアルビオン人のことを話題にしているつもりでした。が。」

はて？ 何時から貴女のことになりましたかね？」

「恍けるなあああああああっ!! …………… ああ、そうだよ。」

私はアルビオンのサウスゴータ太守の娘さ。これで満足かい!？」

射殺さんばかりにトモを睨み付け、吐き捨てるように己の身上を暴露するフーケに、ルイズは驚いたように両手を打ち鳴らす。

「あらやだ、本当にモード大公の家臣だったの？ 適当に言ってみたのに」

「なっ!？」

あんなに自信満々に語ってみせたルイズの推理が、ただの当てずっぽうだったことに驚くフーケ。

実の所、ルイズの推論とはフーケが貴族に恨みを持っているから貴族を狙うのではないか、と言う程度のものだった。

そこで知る限りでは近年最大の改易を例えに持ち出したのだが――

――彼女のカメラ掛けに、フーケは見事に反応した。

慌てて取り繕ってももう遅い。更に適当な理由を並べて反応を引き出そうとするルイズに、事情を察したらしきトモからの援護口撃が入り……見事フーケは自爆したのであった。

「な、何言ってるんだい！？ あんなにわざとらしく貶しておいて……！！！」

青筋を浮かべてルイズに詰め寄るフーケだが、その答えは未だ剣を構えたままのトモから返って来た。

「お忘れですか、ミス・ロングビル。私は極東から呼ばれて来たんですよ？」

トリステインのことすら良く知らないのに、アルビオン人の特徴なんて知るはず無いじゃないですか」

「うぬっ！？ じゃ、じゃあ先刻の悪口は……」

「女性が嫌がりそうな単語を適当に並べただけです」

トモはいっそ爽やかなまでに、はっきり断言した。

余りにも酷過ぎる答えにフーケは絶句する。キュルケ達も啞然とした表情で彼を見やり、ルイズでさえ「それは酷すぎない？」と顔を顰めた。

「……まあいいわ。それより、貴女がマジックアイテムを盗むのは

貴族に恥をかかせるため、でいいのかしら？」

「だったらどうするんだい？　今この場で死刑執行でもするのかい？」

眉間を揉みほぐしつつ動機を確認してくるルイズに、フーケは挑発的な態度で答える。

だが内心では巨大な焦りがうねっていた。

ルイズの目的が読めない。先刻からフーケの出自や動機を尋ねてくるが、その理由が全然解らないのだ。

殺すつもりの手を詳しく知ろうとは思うまい。余計な情が湧いて殺し辛くなるだけだ。

だからといって見逃す筈が無い。『土くれ』のフーケと言えばトリステインを散々騒がせた大盗賊である。名声に拘るトリステイン貴族にとって、彼女の首は同じ重さの金貨よりも価値がある筈だ。

見逃すとは思えないが、殺す訳でもない。

さっさとふん縛ってしまえば良いものを、それすらしないで尋問するだけ。

（何なんだこいつ……一体、何が目的なんだい？）

背中に冷や汗がじつとりと浮かぶ。内心の焦りが最高潮に達した時、ルイズはポンと手を叩いてフーケに提案した。

「そうだ！　ねえフーケ、私達に雇われてみないかしら？」

「「「「はい？」」」」」

その言葉の意味が分からず、その場に居た全員が全く同じ反応をした事に、フーケ達は気付かなかった。

※ヤナギダ・トモ（柳田 智） 種属… ヒューマン（Lv…4）

体力…6／知力…8／感覚…5／敏捷…8／器用…3／魅力…3／
精神…5／幸運…10

HP…5／11（※1） MP…3／11 SP…3／10 ※

数値は現在値／最大値

EXP…28 所持金…110円

保有クラスとスキル

・ネゴシエイター…3

・詐術…1／説得…1／挑発…1

・サムライ…2

・居合い斬り…1

アクセサリ
装備品

・厚手のコート／デルフリンガー／運命神の聖印

アイテム
所持品

・背囊／サバイバルナイフ／目覚まし時計

進行中クエスト

・ルイズを守る（期限…ルイズの卒業まで）
・『破壊の杖』の奪還（期限…翌日まで）

※ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール
種属／ヒューマン…3

体力…3／知力…8／感覚…4／敏捷…3／器用…3／魅力…6／
精神…6／幸運…12

HP…10／10 MP…13／13 SP…10／10 ※数値
は現在値／最大値

EXP…21 所持金…150エキュール

保有クラスとスキル

・セージ…2

・魔法知識…系統魔法…1／戦術…1

・ライダー…1

・乗馬術…1

アクセサリ
装備品

・魔法学院女子制服／魔法の杖／運命神の聖印

アイテム
所持品

・なし

進行中クエスト

・『破壊の杖』の奪還（期限…翌日まで）

※シエスタ 種属／ヒューマン…4

体力…6／知力…3／感覚…6／敏捷…5／器用…6／魅力…5／
精神…4／幸運…14

HP…12／12 MP…8／10 SP…5／10 ※数値は現
在値／最大値

EXP…15 所持金…—

保有クラスとスキル

・ハウスキーパー…1

・清掃術…1

・ハンター…1

・解体術…1

・ランサー…2

・連続突き…1／突撃…1

アクセサリ
装備品

・メイド服／モップ／運命神の聖印

アイテム
所持品

・なし

進行中クエスト

・『破壊の杖』の奪還（期限…翌日まで）

ギルド名…未定

・ギルドスキル…耳打ち

エネミーデータ

・『土くれ』のフーケ…LV3 敏捷値…4／攻撃値…8／防御値…

6 HP／MP…10／20

土のトライアングルメイジ。とある事件の影響で貴族を憎んでいる。

杖を手放すと戦闘不能になる。

・保有スキル…クリエイト・ゴーレムLV6（※2）／アース・ハンドLV3（※3）／アース・バレットLV2（※4）

第十二話 尋問（わるだくみ）（後書き）

用語解説

（※1）回復薬（小）による回復後の数値になる。

（※2）30マイルほどの巨大ゴーレムを生み出す『土』魔法。

ゴーレムを出している間は他の魔法が使えない。

（※3）土で出来た手で相手を拘束する『土』魔法。対象は行動不能状態になる。

この効果は筋力による抵抗判定が成功するまで続く。

（※4）土の飛礫を飛ばす『土』魔法。土属性ダメージに（LV）d6を加える。

第十三話 祝宴（あとしまつ）

朝の日差しが差し込む学院長室で、オールド・オスマンは任務の達成報告を受けていた。

「……と言う訳で、こちらにも多少被害は出ましたが、許容範囲ですし問題は無いかと」

「ふむ……。しかし、こうして秘宝が戻って来たのは僥倖じゃ。よくやってくれたの」

オスマンの労いを受け、誇らしげに胸を張るルイズ。

そんな彼女とは対照的に、キュルケ達はバツが悪そうな表情で所在無さに佇んでいた。

拳動不審気味なキュルケ達に首を捻るオスマンだったが、とりあえず言葉を続ける。

「秘宝は無事に宝物庫に収まった。

これでフーケを捕らえていたら『シュヴァリエ』位は賜ったかも知れんが、彼奴めを逃してしまっただけ。代わりと言っては何じゃが、儂の方から報奨金を出しておくぞ。大金とまでは行かんが、小遣い程度にはなろうて」

「よろしいので？」

「構わん構わん。事情が事情だけに王宮には内緒の任務じゃったからな。

口止め料とでも思えば良い」

トモの疑問をオスマンは呵々と笑い飛ばし、予め準備されていた小袋をそれぞれに渡す。

小袋の中には新金貨が五枚入っていた。大体四エキュ程度価値

がある。

確かにルイズ達貴族にはお小遣いでしかないが、平民のシエスタにしてみれば滅多に見ない大金だ。

「い、いいんですか？ 勝手に着いて行った私がこんなに戴いてしまっても……」

「いや、その金は『冒険者』としてのお主に払う正当な報酬じゃよ。ここは素直に受け取っておきなさい」

「そうよシエスタ。貴女だって活躍したんだから、もらう権利はあるわ」

恐縮するシエスタに苦笑しながら、オスマンとルイズは彼女に袋を押し付ける。

それを微笑ましく見つめていたコルベールだったが、その目がトモを捕らえるや厳しい顔付きになった。

「……さて、今夜は『フリッグの舞踏会』じゃ。」

『破壊の杖』も戻って来たことじゃし、予定通り執り行う」

背後のコルベールを余所に、オスマンは手を打ちながらそう告げる。それを聞いた途端、キュルケの顔が輝いた。

「そうでしたわ！ フーケの騒ぎですっかり忘れていました！」

「今夜の主役は君たちじゃ。せいぜい着飾るのじゃぞ」

その言葉に礼を返して退室する一行。

その背中に、思い出したようなオスマンの言葉が投げ掛けられる。

「ああ、ミス・ヴァリエールとミスタ・ヤナギーダはちょっと待ってもらえんか？」

聞きたい事があるでの」

その台詞に立ち止まるキュルケ達だったが、ルイズが「先に行つて」と言うのと心配そうな顔をしながら扉の向こうに消えていった。キュルケ達が部屋を出るなり、オスマンはそれまで浮かべていた好々爺の顔を引っ込めて眼光鋭い猛者の顔を覗かせる。

「……ミス・ヴァリエール。何故、『冒険者の洗礼』を受けた？」

「……やっぱり気付かれてましたか。誤摩化しは……出来ませんわね、流石に」

単刀直入なオスマンの追求にルイズは肩を竦め、トモは顔を覆つて天を仰ぐ。

ルイズが冒険者になったことは全員口を噤む事で一致していた。

故にオスマンへの報告にも一切そのことは触れていなかったのだが……

「あの、どうしてご主人が冒険者になったと思われたのですか？」

「ふむ、お主の回り過ぎる頭でもそこまでは読めなんだか。」

何、挙動不審なミス・ツェルプストーにミス・タバサ、お主らを心配そうに窺うミス・シエスタ、それに『彼女』の態度がどこおかしかつたからの。

お主達の特殊な事情を知っておれば、何があつたかを推測するのは簡単じゃよ」

「ああ、彼女達の態度からの推測ですか。それは盲点でした」

呆れたような、安心したようなオスマンの台詞に、トモは再び天を仰ぐ。

如何に口止めしていても、態度や表情まで押さえることは出来ない。ましてや異端に関わつたとなれば尚更隠し辛いだろう。

勿論普通の人間では見抜けない程度のものだが、相手は海千山千のオールド・オスマン。

隠し切れる方が異常なのだ。

そう、戻って来てからの『彼女』のように、全く隙を見せない方がおかしいのだから。

隠蔽を見抜かれて嘆息するルイズとトモに、今度はコルベールが詰問して来た。

「何故です、ミス・ヴァリエール？ 君は魔法こそ使えないが聡明な生徒でした。

そんな君が『冒険者』になることの意味、よもや知らない筈もないでしょう？」

「確かに、私の選択は始祖の教えに背く行為かも知れません。……ですが！！」

コルベールの指摘にルイズは俯く。

だが再び正面を向いた彼女の瞳には激情の炎が宿っていた。

「私は何度も始祖に祈りました！ 母様や父様、姉様達のようにとは言わない、ドットでもいいから魔法の才能が欲しいって！！」

毎朝毎晩毎日、繰り返し繰り返し、自室で、礼拝堂で、食堂で、教室で、王都で、領地で、他国で、道中で、どんなときでも、どんな所でも！！」

いつしか鳶色の大きな目に涙をたたえながら、ルイズは誰にも語ったことの無い胸中を明かす。

「魔法の教本ならボロボロになるまで読み返しました！

ルーンだって全部暗唱出来るくらい覚ええました！！

……なのに、全然魔法は使えなかった！

あんなに一生懸命お祈りしても、始祖は応えてくれなかった!」

それは彼女が生きた十六年分の闇だった。

魔法が使えないが故に嘲られ、それでも大貴族の息女と言う身分を妬まれ、助けを求める悲鳴を黙殺された少女の嘆きだった。

オスマンとコルベールは沈痛な表情で彼女を見詰めることしか出来ず、トモは黙したまま何も語らない。

「だから、私は選びました!

私を見捨てた始祖ではなく、私の祈りに応えてくれた神を!」

——自分の運命を自分で切り開く『冒険者』の道を!」

ルイズの絶叫にも似た悲痛な告悔。

彼女が縋った始祖は何もしてくれなかった。

けれど運命神は、自分を倒しにくる『冒険者』を待つ神はそんな彼女に応えてくれた。

その事実には信仰心に篤かったルイズをして異端に走らせるには充分過ぎたのである。

「……で、ですが、貴女はトリステイン有数の大貴族たるラ・ヴァリエール公爵の息女なのですよ!」

そんな貴女が異端に堕ちたと知られれば、この国が未曾有の大混乱を起こすのは必至ですぞ!」

ルイズの壮絶な告悔に絶句していたコルベールが慌てて捲し立てる。見れば隣に立つオスマンも厳しい顔で頷いていた。

異端審問はブリミル教圏とも言えるハルケギニアにおいて最大の不名誉である。

名誉を何よりも美德とするトリステインの公爵家ともあろうものが、自ら異端に堕ちる意味を知らない筈も無い。

だが、そんな二人の懸念に応えたのはルイズではなかった。

「ふむ、そのことでお二人と……『貴女』にお願いがあるのです。お聞きいただけますか？」

そう語り掛けて来たトモの顔はオスマンとコルベール、そして『彼女』の目にはまるで取引を持ち掛ける悪魔のように見えたと言う。

アルヴィーズの食堂の上階、大きなホールになっているところが『フリッグの舞踏会』の会場であった。

豪華な料理が盛られた卓の周りで思い思いに着飾った生徒や教師達が歓談している。

その中であって一際目立つ一団が居た。

燃えるような緋色の髪とは対照的なきわどい黒のドレス姿のキュルケ。

同じく黒のドレス姿ながら、シックに纏められたタバサ。

そして一番目立っていたのが、その黒髪を引き立たせる淡いパステルカラーのドレス姿のシエスタであった。

「ほ、本当に平民の私がこんな所にいてもいいんでしょうか？ 何かの間違いじゃないでしょうか？」

「いいのよ、学院長も『私達が主役』って言うてくれたしね」

「……それに、元々ルイズは貴女を出席させるつもりだった筈。じゃないとそんなドレスを用意したりしない」

「は、はうう……」

ガチガチに緊張しているシエスタを、キュルケとタバサが宥めている。

舞踏会の準備に向かおうとしたシエスタを呼び止め、拉致同然に引っ張って来てああでもない、こうでもないと取っ替え引っ替え着せ替えさせたのが少し前。

何が起きているのかさえ把握出来ないままに着替えさせられた彼女が現状を認識したのは、舞踏会の会場に引っ張り出された後である。無論平民である彼女にとってこんな大舞台は初めてどころか場違いでさえあったのだが、名目上シエスタの主人であるルイズは強引とも言える論法で彼女と周囲の関係者を説得した。

曰く「シエスタはもう学院のメイドじゃなくて私の侍女です。その上、フーケ探索では重要な役目を果たしてくれました。そんな彼女を舞踏会に参加させても何ら問題は無い筈です」と。

当然反発もあったのだが、今度は使い魔であるトモが説得と言う名の脅迫を行う。

曰く「フーケ探索の功労者を労わずして何が貴族ですか？ ……ああ、貴族としての責務も果たせなかったくせに体面を気にしても今更ですよ？」と。

こうしてうやむやの内にシエスタの出席は決定され、こうして舞踏会の会場に立っている訳なのだが……

「や、やっぱり場違いですよね？ それとも皆さんで私を騙してるとか……？」

「そんなの心配のし過ぎよ！ それに貴女、そこらの有象無象より断然可愛いわよ？

まあ、私には劣るけどね」

「大丈夫。自信を持って良い」

何せつい昨日まで夢にさえ見なかった出来事である。

おまけに緊張し切った彼女を気遣い、次々舞い込むダンスの誘いをキュルケが片っ端から断るせいで肩身が非常に狭い。

そうこうしている内にまた一人男子生徒が歩み寄り、その手を差し伸べる——キュルケではなく、シエスタに向かって。

「勇猛果敢なる勇者のお嬢さん。宜しければ私と一曲お付き合いただけますか？」

「……え？」

ぽかんとするシエスタ。

それを見たキュルケが満面の笑みを浮かべてシエスタを焚き付ける。

「ほら、行つてらっしゃいな！ 殿方を待たせないのも、一流の淑女の嗜みよ？」

そう言つてキュルケに背中を押し出されて若干パニックに陥ったシエスタだったが、やがておずおずと差し出された手を取った。

「え、ええと……はい、こんな私で宜しければ」

「おお、イーヴァルディの再来たる貴女のお相手を務められるとは！ これほどの名誉がありますまい！」

「いやそんな！ イーヴァルディの勇者様と比べられるなんて！」

「いえいえ、その身を賭して貴族の間違いを正し、あの盗賊フーケの討伐に赴いて見事秘宝を奪還せしめた貴女は彼の勇者にも劣りません！ ご謙遜なさらず、堂々とその武勇を誇りなされば宜しいのです！ 雛鳥達のさえずりなど、貴女の功績の前には風に散らされた朝靄の如く霞むのですから！」

過剰なまでにシエスタを褒め讃える男子生徒。

どう聞いてもその言葉は武人に向けるべきものだったが。

男子生徒の友人らしき生徒達が「……あいつ、本気だったんだ……」等と囁き合うのを横目で眺めつつ、適当な相手を見つけるようとするキュルケの目がある人物を捉えた。

寂しい頭頂部を大きな金髪の鬘で隠したコルベールの誘いをやんわりと断り、涙目になった彼の見送りを受けて歩み寄る『彼女』に、キュルケは手にしたワイングラスを掲げて見せる。

「良かったのかしら？ ミスタ・コルベール泣いてたわよ、『ミス・ロングビル』？」

そう、結い上げられた髪に合わせたエメラルドグリーンドレスに身を包んだ麗人こそ、学院長秘書のミス・ロングビルこと『土くれ』のフーケその人であった。

その彼女はグラスを受け取ると一気に呷り、その目を吊り上げてキュルケを睨み付ける。

「ふん、アンタ達のお陰で仕事は失敗、その上あんな条件をつけられちゃ逃げるに逃げられない。……そんな状態で呑気に踊ってなんて居られないよ！」

「あらあら、あの条件を呑んだのは貴女でしょ？ 私達はただ見ていただけですもの、恨むのはお門違いよ？」

フーケの恨み言を飄々と躲すキュルケだが、内心では彼女に多大な同情を寄せていた。

あの時、あの廃屋の前で拘束されたフーケにルイズが出した条件は、キュルケ達をして目を剥き絶句させる程の威力を備えていたからだ。った。

『ねえフーケ、貴女ほどの腕前なら何処にでも忍び込めるわよね？』

だったらちよつとロマリア行つて、私達のこと知られないように
工作してもらえるかしら?』

まるで散歩にでも行くかの様に提案されたそれは、フーケならずとも
言葉を失う行為だった。

ロマリア、正確にはロマリア連合皇国はハルケギニアの他の国々とは
違い、ブリミル教の全ての権威を預かる教皇が直接治める宗教国
家である。

いわばブリミル教の総本山。そこに単身乗り込み、よりにもよつて
ルイズ達の異端認定を妨害しろと言うのだ。

フーケならずとも「それは死ねって言ってるのかい?」と漏らした
くなる仕事である。

しかしルイズは笑いながら否定した。

今の所、ルイズ達のことを知っているのはキュルケ、タバサ、オー
ルド・オスマン、コルベール、そしてフーケ以外に居ない。

この四人が口を噤んでさえ居れば、ルイズ達のこと『珍しい東方
の技を使える』程度の認識で済む。

一生徒が画策するにはスケールの大き過ぎる策略だが、その『万が
一』が起こる確率が低いのだ。

ある意味飼い殺しとも言える。

この前代未聞の大仕事に対する報酬もやはり前代未聞であった。

『別に今まで通り盗賊稼業は続けても構わないわ。ヴァリエール領
と魔法学院から盗みさえしなければ私は関与しないもの』

『……ツェルプストー領も含めといってもらえるかしら?』

『……ガリアでは止めてもらえると助かる』

ころころ笑って酷いことを言うルイズに、キュルケとタバサが追随する。

お咎め無しでの解放。それが報酬の一つ。他にも情報の融通や『冒険者』の秘密を教えるなど、今の彼女達が出せる限りの報酬が提示された。

けれどフーケが最も心惹かれた報酬は、何の気もなくルイズが口にした台詞であった。

『後は、そうね……、危なくなったらヴァリエールで匿うわよ？
勿論、貴女のお仲間も』

その言葉を聞いて真っ先に浮かんだのは故郷の村で待つ『あの子』のことだった。

『あの子』の持つ特殊な事情故、彼女達は故郷から離れることが出来ない。

しかし異端者であるルイズ達が既に居るのだから、厄介事の一つや二つ増えた所で構うまい。

無論完全に信用出来る訳ではないが、いざと言う時に逃げ込める場所が出来たことは歓迎すべきであろう。

それにロマリアにはあらゆるマジックアイテムに関する情報が集まってくる。フーケにとっても利は充分にあるのだ。

最終的にフーケが提示した条件は三つに絞られた。

『冒険者の洗礼』を含む冒険者の情報、フーケが盗んで来たマジックアイテムの買い取り、そして身の危険を感じた際に一族郎党を匿うこと。

それに対してルイズが示した条件は二つ。

ルイズ達の秘密がロマリアにバレそうになった際の隠蔽工作と、ルイズ達の関係者を盗みの標的から外すこと。

マジックアイテムの買い取りには難を示したものの、タバサがその

道にコネを持っているらしく可能な限り言い値で買い取ることを了承。

また冒険者の情報には神器も含まれていたが、トモの『冒険者以外に神器は使えない』と言う説得で諦めてもらった。

『洗礼』については実際試したものの聖印は現れず、フーケに冒険者の資格が無いことを確認するだけだった。

此処までは問題ない。いや、問題はあっても自力で解決可能な範囲に収まっている。

自力では解決出来ない問題、それは……

「……で、結局どういう風に纏まったのかしら？」

あの子、『当てが無ければ作ればいいのよ!』としか言わないんだもの」

長い回想からきらびやかな舞踏会の会場に意識を戻したキュルケは、何やら自棄になったようにワインを呷るフーケに聞いてみる。

その問い掛けにフーケは鼻を鳴らし、呆れ声で学院長室での取引を明かす。

「……あのお嬢ちゃん、とんでもないね。オールド・オスマン経由で『鳥の骨』につなぎを取らせるなんて、どうやって思い付いたのやら……」

「『鳥の骨』? ……って、マザリーニ枢機卿!？」

キュルケが驚くのも無理は無い。

王位不在のトリステインの政治を一手に引き受けるマザリーニを頼むと言うことは、即ちトリステインを巻き込むことに他ならない。だがフーケはもう一度鼻で笑うと、彼女の勘違いを訂正した。

「ああ、もちろん詳しい事情は知らせないよ。」

オールド・オスマンからは『ロマリアで働きたいメイジを受け入れてくれる神官を紹介して欲しい』としか伝わらないからね」

「成程、要するにコネを使って堂々と潜入するって訳か。」

「正式な、それも枢機卿の紹介なら疑われないって所かしら？」

そう、ルイズ達が悩んでいたのは『どうやってロマリアにフーケを送り込むか？』と言う問題だった。

単身乗り込んだ所で異端審問に関わる要職に近づける訳が無い。

だからある程度高い地位の神官に近づく為に、ルイズが考え出したのがマザリーニを頼る方法なのだ。

ロマリアにおいて、マザリーニは教皇候補に指名される程度には影響がある。

それを利用してフーケを送り込めば、少なくとも出自を疑われることは無いだろう。

「あのお嬢ちゃんもヤバイけれど、あの使い魔はもっとヤバイね。」

あの交渉、アンタ達にも聞かせてやりたかったよ」

トモがオスマン達に持ち掛けた策謀は、ルイズがフーケに持ち掛けた取引そのままであった。

ただし、トモはオスマン達に『ロングビル』の正体を語っていない。フーケは取り逃がしたことになるし、『ロングビル』も何事も無かったかのように帰還している。

その上で『ロングビル』をロマリアに送り込む——余りにも突飛な提案を吞ませる為にトモが用意した言い訳がこれだ。

『ロングビルの没落にはロマリアの陰謀が関わっているかも知れない。』

だからそれを確認する便宜を図る代わりに、ルイズ達の秘密を守って欲しい』

普通なら誰も信じない、苦し過ぎる言い訳であった。

しかしトモは問題を殊更強調し、論点を微妙にずらし、虚実を取り混ぜてあやふやにして、遂にはオスマン達を煙に撒いてしまったのだ。

『フーケを追いかける道すがらに聞いた彼女の話から大体的見当が付きました。

とは言え、これはあくまで仮の話、事実であるかどうかは解りません。

……ですが、愛する家族や領民達と引き離される悲しみを語ってくれたミス・ロングビル涙に、私はどうにかして報いたかったのです』

ぽろぽろと涙を零しながらの訴えは思いのほか説得力があったらしい。

厭らしいことに、ルイズ達の問題はあくまでも言い訳にしか過ぎないような印象を植え付ける語り口で。

オスマンとコルベールは号泣しながら『ロングビル』に最大限の便宜を図ることを約束。

そこにルイズが『だったらマザリーニ枢機卿を頼ってみては？』と畳み掛け、あれよあれよと言う間に『ロングビル』のロマリア派遣が決定してしまったのである。

「あれは一流の詐欺師のやり口だね。正直、敵に回したら厄介どころの話じゃ無いよ」

「……彼の話術にルイズの頭脳が加わったら、もう無敵なんじゃないかしら」

「……非常に手強い」

何故か出会ってはいけないもの同士がくっ付いてしまったかのような、取り返しのつかないものが産まれてしまったかのような悪寒に身を震わせる三人。

曲が終わり、慣れないダンスから解放されたシエスタがそんなキュルケ達の元に歩み寄るのと、ホールの扉に控えた衛士がルイズ達の到着を告げるのは殆ど同時であった。

「ヴァリエール公爵が息女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢、ならびにその使い魔ヤナギダ・トモ様のおなゝりゝゝ!!」

壮麗な扉が大きく開かれてルイズがその姿を見せた途端、ざわめいていたホールは一瞬にして静まり返った。

長いピンクブロンドの髪をバレッタで纏めた小さな顔は、白いパーティードレスと相俟ってまるで宝石のように輝いて見える。

薄化粧だけのシンプルな装いも、肘までの長手袋の白さも、開いた胸元に光る聖印も、ルイズの高貴な美貌をこの上なく引き立たせている。

そしてその後ろに控えている使い魔もまた、普段とは違う装いを見せていた。

無造作な短髪はオールバックに固められ、艶やかな黒い髪がエキゾチックな雰囲気醸し出す。

何の変哲も無い黒の燕尾服姿がまるで一流の執事のごとくビシッと決まっており、いつものコート姿とは一線を画す雰囲気を漂わせている。

背中に背負ったデルFRINGERだけが場違いだったが、それすらアクセントとなって彼を歴戦の勇者に見せていた。

主役が揃ったと見た楽士達が再び奏で始めた音楽が流れる中、ルイズとトモは真直ぐキュルケ達の元へ向かう。

「……折角の舞踏会なのに踊らないで固まってるなんて勿体無いわよ？ あらシエスタ、そのドレス似合ってるわ、私の見立て通りね！」

「あらルイズ、貴女が選んだドレスはどれも地味だったわよ？ シエスタにはもう少し派手な方が似合うと思うわ」

「……………（がつがつ）」

「あ、あの私皆さんみたいに綺麗じゃないし、こんなドレス初めてだし、ええと、ええと……………」

「いえいえ、とても良くお似合いですよシエスタさん。…………むしろ私の方が場違いっぽいんですが」

ルイズのセンスに噛み付くキュルケ、我関せずとひたすら料理を貪るタバサ、やたらテンパっているシエスタ、そして憂鬱な表情で溜め息を吐くトモ。

三者三様ならぬ五者五様の様相を見せる一同を、フーケは生暖かい目で見守る。下手に手を出せば余計な騒動に巻き込まれそうだと直感が囁いたからだ。

けれど現実是非情である。混沌としたこの場を更に引つ掻き回すかのように、新たな混沌が空気を読まずに這い寄って来たのはフーケがこの場を離れようとしたまさにその時だった。

「やあ、遅かったねルイズ。」

その純白の衣装が清楚な君にとても良く似合っているでえっ!？」

「……………まったく、目を離すとすぐ口説こうとするんだから油断ならないわね」

フリルをふんだんに使った燕尾服と言う、悪趣味一步手前な格好で現れたギーシュがルイズを褒め讃えるが、その言葉は途中でモンモランシーのつま先に遮られる。

そのモンモランシーは水色の夜会服に身を包み、ギーシュから贈ら

れた薔薇を象った銀色に光るネックレスを着けていた。

「銀じゃないわね。もしかして、純鉄？　ギーシュ貴方、ドットじゃなかった？」

「……僕だっていつまでもドットじゃ居られないよ。何より、君たちに追い付くにはラインでさえまだ遠いしね」

キュルケの鑑定眼が素材を見抜く。一方、見抜かれたギーシュは頬を掻きながら所在無さげにしていた。

鉄はラインからでないと『練金』出来ない金属だ。あの決闘からたった数日でラインに成長出来たのは驚異的だが、彼本来の実力からすればおかしくない。

彼がなかなかドットから抜け出せなかったのは彼の中の甘えが原因である。決闘にてそれを自覚したギーシュがそれを克服出来たのは当然の成り行きだった。

彼は毎晩、精神力が尽きるまで『練金』を繰り返し、昨晚ようやく純鉄の練金に成功してラインに昇格出来たのだ。

——フーケの騒動にまったく気が付かないほど集中して。

ギーシュが一連の騒動を知ったのは全てが終わり、ルイズ達が帰還した後だった。

それを知った彼が一番最初に思い浮かべたのは『置いて行かれた』と言う落胆だった。

ギーシュは自分が学院で最もルイズ達に近い人間だと信じている。けれど、ルイズ達は彼を置いてフーケ討伐に向かって行った。

それは即ち、彼女達に頼りにされていなかった証明に他ならない。

実の所、ルイズ達はギーシュを無視していた訳ではない。

ただ出立が夕刻と遅かったこと、迅速な行動が求められたことが重なり、彼に助力を求める暇がなかったただけだ。

だがそんな事情を彼は知らない。だから置いて行かれたと言う事実

は彼を打ちのめすには十分な威力を持っていた。

ギーシュは思う。もしルイズ達が今のギーシュの実力を知っていたら連れて行ってもらえただろうか？、と。

解らない、自信が持てない。彼の自尊心は今、致命的なまでに揺らいでいた。

「へえ、やるじゃないの！ 凄くないギーシュ！！」

「君たち程じゃないさ。聞いたよ、フーケのこと。大活躍だったそうじゃないか！」

ルイズの賞賛もどこか滑って聞こえてしまう。

若干の嫉妬を込めたギーシュの返答は、けれども意外な反応で返された。

「活躍なんかしてないわよ。私がやったのって最後のとどめくらいだし、それだって皆が居たから出来たことだし」

「いえ、一番活躍出来なかったのは私ですから。真っ先にやられて、結局皆さんの足を引っ張っただけですし」

「そんな、それを言うなら私が一番役立たずだったじゃないですか！ 皆さんに勝手に着いて行ったばかりに……」

「シエスタは充分役に立っていたわよ？ むしろ私の方が足手まといだったかも知れないわね」

「……キュルケが居なかったら最後の攻撃は成り立たなかった。全く有効な策を打ち出せなかった私が一番無能……」

「何言ってるのよ、タバサのシルフィードが居なかったら今頃仲良くあの世行きだったわ！ それより私が余計なことを言い出さなければ……」

「いいえ、あの場でご主人が手を上げなかったら秘宝奪還はなりませんでしたよ。フォロー出来なかった私が悪いんです」

「いいえ！ トモさんは悪くありません！ やっぱり私が……」

「違うわ、私が……」 「それも違う。私が……」 「なんでそうなるのよ! 私が……」 「違います、私が……」

目の前で皆がそれぞれ『自分が悪い』
と言い合う光景に、ギーシュとモンモランシーが目を白黒させる。

いつまでも続くかと思われた謝罪合戦。それを止めたのはぷつと吹き出したフーケの笑い声だった。

「……くつ、くくく、あはははははは！
 なんだい皆、全員自分が
 悪いって！

結局誰も活躍出来なかったってことじゃないか！ あはははは

っ！」

普段の凜とした『出来る女』の仮面を脱ぎ捨て、フーケは腹を押さえて馬鹿笑いしている。

そして彼女の言葉に、ルイズ達は納得したように手を打ち合わせた。

「まあ、此処は一つ『皆が悪かった』ってことで」
「……なんだいそれは」

ルイズの言葉に頷く一同に、ギーシュは呆れ返る。そして、彼女達を見てふと漏らした。

「……成程、僕では君たちのお眼鏡には適わない筈だ。

ラインになった程度じゃ、まだまだ君たちには追いつけないな」

ルイズ達が達成した任務は充分称賛に値する大手柄だ。

もしもギーシュがそれをしたら調子に乗り易い彼のことだ、きっと周囲を見下してふんぞり返っていただろう。

そう、あの決闘の日に知った醜い姿、そのままに。

けれど彼女達は驕りもしなければ誇らしげに語りもしない。当たり前のように平然としている。

ラインになった程度で浮かれていた自分が恥ずかしい。自分が一歩進んだ時には、彼女達はもう手の届かない所まで進んでいたのだから。

けれど、彼の独り言を聞きつけたルイズは小首を傾げた。

「追いつけないって……、貴方ラインになったんでしょう？」

未だ『ゼロ』の私の方が置いてかれてるじゃないの」

「魔法の有る無しじゃないさ。僕の目指す場所は余りにも遠く、僕の足は余りにも遅い……。

僕がそこまで辿り着くには、後どれだけ掛かるんだろうね」

「何を言ってるのか解らないけれど、そうね……。

『目標を持つのは大事だけれど、それに囚われていては前に進めないわよ?』」

「……え?」

突然語り出すルイズ。戸惑うギーシュを余所に、彼女は『その言葉』を紡ぎ出す。

「『ほんの一步、周りがどんなに早く歩こうが構わずに自分の一步を確実に踏み出していけば、いつか目標に辿り着けるでしょう?』」

「ルイズ、それは?」

「東方の、ある偉人の言葉だそうよ。

……ねえギーシュ、貴方この短時間でラインになるってことがどれだけ凄い事なのか知ってるでしょう? 貴方が何を目指しているのか知らないけれど、此処で諦めたら貴方どこにも行けないわよ? 焦らず、自分の出来る範囲で最大限頑張る。それが『努力』って奴じゃないの?」

ルイズが語る東方の言葉は、ギーシュの胸にすんと入り込んだ。笑いがこみ上げてくる。彼女達に置いて行かれたと思い込んでいた先刻までの自分がなんだか馬鹿馬鹿しく思えてきた。

何のことは無い、ギーシュはただ焦っていただけだったのだ。

彼女達は何ら変わっておらず、彼は未だルイズ達の友人であり、この大手柄もいつものじゃれ合いの延長にあつた出来事にしか過ぎない。

先刻のフーケのように突然吹き出した彼に、ルイズは怪訝な目を向ける。彼女は笑い話をしたつもりは無いのだから当然だろう。

「くっくっく、いや失礼。……そうだね、君の言う通りだ。出来る範囲で精一杯頑張らないと、追い付くものも追い付けないな。

……ありがとうミス・ヴァリエール。もう少しで僕は道を違えてしまう所だったよ」

「……？、まあ私の言葉が役に立ったのならそれでいいけれど」

目の前で啞然としている少女に、ギーシュは最大限の感謝を込めた礼を贈る。

意味が分からずキョトンとするその様にまた笑いの発作が起きそうになるが、彼は自制心を総動員して何とか堪えた。

「ふふっ……さあルイズ、君も踊ってくると良い。ミス・シエスタは先刻申し込まれて一曲踊っていたよ？」

「えっ！？ ちょっとシエスタ、何で待っててくれなかったのよ！折角の貴女の初舞台、見逃しちゃったじゃないの！！」

「ええっ？ い、いえ、あんまり熱心な方だったから、断り切れなくて……」

「そうそう、知ってたシエスタ？ 『フリッグの舞踏会』と一緒に踊った二人は将来結ばれるんですって！！」

「えええっ！？ そうなんですか！？」

「……ただの言い伝え。気にすることは無い」

「ででででもっ！？ 私なんかが貴族様のお相手なんて……」

いつの間にかモンモランシーをも巻き込んで騒ぎ始めた彼女達を急かすように、楽団が奏でる曲が一段と大きくなった。

それに勇気づけられたのか、それまで遠巻きに囲んでいた他の生徒達が一斉に群がり、盛んにルイズ達へダンスの誘いを申し込み始める。

その殆どがキュルケ狙いであつたが、中には意外な美貌を見せたルイズや、貴族の令嬢には無い素朴な可愛らしさを持つシエスタに熱い視線を送る男たちも多かった。

タバサは我関せずを貫くように料理に向き直り、ギーシュは再びモンモランシーと共にホールへ向かう。

それぞれを見送ったトモも料理に手を伸ばそうとして……裾を掴まれて振り返る。

そこに居たのは若干不機嫌な表情のルイズであつた。戸惑うトモに向かい、彼女は白い長手袋に包まれた手を差し伸べた。

「……沢山誘われていたようですが？」

「着飾った途端に群がって来るような安い男は御免だわ。こう言うときは黙って手を取るのが礼儀よ？」

ルイズの顔と差し出された手、そしてニヤニヤと笑顔を浮かべてこちらを窺う友人達を見比べ、トモは嘆息して天を仰ぐ。

「……ダンスの素養はありませんからね？」

「あら、ようやく貴方の弱点を見つけたわね！」

ころころと笑うルイズの手を取り、トモは恭しく頭を下げた。

「それでは僭越ながら、一曲踊って頂けますかレディ？」
「もちろんお受け致しますわジェントルマン！」

並んでホールに向かう二人。『邪魔だから』とその場に置いて行かれたデルフリンガーが小さく笑った。

「こいつはおでれーた！主人のダンスの相手を務める使い魔なんて、初めて見たぜ！」

どうにか踊り抜いたトモだったが、その後キュルケとシエスタにもダンスを申し込まれ、挙げ句見知らぬ女生徒からも熱烈なアピールを受ける羽目になった。

これ以上晒し者になる気の無かった彼はどうか煙にまき、デルフリンガーと幾つかの料理を抱えてバルコニーに逃げ込む。

「……想像以上にパワフルな方々ですね。まるで獲物を追い詰める獵犬みたいです」

「カカカツ、そりゃ言ってる！」

皆あの嬢ちゃん達のおこぼれに預かりたいんだろうさ！」

デルフリンガーの混ぜっ返しにげんなりしながら、テーブルからかすめ取って来たワインと料理に手を着ける。

贅の限りを尽した料理は確かに美味で、高級であろうワインにも良く合った。

けれど、トモにはどこか物足りなく感じる。

「マルトーさんの創作料理の方が美味しいと感じるのは、私の舌が貧乏だからですかね？」

「そりゃ旦那、アンタの為に作った料理と見知らぬ誰かの為の料理じゃ気合いの入り方も違うってもんさ」

「……そう言うものですかね？」

けたけた笑うデルFRINGガーに生返事をしながら、トモは天を仰ぐ。夜闇に浮かぶ双月が放つ赤と青の月光が、夜空を紫紺に染め上げる。その幻想的な光景に、トモは『あの日』のことに思いを馳せた……。

※ヤナギダ・トモ（柳田 智） 種属… ヒューマン（Lv…4）

体力…6／知力…8／感覚…5／敏捷…8／器用…3／魅力…3／
精神…5／幸運…10

HP…6／11 MP…11／11 SP…2／10 ※数値は
現在値／最大値

EXP…30 所持金…5エキュ（※1）

保有クラスとスキル

・ネゴシエイター…3

・詐術…1／説得…1／挑発…1

・サムライ…2

・居合い斬り…1

アクセサリ
装備品

・厚手のコート／デルフリンガー／運命神の聖印

アイテム
所持品

・背囊／サバイバルナイフ／目覚まし時計

進行中クエスト

・ルイズを守る（期限…ルイズの卒業まで）

・『破壊の杖』の奪還（期限…終了）

※ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール
種属／ヒューマン…3

体力…3／知力…8／感覚…4／敏捷…3／器用…3／魅力…6／
精神…6／幸運…12

HP…10／10 MP…12／13 SP…10／10 ※数値
は現在値／最大値

EXP…22 所持金…154 エキュー

保有クラスとスキル

・セージ…2

・魔法知識…系統魔法…1／戦術…1

・ライダー…1

・乗馬術…1

アクセサリ
装備品

・魔法学院女子制服／魔法の杖／運命神の聖印

アイテム
所持品

・なし

進行中クエスト

・『破壊の杖』の奪還（期限…終了）

※シエスタ 種属／ヒューマン…4

体力…6／知力…3／感覚…6／敏捷…5／器用…6／魅力…5／
精神…4／幸運…14

HP…12／12 MP…8／10 SP…5／10 ※数値は現
在値／最大値

EXP…15 所持金…4エキユ

保有クラスとスキル

・ハウスキーパー…1

・清掃術…1

・ハンター…1

・解体術…1

・ランサー…2

・連続突き…1／突撃…1

アクセサリ
装備品

・メイド服／モップ／運命神の聖印

アイテム
所持品

・なし

進行中クエスト

・『破壊の杖』の奪還（期限…終了）

第十三話 祝宴（あとしまつ）（後書き）

用語解説

（※1）現在の所持金をハルケギニアの貨幣価値に換算して加算した数値である。

第十四話 回想（たわむれ）

ヤナギダ・トモこと柳田智はその日、夜闇迫る公園のベンチで一人黄昏れていた。

時々その手に抱えた角封筒を見ては溜め息を吐く。

下宿の近くにあるこの公園は昼間でも滅多に人が居らず、繁華街からも外れているので夕方から夜に掛けて完全な無人地帯と化す。故に存分に落ち込むには最適の場所なのだ。が……

「……はあ」

本日九十七回目の溜め息を吐き、彼はもう一度角封筒に目を落とす。中に入っているのはプリントアウトされた紙を纏めた分厚い紙束と、そのデータを収めたCD-ROMが一枚。それを確認すると、彼は本日九十八回目の溜め息を吐いて一人ごちる。

「……結構自信あったんですけどねえ……このルール」

そう言って紙束をばらばらと捲る。

そこに書かれていたのは箇条書きにされた文章と数字の羅列であった。

柳田智は大学のTRPGサークルに所属する一年生である。

彼とTRPG、テーブルトーク・ロールプレイングゲームの出会いはその古くない。

高校時代、ラノベと間違えて手を出したりプレイにハマったのが切っ掛けだ。

だが人数を揃えねば遊べないのがTRPG。そして彼の周囲にはT

RPGに興味を持つ友人は居なかった。

何人かにリプレイを勧めてみたものの実際にプレイしてみようと思わせるには至らず、彼は買い揃えたルールブックを前に涙を吞む。その悔しさを、彼は『オリジナルのルール作り』にぶつけた。

彼がハマった国産TRPGの大御所を元に、当時流行り始めたMMORPGの要素を交え、さらに各種ゲームや漫画、アニメやラノベの設定を盛り込む。

ライトファンタジーをベースにした背景世界で、様々なスキルを組み合わせてモンスターと戦い、世界の謎に挑む冒険者たちの物語。出来上がったルールを彼は誰にも見せなかったが、それはパソコンの片隅にひっそりと息づいていた。

そんな彼だからこそ、大学でTRPGサークルを発見した途端に入会したのは当然の成り行きであろう。

初心者だった彼を温かく迎え入れたサークルの仲間達だったが、彼らは百戦錬磨のゲーマーだった。

何しろパワーレベリングと称してドラゴンを相手にさせるような連中である。

クレバーな戦略、ピーキーな戦闘。ハイエンドファンタジーの重厚な世界は彼にとって壁が高過ぎた。

けれどその経験は彼が作っていたオリジナルTRPGに反映され、より洗練されて行く。

そして完成されたそれを、彼は今日サークルに持ち込んだのだが……

「駄目だね。判定周りに粗が多い。これじゃエラーも多くなるよ」

「スキルが中途半端。剣士と槍兵を分ける意味ってあるの？」

「もっとランダムな要素があっていいよね」

「経験値獲得条件がバランス悪過ぎ。これじゃプレイヤーのレベルに差が出るよ」

「そもそもこれって世界観もクラスもスキルも見覚えあるものばか

りだよね？」

まさにフルボッコ。

山のような駄目出しを喰らい、彼は失意に打ちのめされてこの公園を訪れたのだった。

「……まあバランス悪いしエラーも多いしパクリも認めますけど……、あそこまで言うことは無いでしょうに」

ぶちぶちと不満を漏らす。しかし彼とてサークルの面々から指摘された欠点は理解していた。

彼一人で組んだルールであるから、彼が気付かないエラーがあってもおかしくはない。

だが自信を持って持ち込んだそれを、あそこまでボロクソに貶されれば落ち込むのも道理。

ひとしきり愚痴って本日九十九回目の溜め息を吐いたところで、彼は気合いを入れ直す。

そう、赤いコートの凄腕ガンマンも言っていたではないか。

「間違っていたのなら正せば良い、か……」

もともとサークルに持ち込んだのもお披露目を兼ねたテストプレイの為だったし、エラーを指摘してくれたことは感謝している。

あれだけ指摘されたのだ。そこを正せば凄いシステムになるに違いない。

公園を出て下宿に向かう道すがら、彼は頭の中でルール改訂を始める。

しかし道程は遠い。思わず本日百回目の溜め息を吐いた瞬間、彼の意識は暗転した。

彼の不幸は二つ。

改訂に熱中するあまりに周囲への注意が疎かになっていたこと。
そして滅多に車が来ない筈のここに、何故か大型トラックが進入して来たことだった。

あ……ありのまま、今起こった事を話すぜ！

『強い衝撃と痛烈な痛みを感じたと思ったら、次の瞬間なんだかよく解らない場所に居た』

な……何を言ってるのか判らねえと思うが、俺も何をされたのか判らなかった……

頭がどうにかなりそうだった……テンプレだとか転生トラックだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。
もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……

などとネタに走ってる場合じゃないですね。

気が付いたら見渡す限り真っ白な空間。足下もなんだか覚束なくて、現実感がありません。

目を凝らしても白一色に塗りつぶされた視界には何も見えてきません。酷く寂しくて気持ち悪い光景です。

「……なんですか、ココ？」

「ここは『狭間の空間』、いわゆる死後の世界と言う奴ですね」

思わず口走った疑問に、背後から返事が返ってきました。

慌てて振り返った私が目にしたのは、黒いTシャツにブルージーンズを合わせたひよろ長い男の人。

にやにやと癪に触る笑みを浮かべるその顔に、見覚えがあります。具体的に言うなら、毎朝洗面所で顔を合わせる間柄です。

「わ……私!？」

そう、そこに居たのは間違いなく私こと『柳田智』その人でした。目を白黒させていると、その『柳田智』は意地悪そうに笑いながら話し掛けてきました。

「そんなに驚かなくても良いでしょう? まあ、この姿なのは謝りますが」

「な……何なんですか貴方は? それにココは何処なんですか!？」

「錯乱してますね……、まあ当然でしょう。さて……」

そこまで言うと、『柳田智』は居住まいを正して私に向き合います。ですが、良く見れば笑いを堪えているのが判ります。必死に押し殺そうとしているようですが。

友人から鉄面皮と言われるほど表情の薄い私ですが、両親曰く表情に動きが少ないだけで割と感情が顔に出易いそうです。

その時は下手な慰めだと思いましたが、こうやって相対していると成程、これは判り易い。どんな嘘であれ両親に通じなかったのも納得です。

さて、私に感情を読まれているとも知らない『柳田智』は、威厳を取り繕った声でとんでもないことを言ってきました。

「私は『神』です。貴方をココに招いた理由は、貴方を『ゼロの使い魔』の世界に送る為です」

「……はい？」

私は所謂『オタク』です。まあ、TRPGなんてマイナーなゲームのプレイヤーは十割の確率で『オタク』でしょうが。

偏見？ 知りませんね。

ですので当然『ゼロの使い魔』の事は知っています。

って言うか全巻揃えています。外伝も『タバサの冒険』と『烈風の騎士姫』の両方押さえています。

それに二次創作は多少嗜んでいますし、こう言う展開……所謂『テンプレ』も好物でしたが。

これらはTRPGと同じく想像上だからこそ楽しめるもの。誰が好き好んで実体験したいなどと思うものですか！

「じよ、冗談じゃありません！ 今すぐ私を帰してください！」

あれほど苦勞して潜り込んだ大学生活が一年経たずに不意になるなぞ、割に合いません！

それに今晚はバイトが入っています。この就職難の時代、こう言ったことで顔をつないでにおいて多少でも就職活動を有利に運ぶ必要があるんです！

今週末にはサークル主催のコンベンションもありますし、やりかけのキャンペーンも放っておけません！

ですが私の必死な訴えを、自称『神』は無慈悲にも一刀両断にしました。

「それは無理です。だって貴方、もう死んでますから」

「……………うん？」

「思い出せませんか？ 貴方トラックに轢かれて死んじゃったんですよ。」

ミンチより酷いって、ああ言う状態を指すんじゃないですかね？」

その言葉を聞いた途端、脳裏に浮かび上がる光景。

あの公園からの帰り道、ルール改訂に頭を捻る自分、唐突に照らされるライト、甲高いブレーキ音、弾き飛ばされるような衝撃、打ち撒けられた脳漿、そして暗転する意識。

「あ……あ、ああ……ああああああああっ！！！」

思い出すも何ありません。何が起きたのかすら理解出来ていなかったのですから。

誰だって自分の死に様なんて見たくないでしょう。なのにこの『神』はせっかく知らずにいられたそれを、わざわざ突付けてくれたのです！

いや、それ以前にこいつは何と言いましたか？

ここに『招いた』と言いませんでしたか？

それってつまり、

「ま……まさかあのトラックは貴方の差し金ですか！？」

「おや、案外鋭いんですね。その通りですよ」

こいつが元凶ってことじゃないですか！？

「な、なんて事を！？ 何で私を死なせる必要があるんですか！？」

「退屈だから」

……え？

今、碌でもないことをほざきませんでしたか？ この『神』。

「いやあ、ほら『私』って全知全能でしょう？ ですから何やってもつまらないんですね。」

今までは貴方がた人間が作り出した『物語』を読むことで退屈を紛らわしていたんですよ。

人間の想像力って凄いですね。全知全能の筈の『私』ですら思い付かないようなことを思い付くんですから。

ですが、最近それよりも面白いことを知りまして。

貴方がたがインターネット上に書き散らしている二次創作。あれを実際にやってみようと思ったんです。

『物語』を舞台にした箱庭、俗に言う『平行世界』を作り出して、そこにイレギュラーを放り込んでみたらどうなるのかな？ って。あくまで『物語』通りに進むのか、それとも『物語』の面影も無くなるほど滅茶苦茶になるのか？ それを見てみたいんですよ。

貴方にはその栄えある実験台第一号になって頂きます。場所が『ゼロ魔』なのは……まあ、たまたま選んだ舞台がそうだっただけですが」

何でしたら『なのは』とか『ネギま』でも良いですよ？ なんて言い出す『神』を見て、私の内心にモヤモヤしたものが湧いて来ました。

そんな自分勝手に殺されたことに対する怒りもあります。そんな理由で一つの世界を弄ぶ『神』に対する恐怖もあります。

でも、今のこの感情はそれらとは違います。哀しみのような、怒りのような、憎悪のような、なんだかよく解らない感情が胸の辺りで渦巻いているのです。

とりあえずこのモヤモヤは一旦棚に上げて、この自称『神』を問い詰めるのでしょうか。

「な、なら私でなくとも良いでしょう？ 何故わざわざトラックで轢き殺してまで私を選んだんですか？」

良くあるトリッパーや転生ものの主人公のように、私は日常を『つ

まらない』とは考えていません。

リアル厨二時代にはそんなこともありましたが、今となっては思い出す度に悶え苦しむ黒歴史でしかありません。

そりゃ、TRPGなんて言う妄想の極地みたいなゲームにハマっちゃいますが、少なくとも妄想と現実の区別はつけています。

いまさら厨二的展開に巻き込まれても、正直迷惑なだけですし。

ですがその問いに返された答えは、私の想像の遥か斜め上をぶっ飛んだ最悪なものでした。

「貴方が箸にも棒にも引っ掛からないくらい平凡な人間だからですよ」

「……うえ!？」

思わず呆然とする私を面白そうに見やりながら、自称『神』は訊いても居ないのにペラペラと喋り出しました。

「地方公務員の家庭に生まれ、小中高と特に良い事も悪い事もせず暮らし、二流の大学に進学。

生来の要領の悪さ故に学力は平均値より上がらず、運動能力も全国標準止まり。

オタクではあるものの社会に適応出来ない程ではなく、友人は多いものの付き合いの深い親友はいない。

……そして貴方は将来ある中小企業の営業職に就き、生涯独身で平社員のまま定年退職します。

以降、身寄りの無いまま一人暮らしを続け、八十八歳で誰にも看取られず、老衰で孤独死する予定でした。

……まさに居ても居なくてもどうでも良い人生です。子孫も残さなかったのだ、今死んでも寿命で死んでも地球の未来には影響ありません。

どうせ今までも大した人生じゃなかったでしょう？ だからせめ

て私の暇つぶしの役に立ってもらおうと思ったのですよ」

……………何ですか、それは。

私の人生は確かにろくなものじゃないのでしょうか。ですが、そのろくでもない人生を私は精一杯生きてきました。

普通の人より要領が悪かったからこそ、必死になって努力を重ねて来たんです。その結果が平均値であろうとも、それは私の血と汗と涙の結晶なのに！

独身？ 平社員？ 上等じゃないですか。

私の人生は私の取り分です。どんなにくだらないう人生だったとて、天寿を全う出来たのなら私は賭けに勝ったのでしょーに！！

「……随分勝手な仰り様ですね。社会の大部分は私のような平凡な人間が動かしてるも同然でしょう？」

気が付けば、私の口は『神』に向かって悪態を吐いていました。ですが、私の言葉を『神』は全く取り合いませんでした。

「そんなことはどうでも良いんです。どのみち貴方が『ゼロ魔』に行くのは確定しているんですから。

……さて、それじゃ『テンプレ』通りにチート能力を差し上げましょう。何が良いですか？

不老不死？ 身体能力カンスト？ 『ゼロ魔』なら魔法の才能、あるいは無限大の精神力とかですかね？

『ネギま』や『なのは』、あるいは『DQ』や『FF』の魔法も良いですね。

うーん、『型月』の『直視の魔眼』とか『無限の剣製』も捨て難い。いっそ『空想具現化』でも付けますか？

あ、勿論リスクや代償は無しにしてあげますから安心してください」

成程、それは確かにチートです。厨二時代なら喜んで受け取ったでしょう。

——くだらない。反吐が出そうです。

あの頃と違い、私は努力が実を結ぶ喜びを知っています。努力の結果、報われなかった悲しみも知っています。

そして『努力出来る才能』こそが如何なる才能よりも尊いことを知っているんです。

某大魔導士は弱い己を叱咤しながら、遂には勇者の隣に並び立ちました。

某魔軍司令は何度も倒されながらも、最終決戦にて勇者にも、大魔王にも認められる武人になりました。

某卓球少年は運動音痴を馬鹿にされながら、間断なき努力で沢山の人を魅了しました。

某魔人探偵の相棒は何度も挫けながら、最後には悪の化身に一矢報いました。

某剣術道場の門下生は超人だらけの戦いをぐり抜け、大金星を挙げるに至りました。

某競走馬はその余りに小さな身体の不利益を押し切り、海外でさえ通じる馬に成長しました。

凡才や秀才が努力の果てに天才を凌駕する。その姿に人は感動し、憧れるのです。

某種の世界のように、最初から才能に溢れた人間がいたら反発が起ころのは必至でしょう。

某少年誌が掲げる『努力・友情・勝利』は決して伊達じゃないんです。

なのにこの『神』は才能だけを、能力だけを与えれば満足出来ると

思っているのです。

なんて……哀しい人なんでしょう！

「……ああ、そう言うことですか。だから、私は……」

すっと腑に落ちる感覚。私の胸のモヤモヤが晴れて行きます。
なんだ、こんな簡単なことだったんですか。

「………貴方を、哀れんでいたんですね」

「……何ですって？」

私の言葉に、『神』はそれまで浮かべていた余裕の笑みを消し去りました。

まるで鳩が豆鉄砲を喰ったかのように呆然とした『神』を見ながら、私は続けます。

「……とある作品で言っていたんですがね。

主人公が『幸せ』の意味を沢山の人に尋ねたとき、上司に当たる人物がこう言うんです。

『幸せってのは一言で言うと、進歩だ』

『昨日より良い今日、今日より良い明日。』

未来に希望が持てる状況……それが『幸せ』なんじゃねーの？』

って。そしてそれを踏まえた上で、別の人物がこう言ったんですよ。

『一つのことを成し遂げるその瞬間、そこに心の全てを傾けて生きる。』

それが『志』ある生き方なんだ』

『そんな生き方ができるなら、俺は『幸せ』だな』

とね。」

『イレブンソウル』、神永一佐と乃木隊長の台詞ですね。あの話はとても印象深く、私の人生観にも大きな影響を与えてくれました。

「そしてもう一つ。こっちは結構有名な作品ですが……

ある男が使命を果たし、その命を散らしました。そのときに見た走馬灯の中で、彼の所為で死んでしまった同僚の台詞なんです……

『そうだな…わたしは『結果』だけを求めてはいない。

『結果』だけを求めていると、人は近道をしたがるものだ。

近道した時真実を見失うかもしれない。やる気も次第に失せていく。

大切なのは『真実に向かおうとする意志』だと思っている。

向かおうとする意志さえあれば、たとえ今回は犯人が逃げたとしても、いつかはたどり着くだろう？

向かっているわけだからな……違うかい？』

そう言うんですよ」

『ジョジョの奇妙な冒険』の第五部、アバッキオと殉職した警官の会話です。

これも初めて読んだ時は涙が溢れるくらい感動したシーンです。

要領が悪くて周りに置いて行かれがちだった私に向けられた、そんな気がするくらい好きな台詞でした。

「……貴方は、全知全能と言うくらいですから何でも出来るんですよ。

それこそ望んだだけで『結果』が得られるような、不可能なんて

存在しない才能が。

ですが、それはとても不幸なことです。

『幸せ』が『進歩』の事であるのなら、『進歩』を知らずに『結果』に至る貴方は『幸せ』を知らない事になりますから」

「……ふ、ふざけるな！ 『神』である私を哀れむなど、たかが人間の分際で……！」

それまでの慇懃な、と言うより私の話し方を真似た口調から一転、憤怒の形相で詰め寄って来る『神』。

自分の顔が此処まで歪むだなんて、初めて知りました。

何やら周囲の空気がビリビリしています。もしかしたら私ごとこの空間を消し去るつもりかもしれません。

ならば最後まで足掻きましょう。蟬螂の斧とは言え、我が人生最後の……いえ、我が死後初にして最後の言葉です。

刮目して見るが良い、『神』よ……！！

「貴方は言いました！ 人間は貴方が思いもしなかった物語を作り上げた、と！」

想像の世界とは言え、人間は貴方を凌駕したんです……！！

それが悔しかったんでしょう！？ それが憎かったんでしょう！？

……そう、貴方は人間が羨ましかった……！！ そうなんでしょう！？

「黙れええええええええええええええええ……！！！」

「いいだろう、さあ殺せ！ アンタを踏み付けたこの私を……！！

そして刻み付けるがいい、たかが人間に屈した今日と言う日の敗北を……！！

いつか人間はアンタを越えて行くだろう……！！

人間が『進歩』を求める限り……、人間が歩みを止めない限り……！！、

アンタは再び負けるんだ……！！！」

白かった空間が極彩色に輝き、何も無かった景色が荒れ狂う水面の

ように歪んで行く。

それらが私を捻り潰そうと向かって来るのを目の当たりにしながら、私は最後の言葉を口にする。

「——人類を無礼るなッ！ 人間を……無礼るなああああッ！！！！！！」

それを最後に私の意識は途切れました。

……再び目覚めた時、私の視界に入ってきたのはやっぱり真っ白な空間でした。

「先刻までの……夢？ って、うわあああああああッ！？！？」

は……恥ずかしいっ！

よりによって最後の言葉がマヴラヴオルタって、厨二の極地じゃないですか！？

なんか変に気分が昂って、言わずにはいられなかったんですが……もしかして、私って無意識のうちに厨二病に罹患していたとか？ だったら寒過ぎです！！

「消してえええええっ！！ この記憶を消してえええええええっ！！」

「……人にあれだけSEKKYOUしといて、今更何言ってるんですか？」

顔から火が出る勢いで転げ回っていると、不意に背後から聞き覚えのある声が掛けられました。

その瞬間、私の全身が硬直します。錆び付いたブリキの玩具のようにゆっくり振り向くと、そこには私と同じ顔をした『私』が居ました。

「……もしかして、『神』ですか？」

「YES、YES、YES」

「もしかして、先刻の夢は現実ですか？」

「YES、YES、YES」

「もしかして、怒ってますか？」

「NO、NO、NO」

「……ほへ？」

ジョジョ第三部の掛け合いですが、YESとNOが真逆の返答を返されてしまいました。

思わず埴輪顔（目と口をまん丸に空けて、左手を頭にして右手を腰か腹に置くポーズのこと。右手が胸に來るとシェーッ！ になるのが要注意）になって惚けていると、『神』がいきなり頭を下げました。

「貴方の言う通りでしたね。済みませんでした」

「……………はい？」

いきなりの展開について行けずに埴輪顔から困惑顔になった私を余所に、『神』は言葉を続けます。

「私は羨ましかったんですね。足りない故に、有限の知識と能力故に成長出来る貴方がたが、努力する事が出来る人間が。」

貴方に言われるまで、私は自分が不幸であることにさえ気付きませんでした。

全知全能を謳っておきながらこの体たらく……お恥ずかしい限りです」

「は、はあ……」

何でも私を消そうとした時、私が吐いた捨て台詞に共感したのだそう。

そして思い返してみれば、私の言った通り『進歩』も『成長』も『努力』の必要さえ無かった自分が凄く不幸である事に気付いたそう。

……ごめんなさい。こんなとき、どういう顔をすればいいのか判りません。

笑えばいいんでしょうか？こう、ネタ的に。

「……本来であれば、貴方を生き返らせてあげべきなんですよが……」

残念ながら、還るべき肉体がもう火葬されてるみたいなんですよ」

早！ 昨晚の出来事ですよ！？

「実は……この空間は現世と隔絶した時間が流れてて、現世では既に一年経っているんです」

うっそ！？

「ですから、今更現世に戻っても徒に混乱が起きるだけなので……」

当初の予定通り、『ゼロの使い魔』の世界に送ることになりました」

ちよちよちよっ！ あれだけ大立ち回りを演じておいて、結局元の木阿弥ですか！？

「既に『ゼロ魔』を舞台にした箱庭は稼働しているんです。新たに創り直すには今ある箱庭を壊さないと……」

「……その場合、箱庭の中の人々はどうなるんですか？」

その台詞に嫌な予感を感じ取り、恐る恐る訊いてみます。尤も、応えは判り切っていました。

「箱庭も一つの世界ですから、世界が壊れれば人間どころかそこにある全ての存在が失われます」

……やっぱり。そんなことだと思いましたよ。

「……判りました。私の我儘で箱庭の中の人達に迷惑はかけられませんから」

「……重ね重ね申し訳ない。ただ、箱庭の中は『ゼロの使い魔』そのものの世界なので……」

危険度もそれなり以上にあります。一応何かしらの能力は持って行った方がいいと思いますよ」

……あれだけ啖呵を切った手前、今更チートなんて貰えませんか。どうしましょう……？

そう言えば、これって、もしかして？ ……ああ、丁度良いんじゃないでしょうか？

「それじゃ……これをお願い出来ますか？」

私をそう言いながら、死んでまで後生大事に持っていた角封筒……自作TRPGを『神』に手渡します。

『神』は訝しみながらそれを受け取り、封筒の中身に目を通して……ある一節に目を見開きました。

「こ、これは……!？」

「はい。このTRPGの最終ボスは……『神様』なんです」

そう、このTRPGは『神に逆らう冒険者』をモチーフにしているのです。

背景世界にそれっぽい神話とそれにまつわる謎が幾つか仕掛けられていて、それらを全て解き明かしたプレイヤーには『神』への挑戦権が与えられます。

ルール上は最上級クラスを獲得出来ると言うだけですが、最終的には『神』を倒すことでNPCに……、PC自身が『神』となるエンディングが用意されているのです。

最初はこのことを知っていたのかと勘ぐりましたが、あの驚き様ではどうやら私を選んだ事とこのTRPGとは無関係だったようですね。

「まあ、実現するもしないも貴方次第で構いませんが、もし私の提案に付き合ってくれるなら……貴方も退屈せずに済みますよ？」

「何ですって？」

「私がこれから向かう世界に、このシステムを広めます。

そこで、貴方に向かって『冒険者になりたい』と要求して来た連中に、このTRPGのルールを適用して欲しいんです。

無論、全員のお願いを聞く必要はありません。心の底から『神様をブッ倒す!』と願ってるものだけで構いませんから」

「……『私』を、ブッ倒す？」

私の言葉に驚く『神』、それはそうでしょうね。

これって要するに『お前を殺す為に手を貸せ』と言ってるようなものですか。

構わず私は言葉を続けます。

「貴方を倒すことを目標に、彼らは……そして私も、レベルアップと言う『進歩』を遂げるでしょう。」

T R P Gと言うのは想像力のゲームです。プレイヤーとゲームマスターが振るうダイスが剣となり魔法になって心象世界を縦横無尽に駆け巡り、物語を共有して一緒に成長して行く。

——そう、『進歩を共有出来る』んです」

「!？」

これは私見ですが、T R P Gの醍醐味はゲームマスターとプレイヤーの一体感にあると思うのです。

唯我独尊なマスターではセッションも荒れるでしょうし、自分勝手なプレイヤーとは一緒に遊びたくありません。

プレイヤーが楽しめないとマスターもつまらないのです。その逆も然り。

そしてプレイヤーがレベルを上げると同様にマスターも経験を積み、皆がより楽しめるように成長していきます。

凝ったシナリオを練り上げ、仰天するようなダンジョンを仕掛け、

絶妙なバランスのエネミーを配置する。

そしてマスターとプレイヤーが一体となり、キャンペーンのエンディングに向けて一丸となる。

苦楽を共有して来た『仲間』であることが、良いゲームマスターの条件なのです。

「貴方は積極的に『ゼロの使い魔』の世界に手を出す必要はありません。」

ですが、いつか私達は箱庭を抜け出して貴方に立ち向かうでしょう。その瞬間がスタートの合図です。

貴方と言うゲームマスターを迎えた新たな『ゼロの使い魔』の世界で、私達は迷宮に挑み謎を解き、強敵と闘ってレベルを上げ……そうして一緒にエンディングに向かって共に『成長』するのです」

「わ……『私』が、成長……『進歩』出来ると？」

『幸せ』になる為に……『努力』出来る、と!？」

わなわなと震える『神』に、私は大きく頷いて見せます。

全知全能であるが故に『進歩』と言う『幸せ』を知らなかった『神』にとって、この提案は魅力的に映ることでしょう。

ラスボスがマスター自身と言うのは問題かもしれませんが、実際のプレイでもラスボスを操るのはマスターですから問題は無し!

……だと思えます。

「……………く、くくつ……………くはは……あははははははははっ!!」

突然『神』が笑い出しました。もしかして駄目だったんでしょうか? そう考えて身構える私に、笑い過ぎたのか眦に流れる涙を拭いた『神』が真剣な眼差しを向けてきます。

「いいでしょう! 貴方の望み通りにこのルールを適用しましょう」

『神』がそう宣言した瞬間、私の目の前に鏡のようなものが現れました。

……『サモンサーヴァント』のゲートですかコレ?

「時間です。その鏡をぐり抜けたとき、貴方は『平賀才人』の代わりに召喚される事になります。

レベルは1からのスタートになりますが、流石に装備も無しでは大変でしょう。これを持って行きなさい」

そう言って手渡されたのは地味な色合いのコートと背囊。

初期に買えるアイテムでは上等な方でしたが、これから向かう世界では多少心許ないのは否めません。

ですがいきなり最強装備なんてチート、貰っても嬉しくありません。これくらいが丁度良いでしょう。

「……有り難うございます。それでは……参りましょうか！」

コートを羽織り、気合いを入れて、私はハルケギニアに向けて一歩踏み出します。

と、『神』が「ああ、忘れていた！」と私を引き止めました。

振り返る私に向かって、『神』は銀色に光る何かを放り投げてきます。

慌てて受け止めたそれは、三本の剣を重ね合わせたアクセサリでした。

「それが冒険者の聖印です！ 運命と未来、そして『私』に挑む事を許された証です！」

忘れないでください、その聖印は『私』との約束の証なのですから！」

その言葉を聞き、私は聖印を握る手に自然と力が籠るのを感じました。

そうです、私はこれから『ゼロの使い魔』の世界で仲間を集め、も

う一度此処へ、『神』の前に立たねばならないのです。

『神』に挑む為に、『神』と競う為に、『神』と成長する為に！

「ならば精々難易度の高いダンジョンでも作って待っていなさい！

———いつか、私と素敵な仲間達が貴方に挑みに来る日まで！」

「ならば精々高レベルの冒険者になりなさい！

———いつか、『私』の造り上げた大迷宮で共に遊ぶその日まで！」

互いにエールを交わし、私は鏡を潜り抜けます。

その先に『幸せ』がある事を信じて。

夜空に浮かぶ赤と青の月が、バルコニーに立つ一人と一振りを照らし出す。

燕尾服に身を包んだトモのグラスはいつの間にか空だった。どうやら回想している間に飲み干してしまったらしい。

継ぎ足そうと瓶を持ち上げ、手応えが軽い事に気付く。いつの間にか一本空けてしまった様だ。

「……酒、弱かった筈なんですがね……」

かつてサークルの新歓コンパで日本酒一合を吞まされた瞬間にぶっ

倒れた事を思い出し、彼は首を捻った。

これも冒険者の恩恵なのだろうか、と代わりを求めてホールに戻ろうとするトモの目の前に白の塊が現れる。

真っ白なドレスの美少女。言うまでも無く、ルイズであった。

「……楽しんでるみたいね」

「楽しんでるかどうかはともかく、美味しい思いはしていますね。

……これで私を付け狙う方々の視線が無ければ言う事は無いんですが」

トモが群がる女生徒から抜け出し、バルコニーに逃げ込む様子はルイズ達も目撃している。

その時の事を思い返して吹き出すルイズに、彼は憮然としながら零す。

「昨日の大荷物の正体がコレだって知っていたら、昨日の内に燃やしておくところでしたよ。

シエスタさんなんて物凄く緊張しちゃってるじゃないですか、可哀想に」

「でも可愛いからいいじゃないの。貴方も結構似合ってるわよ？」

そう、彼らが着ている礼服は先日トリスタリアに向かった際に購入したものだった。

ちゃっかりトモとシエスタの分まで確保して、彼らを驚かせようと本番まで内緒にしていたようだ。

悪戯っ娘のようになると笑うルイズを見て、トモの胸中にちくりとナニカが突き刺さる。

本来、ここに居るのは不器用で女性にだらしない、けれど惚れた女の為にたった一人で七万の敵に立ち向かえる少年の筈だった。

命を懸けてルイズを愛し、生涯を懸けてルイズが愛する少年との出

会いを、トモは不当に奪ったのだ。

その上、彼は彼女に『冒険者の洗礼』を行わせるため、様々な小細工を施した。

決闘でわざわざルイズに洗礼の手順を見せたのも、ルイズの自尊心を様々な方法でくすぐったのも、全てはルイズを『冒険者』にする為。

『神』との約束を果たすため、トモはただその為だけにルイズの運命を振り曲げてしまったのだ。

だからだろうか。決して訊くまいと思っていた疑問が口について出て来てしまったのは。

「……ご主人は『冒険者』の道を選んだ事に後悔は無いんですか？」
「無いわね」

あっさり断定したルイズを思わずまじまじと覗き込んでしまうトモ。一方ルイズは無い胸を張り、実に堂々とした態度で彼を見返した。

「『私の人生は私の取り分』なんでしょう？」
「だったらこれを元手に大穴に賭けるのも私の自由だわ。そうでしょう？」

そこに居たのは自分の選択に誇りを持つ、立派な『冒険者』だった。原作初期の余裕の無い傲慢な態度ではなく、自信に溢れながらも決して無謀ではない、誇り高き勇者の姿。

——ああ、そうか。

彼女は『ルイズ』であって『ルイズ』じゃない、けれど間違いなく『ルイズ』なんだ——

彼は確かに彼女の運命を振り曲げてしまったのかも知れない。

けれども、それに匹敵する新たな運命がその扉を開いたのだ。

――済まないね、才人。

君の代わりは務まるまいが、せめて私は私のやり方で彼女を導いてみせよう――

「……判りました。その覚悟、私は敬意を持って賞賛します」

「何よ、いきなり改まって？」

突然居住まいを正し、敬礼でもしかねない勢いでルイズを讃えるトモに、ルイズは目を白黒させた。

そんなルイズを微笑ましく思いながら、トモは彼女に『お願い』をする。

「ところでご主人。ギルドを組んだら名前を付けなければなりません。

後でシエスタさんも交えて相談しようと思っていたんですが、よければ私に付けさせてもらえませんか？」

「え？ ……いいけど、あんまり変なのは駄目よ？」

「大丈夫です、いい名前を思い付きましたから。……怒らないで下さいね？」

それを聞き、ルイズの眉が危険な角度に吊り上がる。

「……言ってみなさい。その上で制裁するから」

「制裁は決定事項なんですか！？ ……コホン、では……」

もうそれ以下が存在しない極低温、後は熱くなるだけしかない絶対零度を表す言葉で、

『アブソリュート・ゼロ』

なんてどうでしょうか？ ハルケギニア最初の冒険者ギルドには
相応しいと思うんですが」

ルイズはその言葉を舌の上で転がしてみる。

『ゼロ』の呼び名が入るのは気に入らないが、言葉の響きはいい。
何より『これより下が無い、だから後は上がるだけ』というその意
味が素敵だ。

成程、確かにハルケギニア最初の冒険者ギルドに相応しい。

ルイズは花のような笑みを浮かべると、トモに向かって宣言する。

「……いいわ、それで行きましょう。私達は今日から冒険者ギルド、
『アブソリュート・ゼロ』よ!!」

そしてこの日、神様に挑む愚者達の、余りにもささやかな旗揚げが
なされたのであった。

CONGRATULATIONS!
RIO ACHIEVEMENT!
THE 1ST SCENA

シナリオ経験値

- ・シナリオの難易度…1 (×3)
- ・セッションに参加した…1 (×3)
- ・セッションで活躍した…1 (×3)

達成したクエスト

・ヤナギダ・トモ…『破壊の杖』の奪還（追加EXP…3 報賞…任意のアイテム一点を得る）

・ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール…『破壊の杖』の奪還（追加EXP…3 報賞…任意のアイテム一点を得る）

・シエスタ…ギーシュと決闘（追加EXP…1 報賞…一回だけギーシュに命令が出来る）／『破壊の杖』の奪還（追加EXP…3 報賞…任意のアイテム一点を得る）

ギルド名…『アブソリュート・ゼロ』

・ギルドスキル…耳打ち

挿話 酒場（みらいのできごと）

冒険者？ ……ああ、あの連中か。

けど、何で連中の事が知りたいんだ？

……『冒険者になりたい』！？

おいおい、始祖様に喧嘩でも売りにいくつもりかよ！？

そりゃ異端認定こそ受けてないけどな、ロマリアの坊主共だっていい顔しねえぞ？

……まあ、メイジ様だっておいそれと手出し出来ねえってんで、ほとんども黙認だよ……

……解った、解った！ 教えてやるから頭を上げろよ！

ったく、此処の払いはお前持ちだからな。

……へへっ、悪いな。おおいマスター！ 一番上等なエールを持っ
て来てくれ！

お代はこいつが持つからよ！

……で、何が知りたいんだ？

……冒険者の目的が知りたい、ねえ……

それも知らないで冒険者になりたいなんて思ったのかよ。

……まあいいや。で、目的だったわけ？ 確か『神様をぶち殺す』だったぞ。

ああ、神様って始祖ブリミル様の事じゃない。連中が言ってるのは『運命の神』^{デウス・エクスマキナ}って奴だ。

俺も詳しくは知らないんだが、連中に力を授けてる神様だそうだ。んで、力を寄越す代わりに自分を殺せって言ってるらしい。

……どうしてそんな事をするのか、ってか？

なんでも、この世界は暇を持て余した神様に創られたんだとさ。

その際に鳥やら獣やらより人間は弱く創られたって言う話だ。

でも人間は頭を働かせて獣や鳥を追い払い、世界を自分の物にしたんだそうだ。

それを見た神様が激怒して人間を滅ぼそうとしたんだが……

何回滅ぼしてもしぶとく甦って来る人間を見て、神様も考え方を改めたらしい。

そもそもこの世界を創ったのは暇つぶしだった訳で、何で暇かって言うとなんか神様だから死ねないから、なんだと。

で、人間ってのはそんな神様でも予想がつかない成長をするらしくてな。

事と次第によっちゃあ、神様より強くなれる可能戦があるんだ。

そこで神様が人間に持ち掛けたのが『冒険者の力を与える代わりに自分を殺せ』って契約なのさ。

……判ったろ？

要するに神様の自殺を兼ねた暇つぶしの為の玩具なんだよ、冒険者ってのは。

しかもこの目的を諦めると冒険者じゃなくなっちゃう。力も道具も何もかも失って、ただの人間に逆戻り。

実際、そうやって力を失った冒険者ってのは結構居るらしいぞ。

お前も気を付けろよ？ 冒険者になりたいってんだったらな。

……次は冒険者の能力が知りたい、ってか。

まあそれを聞きたくなるのも判らんじゃないがな。

なんせメイジ様だって敵わねえあのエルフとガチ勝負出来るっていうし。

まさに超人って感じだもんな、憧れるのも無理はねえ。

で、だ。出来る事っていうか……あいつらは自分の力を正確に把握してんだよ。

何が出来て、何が得意なのかを数字にして表すのさ。所謂『レベル』って奴だ。

修行とか実戦とかの経験を積みればLvは上がるし、逆にLvが下がる場合もある。

それにLvにも種類があつてな、ものによって種属LvとかクラスLv、スキルLvとかに別れるんだ。

まず種属Lv。こいつは基本的な能力を表すLvだ。

体力、知力、感覚、敏捷、器用、魅力、精神、幸運の八つと、それにHP、MP、SPの三つがある。

体力ってのは腕っ節の事だな。これが高いと身体の頑丈さも上がって来る。

知力は頭の出来を示してる。どんだけ小狡く立ち回れるかってのも

こいつが決めるんだ。

感覚つつうのは目や耳がどれだけいいかを表してる。所謂カンって奴も鋭くなって来るぞ。

敏捷はすばしっこさだな。高Lvになると馬どころか竜とすら競争出来るって話だ。

器用ってのはそのまんまだ。手先だけじゃなくて体全体の使い方に関わって来るがな。

魅力……これも見たまんまだな。顔の造りだけじゃなくて人を引き付けるカリスマとか雰囲気だとかにも影響がある。

精神、要は根性の事だな。魔法系の奴らにゃ割と重要な数値らしいぞ。

幸運は文字通り運の良さを表してる。他にも色々在るらしいが……

で、残り三つ。

HPはヒットポイントの略で、生命力を表してる。これが無くなる と死んじまうから気を付けろよ？

MPはマインドポイント、メイジ様の言う精神力に相当するらしい。SPはスタミナポイントって言って、どんだけタフかを示すって言うぜ。こいつが尽きるとピクリとも動けなくなるらしい。

これらはステータスって呼ばれてる数値だ。んで、種属によって色々変わる。

俺達人間は『ヒューマン』って言う種属で、得意は無いけれど苦手もないって言うのが特徴だって話だ。

で、それを使って『何が出来るのか』を表したのがクラスLvだな。剣や槍を使って直接戦うのがウォーリア系、メイジ様みたいに魔法を使うのがスペルマスター系、道具や薬を作るのがマイスター系。それに猟師とか農夫とかの普通の仕事を表す一般技能系を加えて四つの系統に別れてる。

そしてそれぞれのクラスで『何が得意なのか』を表すのがスキルLV、このスキルって奴を使うのに必要なのがMPって訳だ。

で、冒険者ってのは限界が無いから鍛えれば鍛えた分だけ強くなれる。

冒険者が超人って言われる所以だな。

先刻も言った通り、冒険者ってのは限界無く成長出来る。そうすると普通の道具じゃ冒険者に付いていけないんだ。

じゃあ連中がどうしてるかってえと、金や宝石みたいな価値のある物を神様に捧げて、欲しい道具をもらうんだと。

それが『神器』って奴さ。確か『アクセサリー』と『アイテム』に別れてた筈だ。

アクセサリーってのは武器や防具みたいな身に着ける道具のことだ。指輪とか首飾りみたいなのもあったぞ。

アイテムってのは薬みたいな使い捨ての道具だ。薬だけじゃなくしてお守りなんかもこれに入るな。

で、神器てのは冒険者以外には使えないらしい。

実際、冒険者以外の人間に冒険者の薬を使っても何の効果も無かったって言うぜ？

おまけに神器は壊れたり腐ったりしないんだ。その上、使う奴に凄い力をくれるのもあるって話だ。

……まあ、話だけ聞いていると凄え便利に聞こえるかも知れないが、それが使えるようになるにはやっぱり努力が必要なんだ。

それもLVが上がれば上がるほど要求される努力も大きくなっている。

それが原因で心が折れて冒険者の資格を失う奴がほとんどだって聞くぞ？

結局冒険者になっても最後にものを言うのは自分自身ってことだな。

……冒険者になる方法が知りたい？

これまた単刀直入に来たな。ちょっと面食らったぜ。
あー、冒険者になる方法だったな？ 結構簡単だぞ。

『神様に祈る』、これだけだ。

……嘘や冗談じゃないぞ、本当にこれだけなんだ。だから怒るな。
……ああ、本当にそれだけだ。つつつても始祖様じゃない、連中が
信仰してる『運命の神様』の方だよ。

神様に向かって「冒険者になりたい」って祈るんだ。で、神様が「
こいつは冒険者に相応しい」って認めると冒険者になれる。

……認められる為の条件？ 知らんよ。

何でも『絶対諦めないこと』が絶対条件らしいが、努力してても認められなかった奴なんざごまんと居るしな。

……ああ、高レベルの冒険者の手引きがあると認められ易いってのは聞いたことがあるな。

認められると教会の鐘みたいな音が聞こえて、『運命神の聖印』つてのが現れるからすぐ判るぞ。

聖印は『ステータスを確認する』、『神器を購入する』、『ギルドを組む』なんかに使われるらしい。

……ん？ 『ギルド』って何だ、って？

冒険者が寄り集まって一つの集団になったもんさ。

大体四、五人くらいで構成されてて、『リーダー』って呼ばれる奴

が頭を務めてる。

パーティを組むと色々恩恵があるんだが、その使い方を決める権限を持つのがリーダーの役目なんだと。

その恩恵を活かす為に必要なのが『拠点』だな。所謂アジトって奴だ。

……後な、冒険者ってのは何者にも従わないんだ。

そりゃ神様を殺そうって大それた連中が、今更王様だの神官だのに従う訳無いわな。

でも冒険者だって稼いで喰わないと死んじゃう。

でも仕事を持つってことは誰かに従うってことでもある。

だから連中は『依頼を果たすことを運命神に誓う』ってこじつけて仕事をするんだ。

それを『誓約』^{クエスト}って言うらしい。

クエストを果たすと依頼人からの報酬だけじゃなくて、神様からのご褒美が貰えるんだ。

この報酬を受けるのに必要なのが『拠点』だな。他にも色々役に立つようだが。

貰えるのは道具だったり、見えない加護だったり、新しいスキルだったり色々あるが、普通にしてたら絶対貰えないような凄いものらしいぞ？

その代わりクエストに失敗すると天罰が下るんだ。

何が起こるかはその時になってみないと判らないが、酷いことになるといきなりおっ死んじまう事だってあるっつうぜ？

ギルドの恩恵は他にもあるぞ。一番有名なのが『耳打ち』とか言われるアレだな。

同じギルド同士なら、どんなに離れていても聖印を通じて会話が出るってやつ。

慣れて来ると口に出さなくても会話出来るようになるらしい。

……嘘みてえだが本当の話だ。実際にゲルマニアとガリアに散った仲間とトリステインで会話したって記録があるし。

竜駕籠なんか問題にならないくらい素早く話が伝わるぞ？ 冒険者が手強い理由の一つだな。

……何だ？ なんか腑に落ちないって顔してるぞ？

……ああ、冒険者が群れる理由か。

そりやお前、あいつら誰にも仕えないから誰にも頼れないんだぞ？ だったら仲間同士で助け合うしかないだろう。

自分が得意な分野で仲間を助けて、その代わり仲間が得意な分野で助けてもらうって言うのがギルドを組む最大の理由なんだ。

一人で冒険を続ける『ソロ』ってのも居るが、そう言う奴は大概早死にするってのが常識だ。

冒険者になりたいなら、信頼出来る仲間を見つけるのも大事だぜ？

……もう充分か？

うん？ 何で俺が冒険者に詳しいのかって……？

いいじゃねえかよ、そんな事。

……それより、判っただろ？

冒険者ってのは言われているような気楽なもんじゃない。常に死と隣り合わせの危険なモンだ。

その上誰にも助けてもらえないっておまけ付き。

それでもなりたいかい、冒険者に？

……そうか、判った。じゃ、これ持ってお前の親父に見せてこい。
「酒場で呑んだくれてる爺からだ」って言えば判る筈さ。後はお前の親父が教えてくれるぜ。

どうして親父が、って面だな。そんなもん直接訊いた方が早いぞ。ほら、さっさと行きな！

……やっぱりあいつの子だな。血は争えねえ。

……なんだよ、そのにやけ面はよ？

ふん、かつてトリステインにその名前を響かせた大冒険者、『凍れる刃』ともあろうお方が、今やすっかり呑み屋のマスターかよ。

……ああ、あの餓鬼が『トリスタニアの大津波』と呼ばれたあいつの子供さ。アンタの右腕だったあいつだよ。

……そうだな、もうあんなに大きくなっちまった。そりゃあ俺達だって老けもするってもんさね。

……止めてくれよ、その名前で呼ぶのは。俺はもうシーフでもニンジャでも無え、『夜闇の鴉』はもう居ないんだ。

だからあの聖印もただの飾りに過ぎねえよ。

重なる三本の剣に籠められた『運命』と『未来』、そして『神』に挑む誓いを破って冒険者の資格を失った俺じゃ、二度と輝かないさ。

……マスター、タルブのいい奴があったろ？ 空けてくんねえかな。

お代ならホレ、この通り。

……『幸運のワイン』？ おいおい、すげえ奴持って来たな。

これってあれだろ？ 『タルブ事変』の年に仕込んだ奴。あの事件でおじちゃんになった樽の中で、唯一無事だったって触込みの。

貴族様だって滅多にお目に掛かれないって代物だぜ？ いいのかよ？

……まあな。俺達の後輩が誕生しためでたい日だ。これくらいの贅沢は許されるか。

じゃ、マスターも付き合ってくれ。どうせ他に客なんざ居ないんだ。

店閉めたって文句は出ねえよ。

……おう、じゃあ……

『我らの後輩の未来と』

『我らが先輩、はじまりの冒険者達』『アブソリュート・ゼロ』に』
……『乾杯だ!!』

挿話 酒場（みらいのできごと）（後書き）

まずはお読みいただき有り難うございました。

お待ちいただいた方には申し訳ありません。

あの地震から半年以上が経ち、ようやく自分の周囲も落ち着いてきました。

さあ気張って続編を、と自作を読み返すと以前は気が付かなかった欠点が出るわ出るわ。

このままではいけないと思いたち、ルールの大幅改定とそれに伴う全話修正に踏み切りました。

余りに身勝手ではありますが、読者の皆様にはどうかご理解いただきました。伏してお願ひ申し上げます。

第二章も鋭意執筆中ですので、今暫くお待ちいただけると嬉しいです。

それでは、今後とも宜しくお願いいたします。

幕間

ルイズ（ry（以下ル）…ルイズとー！

シエスタ（以下シ）…シエスタのー！

ル&シ…なぜなにTRPGー！

ル……とりあえず言ってみたけれど、何これ？

シ…要するに、今までちよろちよろ出してきた設定をまとめようって企画ですね。所謂気分転換と言う奴です。

ル……それは良いけど、どうして対談形式に？ 正直やり辛いんだけど。

シ…作者曰く「番外編だし、折角だから俺はこの書き方を選ぶぜ！」との事です。実際はリプレイ形式を一度やってみたかっただけのようですね。思った以上に書き辛くて後悔してるみたいですが…

ル…まあいいわ。それじゃ、早速始めましょうか！

■■■■TRPGってなに？■■■■

ル…さて、まずは「TRPGとは何か？」の解説から始めましょうか。

シ…そうですね、じゃあ……

『詳しくは適当なルールブック、またはリプレイを読め！』

以上！ お疲れさまでした。

ル…ちよつとちよつとシエスタ！ それは幾ら何でもはしより過ぎ！

シ…でも一番判り易いですよ？

ル…そ、それはそうだけど……、とにかく駄目よ！

シ…チツ……、判りました。え、TRPGとはテーブルトーク・ロールプレイングゲームの略称です。DQやFFみたいなRPGの元祖で、キャラクターを演じて遊ぶ（ロールプレイ）ゲームの一種ですね。テーブルトークの名の通り、大勢で集まって卓を囲む様は結構圧巻ですよ。……事情を知らないと、何やら怪しい集団にしか見えませんが……

ル…しっ！ それは言わない約束よシエスタ！ あ、なんでそんなに大勢いるのかって言うと、ゲーム機と違って進行役が必要になるからよ。この進行役をゲームマスター（GM）って呼ぶわ。そしてプレイヤーは一人につき一つのキャラを受け持つの。これがプレイヤーキャラクター（PC）ね。

シ…このGMとPCがお互いに会話トークしながらゲームは進みます。GMはシナリオと呼ばれる筋書きに沿って話を進め、PCたちの状況を解説します。それにPC達がどんな対応をするのか、どんな行動をとったのかをGMに報告して、またGMがその結果をPCに伝えてを繰り返す訳です。

ル…でも、GMとPCがそれぞれ好き勝手に行動してたらゲームにならないでしょ？ だから何をするのか、何が出来るのかを明文化したルールがあるの。例えば「ゴブリンが襲ってきた！」ってシチュエーションを再現するとするわね。まずGMはゴブリンの強さを決める。ここで「俺のゴブリンはドラゴンより強いぜ！」とか言い出さないように、ゴブリンの能力は定められているの。もちろんPCも同じ。「ぼくのかんがえたさいきょうのゆうしゃ」とか「永久力吹雪！ 相手は死ぬ」みたいな連中が湧かない様に、ルールに沿ってキャラ設定を作り込むのよ。

シ…この小説で言うなら、文末に列記された数字がそうですね。

ル…次に、襲ってきたゴブリンに対してPC達がどう反応するかを決めるの。反撃しても良いし、逃げ出しても良い。変わった所では懐柔するとか、捕獲するって言うのもあるわね。

シ…作者の知ってる例では「人質をとって言うことを聞かせた」なんてのがありました。

ル…何それ酷い。……とにかく、PCは自分達の行動をGMに報告するの。そうしたら、GMはそれが成功するのか失敗するのかを判断するのね。それが「判定」とか「ジャッジ」とか呼ばれる行為よ。それぞれの能力値を基準に、サイコロやトランプなんかを使って判

断される事が多いわ。

シ…ちなみにサイコロのことは「ダイス」と呼びます。大体六面から十面体の奴が使われています。百面体ダイスなんてのもありますが、あれはもうゴルフボールですよ？

ル……突っ込まないわよ。で、GMは判定の結果をPCに伝え、PCはそれを元に次の行動を選択するの。こちら辺は決まったことしか出来ないコンピュータゲームとの違いね。先刻の例もそうだけど、会話で進めるTRPG最大の魅力はこの自由度にこそあるわ！ルールが許す限り、PCの選択肢は無限にあると言っても過言じゃないの。「戦闘を継続する」、「適当に追い払って逃げ出す」、「懐柔を試みる」、もちろん「人質を取って脅す」もあり！ゲームとは言え勝ち負けが決まったものじゃないから、遊び方もGMやPC次第で幾らでも変わるのよ。

シ…ですが、その所為で逆に取っ付きにくい人もいますね。遊び方が判らないとか……

ル…まあ、実際にやってみないと判らない所もあるからねー。そう言う人のために、プレイ内容を文章に起こしたものがプレイよ。そういや最近知ったんだけど、プレイって日本独自の文化らしいわね。

シ…ああ、SW2.0のリプレイでそんな事書かれてましたね。

ル…有名どころだと「ソードワールド」、「アリアンロッド」、「ナイトウィザード」あたりかしら？ ラノベを扱ってる本屋さんなら大体置いてあるわ。中にはアニメ化された「ロードス島戦記」のような作品もあるから、一つぐらいは聞いたことあるかも知れない

わね。

シ…ロードスと言えば、あのエルフ娘の中の人は……

ル…駄目よシエスタ、それ以上いけない！ 何事にも黒歴史は潜んでいるのよ！ ……とりあえず、TRPGがどんなものであるかは理解してもらえたかしら？ もし興味があるなら、是非お友達を誘って遊んでみてね！

■■■TRPGの専門用語■■■

ル…さて、じゃあ折角ダイスの話も出た事だし、TRPGで使われる専門用語を幾つか紹介するわね。まずはこの小説でも時々出て来る「d6」について説明しようか。

シ…先程も出ましたが、TRPGではサイコロのことを「ダイス」と呼びます。そして普通の六面体のサイコロを「d6」と表記するんです。十面体なら「d10」、二十面体なら「d20」と、dの後ろに付く数字で種類を見分けます。

ル…このd6の前に付く数字はダイスの個数を示しているの。2d6なら「六面体ダイスを二個使用する」って意味になるわね。大体のルールではこれが基準になっているみたい。

シ…この小説も基本2d6で判定しています。スキルや装備でダイスの数は増減するみたいですが、詳しくはまた次回に。

ル…そこまで説明しちゃうと長くなるから……。で、ダイスの目が揃ったりすると特別な効果が発生する場合があるわ。それが「クリティカル」と「ファンブル」ね。クリティカルは「絶対的成功」とも訳されていて、ゲームによっては判定が自動的に成功したりするの。逆にファンブルは「絶対的失敗」とも呼ばれていて、判定が自動的に失敗した事になるの。その効果はゲーム事に違うから一概に言えないけれど、この小説に置いては「6のゾロ目をクリティカル」、「1のゾロ目をファンブル」と定義しているわ。

シ…この小説のルールでは「クリティカルしたダイスを振り足す」、「ファンブルしたダイスを112する」と言う効果に設定しています。

ル…あと説明するとしたら「ターン」かな？ これはTRPG内の時間経過を表す単位の一つで、具体的な時間はルール事に異なるわ。他に「ラウンド」、「カウント」なんてのもあるけど、この小説では「ターン」を採用してる。

シ…所謂「ターン制」と言う奴ですね。これも後ほど。

ル…で、1ターン内でGM、PCが行動する順番を決めるのが「イニシアチブ」よ。これもルール事に違うから、詳しくはルールブックを確認してね。と、まあ取り合えずはこんな所かな？ 後は随時説明して行くわね。

シ…では、いよいよこの小説のルール説明に入りましょう。

ル…そうね。じゃあ、まず最初はキャラクター作成から説明するわね！

■■■キャラクターメイキング…ヒューマン篇■■■

ル…さて、これから自分のPCを作る訳だけど……

シ…先生、まず何を決めるのかが判りません！

ル…そうね、そこから始めましょうか。

※ヒューマン…x

体力…A／知力…B／感覚…C／敏捷…D／器用…E／魅力…F／
精神…G／幸運…y

HP…10／10 MP…10／10 SP…10／10 ※数値
は現在値／最大値

EXP…30+3d6 所持金…z

保有クラスとスキル

・なし

アクセサリ
装備品

・なし

所持品^{アイテム}

・なし

シ……何ですか、これ？

ル…これが私達ヒューマンの初期ステータスよ。それぞれの数値の意味は挿話を読んでもらうとして、ここでは数値の入れ方を説明するわね。まず、体力から精神までの数値は1d6を振って決めていくの。けれどダイスは気まぐれだから、思った通りの値にならない事もあるでしょう？　そこでステータスのA～Gまでの値は自由に入替える事が出来るようになってるの。

シ…例えば体力が1で知力が6になったけれど、自分はパワー馬鹿をやりたいんだ！　って場合は体力と知力を入替えられる、って事ですか？

ル…そうなるわね。

※1d6を7回振り、出た値をそれぞれA～Gに振り分ける。

どの能力値に振るかはプレイヤーの判断による。

ル…次にAとGの値を合計するの。それを42から引いた残りの数が幸運の値になるわ。

シ…引くんですか？

ル…幸運はちょっと特殊なステータスだから、完全なランダムには出来ないの。その代わり、これで全てのPCの能力値の平均が同じになるわ。公平ね。

※421（AとGの合計）＝yとなる。

ル…次に初期経験値を決めるの。これを使ってクラスとスキルを習得するってわけ。ちなみに全種属一律で初期経験値は30なんだけど、ヒューマンはそこに3d6を追加出来るの。ヒューマンだけのささやかなボーナスね。

シ…結構お得じゃないですか！ これじゃ皆ヒューマンを選ぶと思いますけど？

ル……まだ本編じゃ出てこないから判らないだろうけど、実はヒューマンって全種属中最弱の位置づけらしいわ。

シ……mjd？

ル…エルフとか、この小説には出てこないけどドワーフとか、とにかく亜人種には強力なボーナスが付いてるそうよ。ヒューマンの＋3d6って焼け石に水なの。トホホ……

※初期経験値に3d6を加える。

これはヒューマンのみ行う事が出来る。

ル…それじゃ、いよいよクラスとスキルを選ぶわよ。どのクラスを選ぶかによって能力値に変化があるから注意してね。スキル1Lvは10EXP、2Lvに上げるには20EXP必要になるわ。Lvが上がる毎に必要なEXPは二倍ずつ増えて行くのよ。

シ…クラスの系統って四つでしたっけ？

ル…そうよ。直接戦闘のウォーリア系、魔法を使うスペルマスター系、道具作成のマイスター系、それと一般技能系ね。それらを全部足したのが種属Lv、ステータス表でxになっている所の数値になるわ。そのLvがそのままボーナスポイントになるの。幸運以外の好きなステータスに割り振れるわ。そうそう、先刻の四系統だけど、一般技能系を除く三系統にはそれぞれHP、MP、SPに補正が付くよ。

シ…補正？

ル…例えばシエスタのランサーはウォーリア系でしょ？ そのLV分、HPに加算されてるのよ。同じようにスペルマスター系のスキルを取得すれば、今度はMPが増えるわ。

シ…じゃあマイスター系ならSPが上がる訳ですね。

ル…ええ。あ、一般技能系は補正がないとは言っても色々使える技能が多いから、持っていて損じゃないわ。後は趣味の問題よ、今後の成長との兼ね合いを上手く取って、貴方だけの冒険者を作ってね！

※EXPを10点払う事でクラススキルを1LVで取得出来る。
以降、1LV毎に必要なEXPは二倍になる。

※ウォーリア系のクラス1LV毎にHPに1点加算する。
スペルマスター系はMPに、マイスター系はSPにそれぞれ加算される。

※クラス毎に設定された能力値一つに、そのクラスのLVを加算する。

※クラスLVはクラススキルLVの合計値になる。
全クラスLVの合計がXの値になる。

※Xの数値を幸運以外の任意のステータスに割り振る事が出来る。

シ…そう言えばクラスって何処まで決まっているんですか？

ル…まだ殆ど決まっていけないわ。現時点で決まってるのはこれだけよ。

※ウォーリア系クラス

・セイバー（剣士）…長剣を用いて戦うクラス。／能力値補正…体力

・ランサー（槍兵）…槍や長柄武器の扱いに長けたクラス。／能力値補正…敏捷

・グラップラー（拳士）…素手か籠手での格闘をするクラス。／能力値補正…体力

・バーバリアン（重戦士）…斧や鎚での戦闘に優れるクラス。／能力値補正…体力

・サムライ（侍）…刀を使うことに特化したクラス。／能力値補正…敏捷

・アーチャー（弓兵）…弓による長距離攻撃を行うクラス。／能力値補正…器用

・シューター（銃手）…銃を装備して狙撃するクラス。／能力値補正…感覚

※スペルマスター系クラス

・キャスター（魔術師）…『魔法／理論』を使うクラス。／能力値補正…知力

・シャーマン（巫術師）…『魔法／精霊』を使うクラス。／能力

値補正…感覚

・ヒーラー（治癒術師）…『魔法／治癒』を使うクラス。／能力
値補正…精神

※マイスター系クラス

・アルケミスト（錬金術師）…アイテム製造が出来るクラス。／
能力値補正…知力

・ブラックスミス（刀剣鍛冶師）…武器・防具を作るクラス。／
能力値補正…器用

・ウィッチドクター（薬師）…使い捨てのアイテム作成に特化し
たクラス。

一般人にも効果があるアイテムを
造り出せる。

／能力値補正…感覚

※一般技能系クラス

・ネゴシエイター（交渉人）…交渉や説得に優れたクラス。／能
力値補正…知力

・ハウスキーパー（家政婦）…家事全般を得意とするクラス。／
能力値補正…器用

・ハンター（猟師）…狩りの技術に精通したクラス。／能力値補
正…器用

・セージ（賢者）…広く世の中の知識全般に精通したクラス。／
能力値補正…知力

・ライダー（騎兵）…様々な乗り物を操縦出来るクラス。／能力
値補正…器用

・ファーマー（農夫）…農業の専門家たるクラス。／能力値補正…
体力

・シェフ（調理師）…美味しい料理を造り出すクラス。／能力値補
正…器用

シ……あれ？ スペルマスターの『魔法／理論』って何ですか？

ル…まだ本編に出てきてないし、今は説明しないわ。系統魔法や先住魔法とは違う括りだし、そこまで含めると物凄く長くなるから。さて、ここまで来たらあと一息よ。次に決めるのは所持金ね。

シ…私、所持金が20スウしかなかったんですが……

ル…それは話の都合でそうただけよ。初期の所持金は2d6を振って決定するわ。けれど出目がそのまま所持金になる訳じゃなくて、まず2d6を振って境遇を決めるの。

シ…境遇？ あ、平民とか貴族とかを決めるって事ですか？

ル…その通り！ 境遇は「境遇表」で決定されるわ。そしてその境遇ごとに設定された基本額に2d6を掛け算した値が所持金になるのよ。ただし「境遇表」は現代日本が基準になっているから、ハルケギニアでは通じないの。エキューに換算し直してね。

シ…レートは1エキュー＝100スウ＝1000ドニエ＝二万円で計算してるそうです。ちなみに回復薬（小）って一本4100円なんですわ、これってとある栄養ドリンクの値段を参考にしたんだとか。

ル…ハルケギニア価格に換算するとき、めんどくさくなって端数を切り捨てたらしいわ。それがシエスタの初期所持金の元ネタになっ

てるそうよ。

シ…つまり、私の全財産は栄養ドリンク一本分しかないってことですか……

※2d6を振り、以下の表を参照して境遇を決定する。

		出目	出身	基本額
2		赤貧(※)	一百円	
3 ～ 4		苦学生	千円	
5 ～ 6		大学生	五千円	
7 ～ 8		フリーター	一万円	
9 ～ 10		正社員	二万円	
11		エリート	五万円	
12		富豪(※)	十万円	

(※) 採用にはGMの許可が必要。

(境遇の基本額) × (2d6) ÷ Zとなる。

ル…最後は装備品と所持品ね。コレについては特に言う事はないわ。さっき決めた所持金で買い物すれば終わりよ。強いて言うならわざわざお店に出向いて買い物しなくても良くて、いつでもどこでも購入可能ってことかしら。konozamaも真っ青の神様クオリティ万歳！　って感じ？

シ…何ですかソレ……

ル…ちなみに私とシエスタの所持品はゼロ魔本編に準拠しているわ。だから杖とか制服とかメイド服は神器じゃないのよ。あ、あと神器は装備することでステータスに補正が入る場合もあるわね。

シ…神器の補正は結構大きいですから、早めに神器に交換したいですわね。

……ファンブルしたら脱げるし（ぼそっ）。

ル…え？　何か言ったシエスタ？

シ…いいえ。……そう言えば、アイテムの後ろに付いてる「重量…」って何ですか？

ル…文字通りアイテムの重さよ。総重量がPCの体力と同じ値になったらそれが限界、それ以上は持てないわ。私や彼は重量無視出来る神器を持ってるから問題ないけどね。それと基本、神器は一種につき一つだけしか装備出来ないの。

シ…え？ それって剣だったらそれを二本持てないってことですか？

ル…ええそうよ、ここで言う装備品とは「即座に使える状態」のものを指すの。身に付けていたり、手に持っていたり、すぐ取り出せる様になっていたりするものの事ね。装備していない神器は所持品の項目に入るわ。これを使うためには改めて装備し直す必要があるのよ。

シ…それじゃ、いつかの薬はどうなるんですか？

ル…あれは購入直後だったから手に持ったままだったでしょう？だから薬を「装備した」状態だったというわけ。それと能力値補正のある神器は装備しないと効果を発揮しないから気を付けてね。

※所持金の範囲内で所持品を購入する。

※所持品は装備しなければ使えない。

※所持品は一種につき1つしか装備出来ない。

※能力値補正ボーナスは装備した時点で発生する。

装備を解除すると補正効果は失われる。

ル…さて、とりあえずPCの設定部分だけ説明したけれど、みんな理解出来たかしら？ 戦闘の処理とか、細かい判定周りはまた次回と言う事でお願いね。

シ…改定前とは随分変わりましたね。

ル…あれはまあ、適当に決めた奴だったから。おかげで思いつきバランスブレイカーになっちゃったし……。ちなみにこのルールは未完成版だから、突然仕様変更される場合があるわ。そこはどうかご了承いただきたいわね。

シ…でも、コレって公開する必要あったんですか？ なんだか設定

ばかりだし、読者の皆さんも「厨二乙」ぐらいしか思わないんじゃないや

……

ル…実は作者も迷っていたんだけど、改定前のルールに比べて複雑化してるから設定まとめを兼ねて公開に踏み切ったらしいわ。ついでと言っては何だけど、読者の皆さんにも協力をお願いしたいの。

シ…と言うと？

ル…簡単よ。「作ってほしいクラスとスキル」、あるいは「実装してほしいルール」を募集したいの。「こんなクラスがあったら良いな」とか、「こういうスキルがあると面白いんじゃないか？」みたいな希望があったら、作者宛にどしどし送ってちょうだい。採用される

可否かは作者が判断するけど、面白ければ何でも良いわ。あ、もちろんルールに対するツッコミやダメ出しも受け付けているわよ。

シ…作者は小心者ですので、なるべくお手柔らかにお願いしますとのことです。……だったら公開しなければ良いのに（ボソツ）

ル…それじゃあ今回はここまで。また次回お目に掛かりましょう。

シ……正直、コレ書く暇あったら本編の続き書いた方が良かったんじゃない……

ル…正論だけど駄目よシエスタ！ 作者が一番気にしてるんだから……

幕間（後書き）

と、言う事で設定解説&α版ルール公開です。
是非、皆さんのご意見をお聞かせください。
よろしく願います。

第十五話 成長（れべるあっぱ）

「うつく……えぐつ……」

ハルケギニアを照らす二つの月が一つになる『スヴェル』の月夜。
ヴァリエール公爵の屋敷、その中庭の池に浮かぶ小舟の上でルイズは毛布に包まって嗚咽を漏らしていた。

ルイズは魔法が使えない。けれどそれは彼女が努力していない所為ではない。

むしろ同世代の子供達において、今のルイズ程に努力するものも居ないだろう。

『ルイズ、まだお説教は終わっていませんよ！』

だが何事にも厳格であった母には通じなかった。

母にはルイズの努力よりも目に見える成果の方が重要だったのである。

その上、二人の姉の出来の良さがルイズの不幸に拍車を掛けた。

『ルイズお嬢様は難儀だねえ』

『上の二人のお嬢様はあんなに魔法がお出来になるって言うのに……』

母から逃げ出し、植え込みに隠れたルイズを探しに来た使用人達の何気ない会話。

使用人達からすら哀れまれていた事を知り、彼女の自尊心は脆くも砕け散った。

そんな時、彼女は『秘密の場所』と呼ぶ中庭の池に逃げ込む。

誰も居ない此処でなら、ルイズは誰に憚る事なく泣く事が出来たの

だ。

夜闇を照らし出す片割れの月光で仄紅く照らし出された中庭で、ルイズが暫く啜り泣いていると……

「泣いているのかい、ルイズ？」

いつの間にか立ち籠めた霧の向こうから声が掛けられる。

白い石で作られた東屋が建つ池の小島に、マントを羽織った貴族が立っていた。

「子爵様、いらしていたの？」

ルイズは慌てて居住まいを正し、先程まで涙に暮れていた顔を背ける。

彼の事は良く知っていた。最近自領を相続したばかりの将来有望な少年。彼女にとって憧れの存在であった。

両親の覚えもめでたく、特に父と彼の間に交わされた約束はルイズの胸をほんのりと熱くさせた。

「今日は君の父上に呼ばれたのさ。『あのお話』の事でね」

「まあ！ ……いけない人ですわ、子爵様は」

「僕の小さなルイズ。君は僕の事が嫌いかい？」

頬を染めて俯くルイズに子爵は戯けながら尋ねて来るが、彼女は小さく首を振った。

「そんな事はありませんわ！ ……でも、私、まだ小さいし、よく解りません」

その答えに子爵は小さく笑みを浮かべると、小舟のルイズに手を差し伸べる。

「ミ・レイディ。手を貸してあげよう。ほら、つかまって……」

「でも……」

「また怒られたんだね？ 安心して、僕からお父上に取りなしてあげよう」

差し伸べられた手はまだ六歳のルイズには大きく感じられた。

たった十歳違いの少年のそれは、力強い自信に満ちあふれている。

ルイズの小さな手が、子爵の手を取ろうとしたその時、

「何やってるのルイズ！ 置いて行くわよ！！」

背後から掛けられる声。

思わず振り返ったそこにあったのは、見慣れた中庭の光景では無かった。

天高くそびえ立つ、重厚な意匠の黒く巨大な扉。

到底人の手では開きそうも無いそれが今、たった一人の手によって少しづつ押し開かれていく。

そしてどこか見覚えのある人々がルイズを手招きしていた。

メイド服の上に白銀の軽装鎧を着けた黒髪の娘が居た。

自身の身長よりも長大な突撃槍を抱え、緊張に強ばる表情にはほんの少しだけ期待感が浮かんでいる。

肌も露な革製と思しき衣装を纏った紅い髪の女性が居た。

その手にあるのは杖でなく長距離用のライフル銃、けれどルイズの知る限り総金属製の銃なぞ存在しない。

黒いマントに同じく黒いとんがり帽子を被った青い髪の少女が居た。大きな杖と謎の書物を何冊か抱えており、幾つもの古傷が刻まれた立派な風竜を従わせている。

他にも何人か居るようだが、逆光になってよく見えない。

そして今、門を開き切った人物が鮮やかな緋色の陣羽織を翻して振り向く。

背に大太刀を、腰に二本の剣を佩いたその男は満面の笑みを浮かべ、ルイズに向かい手を差し伸べる。

「さあ、行きましょう、『大迷宮』へ！」

——この先で待つ『神』の元へ——

ルイズは迷う。

子爵と共に父の元へ向かうか？

それとも……？

迷いは一瞬。ルイズは——

目覚めたルイズが見たものは、二つの月明かりに煌々と照らし出された自分の部屋。

けれど一瞬、彼女は此处が自室である事に気付けなかった。

「……夢？」

寝ぼけ眼で室内を見回し、ここが一年と数ヶ月を過ごしたトリステイン魔法学院の女子寮である事を思い出す。

随分懐かしくて寂しい夢だったなあ、等と思い返し、ルイズはあれ？と首を捻った。

夢の最後に、子爵ではない誰かが出て来たような気がする。

何か重要な事だったような気がする、だがどうしても思い出せないので早々に諦めた。

時刻は夜半過ぎと言った所か。二つの月がいつもより接近していたのを見て、ルイズはもうすぐ『スヴェル』の月夜なのだな、と思いついた。

何にせよまだ夜中、もう一度寝直そうとベッドに潜り込もうとして、彼女は部屋の片隅で丸まっている人影に気が付いた。

壁に背を預けてデルフリンガーを抱え、胡座をかいて眠っているのは彼女の使い魔（偽）であるヤナギダ・トモその人である。

毛布に包まって縮こまるその姿はとても寒そうに見えた。

苦笑いを浮かべ、ルイズは自分の毛布を手にとって彼に歩み寄る。

もう一枚毛布を重ねてやれば寒く無かろうと言う思いやりであった。

もう一度言う。ルイズはあくまで毛布を分けようとしたただけだ。

だから思ったより大きな毛布に足を取られてスッ転び、ものの弾みで彼女の頭が丁度彼の股間に激突したのは、不幸な事故以外の何者でも無かった。

「うきゃあああああっ！？」

「ぐばおおおおおおっ！？」

『男の股間に顔を埋めた』羞恥から悲鳴を上げるルイズと、『男の急所を直撃された』激痛から絶叫を上げたトモ。

タイプは違えど真夜中にそんな大声を出されれば大迷惑であり、被害を被ったご近所が怒鳴り込んで来るのは地球でもハルケギニアでもよくある事だ。

「ちょっとルイズ！ 一体今何時だと思っ……て、る………の？」

セオリーに従い苦情を入れに来たお隣さんであるところのキュルケが目撃したのは、股間を押さえて蹲るトモと真っ赤に染まったルイズの姿。

凹凸の乏しいルイズの肢体はキュルケより女性としては劣るが、その分危険な魅力に満ちている。

そしてふんだんにフリルを使用しているとは言え、所詮薄絹一枚にしかすぎないネグリジェではその肢体を隠し切れない。

特定の趣味の方々なら拝み倒したくなる光景だ。

（……ああ、そういうことだったのね）

毛布を胸元にたぐり寄せて涙目になったルイズに、ベビードールの上に羽織っていた男物のシャツを着せてやる。

突然の行動に戸惑うルイズに、キュルケは沈痛な表情で首を振った。

「……大変だったわねルイズ。でも、殿方は私達よりも繊細なのよ？」

その……二度と使い物にならなくなったりしたら、大変でしょう？」

「へ？ ……ちょっと、何言ってるのよ！？」

一拍遅れて台詞の意味を理解したルイズが顔を真っ赤に染めて抗議するも、キュルケは優しく微笑んで全く取り合わない。

それが全くの誤解である事も気付かないままに。

「だから、違うのよ!! アンタからも何か言ってやって……?」

何を言っても聞き入れないキュルケに根負けしたルイズは、もう一方の当事者に援護を要請する。

けれどその言葉には何の反応も返ってこなかった。

そして彼女の背後には、未だ『急所』を押さえてのたうち回るトモの姿があった。

「……幾ら何でもやり過ぎよ、ルイズ」

「だーかーらー、違うんだってば!!」

あまりの苦しみ様に引くキュルケと駄々っ子の様に手足をばたつかせて抗議するルイズ。

微笑ましくも深刻なすれ違いが続くその後ろで、被害者兼容疑者であるトモは内心でこう思わずにはいられなかった。

ああ、これがお約束と言う奴なのか、と。

「……酷い目に遭いました」

「けけけ、旦那も隅に置けないねえ?」

「デルフ君まで言いますか。何度も言うようですが……」

「判ってるって。まあ、あんな乳も尻も無い娘っ子にや、色気のいの字も無いしな」

「さて、稽古を始めますか」

「……否定してやらないんだな、旦那」

明くる日の早朝、ヴェストリの広場にて日課の鍛錬に勤しむ一人と一本の姿があった。

身体を解しながら昨夜の事件を愚痴るトモと、それに便乗して酷い事を言うデルフリンガー。

いつものコートを纏って柔軟をしている姿は学園の使用人達の間で噂になる程度にはシュールであったのだが、今日はそれに輪を掛けてシュールな光景が広がっていた。

屈伸しているその足下、昨日まではスニーカーだった靴が謎の履物にすり替わっている。

足袋と草鞋と脚甲を組み合わせたようなそれは防御力は殆ど無いに等しいが、ある恩恵を装着者に齎す神器であった。

「さて、本邦初公開と行きましょうか」

そう言うと、トモは軽くランニングを始める。

けれどその足取りは段々早くなって行き、遂には文字通り目にも留まらぬ速さで中庭を走り抜けていった。

その名は『韋駄天の具足』。

その能力は『装着者の敏捷値を＋3する』というもの。

底上げされた敏捷値が趣くまま、今のトモは文字通り韋駄天の如き早さを獲得していた。

「凄え！ 馬より速く走る人間なんか初めて見たぜ！」

「そ、そいつは重畳……ぜひゆーっ、ぜひゆーっ……」

とは言え、馬ならぬ身で全力疾走出来る距離などたかが知れている。はしゃぐデルフリンガーとは対照的に、調子に乗って走り回ってし

まったトモは呼吸困難に陥っていた。

「はあっ、はあっ……調子に乗り過ぎましたね」

「旦那は結構うっかり者だね。氣いつけたほうがいいぜ？」

「肝に銘じておきます」

汲み置きの水で汗を流し、鞆に納めたデルフリンガーを背負って両の頬を叩き、気合いを入れる。

ちらほらと現れ始めた使用人達にすれ違いざま挨拶を交わしつつ、トモは昨夜の惨劇の舞台となったルイズの部屋に向かった。

一方その頃、惨劇の片割れたるルイズは未だ惰眠を貪っていた。

目覚まし時計が鳴り出す寸前、その頭を勢い良く叩いて黙らせたルイズは毛布に包まって寝返りを打つ。

「んみゅう……あと五分……」

定番の寝言を吐いて毛布に包まるルイズ。だがその毛布が勢い良く引き剥がされる。

朝方の冷え込んだ空気がルイズの柔肌を撫で、彼女の至福の時は終わりを告げた。

「ひえええええっ、何事!？」

「何事、じゃありません。もう朝ですよ?」

突如天国から地獄に突き落とされたルイズがパニックを起こして飛び起きる。

その目に飛び込んで来たのは、ここ数日ですっかり見慣れてしまったメイド服だった。

「……シエスタ？」

「ほらほら、もうすぐトモさんも鍛錬から戻ります。その前に支度を整えましょうね」

寝ぼけ眼のルイズを洗面台の前まで引っ張り、顔を洗わせる。

そして彼女が顔を洗っている間に着替えを用意し、手早く着替えさせてピンクブロンドの髪を櫛で梳く。

「……ねえ、まだ朝食には早いと思うんだけど？」

「駄目です！ そう言って二度寝した挙げ句、危うく遅刻しそうになったのをお忘れですか？」

朝に弱いルイズが早起きになったのはごく最近の話。

原因は言うまでも無くトモの持ち込んだ『目覚まし時計』である。

見掛けはただの時計だが、これは『状態異常』を回復させる効果を持つ立派な神器なのだ。

神器は冒険者以外には使えない、故にルイズでは目覚まし時計を止められなかった。……今までは。

冒険者に目覚めた以上、彼女もまた神器を扱う資格を持つ。

毎朝繰り返し返される目覚ましvsルイズの対戦カードは常に彼女の勝利で終わり、業を煮やした皆の依頼によってシエスタが派遣された、と言う訳だ。

キュルケ達から「容赦しなくていいわよ」と言う言質を取った彼女は、前述の貴族相手とは思えない容赦のなさを発揮して依頼を完遂。彼女が「ねぼすけ相手にはこれが一番です！」と言うだけあって効

果は抜群で、事実それ以降ルイズは一度も寝過ごしていない。
その上、同時にルイズの身支度の世話から部屋の片付けまでついでに片付けてしまうのだ。

冒険者の超人的な身体能力の恩恵を十全に活かした結果である。

「……この上なく無駄な使い方だけどね……」

「何かおっしゃいましたか？」

ぼそりと漏らした呟きを聞きつけ、シエスタが訝しむ。

慌てて誤摩化すルイズの目に、鈍色に輝く無骨な箆手が映る。

シエスタの箆手には似合わないそれは、銘を『剛力の箆手』と言う。
装備すると体力を＋3する中々に強力な代物だった。

「ねえ、シエスタ。何も今着けてなくてもいいんじゃないの、それ？」

「え？、ああ、これですか。いえ、今までこういうの着けた事無いので、早く慣れる為に普段から着けてるんですよ」

「ふうん。……まあ、判らないでも無いけどね」

冒険者の生命線たる神器がおしゃれな小物扱いされているような気がするが、ルイズは華麗にスルー。

制服に袖を通し、マントを羽織った彼女が手に取ったのは杖ではなく折り畳まれた扇子、いや鉄扇である。

畳まれていて見えないが蛇のような生き物と大きな猫が透かし彫りにされ、中々見事な細工が施されている。

トモ曰く蛇のような物は東洋の龍であり、大きな猫は虎であるらしい。

『竜虎の鉄扇』と言う名のこれは小型のハンマー程度の攻撃力を持つが、鉄製故に重いので敏捷値から－1されると言う欠点を持つ。けれどこの鉄扇の真価はその能力にあった。

これを装備する者と同じギルドに属する者に途方も無い幸運を与える、と言う信じ難い能力。

この効果は使い捨てで、『三回』使ってしまうとただの鉄扇になってしまう。

遣いどころを考える必要があった。

「なんて言うか、その……、神器ってつくづくインチキ臭いわよね。何よ途方も無い幸運って」

「で、でも有効なのは間違いありませんし、あのモップでお掃除するといつもより奇麗になりますし」

以前トモに漏らした愚痴をシエスタにも聞かせるが、少しずれた答えが返って来た。

彼女の得物であるモップは武器であると同時に清掃効率を上げる効果がある。

そんなこともあり、今やこのモップは公私にわたって彼女の相棒となっているのだが……

「……ルイズ様、どうされました？」

「ん、何でも無いわ。そろそろ朝食よね、行きましょうシエスタ」

何と返事して良いのか判らず、黙り込んだルイズを氣遣うシエスタ。誤摩化するように微笑み、ルイズは朝食を摂るべく食堂へ向かった。

「ルイズ様、杖！ 杖をお忘れですよ！？」

「あ！？」

赤面して杖を受け取るルイズの照れ隠しは大層可愛かった、とシエスタは同僚に語ったと言う。

さて、冒険者たちが新たに手に入れたのは道具だけではない。

ギルド結成に伴い、彼女達は『拠点』と『リーダー』を定める事になった。

『拠点』とはそのまま本拠地になる場所の事で、『リーダー』とはギルドの方針を決定する代表の事だ。

だが色々と常識はずれの『冒険者』のこと、いずれも文字通りの意味ではない。

クエスト達成時に『冒険者』達が受け取る報酬は二つある。即ち依頼者から払われるものと、『運命の神』から賜るもの。

報酬と言っても物品とは限らない。中には形にならぬ加護や特別なスキルも含まれる。

それらを授かる場所が『拠点』なのだ。他にも『拠点』があつて初めて効果のあるギルドの恩恵もあつたりする。

それに常時発動タイプならともかく、基本的にギルドの恩恵は『リーダー』が承認しないと発動しない。

『冒険者』にとってこの二つは絶対必要な条件でもあるのだ。

「とりあえず、『拠点』はご主人の部屋でいいですかね？」

「『拠点』って、後で変更効くのね？ それなら良いわよ」

そんな会話が交わされ、『拠点』はあっさり決まる。実質十秒も掛からないスピード採決であった。

しかし『リーダー』については紛糾した。この件に関してルイズと

トモの間で意見が割れたのである。

「貴方が『リーダー』をするべきでしょう？ 冒険者の事は貴方が詳しいんだから」

「貴女が『リーダー』になるべきでしょう？ 社会制度上は貴女が上なんですから」

何と互いに互いを『リーダー』に据えようとしたのだ。

ルイズにしてみれば同じ新米冒険者であっても、冒険者に対する造詣が深いトモの方が『リーダー』として最適に見えた。

トモから見ればハルケギニアにおける特権階級『貴族』を肩書きに持つルイズを『リーダー』に据えるのが良策に思える。

両者の食い違いは『冒険者である事』を重視するルイズと、『ハルケギニアでの生活』を重視するトモとの姿勢の違いから来ていた。

……立場が逆転している事に気付き、どちらとも無く目を逸らしたのはそれから間もなくの事だった。

「止めましょう。不毛です」

「同感ね」

「ですがご主人を『リーダー』に押すのは冒険者側から見ても妥当なんですよ」

「えっ？」

トモ曰く、ルイズのスキル構成は指揮者型なのだという。

彼とシエスタはウォーリア系、前衛に立つ戦士である。最前線で戦う彼らでは戦況把握は難しい。

だから『リーダー』は後衛型、それも戦況を理解し自分達に有利になるように運べるクラスが相応しい。

ルイズのクラスは『セージ』、戦況を把握し管理するにこれ以上相応しいクラスがあるのか。

「……判ったわ。とりあえず暫定ってことで良ければ引き受けるわよ」

『リーダー』の座を賭けた押し問答の結果、先に折れたのはルイズの方であった。

とは言えトモの弁舌に食い下がったのだから大健闘と言って良いだろう。

無論、彼らが手に入れたのはそれだけではない。

「サムライは一撃必殺が身上です。が、防御にも気を配らねばフーケ戦の二の舞になりますね」

「……一撃の重さを取るか、それとも手数を増やすべきでしょうか」

「欲を言えば魔法が使えるクラスがいいんだけど……、現状では……」

三人が顔を突き合わせ、あれやこれやと悩んでいるのはクラスとスキルの構成であった。

スキルLvが高ければ高いほどその効果は絶大になる。

けれどスキルを使うにはMPが必要で、そのLvが高ければ高いほど消耗も絶大になってしまう。

だからと言って低Lvのスキルを浅く広くで固めてしまえば、中途半端な役立たずで終わるのがオチだ。

現在手持ちのスキルを伸ばすか、それとも新しいスキルを得るほうがいいのか。

スキルを得るための鍛錬にも時間が掛かる。スキル構成は結構重要な要素なのだ。

悩みに悩み抜いた末、彼らは自らの成長計画を決めた。

トモは話術の強化と回避力を上昇させるスキルを、ルイズは戦術構築能力の向上、シエスタは連続攻撃の強化を選ぶ。

「折角ギルドを組んだのですから『器用貧乏』より『一芸特化』で行きましょう。

分担した役割を果たせば、大抵の戦闘は切り抜けられます」

「貴方が素早さを活かして攪乱、私が戦術指揮を務めて、シエスタがトドメを刺す、ってところかしら。

うん、悪くないわね」

ところで、『冒険者』がギルドを結成するにあたって必ず守る法則がある。

罫の看破や解除、情報収集などを担当する『スカウト』。
ギルドの主戦力であり、攻撃の要を担う『アタッカー』。
魔法や射撃など、主に援護や支援を行う『サポーター』。
憂い無く戦えるように回復や防御を司る『リカバリー』。
そしてメンバーの状況を把握し、効率的な指揮で戦況を有利に運ぶ『コマンダー』。

この五つの役目を揃えて初めて、ギルドは効率よく運営出来ると言う。

だが結成したばかりの『アブソリュート・ゼロ』メンバーのクラスは以下の通り。

- ・ルイズ／セージ、ライダー
- ・トモ／ネゴシエーター、サムライ
- ・シエスタ／ハウスキーパー、ハンター、ランサー

「……足りないわね」

「ええ、人数もクラスも足りません。何より回復役がないのが致命的ですね」

そこでルイズにもう一つ役割が振られる。

彼女が制服の上から腰に巻いたベルトのようなもの、地球では『ウエストポーチ』と呼ばれているものがそれであった。

これもトモの背囊と同じく、五個までならどんな大きさの物であろうと収納出来る謎構造をしており、彼女はそこに回復薬を五つ入れている。

前衛のトモやシエスタでは戦闘にかかりつきりになった場合、回復薬を使うタイミングが取りにくい。だから後衛の彼女に回復役を任せると言うのがトモの言い分だった。

どっちにしても飲ませるのなら変わらないだろうと言うと、なんと回復薬は傷口にぶっかけても効果があると言う。但しその場合は傷に物凄く染みるらしい。

「まあ、私とシエスタさんはご主人ほどお金に恵まれてませんし」

「……それが本音じゃないの？」

足りないものは幾らでもある。

けれど、未だ『冒険者』としては駆け出しの彼らが始めから全部揃えようと言うのは贅沢の極み。

現状ではこの布陣が最適であることには違わないので、ルイズには何も言う事は無い。

……いや、一つだけ気にかかる事があった。

「……戦闘を前提にし過ぎ、なのよね」

冒険者は基本、荒事中心の生活を送ることになる。

目的が目的であるし、その超人的な身体能力を活かすのならばそう
なってしまうべきなのだろうが……

「何か、引っ掛かるのよね。……あれじゃ、まるで――」

――自分達が戦闘に巻き込まれる事を、確信しているようでは
無いのか。

「……なんて、今更よね」

幾ら何でも気にし過ぎだろう。そう結論付けるルイズ。

この小さなしこりがどんな意味を持つのか、それはまだ誰にも判ら
なかった。

※ヤナギダ・トモ（柳田 智） 種属／ヒューマン…6

体力…6／知力…9（+1）／感覚…5／敏捷…12（+4）／器
用…3／魅力…3／精神…5／幸運…10

※○内は今回加算された補正值

HP…14／14（+3） MP…11／11 SP…10／1

0 ※数値は現在値／最大値

EXP…12 所持金…5エキュール

保有クラスとスキル

- ・ネゴシエイター…4
- ・詐術…2／説得…1／挑発…1
- ・サムライ…2
- ・居合い斬り…1／斬り払い…1（※1）

アクセサリー
装備品

- ・厚手のコート／デルフリンガー／韋駄天の具足（※2）／運命神の聖印

アイテム
所持品

- ・背囊／サバイバルナイフ／目覚まし時計

進行中クエスト

- ・ルイズを守る（期限…ルイズの卒業まで）

※ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール
種属／ヒューマン…4

体力…3／知力…9（+1）／感覚…4／敏捷…3／器用…3／魅力…6／精神…6／幸運…12

※○内は今回加算された補正值

HP…10／10 MP…14／14（+1） SP…10／10

※数値は現在値／最大値

EXP…14 所持金…151 エキュー20スウ

保有クラスとスキル

・セージ…3

・魔法知識…系統魔法…1／戦術…2

・ライダー…1

・乗馬術…1

アクセサリー
装備品

・魔法学院女子制服／魔法の杖／竜虎の鉄扇（※3）／運命神の聖印

アイテム
所持品

・ウエストポーチ（※4）／回復薬（小）×5

進行中クエスト

・なし

※シエスタ 種属／ヒューマン…5

体力…9（+3）／知力…3／感覚…6／敏捷…6（+1）／器用…
6／魅力…5／精神…4／幸運…14

※○内は今回加算された補正值

HP…13／13（+1） MP…10／10 SP…10／10
※数値は現在値／最大値

EXP…8 所持金…4エキュール

保有クラスとスキル

・ハウスキーパー…1

・清掃術…1

・ハンター…1

・解体術…1

・ランサー…3

・連続突き…2／突撃…1

アクセサリー
装備品

・メイド服／モップ／剛力の箆手（※5）／運命神の聖印

アイテム
所持品

・なし

進行中クエスト

・なし

ギルド…『アブソリュート・ゼロ』 拠点…トリステイン魔法学院
（ルイズの寮室）

・ギルドスキル…耳打ち

第十五話 成長（れべるあっぱ）（後書き）

用語解説

（※1） 刀で相手の攻撃を受け流す剣技。回避の達成値に（Lv）d6を加える。

（※2） かつて韋駄天が着けていたと言われる具足。敏捷値に＋3される。重量…1

（※3） 竜虎対決図が透かし彫りになった鉄扇。

レンジ密着、物理ダメージに1d6を加算する代償に、敏捷から－1される。

任意のダイス目をクリティカルに変えることが出来る（残り回数…3）。

（※4） ベルト状になった小物入れ。所持品の重量を無視出来る（制限…5個まで）。重量…1

（※5） 装着者に力を与えと言われる銀色に輝く簪手。体力に＋3される。重量…1

第十六話 姫君（かこのとり）

学院で最も人気のない教師を上げろと言えば十人中五、六人が必ず挙げる名前がある。

その教師の名はギトー、長い黒髪に漆黒のマントを纏った冷たい雰囲気を持つ男だ。

だが、彼の不人気の原因はそれだけではない。否、むしろそちらの方が問題であった。

「知っての通り、私の二つ名は『疾風』。疾風のギトーだ」

教卓に立つなりそう名乗るギトー。

静まり返った生徒達の反応をどう受け取ったのか、彼は満足げに教室を見回す。

しかし彼の目が『ある二人組』を捉えるや否や、その表情が渋面に取って代わった。

そこに居たのは『魔法も碌に使えない劣等生』と『生意気な平民の使い魔』の問題児二人、言うまでも無くルイズとトモの主従である。あの『フーケ襲撃』事件で家柄と立場を盾に脅迫されて以来、ギトーは彼女達を苦手にしており、あからさまに避ける様になった。

とは言えルイズが生徒である以上、いつかはこうして面と向かわなければならぬ。

苦々しく思いつつもギトーは彼女達の傍に陣取っていた女生徒に質問した。

「最強の系統は知っているかね？ ミス・ツエルプストー」

「『虚無』じゃないんですか？」

「伝説の話をしている訳ではない。現実的な答えを聞いているんだ」

突然名指しされたキュルケが混ぜっ返すが、ギトーはにこりともせず切り捨てた。

何とも癪に障る物言いが、情熱的な彼女の琴線に触れる。

「『火』に決まっていますわ。ミスタ・ギトー」

不敵な笑みを浮かべつつ、キュルケは己の系統こそ最強とあえて言い放つ。

彼女の自信に満ちあふれた宣言は、けれど予想外の反応をギトーから引き出した。

「残念ながらそうではない。

試しに、この私に君の得意な『火』の魔法をぶつけて来たまえ」

その言葉に目を剥いたのはキュルケだけではない。すぐ傍に居たタバサやギーシュ、モンモランシーは元より、その場に居た生徒達は皆ギョツとした事だろう。

そんな中、トモとルイズだけは少々違う反応を見せる。

ギトーの発言を聞いたルイズはトモに何事かを囁き、彼はそれに頷きを返す。

二人の遣り取りを余所に、キュルケとギトーの挑発合戦は佳境に入っていた。

「どうしたね？ 君は確か『火』系統が得意なのではなかったかな？」

「火傷じゃ済みませんわよ？」

「構わん、本気で来たまえ。君の、有名なツェルプストーの赤毛が飾りでないのならば」

その言葉を聞いた途端、キュルケは胸の谷間に差していた杖を引き

抜きルーンを詠唱。

そのまま杖を振ると彼女の掌に小さな炎の玉が生まれ、見る見るうちに膨らんでいく。

慌てて机の下に隠れる級友を尻目に、キュルケは1メートル程の火球を押し出した。

けれど唸りを上げて迫り来る業火にも物怖じせず、ギトーは冷静に己の杖を振るう。

たちまち舞い上がる烈風。それは向かい来る火球を掻き消したのみならず、そのまま呆然と立ち尽くすキュルケをも吹き飛ばした。

これがギトーの不人気の理由である。

彼は毎年、他系統の生徒を挑発しては叩き伏せ、自らの系統である『風』が最強だと言う持論を無理矢理証明していたのだ。

今年の生贄であるキュルケが吹っ飛ば様を見て、ギトーの口元に笑みが浮かぶ。

けれどその笑みは盛大に引き攣った。

「大丈夫ですか？」

「え？ ……あら？」

キュルケが暴風に跳ね飛ばされたと思った次の瞬間、彼女は何事も無かったかの様に座っていたのだから。

確かに吹き飛ばされた筈、と首を捻る彼女と級友達。

その様子を伺うトモとルイズは会心の笑みを浮かべる。

種を明かせば何の事は無い、ギトーが大人げなく弾き飛ばしたキュルケを、トモが受け止めて元の席に戻したただけだ。

単にそれが目に止まらない早さで行われた、それだけのこと。

何が起こったのかさえ見えなかったギトーは一瞬だけ呆気にとられるが、すぐさま威厳を取り繕って講義を続ける。

「『風』は全てを薙ぎ払う。

『火』も『水』も『土』も、試したことは無いが『虚無』すらも吹き飛ばすだろう。

故に『風』こそが最強なのだ。

目に見えぬ『風』は時に盾となり、時には矛となって全てを薙ぎ払う。

従って「そのご意見には異議がありますわ、ミスタ・ギトー」っ
!？」

段々熱が入っていく彼の独壇場に誰かが水を差す。

そこに居たのはピンクブロンドを優雅に掻き上げる少女。

ルイズ・フランソワーズ・ド・ラ・ヴァリエールその人だった。

「……どういう意味かね、ミス・ヴァリエール？」

「どうもこうも、最強が『風』と言うのは間違いだと言いたいだけですわ、先生？」

怒りを押し殺しているのか頬を引く付かせて問うギトーに、ルイズはあくまで慇懃な態度を崩さない。

その余りに堂々とした態度に、ギトーはおろかキュルケ達でさえも気圧されていた。

「先程、風は全てを薙ぎ払うと仰られましたが……どんな風とて、山は崩せませんわ。

火事に風を当てても煽るだけですし、海が風で吹き飛ばされたなんて話も聞きません。

なにより、そんな嵐のような風を生み出せるメイジなんて極少数しか居ませんわ。

数少ない例外を例に出して『風は最強』なんて言っても、説得力

はありませんわよ？」

「ぐっ……！」

ルイズの指摘にギトーは言葉を詰まらせた。

そもそも『風』とは大気の流れ、即ち運動エネルギーを伴った空気の事である。

元が空気であるだけに大質量相手にはいささか分が悪い。

まとまった質量を相手取ることが出来る風メイジなど、トライアングル以上に限られる。

ギトーの言う通り『全てを吹き飛ばせる』メイジは非情に希少だった。

「何より、『風』系統の優れた所は目に見えない透明性にありますわ。

四系統中最速であるが故に対人戦闘では優位に立てますでしょうが……、

ミスタ・ギトー？ 一体どんな状況を想定して『風は最強』と仰られたのかしら？

無学な私にご教授くださいますかしら？」

「ぬぐっ……！」

ルイズの容赦ない追い打ちにギトーは口籠る。

彼女の言う通り、『風』は対個人戦でこそ真価を発揮する系統である。

かつて国内外から怖れられた『烈風カリン』のような例外こそあるものの、並の風メイジでは対集団戦闘はこなせない。

しかし此処で引き下がっては教師としての沽券に関わる。

自らの持論をこき下ろされたギトーは声を張り上げて反論を開始した。

「……確かに、風で城壁や河川を吹き飛ばすことは出来ん。だが！それでも『風』が最強である事に変わりはない！

何故なら『風』は変幻自在、如何なる戦場にも適応出来る唯一の系統だからだ。

だからこそ最強「何も戦うだけが戦争じゃありませんよ？」っ！
今度は何だ！？」

自らが信じる『風』の優位性を挙げて自己弁護を始めたギトーを遮る声。

ルイズの後ろに控えていたトモが割り込んだのだ。

ギトーの機嫌が目に見えて悪くなる。先程のルイズは曲がりなりにも貴族で生徒であったが、トモは平民で使い魔と言う身分である。取り合う必要は無い。

あからさまに無視を決め込むギトー。だが空気を読まなかったのか、それともギトーに対する当てつけなのか、隣に居たギーシュがトモに疑問を呈する。

「どう言う意味だい？ 戦争って戦う為の物だろう？」

「簡単ですよ。直接戦う人間だけでは戦争は勝てないってことですから」

「……戦争で必要なのは戦力だけじゃない。食料などの兵站、傷病者を治療する水メイジなどの衛生対策、陣地構築に必要な工兵、そう言った後方支援なしでは戦えない。そう言うこと？」

トモの答えを補強したのは、それまで黙っていたタバサであった。その言葉に頷き、彼は言葉を重ねた。

「例えば『風』で百人を薙ぎ払うより、『土』の城壁で千人を阻む方が効率的です。

一騎当千の『風』メイジを集めるより、戦える者を『水』で癒す

方が早いでしょう。

それに密集している敵を倒すなら『風』よりも『火』の方が適任です。

中心に油でも撒いて火を着ければ勝手に燃えてくれますから。

状況によって必要とされる技能は変わります。『風』に拘る必要はありません」

それを聞いた生徒達の表情に理解の色が浮かぶ。

だがギトーのこめかみには青筋が浮かんだ。

「何を言う、『風』に優る系統など有り得ない！

事実、先程のミス・ツェルプストーの火球は私に届かなかったではないかね！？」

引き合いに出されたキュルケの笑みが強ばる。けれどトモは呆れた様に指摘した。

「どんな攻撃が来るのか、予め判っているなら対策だって容易でしょう？

キュルケさんは『火』の系統ですし、『火』の攻撃魔法で来るのは判っていた筈です。

もしギーシュ君のワルキューレが相手だったらどうされていたか？」

「むぐぐっ……！」

そう、キュルケに狙いを定めたのは彼女が『火』系統であったからである。

『火』の攻撃魔法として第一に上がるのは『ファイヤー・ボール』、即ち先程の火球だ。

攻撃魔法として一般的であるが故に、対抗手段は研究され尽くして

いる。

当然、ギトーもそれを熟知していた。

「それにあの火球以外にも攻撃手段はあるでしょう？」

今回はキュルケさんの工夫が足りなかっただけです。

力押し一辺倒では余りに芸がなさすぎますから」

「……そうね。確かに力押しで行こうなんて思っちゃったのは失敗だわ。

他にもやりようはあったもの」

トモの言葉に頷くキュルケ。

敢えて乗った挑発だったが、思い返してみれば余りにもギトーの思惑通りに過ぎた。

まんまと踊らされたことは腹が立つが、ルイズ達の意趣返しで溜飲は下がっている。

後はこの二人がどうやってギトーをへこませるかを見物するだけだ。そのギトーは火を噴かんばかりに顔を真っ赤に染めてルイズ達を糾弾に掛かっていた。

「ええい、黙れ黙れ！ 平民の分際で貴族に意見するとは何事か！」

「ふむ、まともに答えられない所を見るに、凶星だったようですね」

「ぐぎぎぎい……っ！！」

相手はオスマンすら丸め込んだ詐欺師だ。ギトー如きでは口論にすらならない。

追い詰められた彼は最後の手段に出た。

「くっ！ ならば見るがいい、風が最強たる所以を！」

『ユビキタス・デル・ウインデ……』

己が使える最高の魔法を繰り出さんとルーンを詠唱し始めたギト
ー。

丁度その時、教室の扉が音を立てて開き、時ならぬ闖入者を迎え
入れた。

「あややや、ミスタ・ギトー！ 失礼しますぞ！」

「ミスタ・コルベール！ 授業中です……ぞ？」

折角の見せ場を遮られて不快な表情を隠そうともせず、乱入して来
た同僚に抗議しようとしたギトーのしかめっ面が呆然とした表情に
取って代わる。

いや、彼の姿を見た生徒全員が呆氣に取られていた。

薄い頭頂を大きな金髪をロールさせた鬘で覆い隠し、幾重ものレー
スや刺繍に飾り付けられたローブを纏ったコルベールの姿に。

はっきり言おう。似合っていない。

まるで洒落っ気の無い独身中年男性が初めての見合いに合わせて精
一杯着飾ったかのような、非情にいたたまれない空気が漂う。

ギトーと生徒達が一斉に沈黙した意味に気付かず、コルベールは重
々しく告げた。

「おっほん。今日の授業は全て中止であります！ ええと、皆さん
にお知らせが……」

もったいぶった調子でのけぞるコルベール。

その拍子にサイズの合っていない大きな鬘が外れて床に落ちた。
微妙な空気が教室を満たす。沈黙を破ったのはなんとタバサであっ
た。

「……滑り易い」

教室が爆笑に包まれた。

直前まで不機嫌だったギトーでさえ明後日に向き、肩を振るわせている。

笑い過ぎて腹を押さえたキュルケが「貴女も言うわね！」とタバサの肩を叩く。当の本人はにこりともせず、いつもの鉄面皮を保っていた。

「ええいつ、黙りなさい小童共が！ ミスタ・ギトーも……！」

「ミスタ・コルベール、何かあったのですか？」

着飾っていらっしやると言うことは、どなたか貴人がお見えなのですか？」

先程のギトーもかくやとばかりに顔を真っ赤に染めて怒鳴りかけたコルベールに、トモは至極冷静に用件を尋ねる。

隣のルイズすら爆笑していると言うのに一人だけ冷静沈着なその姿に、コルベールは此処を尋ねた理由を思い出した。

「ええ、おほん。皆さん、本日はトリステイン魔法学院にとって降臨祭に並ぶめでたき日であります。恐れ多くも先の陛下の忘れ形見アンリエッタ姫殿下が本日ゲルマニアご訪問からのお帰りに、この魔法学院に行幸なされます。

急なことです、今から学院の総力を挙げて歓迎式典の準備を行います。生徒諸君は正装して門に整列すること」

先程までとは違う理由で教室がざわめく。

皆、馬鹿笑いしていたのが嘘の様に緊張した面持ちになる。

それを見たコルベールが重々しく頷くと、目を見開いて告げた。

「諸君が立派な貴族に成長したことを姫殿下にお魅せする絶好の機会ですぞ！」

お覚えが宜しくなる様に、しっかり杖を磨いておきなさい！」

「……立派な貴族、ねえ？」

「……言いたいことは判るけど、此処は押さえて頂戴。私達も早く準備しなくちゃ！」

コルベールの言葉が終わると同時に、生徒達が一斉に帰り支度を始める。

今日までの出来事を思い返して首を捻るトモを嗜め、ルイズも自分の寮室に向かう。

その後ろ姿がいつもより浮ついているのを見て取り、彼は一人ごちた。

「……まあ、『お友達』ですからね。ですが……」

そう一人ごちると、トモは教室の窓から空を見上げる。

その視線は空の上にあるであろう『島』を見据えていた。

「いよいよ始まりますか。さて、蝶の羽撃きは歴史をどこに連れて行くのでしょうか？」

そこに待ち受けている筈の、巨大な試練と共に。

トリスティン魔法学院に続く街道を、四頭立ての馬車が肅々と進む。沢山の花々で飾られた街道沿いには大勢の人々が立ち並び、歓呼の声を上げて出迎える。

馬車に掲げられた紋章には水晶の杖とユニコーンが刻印され、馬車を引く馬達の頭にも立派な角が生えていた。

無垢なる乙女にしかその背を許さぬ聖獣に引かれた馬車の主。それに当て嵌まる人物はこの国に一人しか居ない。

馬車の窓を覆い隠すレースのカーテンが開き、うら若き女性が顔を覗かせた。

その気品ある顔立ちを目の当たりにした人々から一際大きな歓声がかかる。

しかしカーテンを閉じて再び人々の目から隠されると、女性は優雅な微笑みを引っ込めて憂いも露に深い深い溜め息を吐く。

そんな彼女を、隣に腰掛けていた初老の男性が咎める。

「……王族たるもの、無闇に臣下の前で溜め息など吐くものではないませぬ」

「王族ですって！ まあ、このトリスティンの王様は貴方でしょうに！」

女性の名はアンリエッタ・ド・トリスティン、現トリスティン王国第一王女である。

そして隣に座る初老の男性は前王亡き後トリスティンの政治を一手に握るマザリーニ枢機卿、通称『鳥の骨』であった。

瑞々しく若さ溢れるアンリエッタとは対照的に、まだ四十そこそこであるにも拘らず髪も髭も真っ白に色が落ち、痩せぎすの身体は骨張っている。

けれど無理は無いのかも知れない。政治を一手に握るなどと言うと聞こえはいいが、実際は彼以外ともに政治を行っていないだけな

のだから。

故に国政を預かる心労が彼に集中し、実年齢よりも十歳以上も老ける羽目になったのだ。

なのに本来王位に就くべきマリアンヌ太后は夫の喪を理由に頑に即位を拒否し続けており、その娘は……

「枢機卿、今、街で流行っている小唄はご存知かしら？」

「……存じませんな」

「それなら聞かせて差し上げますわ。『トリステインの王家には美貌はあっても杖は無い。杖を握るは枢機卿、灰色帽子の鳥の骨……』」

……この調子だ。

少なくとも、話題にしているものの区別がつかないようでは話にならない。

しかし彼が後ろに控える自分の馬車を降りて王女の馬車に乗り込んだのは、こんなどうでもいい話をする為ではなかった。

彼らがわざわざゲルマニアまで出向いた事情の再確認の為である。けれど肝心の王女はずっとこんな調子で、マザリーニの話をのらりくらりと躲していた。

（……まあ、仕方が無いと言えば仕方が無いのだが……）

忸怩たる内心の思いを表に出さず、マザリーニは咳払いをして話を戻した。

「街女の歌うような小唄など、口にしてはなりませぬ」

「いいじゃないの、小唄ぐらい。」

私は貴方の言いつけ通りにゲルマニアに嫁ぐのですから」

憂いに陰った表情でマザリーニに反論するアンリエッタ。

これが彼女がずっと不機嫌だった理由である。

彼女は隣国ゲルマニアとの軍事同盟の見返りとして、一回り以上年の離れたゲルマニアの皇帝と結婚しなくてはならないのだ。

政略結婚は政治における常套手段であることはアンリエッタとて理解している。

しかし納得はしていない。

まして先王より蝶よ花よと育てられた箱入りの身ではなおさらだ。

王族らしく外面には出ないものの、近しいものには不満を漏らしまくる毎日。

それが普段から口煩いマザリーニであるなら皮肉の十や二十も出てこようと言うものだ。

けれどマザリーニはそれを咎めない。

彼にしても今回の縁談は苦渋の決断であったのだから。

「仕方ありません。ゲルマニアとの同盟はトリステインにとって急務なのですから。

殿下もご存知でしょう？ かの『白の国』アルビオンの革命とやらを」

「そのくらい、私だって知っていますわ！

礼儀知らずのあの人達の、恥知らずな行為のことは！」

このハルケギニアに始祖ブリミルが降臨してより続く王家の一つ、アルビオンで起きた謀反は瞬く間に王家を圧倒し、伝統あるアルビオン王家は今や風前の灯と化した。

蜂起した貴族達はハルケギニア統一を謳い、墮落した現王家を滅ぼして新しい国家を建設することを夢見ている。故にアルビオンの次に狙われるのは、その親戚たるトリステインであろう。

それに対抗する為に打ち出されたのがゲルマニアとの同盟であった。ゲルマニアは始祖に王権を授けられた四王家とは違い、優れた技術

力と軍事力でのし上がった振興国家である。最高元首が王ではなく皇帝を名乗っているのもその所為だった。

また金さえあれば平民であっても公職に就ける、すなわち貴族になれると言う実力主義の国でもあり、平民の地位もそう悪く無い。それが他国には『成り上がりの野蛮人』として受け取られていた。

その成り上がりの国に、小国ながら始祖以来の歴史を誇るトリステインの王女が興入れする——アンリエッタを憂鬱にさせていたのはそれだった。

マザリーニにも思うところはあるのだが、歴史はともかく国力の劣るトリステインを存続させる為にはこの方法しか考えつかなかったのだから仕様が無い。

「先を読み、先手を打つのが政治なのです、殿下。ゲルマニアと同盟を結び、近いうちに成立するであろうアルビオンの新政府に対抗せねば、トリステインは生き残れませぬ」

何度も繰り返し言い聞かせた台詞を再び聞かせるマザリーニ。けれどアンリエッタは溜め息を吐くばかりでろくな返事もしない。

トリステインの行く末に不安を抱きつつ、馬車は一路魔法学院に向かって進んでいた。

魔法学院の正門に整列した生徒達が一斉に杖を掲げる中、王女の馬車は本塔前に止まる。

オールド・オスマンが立つ本塔の玄関と馬車の間に緋毛氈の絨毯が

敷かれ、カチンコチンに緊張した衛士が大声で王女の到着を告げた。アンリエッタの名が高らかに響き渡る中、馬車の扉が開かれる。けれどそこから現れた人物を見た途端、生徒達は一様にがっかりした顔になった。

だがマザリーニ枢機卿はお世辞にも歓迎しているとは言えないその視線にも動じず、扉に向かって手を伸ばす。

その手を取って現れたのは、可憐な微笑みを浮かべるアンリエッタであった。

一際高く響き渡る生徒達の歓声に、優雅に手を振って応えている。

「成程、確かにお姫様ですね。温室育ちの薔薇みたいです」

「……それは褒めてるのかしら？ 貶してるのかしら？」

トモの人物評に、隣に立つキュルケが首を捻る。その隣には我関せずと座り込んで本を読むタバサの姿もあった。

そして今の発言に一番食いつきそうなルイズはと言えば、呆然としながら王女の護衛に立つ貴族に見入っていた。

見事な羽根帽子を被った口髭も凛々しい好男子である。幻獣グリフォンに跨がっていることから、魔法衛士隊の一つであるグリフォン隊の所属であろう。

魔法衛士隊と言えば貴族の子弟が一度は憧れる騎士の花形だ。王女の護衛ともなればおそらくは隊長クラスであろうことは容易に想像出来る。

しかしルイズはそんなところに注目していた訳ではない。

その風貌が、昨晚の夢に出て来たある人物そっくりだったからであった。

「……ワルド、さま？」

「どうしましたご主人、何か気になることも？」

「……何でも無いわよ」

思わず漏らした呟きを聞きつけたのだろう、トモが心配そうに覗き込んで来る。

慌てて取り繕うが、その視線を辿ったキュルケが例の貴族に気が付き、混ぜっ返す。

「あら、中々いい男じゃない？ あらやだ、一目惚れ？」

「何でもそっちに結びつけるんじゃないわよ、この色魔！」

「ご主人、声！ 声が大きいですよ！？」

慌てて口を押さえるルイズ。

幸い、周囲の歓声に紛れて王女一行まで彼女の怒鳴り声は届かなかったらしい。

失態を咎められなかったことに安堵しながら、ルイズは口を押さえていた手を離れた。

「あ、危なかった……！」

「全く……、キュルケさんもあんまりご主人をからかわないで下さいね？」

「善処するわ。うふふっ」

どう見てもからかう気満々のキュルケを牽制していたルイズの肩が叩かれる。

何事かと振り向けば、そこには先程まで本を読んでいた筈のタバサが居た。

「……結局、誰を見ていた？」

「……別に、昔の知り合いが居たから吃驚していただけよ。一目惚れとかじゃないわ」

「納得した。……キュルケもこれでいい？」

「何だ、つまんないの」

どうやらキュルケを宥める為だけに話し掛けたいらしい。彼女が詰まらなさそうに口を尖らせたのを見て、再び読書に戻る。

ルイズが意外な援護射撃に目を白黒させていると、今度はトモが話し掛けて来た。

「ところで、最初の男性はどなたですか？　どうもあまり好かれていなさそうでした」

「……ああ、そう言えば知らないのよね貴方。

あれがマザリーニ枢機卿、今このトリステインを仕切っているお方よ」

「ふむ、あれが……相当胆力のある御仁ですね」

「あら、どうしてそう思ったのかしら？」

感心した様に何度も頷くトモの台詞に、興味を引かれたキュルケが尋ねる。

「いえ、あれだけ嫌われていながら眉一つ動かさないなんて、凄いとしか言いようが無いでしょう？」

その答えにはつとなるルイズ。

現在のトリステイン貴族で、平民の血が混じっているとも噂されるマザリーニを快く思っている貴族なぞ居ないと言っても過言ではない。

それにも関わらず、国王不在のこの国が機能しているのは彼の尽力あつてのもの。

マザリーニは圧倒的な敵意をものともせずに国政に邁進しているのだ。

それを考えると彼の凄さが良く理解出来る。

大多数の貴族の例に漏れず、ルイズもマザリーニのことは嫌いだ。けれど考えてみれば彼の置かれた立場は、この学院におけるルイズの立ち位置そのものではないだろうか？

彼女も少し前までは圧倒的な悪意に晒され、孤立していた。だがあの『使い魔召喚』以降、彼女はそれを嘆く事は無くなった。

それは言うまでも無く隣に立つ彼と、『冒険者』の道との出会いがあったからだ。

運命に挑む覚悟と、何より大切な仲間との邂逅が彼女を変えてくれた。

では、マザリーニにはそんな『仲間』が居るのだろうか？

「……確かにね。それだけは尊敬出来るわ、心から」

ルイズの呟きは誰にも届かないまま、吹き抜けるそよ風に溶けていった。

最近、ルイズの部屋は彼女の愉快的仲間達の溜まり場と化している。ルイズとトモは言うに及ばず、彼女の専属になったシエスタや冒険者の事を聞きに来るタバサとお供のキュルケ、たまにモンモランシーに夜這いを掛けて撃退されたギーシュが混ざったりする。

けれど今日は流石に誰も訪れなかった。シエスタは本職が忙しく、ギーシュも王女が居る間は夜這いを自粛したらしい。タバサとキュルケも今夜は自室に籠っているようだ。

そんな訳で、この部屋の主は久しぶりに静かな夜を過ごしていた。鋪落としの為に鞆から抜き放たれたデルフリンガーも空気を読み、大人しくしている。

磨き粉を付けた布で擦られる度「おうっ……」だとか「も、もっと優しく……」とか悶える剣と言う気持ち悪いものを、何とはなしに眺めているルイズ。

扉を叩く音が聞こえて来たのはそんな時だった。

始めに長く二回、続けて短く三回。

それはルイズにとって特別な意味を持った音だった。

はっとした顔になり、慌てて身だしなみを整え、トモにデルフリンガーをしまう様に言いつけると、ノックされたドアをそっと開ける。そこに立っていたのは黒い頭巾で顔を隠した少女。

辺りを伺い、誰も居ないことを確認した少女は部屋に入り込んで後ろ手に扉を閉めた。

何かを言いたそうなルイズに人差し指を立てて口を噤ませ、杖を出してルーンを唱える。

室内を光の粉が舞う。

「……ディティクトマジック？」

「どこに目や耳があるのか判りませんからね」

そう言って頭巾を払いのける少女。

栗色の髪がこぼれ、薄いブルーの瞳がルイズを捉えると、その目が笑みを形作る。

「お久しぶりね、ルイズ・フランソワーズ」

そこに居たのはアンリエッタ王女その人であった。

※ヤナギダ・トモ（柳田 智） 種属／ヒューマン…6

体力…6／知力…9／感覚…5／敏捷…12／器用…3／魅力…3
／精神…5／幸運…10

HP…14／14 MP…10／11 SP…10／10 ※数
値は現在値／最大値

EXP…13 所持金…5エキュール

保有クラスとスキル

- ・ネゴシエイター…4
- ・詐術…2／説得…1／挑発…1
- ・サムライ…2
- ・居合い斬り…1／斬り払い…1

アクセサリ
装備品

- ・厚手のコート／デルフリンガー／韋駄天の具足／運命神の聖印

アイテム
所持品

- ・背囊／サバイバルナイフ／目覚まし時計

進行中クエスト

- ・ルイズを守る（期限…ルイズの卒業まで）

※ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール
種属／ヒューマン…4

体力…3／知力…9／感覚…4／敏捷…3／器用…3／魅力…6／
精神…6／幸運…12

HP…10／10 MP…13／14 SP…10／10 ※数値
は現在値／最大値

EXP…15 所持金…151 エキュー20スウ

保有クラスとスキル

・セージ…3

・魔法知識…系統魔法…1／戦術…2

・ライダー…1

・乗馬術…1

アクセサリ
装備品

・魔法学院女子制服／魔法の杖／竜虎の鉄扇／運命神の聖印

アイテム
所持品

・ウエストポーチ／回復薬（小）×5

進行中クエスト

・なし

第十七話 任務（くえすと・2）

アンリエッタ・ド・トリステインは当年として御年十七歳、十六のルイズとは一つしか違わない。

その年齢の近さと国内最大の権勢を誇る大公爵家の血筋を買われ、ルイズは王女の遊び相手を務めていた。

だがルイズにも、そしてそれを決めた大人達にも計算外だったのは、王女がとんでもない『やんちゃ』であったことであろう。

城の中庭で蝶を追いかけて、泥だらけになって侍従長に叱られたことを皮切りに、菓子を取り合っただけのつかみ合いでお互いを泣かせるのは序の口。

ままごとの姫役を巡っての喧嘩ではアンリエッタのボディブローが炸裂し、ルイズの意識を刈り取って鮮やかなTKOを奪ってみせたことすらあった。

当時の家臣達はさぞや苦勞しただろうな、とトモは目の前で繰り広げられる茶番を見てそう思った。

「ああ、ルイズ！ 懐かしいわ！」

「いけません姫殿下！ こんな下賤なところへお越しになるなんて！」

「そんな堅苦しいことを言わないで！ 貴女と私はお友達、お友達じゃないの！」

最初は畏まっていたルイズも、段々態度が軟化していった。抱き合いつつも交わされる思い出話がやたら物騒だったのはご愛嬌と言って良いのだろう。

「感激ですわ、そんな昔のことを覚えていて下さったなんて……。私のことなど、とっくにお忘れになられていたと思っていました

わ」

「忘れる訳無いじゃない！」

あの頃は毎日が楽しかったわ、何にも悩みなんて無かったもの……」

先程までのハイテンションから一転、深く憂いを帯びたその台詞に首を傾げるルイズ。

「……どうかなされましたか、姫様？」

その様子を見たルイズの質問に、窓の外の月を見上げて溜め息を吐いたアンリエッタがその手を取って笑みを浮かべる。
それは傍目にも無理をしていると判るような、そんな笑顔だった。

「結婚するのよ、私」

「それは………おめでとうございます」

それを聞いたルイズは王女の憂いの原因に思い至る。
けれどそれを表に出さず、硬い声で祝福した。

「何でしょう、この大根芝居」

「言うなよ旦那。本人にしてみりゃ大真面目なんだろうさ」

小声で突っ込むトモとデルフリンガーにようやく気付いたらしい。
ルイズの背後に控えていた彼らを見て、王女ははにかんだ笑みを浮かべた。

「あら、ごめんなさい！　もしかしてお邪魔だったかしら？」

「それは勘繰り過ぎと言うものです。敢えて何が？、とは言いませんが」

「あ……ええと、彼は私の使い魔です」

頬を染めるアンリエッタに、無然とした顔で突っ込みを入れるトモ。そしてルイズの紹介を聞き、王女はキョトンとした面持ちで彼をまじまじと見詰める。

「使い魔？　彼が？　……人にしか見えませんが」

「人です。って言うか人以外の何かに見えるなら医者をお薦めしますよ」

「……申し訳ありません姫様。彼はこちらの常識や礼節にまだ疎いので」

慇懃な態度こそ崩さないものの、容赦の欠片も無い言葉にアンリエッタの頬が引き攣る。

不躰を通り越して喧嘩を売っているトモの台詞に、頭を抑えながらルイズが謝罪した。

彼はとにかく礼節に煩い。

礼儀を払ってきた相手には礼を尽くすが、そうでないものに対しては慇懃無礼に接する。

名乗りも上げずに名を尋ねるだとか、自己紹介もせずに人をじろじろと見るなどの無礼者には払う敬意は無い、と言うのが彼の言い分であった。

それがどんなに格上であろうとも、彼は自分の言い分を通す。

流石に王女にまでそれが適用されるとは思っていなかったのだが。

「こちらはトリステイン王国第一王女、アンリエッタ・ド・トリステイン殿下よ。」

姫様、彼は冒険者と呼ばれる人々の一人で、ヤナギダ・トモと言います」

「……あ、初めまして。私、アンリエッタと申します。以後よしな

に」

「失礼しました。」

私はヤナギダ・トモと申します。ヤナギダが家名で、トモが名になります」

ルイズの紹介でようやく名乗りを交わす二人だったが、どうにもギクシクしているのは否めなかった。

が、トモの名乗りを聞き、アンリエッタが不思議そうに尋ねる。

「……家名をお持ちのようですが、もしや貴族の方ですか？」

「いえ、私の故郷では国民全員が家名を持っているんです。」

逆に、皇族様がたの方が家名をお持ちになられないのですよ」

「国民全員が、ですか？」

……そのような国は存じ上げませんが、どちらの国からいらしたのでしょうか？」

小首を傾げながら王女が問う。その疑問に答えたのはルイズであった。

「姫様、彼はロバ・アル・カリイエより遠い所、ニホンって国から召喚されたんです」

「まあ、ロバ・アル・カリイエよりも遠いところからですって！？ルイズ、貴女って昔からどこか変わっていたけれど、相変わらずね！」

ころころと笑うアンリエッタと、どう返していいのか判らず無然とするルイズに、今度はトモが水を向ける。

「で、アンリエッタ姫殿下は一体何用得こんな夜更けにこちらまでいらしたのです？」

「あ、……そうでした。ですが……」

ちらちらとトモの顔色をうかがう王女に、トモは肩を竦める。

「判りました。席を外しましょう」

「……いいえ、ここにいて頂戴」

出て行こうとしたトモをルイズが引き止める。

「姫様、彼はこう見えてかなりの切れ者です。一緒にお話を伺っても宜しいでしょうか？」

もしかしたら力になってくれるかもしれません」

「……ルイズがそう言うのであれば……」

ですが、この場でお話したことは他言無用に願います。宜しいですか？」

「……仕方ありません。お話だけは伺いましょう」

不承不承と言った体で王女に向き直るトモ。

だが肝心の王女は憂い顔で俯いたまま、一向に語り出そうとしない。その姿にトモが何かを言おうとする直前、ルイズが割り込む様に口を開いた。

「察するにゲルマニアの皇帝との婚約に関する何かだと思いますが、違いますか？」

「えっ!？」

「……ほう」

ルイズの爆弾発言にアンリエッタは驚き、トモは感心する。

二人の視線の先で、ルイズは無い胸を反らしながら己の推理を披露した。

「姫様はゲルマニアからお帰りになる途中で学院にご行幸されます。」

そして先程、ご結婚なさるとお話しになりました。

ならばこの二つは関連性が高いはず。ゲルマニアの皇帝にはまだ皇子がおりませんし、もしゲルマニアとの婚約があるのであればその相手は十中八九、皇帝自身となりましょう」

「……凄いわルイズ。たったそれだけで、良く判ったわね？」

「簡単な推理ですわ姫様。この程度、アカデミーの論文を読み解くより容易いことです」

そうは言うが、たったそれだけの材料で真実に辿り着けたのは結構凄い。

ルイズの頭の回転の速さを知って安心したのか、アンリエッタは自身の婚約とその経緯を語り始めた。

アルビオンで反乱が起きたこと。

王室は善戦したが力及ばず、今にも滅亡しそうなこと。

反乱軍の掲げる目標から、アルビオンの次はトリステインに矛先が向くのは確実なこと。

それに対抗する為にゲルマニアと同盟を結ぶこと。

その見返りとしてゲルマニア皇室へ嫁がねばならないこと。

「……アルビオンの叛徒共は当然この同盟を望んでいません。

ですので、彼らは血眼になって婚姻を妨げる為の材料を探している筈です」

「あるんですね？ 心当たりが」

顔を蒼白にしたルイズが尋ねると、アンリエッタは顔を覆って泣き崩れた。

「おお、始祖ブリミルよ！ この不幸な姫をお救いください！」

「……茶番は結構ですから、その心当たりとやらを教えてくださいませんか？」

「ち、ちよつと！ 流石にそれは不敬じゃないかしら！？」

王女の大袈裟なリアクションに呆れ返ったトモが続きを促した。

そのあまりの物言いにルイズは冷や汗を流す。両手で覆われたアンリエッタの表情は見えないが、こめかみがひくついてる所を見ると内心穏やかとは言えないようだ。

「……私が以前したためた一通の手紙です。もしもそれがアルビオンの貴族達に渡ったら、彼らはすぐにゲルマニアの皇帝に届けるでしょう」

「手紙……？」

手紙一通で婚約が破綻する？ ルイズの脳細胞がフル回転を始める。

婚約を解消する理由として一般的なのは浮気である。その証拠にされるなら、その手紙とやらは恋文で決まりだろう。

だがアンリエッタが恋文を出す相手なぞ居ただろうか？ 先王の過保護もあって箱入り状態だった彼女にそんな相手が居たなんて、聞いたことも無い。

……いや、心当たりならある。昔ラグドリアン湖畔での園遊会の際、ルイズが王女の身代わりを務めた事があった。思い当たるとしたらそれ以外には無い。

あの時、身代わりを欲してまで会いたかった相手……それが恋文の送り先に違いない。

園遊会に出席していた人物をリストアップ、年の差や身分の違いで振るいに掛ける。

……そして最有力候補を見つけた瞬間、ルイズは思わず叫んでいた。

「まさか、ウェールズ皇太子に恋文を！？ 敵陣のまったく中では
ありませんか！！」

「……そうです。若気の至りでウェールズ様にお送りした恋文の中
で、私は永久の愛を始祖に誓ってしまったのです」

「な！？」

あまりの浅慮に、ルイズは目眩を起こしかけた。

愛を始祖に誓うとは、即ち婚姻の誓いに他ならない。そして始祖に
誓った相手が居るにも拘らずゲルマニアの皇帝と結婚するとなれば、
それは重婚の罪となる。

重婚の罪を犯した王女との婚姻など、ゲルマニアにとっては不名誉
でしかない。婚約は取り消され、同盟も白紙に戻るだろう。

そうなればトリステインは一国で叛徒共を相手にしなければならな
い。

王家を滅ぼす程の力を持った彼らに立ち向かえる戦力なぞ、この国
にある筈も無かった。

若気の至りで済ませるには重大過ぎる失態であった。

「……成程、それは大問題ですわ。ですが姫様、このことはマザリ
ー二卿には？」

「言える訳ありませんわ！」

こんなことを知ったら枢機卿は決して私を許さないでしょう……
！！」

「国難よりも保身が第一ですか。トップがこうなら貴族だってああ
もなりますか」

王女の言葉にトモは呆れを通り越して苛立ちを覚え始める。それで

も彼は口を出さない。

本来ならノリノリで死地に向かうと宣言する筈のルイズが、未だ冷静さを失っていないかったからだ。

「……姫様、それについてですが「その一件、このギーシュ・ド・グラモンにお任せください!!」っ!？」

けれどルイズが口を開いた瞬間、突然ギーシュが扉を蹴破って乱入してきた。

トモやルイズが止める間もなく王女の眼前に躍り出て跪き、必死にアピールし始める。

「お話しは全て窺いました! この未曾有の国難、不肖このグラモン家の四男たるギーシュ・ド・グラモンに仰せ付けいただければ存外の幸せ!

どうか姫殿下におかれましては大船に乗ったお気持ちでお任せいたただだだだっ!？」

な、何をするんだね君い!？」

「それはこちらの台詞です! 何を勝手に引き受けてるんですか!？」

そのまま勝手に手を取ってキスでもしそうな勢いのギーシュにウメボシ（こめかみに拳を押し付けてグリグリすること。親指を握りこんで中指を立てると効果絶大）を敢行するトモ。

痛むこめかみをさすりながらの抗議を却下し、更に握り拳を振り上げるトモを押し止めたのはルイズの一言であった。

「……そうね。あなたに任せるわギーシュ」

「ちょっ、本気ですか？」

どう聞いても自殺行為にしか聞こえなかったんですが先刻の話!

？」

「ギーシュだけじゃ頼り無いわね。私達も着いていくわよ？勿論、シエスタも」

「それこそ本気ですか！？ 学生に頼むことじゃないでしょうこんなのだ！？」

あくまでも冷静なルイズとは対照的に、普段の感情の薄さをかなぐり捨てて当たり散らすトモの姿に、ギーシュとアンリエッタが目を瞬かせる。

「まあまあ、少し落ち着きなさいよ」

「これが落ち着いていられますか！

このお姫様はよりによってお友達に『死んでこい』って言うんですよ！？」

「！？」

その言葉は鋭い矢となってアンリエッタの胸を貫いた。

『死んでこい』。よく考えてみれば、いやよく考えなくてもその通りである。

内乱の最中の敵地に乗り込み、敵が血眼になって探し求める『重婚の証拠』を取り返す。

彼女がルイズに頼もうとしていたことを簡潔に書けばこうなるだろう。

困難な任務どころではない、まさに特攻ではないか！ それを彼女は『幼馴染み』と言うか細い縁だけを頼ってルイズに押し付けようとしていたのだ！

そのことに今、ようやく気付いたのだ。

「あの、ルイズ……」

「別に、私だってそのことぐらいは気付いてるわよ」

「「えっ!?!」」

恐る恐る口を挟もうとするアンリエッタ、その口を噤ませるルイズの爆弾発言。

いや、彼女だけではない。

事態を呆然と見ていたギーシュも、激しくルイズに詰め寄っていたトモも、その言葉に仰天して絶句していた。

「姫様。姫様がこちらにいらしたのはその為でしょう？」

……いえ、学院へのご行幸自体は偶然だったのですね。

おそらく、マザリーニ枢機卿あたりが言い出したことでは？

ただ、ここに私が居ることをどなたから……おそらくは、私の旧知の人物でしょうが……そう言った方からお聞きになり、愚痴をこぼしに来る途中で思い付いた、そうではありませんか？」

今回の魔法学院訪問は突然過ぎた。

公人ともなれば気軽に外向くことなど出来ないにも拘らず、だ。

ならば本来この訪問は予定に入っておらず、突然誰かが言い出して変えさせたのだろう。

もしアンリエッタが言い出したとしても、マザリーニが賛成すまい。なら、この予定変更はマザリーニ自身が言い出した可能性が高い。そしてマザリーニはここにルイズが在学しているとは理解していても言い出すまい。

この王女が思ったよりもお転婆であることを、彼は誰よりも良く知っているのだから。

故に、王女に彼女のことを教えたのは他の誰かと言うことになる。ルイズはその人物に心当たりがあった。

多分ではあるが、気晴らしの為の共通の話題として持ち出したのではないだろうか？

それが彼にも思いがけない方向に転がってしまったただけだ。

アンリエッタとてただの学生にこんなことを頼みに来た訳ではあるまい。

最初は旧知の彼女に愚痴でも零したかっただけに違いなかった。しかしルイズの機転を知って彼女に縋ることを思い付いたのだろう。ルイズはそう分析していた。

アンリエッタは答えられない。正しくルイズの指摘通りであったからだ。

顔を蒼白にして、時折呻き声を漏らすだけの彼女をさておき、トモはルイズに尋ねる。

「それが判っていて、どうして引き受けるんです？」

「……姫様が学生にすぎない私に頼ろうとするぐらい、宮廷に味方が居ないからよ。」

正確には、アルビオンの間者が入り込んでいるから、ね」

「どとど、ということだい？ 何で宮廷にアルビオンの間者が！？」

「ねえギーシュ、貴方も先刻の話を聞いていたんでしょ？」

連中は姫様の婚約を破棄させる材料を探しているのよ？

だったらアルビオンより、トリステインやゲルマニアで探すって事ぐらい判るわよね？」

そう言われて、ようやくギーシュも理解出来た。

成程、アルビオンの叛徒共がそんなものを探すなら、地元よりもトリステインを狙うのは自明の理。全てを排除するのはいかに魔法衛士隊とて不可能だったに違いない。

そう言った『敵がどこに居るか判らない』状態である王女が、敵にバレたら即付け込まれるような恋文の存在を誰に相談出来ると言うのだろうか？

「……お話しは判りました。

ですが、わざわざご主人が出向く必要は無いでしょう？

枢機卿にでも連絡して、信用出来る貴族か誰かを派遣してもらえば済むのでは？」

だがトモだけは納得いかないらしい。更に言い募る彼に、ルイズは最後の理由を語った。

「それは、私達が『冒険者』だからよ」

「ちよっと、ご主人！？」

「『冒険者？』」

その言葉に慌てるトモ、そしてその言葉に戸惑うアンリエッタとギーシュ。

未だに冒険者のことは秘匿されている。知っているのはごく一部、これだけ付き合いの深いギーシュでさえ冒険者の事は知らされていないのだ。

それをあっさりバラしたルイズ。けれど彼女は飄々として言葉を続けた。

「私達の存在はいつまでも隠し仰せるものじゃないわ。

遅かれ早かれ、いつかはバレる……なら、早いうちに対策をとるべきよ」

「……それで王女様を巻き込もうと？」

「あら、それ位はいいじゃないの。

こっちは命を賭けるんだもの、これぐらいの報酬が無ければ割に合わないわ」

「……確か、彼女を巻き込んで隠蔽工作を頼んでいた気がしますが」「あそこにバレるのと姫様にバレるのでは意味が違うわ。

トリスティンでの事なら姫様のご威光で何とかなるし」

「あ……あの、ルイズ……？そんなに堂々と私の前で宣言されても……」

「……腹黒い、腹黒いよルイズ……ああモンモランシー、僕はどうすればいいんだい？」

肝心のところをぼかした会話ながら、どうにもきな臭い雰囲気は台詞の端々から嗅ぎ取ったギーシュとアンリエッタの頬が引き攣る。一般人と王族の目の前である。異端がどうかロマリアに工作とかフーケを抱き込んだとか言える訳も無く、詳しいことを省いての会話なので内容が不明なのだ。

にも拘らず王女を利用する気満々であることが丸分かりな言葉の応酬、内容不明である故に口を挟めないのがもどかしかった。

そんな悶々とする二人をさておき、トモはルイズの答えに納得したらしい。

「成程、それならこちらにも益がありそうですね。

とは言え、無茶なことには変わりありませんが」

「まあね、それ位でなきゃこの命も遣いどころが無いってものよ。それに……」

そこまで言うと、ルイズは意味ありげに王女に視線を向ける。

「実は反対する気、無いんでしょう？」

先刻からやたら怒鳴ってるのは、姫様に自分のしでかしたことを自覚させるため、

違いかしら？」

「！！」

ルイズの言葉に目を見張る王女。

凶星を指されたトモは一瞬だけ目を見開き、再びいつもの無表情っぽい薄笑いに戻る。

「……やれやれ、見抜かれてましたか。もうご主人をからかえなくなりませうね」

ルイズの指摘通り、トモは爆発した振りをして王女の悪行を列挙していたのである。

直接指摘するよりも、ルイズの身の危険を強調して『お前の所為だ』と迂遠に問い詰めた方が理解し易いだろうと考えたのだ。少々意地の悪い方法だが効果は覲面だったらしい。

「……からかうとかは後で追求するとして、貴方も賛成なら問題は無いわ。

姫様、私達三人にお任せください」

「無理、無理よルイズ！ ああ、なんてこと！

私は貴女達に取り返しをつかないことを……！！」

「そんな弱気でどうしますか、姫様！！」

追求はするんですね……、とぼやくトモを尻目にルイズは王女に向き直り、改めて奪還の任務を引き受ける。

一方のアンリエッタと言えば、蒼白を通り越して今にも折れそうな顔色で震えている。

散々脅されたために、今更自分の罪業に恐れを為し始めていたのだ。だがそんな彼女を、ルイズは一喝する。

「貴女はこのトリステインを背負う王家の方なのですよ？

貴女は唯、一言命令を下すだけで宜しいのです、『国のために死ぬ』と！」

「そんな！ ルイズ、貴女は……！！」

「杖は私が振るいましょう。

ルーンを唱え、剣を構え、槍を突いて敵陣を走破し、皇太子の元へ向かいましょう。

ですがそれをさせるのは姫様、貴女の命令です！

貴女の意志で私達を戦地に送るのです！

貴女の一言が、私達と立ち塞がる敵の生死を決めるのです！」

「あ、ああ……！」

「さあ、ご命令を！」

トリステイン王国第一王女、アンリエッタ・ド・トリステイン殿下！！」

アンリエッタは涙目になって首を小刻みに振る。

自分の立場がこんなに恐ろしいものだなんて知らなかった。

自分の一言がこんなにも重いものだなんて知らなかった。

——自分がこんなに何も知らなかったなんて、思いもしなかった……！！

今更ながらの後悔は彼女にとって何の意味も為さない。既に賽は振られてしまった。

彼女は自分自身の手で、彼女の大切な『お友達』に命令しなければならぬのだ。

「い……いや……わ、私……何もしないのに……」

好きで王女になった訳じゃないのに……！」

「……誰だって好きで自分に生まれて来た訳じゃありませんよ」

遂に泣き出したアンリエッタに掛けられる厳しい言葉。

ルイズと王女の遣り取りを黙って見ていたトモが陰しい表情で彼女を見下ろしていた。

「けれど生まれは変えられません。それが嫌なら自分自身で変えていくしか無いんです。

貴女が此処で泣き喚こうが、何にも変わりませんよ。

何もしないで、何も変えないで、不平不満をダラダラ流すだけならば……、

トリステインを火の海に変えた王女として、歴史に永遠に名が残るだけでしょね」

「ひいっ……！」

なんて事を言うのだろうか、この男は！

トリステインを火の海に変える？ そんな悪行を為した王女として名が残る？

……そんなのは嫌だ、嫌に決まっている！

「わ……私は一体、どうすれば……」

「それを私達に聞いてどうするんですか？

それを決めるのが王族の務めでしょう。

それが出来るからこそ、貴族も平民も王に従うのですから」

涙ながらの訴えも冷たく断じられる。それはまさに刃の様な言葉であった。

孤立無援。アンリエッタはしゃくり上げながら思う。どうしてこうなった？

——決まっている。自分が何もなかったからだ。

味方を作る努力をしなかった。こうなる前に枢機卿に相談しなかった。

何より、自分の立場を理解しようとしなかった。

何もしなかったツケが、今此処に噴出しているだけ。

悪いのは全て自分。何もしなかったが故に大切な『お友達』からすら見放されて、こうして泣き崩れる羽目に陥ったのだから。

ルイズの部屋に沈黙が落ちる。

誰も口を開こうとしない。皆、黙って啜り泣く王女を見詰めているだけ。

時間にして数分か、数時間か。沈黙を破ったのは、アンリエッタだった。

「……貴方は、私が何もしていないとおっしゃいましたね？」

このままならば、稀代の悪女として歴史に名を残すと」

「そうですね。その通りです」

「先程ルイズは私に『死ね』と命令しろ、と言いました。

あれは貴方がそう言わせたのですか？」

「違います。私はただ変わる機会をご主人に与えただけ。

あの台詞も、そこに至る考え方も、ご主人が自分で辿り着いたものなのです」

「貴方は、何もしてこなかった私に、何かをする資格があると思いますか？」

「何かをするのに資格はいらないでしょう。

今まで何もしなかったのなら、今から何かするべきだと思いますよ」

それを聞くと、アンリエッタは眦に残った涙を拭き払う。

そこには先程までとは打って変わり、毅然とした表情が浮かんでいた。

「ルイズ・フランソワーズ・ド・ラ・ヴァリエール、及びその使い魔ヤナギダ・トモ、そしてギーシュ・ド・グラモン、貴方がたに命令します。

アルビオンに向かい、ウェールズ皇太子から手紙を奪還し、私の元に届けなさい。

……必ず、生きて、私に直接渡すですよ！ これも……命令です！！」

王女が下した命令に、ギーシュは背筋を伸ばして杖を掲げ、「杖に懸けて！」と誓う。

そしてトモとルイズは胸元に輝く三本の剣を組み合わせた聖印にその手を重ね、重々しく宣言した。

「『我ら『アブソリュート・ゼロ』は必ず手紙を奪還することをここに誓う。」

クエスト
「宣誓！」

三本の剣を重ねた聖印が銀光を放ち、運命神と王女にクエストが結ばれる。

こうして冒険者パーティ『アブソリュート・ゼロ』最初のクエストは幕を上げた。

※ヤナギダ・トモ（柳田 智） 種属／ヒューマン…6

HP…14／14 MP…9／11 SP…10／10 ※数値

は現在値／最大値

EXP…14 所持金…5エキュール

進行中クエスト

- ・ルイズを守る（期限…ルイズの卒業まで）
- ・手紙の奪還（期限…アンリエッタの婚姻まで）

※ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール
種属／ヒューマン…4

HP…10／10 MP…12／14 SP…10／10 ※数値
は現在値／最大値

EXP…16 所持金…151エキュール20スウ

進行中クエスト

- ・手紙の奪還（期限…アンリエッタの婚姻まで）

※シエスタ 種属／ヒューマン…5

HP…13／13 MP…10／10 SP…10／10 ※数値
は現在値／最大値

EXP…8 所持金…4エキュール

進行中クエスト

- ・手紙の奪還（期限…アンリエッタの婚姻まで）

第十七話 任務（くえすと・2）（後書き）

文章の書き方を模索しています。

興味のある方は `http://ncode.syosetu.com/n8231x/` へどうぞ。

第十八話 出立（しゅっげき）

学院長秘書、ミス・ロングビルはここ最近多忙であった。なんやかんやでロマリア派遣が間近に迫っていたからである。ようやく全ての準備を終え、あとは一週間後にトリスタリアを出発するロマリア巡礼のキャラバンに便乗させてもらうのを待つばかりだった。だが……

「まったく、何でいきなりお姫様が学院に来たりするんだか」

突然のアンリエッタ王女の行幸を受け、旅装を紐解く羽目になったことに一人愚痴りながら無意識に『右腕』をさすっていた事に気付いた彼女は苦笑を浮かべる。

（……あいつらもまあ、用心深いって言うか臆病って言うか。

それとも用意周到って言うべきなのかね、これは）

ルイズ達との取り決めの中で、ついでの様に提案された『それ』。あれだけ頭が回るのならさぞや立派な泥棒か詐欺師になれるだろうとまで考えが及んだロングビルに、突然声が掛けられた。この部屋には確かに彼女しか居ない筈なのに。

「随分ご機嫌だな」

「!？」

いつの間にか……そう、いつの間にか彼女の背後に現れた人影。背が高く、全身を覆う黒いマントから長い杖の先が覗いている。おそらく軍人が好んで使うレイピアタイプの杖剣だ。けれどその表情を窺うことは出来ない。不気味な白い仮面で顔を隠しているから

だ。

「探したぞ。こんなところに潜んでいたとはな」

「……深夜に女性の部屋に忍び込んでおいて、随分なものの言い様ですね？」

腰に差した杖に手を伸ばしながら、ロングビルは油断無く人影を窺う。

(……………コイツ、強い……………!!)

ロングビル、いやフーケの背中にじつとりと脂汗が浮かぶ。これ程の窮地に陥ったのは冒険者達を敵に回した時以来、だがあの時のように丸く治まると言う期待はするだけ無駄だ。

(騒ぎを聞きつけた誰かが駆けつけるまで時間を稼ぐしかない、か……………)

……………やってやろうじゃないの!!)

吹き飛ばされるのを覚悟して引き抜かれた杖は、けれど怪人に向けられることは無かった。

「私は争いに来た訳じゃない。

杖を引け『土くれ』……………いや、マチルダ・オブ・サウスゴータ」
「んなっ!？」

——何故その名を知っている!? 既に知るものの居ない筈の本名を呼ばれたフーケが驚愕する。男の投げた爆弾は、彼女の度肝を抜くには充分過ぎた。

「アンタ一体何者だ？ 何故その名前を知っている？
……いや、そもそもどうやって私を見つけ出した！？」

有能な秘書の仮面を脱ぎ捨てて叫ぶ。無理も無い。今やその名を知るものは彼女の家族と『冒険者』達しか居ないのだから。いや、没落貴族である『サウスゴータ』の息女の名前くらいは調べも付くだろう。しかし『マチルダ』と『フリーケ』、そして『ロングビル』が同一人物だとは誰も知らない筈だった。

焦るフリーケに怪人は仮面の奥で嘲る様に鼻を鳴らす。

「ふん。蛇の道は蛇、貴様とサウスゴータを結びつける証拠なぞいくらでもあるわ。それに平民の衛兵なぞ役に立たん。べらべらといらんことまで喋っておったぞ」

無論、衛兵達は『フリーケ』の正体がロングビルであることなど知らない。彼らはただ、襲撃の際に教師陣が見せた失態を面白おかしく語っただけだ。学院の秘宝を狙ってフリーケが襲撃をかけたこと、その際に学院の教師の大半が留守にしていたこと、暫く経ってからようやく結成された追撃部隊には教師は一人も参加しておらず、皆怖じ気づいて尻込みしていたこと。そして学院の秘宝を取り返して来たのが学生と平民達であったこと……。

尾ひれのつきまくったそれは、さぞかし旨い酒の肴になっただろう。

「衛兵が？ ……それは盲点だったね」

まさかの情報漏洩に舌打ちするフリーケ。
そんな彼女に白仮面はとんでもない提案を持ち掛けた。

「私と来い『土くれ』。共に『聖地』を取り戻そう」

「『聖地』だあ！？ 寝言は寝てから言いな！！」

ハルケギニアの東に位置する『聖地』は、ブリミル教にとって特別な場所である。数百年前、長命と尖った耳と進んだ文明を持つエルフによって奪われて以来、『聖地』の奪還は全ブリミル教徒の悲願となった。けれど強力な先住魔法と恐るべき武器によって武装した彼らは非常に手強く、系統魔法を旨とするメイジ達は未だに辛酸を嘗め続けている。

「はん、百人総掛かりでも勝てない相手に喧嘩を売るなんざよっぱどの物好きだね！ 心中の誘いなら余所に行きな！！」

「百人で勝てぬなら千人で掛ければ良い。ハルケギニアを統一すれば不可能じゃないさ」

「ハルケギニア統一だって！？ 正気かい！？」

伝統にこだわり気位だけは高いトリステイン、実力主義故に蛮国とも陰口されるゲルマニア、政変以降きなくさい噂が絶えぬガリア、そして憎き故郷アルビオン……。

様々な国家が群雄割拠するハルケギニアで、全ての国が肩を並べるなど有り得ない。壮絶な足の引っ張り合いに終始することは確実であろう。だが目の前の怪人は自信たっぷりに頷く。

「我々はハルケギニアの将来を憂い、国境を越えて繋がった貴族の連盟だ。無能な王家を打倒し、有能な貴族が政を行う……」

そして我々の手で統一されたハルケギニアの総力をもってエルフ共を駆逐するのだ！

「王家を打倒！？ ……そうか、アルビオンで謀反を起こしたってのはアンタ達だったのかい！」

フーケの言葉に重々しく頷き、白仮面は杖に手をかけて最後通告を突付けた。

「我々は優秀なメイジが一人でも多く欲しい。
同士になれマチルダ。さもなくば此処で死ね」

「……知られたからには、って奴かい。
自分でべらべら喋っておいてそれは無いだろうに」

溜め息を吐きながらフーケを両手を上に挙げる。降参の意思表示だった。

「……やっぱり貴族って連中は嫌いだよ、人の都合なんかこれっぽちも考えやしない。ええい、解ったよ。どことなりと連れて行きな」

「案外聞き分けがいいのだな」
「まだ死にたくは無いからね。それより、アンタ達の組織は何て言うのさ？」

フーケの問いに、怪人は仮面の奥でくくくつ、と笑うと初めて名乗りを告げた。

「レコン・キスタだ。……着いてこいマチルダ。早速やつてもらいたい仕事がある」

「着替えの時間位くれないかい？ それともこんな格好でつれ回す気？」

「……外で待っていていよう。手早く済ませるんだな」

そう言い残すと白仮面はマントを翻して足早に部屋を出て行く。残されたフーケは夜会服の裾に手をかけようとして、ふと『右腕』に目をやった。

「あの子達、このことを予測していたのかしら？ まさかね」

明くる日の早朝。朝靄が立ち籠める学院の厩舎で、ルイズ達は出発の準備を整えていた。

「ね、ねえ君。これはやっぱり貴族としてどうかと思うんだが」

「またそれですか？ お忍びの任務なんですから、それ位は当然だと思いますが」

不服そうなギーシュの台詞に、溜め息を吐きつつトモが返す。彼自身はいつもと変わらぬコート姿であったが、他のメンバーは質素な厚手の丈夫な服に最小限の荷物という、まるで平民のような旅装に身を包んでいた。

「これから渡る先は敵地なんですよ？

身分を吹聴して回る訳にはいかないでしょう」

「それにあんな大荷物抱えてアルビオンに向かうつもり？

いざと言うときのために最小限にしとけて言ったでしょ」

「し、しかしだね……」

昨晚、王女から命令を受けたルイズ達は翌朝出発することを決めて解散。その際にトモは「荷物は最小限に、身元がバレる服装は厳禁」と言い含めておいた。

しかし今朝、集合場所にギーシュはいつもの服装で山のような荷物と共に現れた。もっとも、それを予測していたルイズとトモによってその場で着替えさせられ、シエスタが予めまとめておいた荷物に差し替えられたのだが。

「仮にも王族に会うのに、夜会服の一つも無いと言うのは……」

「緊急事態です。学院の制服で充分でしょう」

「それにあんまり大荷物だと夜盗に狙われ易くなりますよ？」

用心に越したことはないです」

未だぶつぶつと零すギーシュをトモとシエスタが宥めている。それを横目で見ながら、ルイズは自分の胸元に目を落とした。

そこには頑丈な革紐を通して即席のネックレスにされた指輪が光っている。トリステインの国宝『水のルビー』、アンリエッタからお守り兼身分証明として手渡されたものだ。

『いいですか？ ルイズ、これは貴女に貸したものです。

必ず返して下さいね』

「姫様も随分心配性ね。私達が散々煽った所為でもあるんでしょうけれど」

「貴女がそれを言いますか？ ……私も似たようなものですが」

指輪を渡して来たときの王女の必死な顔を思い出して苦笑いを浮かべるルイズに、すかさずトモのツツコミが入る。あまりの無礼にギーシュのみならず、事情を聞かされたシエスタが卒倒した昨夜の出来事を二人ともやり過ぎたとは微塵も思っていなかった。

「姫様、結構過保護にされてたようだし、国王様が亡くなった後のごたごたから遠ざけられていたみたい。だから、今まで知る機会が

無かったんでしょね」

「施政者としてそれはどうなのか、つてのはさておくとしても少々薬が効き過ぎたような気がします。副作用には充分注意しないといけませんね」

蝶よ花よと育てられた箱入り娘には、王族がもつ責任は重過ぎた。本来なら社交界で徐々にその重さを知って行く筈だったのだろうが、貴族達の都合で振じ曲げられて今の形に納まった、と言うのがルイズの見立てである。

一方、トモは突然突付けられた現実を受け入れられなかった場合を危惧していた。万が一、逆切れされて暴走すればトリステインの全てが巻き込まれてしまう。それ故に憎まれ役を引き受けて釘を刺しまくった訳なのだが、上手いこと伝わっているかどうかは微妙なところだ。

ルイズもまたアンリエッタと同じような箱入り娘であるが、トモとの出会いとフーケ追撃と言う経験を積んだ彼女は一回り大きく成長している。冒険者云々は余録に過ぎない。真に歓迎すべきは彼女の内面の変化なのだ。

（原作だとこの頃はまだツンツンしていた筈だし、いい傾向ですね）

冒険者としての能力の底上げがあるにしても、自力でそこまで辿り着けたのだ。未来を、この世界の筋書きを知っているトモから見てもルイズの成長は著しい。

……なのにトモの心中は穏やかではなかった。

幽かに、それと気付かない程小さな不快感が彼の心にさざ波を立てる。それを見極めようとしても小さ過ぎて自覚出来ない。

（何でしょうかこの気持ち悪さは？ 何か気に入らないことがあります

ましたかねえ)

顎に手をやり、不快感の正体に思いを馳せるトモ。
その思考を遮ったのは、ギーシュの懇願であった。

「お願いがあるんだが、僕の使い魔を連れて行ってもいいだろうか？」

「使い魔？　ギーシュ、貴方の使い魔って何だっけ？」

ルイズの酷い一言に、ギーシュは思わずっこける。気を取り直して立ち上がり、地面を何回か叩くとそこから茶色の何かが顔を出した。

「紹介するよ。僕の使い魔、ジャイアントモールのヴェルダンデだ」

「わあ、大きなモグラさんですねえ」

シエスタが黄色い声を上げる。そこに居たのは熊程の大きさのモグラであった。髭と鼻をひくつかせるその顔には、確かに愛嬌があるとさえなくもない。

「ああ、ヴェルダンデ！　君はいつ見ても可愛いね！

どぼどぼミミズは一杯食べて来たかい？」

「……なんだか急に可哀想な人に見えてきましたね」

「しっ、聞こえるわよ！　……私もそう思うけど」

モグラに頬擦りする美少年という非常に困るものを見せつけられ、げんなりする二人。すると、急にヴェルダンデが鼻先をひくつかせ、ルイズに擦り寄って来た。

「え？　何よこのモグラ……って、きゃあっ！」

今度はルイズが悲鳴を上げる。突然ヴェルダンデがルイズを押し倒し、鼻先で体中をまさぐり始めたのだ。羞恥とくすぐったさで地面をのたうち回るルイズ、いつもの服装なら盛大に曝け出されたであろう下着は厚手のズボンに隠されていたので無事であった。

「ちいっ、惜しい！」

「……ギーシュ君、後でお話があります。」

まずは君の使い魔を止めて欲しいんですが」

「あっ、そうだ、そうだね。済まないルイズ！ 止せ、止してくれヴェルダンデ、主に僕の世間体的な意味で！」

ジト目で睨み付けて来るトモとシエスタの視線に押され、ギーシュは慌ててヴェルダンデを制止する。が、ヴェルダンデはそれに構わず盛んにルイズの胸元を鼻先で突き回す。

これ以上ルイズを辱める訳にもいかない。トモが背中のデルフリンガーに手をかけ、シエスタがモップを構えたその瞬間、一陣の風がヴェルダンデを吹き飛ばした。

「ああっ、ヴェルダンデ！ 誰だ、こんなことをする奴は！！」

「済まない。婚約者の危機に居ても立っても居られなくてね」

激昂したギーシュの誰何の声に答え、朝霧の中から現れたのは羽根帽子を被った長身の青年だった。銀糸でグリフォンの刺繍が施された見事なマントを羽織っている。

それを見たギーシュの目が大きく見開かれた。青年には見覚えが無かったが、そのマントのことは良く知っていたからである。

「そ……そんな……魔法衛士隊、だって……？」

絞り出す様なギーシュの問い掛けに、青年は頷きを返した。

「女王陛下の魔法衛士隊、グリフォン隊隊長のワルド子爵だ。

姫殿下より君たちの護衛を命ぜられ、こうして馳せ参じた次第だ」

「魔法衛士隊の隊長!?!」

ギーシュとシエスタの驚愕が重なる。魔法衛士隊と言えばトリステイン騎士の頂点、王族とはまた違った意味で雲の上の人であった。

「ご助力感謝します。

私はヤナギダ・トモ、ロバ・アル・カリイエよりご主人に召喚された使い魔です」

「使い魔? 君がルイズの? ……失礼、まさか人とは思わなかったもので」

トモの自己紹介に一瞬だけ目を見開き、青年……ワルドは帽子を取って一礼する。

「初めまして、僕はジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルドだ。僕の婚約者がお世話になっているよ」

「いえ……婚約者?」

「ああ、ルイズのことさ。まあ、親同士が決めたことなんだけれどね」

「「えええっ!?!」」

再びギーシュとシエスタの驚愕が重なった。トモはと言うと、眉がそれと気付かない程度に跳ね上がるだけ。

逆に慌てたのはルイズである。ワルドの発言に顔を真っ赤にしなから、それでも淑女然とした態度を崩さずに抗議する。

「もう、ワルド様だったら、そんな昔のことを持ち出して！

……それにしても姫様も大胆ですね。グリフォン隊の隊長を派遣するなんて」

「そうだね。けれどお忍び故に大人数を動かすわけにはいかない。

だから僕が指名されたと言う訳さ」

「量より質、ってことでしょうけれど……、仮にも隊長の肩書きがついた人物の単独任務なんて、アルビオンの貴族派にとって大いに興味を引く事柄でしょ？」

そこから私達の存在を嗅ぎ付けられることだってあるでしょうし、もしかしたらこの先待ち伏せも覚悟しないといけないかも……」

ルイズが並べた懸念に、ワルドは驚いた顔で敬服する。

「これは驚いた！ 僕の婚約者はいつの間にか一流の策士になったんだい？」

「ですがご主人の懸念ももつともです。それに……」

そこまで言うと、トモはワルドの服装に視線を向ける。

グリフォン隊のマントもそうだが、立派な羽根帽子に貴族らしく洗練されたローブ、おおよそお忍びの任務には向かない姿と言えるだろう。その視線の意味に気付いたのか、ワルドも肩を竦めて首を振っていた。

「……何しろ急な話だったのでね。

ゲルマニア帰りゆえ旅装は揃っていても、流石に偽装までは手が回らなかったんだ」

「いえ、それは仕方ありません。グリフォン隊と言うことは、乗騎も？」

ワルドが口笛を吹くと、鷲の頭と獅子の身体を持った幻獣グリフ

オンが現れる。顔を寄せて擦り寄るグリフォンを撫でながら、彼は困った様に頬を掻いた。

「無論、こいつで行くつもりだったよ。

けれど、どうやら君たちの思惑を外してしまったようだね」

「……まあいいでしょう。ですが、このままでは悪目立ちに過ぎますし……」

腕を組み、頭を捻って計画を修正して行くトモとルイズ。こう言ったことに関しては彼らが適任であることを知っているシエスタとギーシュは口を挟もうとはしない。

だから、それを知らないワルドが思わず口を挟んだのは仕方が無かったことなのだろう。

「ふむ、ならば僕の従者の振りをすればいい。

何かあっても従者までは狙われないだろうし」

「「却下」」

即座に切り捨てる二人に、ワルドの口元が引き攣った。

「何故だい？ いい案だと思うけれど」

「お忍びの任務に従者を連れて歩く軍人がどこに居ますか？

ちよつと聡い人なら偽装を疑いますよ」

「それより問題はグリフォン隊長が単独で動いてる、って事よ。ちよつかい出されることが前提なら、いっそ一緒に居ても不自然じゃない理由を考えるべきね」

「それは……、確かにそうだね」

そこまで言われればワルドとて考え直さざるを得ない。

「ところでご主人、子爵とはどれ位親しいので？」

「え？ ……そうね、小さい頃は領地も近かったし、結構親しかったわよ？ 十年くらい前にワルド様が爵位を継いでからは疎遠になっちゃったけど……」

「そうだね、軍務に掛かりっ放しだったから領地にはほとんど帰れなかったし……」

「ふむ。では、少なくとも幼馴染み程度には親しかった、と考えて宜しいですね？」

「……何か思い付いたの？」

一連の遣り取りに何か突破口でも見出したのだろうか？ ルイズは悪知恵においては他の追随を許さない己の使い魔（偽）に尋ねる。水を向けられたトモは「ええ、まあ」と曖昧に頷くと、今度はワルドに矛先を向けた。

「お尋ねしますが、公務ではなく私的な理由で護衛などを引き受ける、と言うのは良くあることですか？」

「良くあるとは言えないが、それが公務や政治に支障を来さない限りはまああるな。……もしや、ルイズを？」

唐突に振られた話にも関わらず、ワルドは即座に質問の意味を理解した。

「ええ、ご主人の護衛として派遣されたことにしましょう。」

ご主人、申し訳ありませんが制服に着替えていただけますか？」

「……学院の生徒がアルビオンを訪れる理由はどうするの？ 姫様のことは持ち出せないわよ？」

「学院から一時帰省した留学生の友人を捜しに行く、と言うのはどうでしょう？」

中々帰ってこないから心配になったとか何とか」

「……その辺りが適当かしら。
貴族のお嬢様が冒険紛いの遊覧旅行としゃれ込んだ、ってところ
ね」

目の前で展開される策略に、ワルドは瞠目するばかり。

要するにこの二人は『世間知らずの学生』と言う身分を逆手に取り、本当の目的を上手くばかしながら自分が護衛に就く理由をごく自然にでっち上げているのだ。流石に老獪なマザリーニ枢機卿には劣るものの、充分に合格点を出せる作戦であった。

「……君たちは凄いな。いつの間にそんな知識を？」

「私は東方で何でも屋みたいなことを生業にしていました。その所為ですね」

「わ、私は……魔法が使えないから、知識だけは完璧にしておこう
って思ってた……」

ワルドの問い掛けにスラスラと答えるトモ。一方、ルイズの言い訳はたどたどしかった。冒険者の存在を教えるわけにはいかないとは言え、彼女には彼に嘘を吐く心苦しさがある。とうとう「着替えてきますっ！」と言い残して走り去ってしまった。

「あっ！ ミス・ヴァリエール、お手伝いします！」

「ギーシュ君も今のうちに着替えて下さい」

「そうだね。では子爵、少々失礼させていただきます」

「む、解った。早めに頼むよ？」

いたたまれなくなったのか、駆け出したルイズの後をシエスタが追いつ、トモの指示を受けたギーシュが着替えに向かう。

その場に残されたトモとワルドの間に、何とも気まずい空気が流れる。そんな空気を吹き飛ばそうと思ったのか、殊更気さくにワル

ドはトモに語りかけた。

「ねえ君、ルイズの使い魔と言うことはいつも一緒に居るんだろう？
学院での彼女はどんな感じなんだい？」

「そうですね……実技はともかく、座学は優秀みたいですよ？
残念ながら私はこちらの魔法に明るくないので、具体的にどうこ
う言えないのですが」

表面上は朗らかな会話を交わす二人。

そしてトモはルイズ達に戻るまで、貼付けた笑顔を崩さなかった。

日も昇り始めた頃、ようやく出発した一行の姿を学院長室から見
送るアンリエッタ。

どうやら増援として送ったワルド子爵と何やら悶着があったらし
く、出発にもたついた一幕は王女にとっても予想外であった。

「……もしかしたら、余計なことだったのかもしれないね。

ですがルイズ、貴女達には無事に帰って来て欲しいの。

私の我儘に巻き込んだ所為で、大切なお友達を失ったりしたら私
は……」

祈るような呟きはそこで途切れる。大きく頭を振って雑念を払い、
王女はその美貌を上げた。

どうすれば良い、などと言う資格は彼女には無い。彼女は王族で

あり、貴族と平民を束ねるものなのだから。

それを自覚すらしなかったが故に『お友達』を戦地に送ることになったのだ。ここで再び迷うのは、敢えてこの任務を引き受けてくれた彼女達への冒瀆となる。

最早アンリエッタには迷うことは許されないのだ。

「始祖ブリミルよ、どうかあの者達にご加護を与えたまえ。」

そして彼女達の任務を無事に成功させたまえ……」

毅然として任務の成功を祈るアンリエッタの後ろ姿を、オールド・オスマンとマザリーニ枢機卿が眩しそうに見ていた。

昨晚、マザリーニの部屋に突然現れた彼女から事の顛末を聞かされた枢機卿はそれこそ飛び上がりばかりに驚いた。重婚の証拠となる恋文の存在もそうだが、何よりそれを取り返すべく動いたのがヴァリエールの公女であったことが拙い。下手をすればトリステイン最大の貴族が謀反を起こす可能性だってあるのだ。

しかしアンリエッタは一步も引かず、逆に彼を説得し始めた。

これは自分の失態であることは重々承知していること。

それを教えてくれたのがルイズ達であること。

国宝である『水のルビー』をルイズに渡しているので、最早一蓮托生であること。

ルイズ達に万が一のことがあった場合、王女自らが責任を取ること。

ヴァリエール公爵には直接自分が説明に当たること。

そしてそれを防ぐために出来る限りのことをしたいので知恵を貸して欲しいこと。

男子三日会わざれば刮目して見よ、の格言通り、いや、たった一晚で王族の責務の重大さを知り、一回りも二周りも大きく成長した

王女の姿に思わず気圧されたマザリーニ。

そして湧き上がる喜びと感動。

先刻まで王族の覚悟なぞ欠片も持たなかった小娘が、一瞬にして『高貴なるものの義務』に相応しい気高さを身につけたのだ。これほど喜ばしいことは無い。

感涙にむせび泣くマザリーニを宥め、アンリエッタはルイズ支援のための策を立てる。

軍を使うことは出来ない。一部隊でも動かせば、たちまち貴族派に嗅ぎ付けられてしまうだろう。

なら気付かれない様に護衛する？ 論外だ。彼ら自身が見つからない様に動こうとしているのに、それを更に影から守ろうなんて見つけて下さいと言っているようなものだ。

「結論は、メイジも傭兵ものともせず、雲霞の如き敵兵に囲まれた皇太子の元ヘルイズ達を届け、無事に帰って来れる……そんな方法ね」

「正しく無理難題……ですが、おそらくこの国でたった一人だけ、その無謀を叶えることの出来る人物が居ます。彼を使いましょう」

指名されたのはルイズが学院に居ることを教えたグリフォン隊長、即ちワルドである。この困難な任務を彼は「姫殿下と婚約者の危機とあらば」と進んで引き受けでくれた。

「……それにしても、オールド・オスマンは良い生徒をお持ちのようだ。ともすれば不敬として処罰されかねないと言うのに、身を挺して姫殿下を諭すとは……」

羨ましそうに漏らす枢機卿。彼の周囲にはそのような気骨のある人物などおらず、不満や侮蔑を隠そうともしないくせに媚びへつらう奴らばかり。一命を賭して王女を諫めるような忠臣など望める筈

も無い。

だからそんな生徒を育てたオスマンが羨ましくて仕方が無いのだ。

「ほっほっほっ、それは買いかぶり過ぎと言うものじゃろう。
むしろ子爵のような忠臣を持った枢機卿こそ羨ましいがの」

だがオスマンにしてみれば見当違いも甚だしい評価である。

あの『冒険者』が召喚されて以来、彼の胃が休まる日は無かった。
召喚直後の一幕や決闘騒ぎ、そしてフーケ襲撃とその後の顛末。異様に口の回るあの男に加え、最近はずいぶんという黒幕が現れたことで彼の気苦労は増えるばかり。今回の件にしても、あの二人が噛んでいると知った時点で全てを投げ捨てて逃げ出したくなっただけだ。

（全く、彼が来てからと言うものの頭が痛いことばかりじゃわい）

これまでとこれからを考えると頭痛がして来る。

思わず頭を抑えるオスマンだったが、事態は突然飛び込んで来た
コルベールによって更に深刻なものとなった。

「おおおオールド・オスマン、大変です！ ミス・ロングビルが
失踪しました！！」

「何じゃと！？ 一体いつ！？」

息も絶え絶えに語られた衝撃的な報告に目を剥くオスマン。

そんな彼に、コルベールは懷から何かを取り出しながら話を続ける。

「つい先程、見回りをしていたメイドがミスの部屋が開いているの
を発見したのです！ 部屋は既にもぬけの殻、そして『これ』が脱

ぎ捨てられたドレスの『右腕』に……！」

「むう、それは………！？」

差し出された『それ』を見たオスマンは顔を青褪めさせた。

マザリーニは意味が分からず首を捻っている。

「何と言うことだ、こんな時に……！」

「で、ですが、このままでは………！」

「お静かに願います、オールド・オスマン。日の出より大分経った
とは言え、まだ休んでいる生徒も居ることでしょう？」

狼狽するオスマンと浮き足立つコルベール。右往左往する二人を
諷めたのは、今や豆粒よりも小さくなったルイズ達の後ろ姿を見送
り続けている王女であった。

「ぬ、しかし………！？」

「何があったのか説明していただけますか？　もしかしたら力にな
れるかもしれません」

毅然とした態度を崩さず詳しい説明を求めるアンリエッタに、オ
スマンとコルベールは顔を見合わせた。

「……少々取り乱しましたな。ですがこれは学院の問題、姫殿下に
おかれましては……」

「構いません。私の事情に学院を巻き込んだのはこちらですもの。
その分は埋め合わせるべきですわ」

ぴしゃりと言い放つその姿に、オスマン達は再び顔を見合わせた。
目配せの応酬の末、コルベールは己が握り締める『それ』の意味を

語る。

「……………」と、言う次第で……」

「なんと！ それは一大事ですぞ！！」

「……ですが、余りにも時期が合い過ぎています。もしかしたらルイズ達の件と何か関わり合いがあるかも知れません」

その説明に驚くマザリーニとは対照的に、アンリエッタは冷静にこの件とルイズ達の任務の関わりを指摘する。

「うぬ、なれば早速彼女達に増援を……！」

「なりません。少数精鋭に留めた意味をお忘れですか？」

「しかし殿下……！！！」

慌てふためくオスマン達を嗜め、アンリエッタは朝靄の晴れつつある蒼穹の空を見上げる。

「既に杖は振られたのです。ならば彼らの忠誠を信じずして何としますか？」

「む、ぐ………そうじゃの、そうであった。確かに彼らなら道中にどんな困難があろうとも、必ず乗り越えてくれますでしょうな」

その言葉にマザリーニはワルドを思い浮かべ、彼以外はあの男の姿を思い浮かべる。一見無表情にも見える薄い微笑みで、思いもしない事をしでかす正体不明の謎の男。

『何かをするのに資格はいらないでしょう。』

今まで何もしなかったのなら、今から何かするべきだと思いますよ』

東方から来たと言うトモの言葉を思い出し、アンリエッタは既に見えなくなった後ろ姿に目を向けた。

「彼らを信じましょう。そして私達は私達が出来ることをするのです。

——彼らが帰って来た時、胸を張って迎え入れるために」

力強いその言葉はまさにクエストを誓った時のルイズ達の姿、そのものであった。

※ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール
種属／ヒューマン…4

HP…10／10 MP…11／14 SP…10／10 ※数値
は現在値／最大値

EXP…17 所持金…151エキュール20スウ

進行中クエスト

・手紙の奪還（期限…アンリエッタの婚姻まで）

第十九話 襲撃（まちぶせ）

同じ岩から削り出された建物が、山道を挟んで張り出した溪谷の崖を穿つ街並。

港町ラ・ロシエールはそんな街である。

溪谷に翳されて昼なお薄暗い町並みから一本外れた裏通りの奥深く、そこに『金の酒樽亭』は存在していた。

「アルビオンの王様はもう終わりだね！」

「いやはや、『共和制』って奴の始まりなのか！」

「では『共和制』に乾杯！」

一見すると廃屋の様にしか見えない店内で、強面のごろつき紛いな男たちが手にしたジョッキを掲げて乾杯を交わしていた。彼らは今や叛徒である筈の貴族派から『王党派』と呼ばれているアルビオン王国軍から逃げ出した傭兵達である。

王国への忠誠だの新体制への移行だのはどうでもいい。肝心なのは金払いがいいか悪いか、そして生きるか死ぬかの違いだけだ。支払われた金と自分の命が釣り合うなら負けるまで雇われてやる。だが最後まで付き合うつもりは無い。

そんな彼らだからこそ『彼女』に目を付けられたのだろう。

立て付けの悪いはね扉が耳障りな音を立てる。

男たちの無遠慮な視線が突き刺さるのも気にせず現れたのは、フードを目深に被った長身の女であった。

「……アンタ達、傭兵かい？」

街娘のような蓮っ葉な言葉遣い、だが育ちの良さが窺える上品な

声色という矛盾した女の台詞に傭兵達は互いに顔を見合わせる。

「……姐さん、あんた貴族かい？」

「メイジではあるけどね、貴族じゃないよ。それより、私に雇われる気はあるかい？ ……金なら、ホラ」

傭兵達に纏め役である一番年嵩の男が放った疑問に答えた女は袋を投げ出す。重たい音を響かせてテーブルに落ちたそのの中身を見て、男の目の色が変わった。

「おほ、エキュー金貨じゃねえか！ ……こんだけ貰えるなら充分だ。」

いいだろう、雇われてやるよお嬢さん。それで？ 何をすればいいんだ俺達は？」

「悪いけど、私は代理人だよ。もうすぐ雇い主が来るだろうから……」

女がそこまで言いかけたその時、再びはね扉が耳障りな音を立てる。傭兵達の視線が新たに現れた人物を捉えるや、店内にどよめきが走った。

なぜならその人物は怪しい仮面で顔を隠していたからである。

「連中が出発した。少し手間取っていたようだがな」

「そうかい。こっちはたった今傭兵を雇ったばかりだよ」

女との遣り取りに傭兵達はこの白仮面が雇い主だと理解した。

「貴様らはアルビオンの王党派に雇われていたのか？」

「先月まではな。負けるような奴は主人じゃ無えよ」

白仮面の質問に答えた男の言葉に傭兵達がどっと湧く。
だが続けて放たれた怪人の言葉で今度は店内が凍り付く。

「金は言い値を払う。だが俺は甘っちょろい王様じゃない。逃げれば殺す」

いっそ静かなその台詞に、百戦錬磨の傭兵達は脂汗を流して頷く以外出来なかった。

魔法学院からラ・ロシエールまでは早馬で二日ほど、だが翼あるグリフォンなら無休憩で一日あれば着ける。しかし流石のグリフォンとて五人も載せることは出来ない。

故にルイズとワルド以外の一行は馬を乗り換えながら街道を直走る羽目になった。

「ラ・ロシエールまで止まらずに行くつもりだったんだが……」

「戦力を分散する訳にはいきませんわ。私達は偵察がてら彼らに合わせましょう」

馬に合わせてゆったりと飛ぶグリフォンの騎上で、ワルドを嗜めるルイズ。

そのグリフォンに追い付こうと全速で走る三騎の馬のうち、一騎だけがやや遅れ気味だった。言うまでも無くトモを乗せた馬である。

「……彼は馬の乗り方が下手だね。まるで初心者のようなだ」

「ようだ、じゃ無くて初心者そのものですわ。彼の国では馬自体珍しかったそうです」

「ふむ、彼はロバ・アル・カリイエより遠いところから来たんだっ
たね。どうやって移動していたのかな」

「馬を使わない乗り合い馬車のようなものが発達していたそうです
わ。仕組みの方は専門外とかで教えてくれませんでしたわが」

ワルドに抱え込まれるような格好でグリフォンに跨がるルイズの
口調が未だ硬いのは偽装のためだ。「どこに目や耳があるか解りま
せんもの」とは彼女の談。

「気にし過ぎじゃないかい？ 僕としてはもっと気安く接して欲し
いんだが……」

「いいえ、貴族派が何らかの行動を起こすことを念頭に置かないと
いざと言う時に備えられませんか。……任務を終えてから昔みたい
にいっぱいお話ししましょう？」

「ふふっ、そうだね。ならば増々急がねば！」

「……彼らを置いて行かないでくださいね？」

何故かやたら急ごうとするワルドを何度嗜めただろうか？ いい
加減注意もおざなりになって来る。そんな彼女をひたと見据え、彼
はとんでもないことを言い出した。

「随分彼らを気にするね。もしかして、あの中の誰かと恋仲なのか
な？」

「へ？」

突拍子も無いその言葉に、ルイズは硬直する。

「違うのかい？ やたら彼らの肩を持つようだったし、もしかしたらと思ったんだが」

「……ち、違いますわ。彼らは……そう、仲間！ 仲間なんですよの！」

慌てて否定するルイズに、ワルドは悪戯っぽく微笑む。

「それは良かった。

婚約者に恋人が居るなんて聞いたら、きっと僕は生きていられないからね」

「……大袈裟ねえ。第一、婚約者とは言っても親同士が決めたことじゃなくって？」

呆れたようなルイズの言葉にワルドは戯ける。

「おや、僕の小さなルイズ！ 君は僕のことを嫌いになったのかい？」

「そんな訳ありませんわ！ それに、もう小さくありませんことよ？」

「僕にとっては未だに小さな女の子さ。覚えているかい？ あのお屋敷の中庭で……」

その台詞を聞いた途端、ルイズの脳裏に夢の情景が甦る。忘れ去られた中庭、池に浮かぶ小舟、毛布に包まって泣く幼い自分、迎えに来てくれた少年と、そして……

（……？、何だったかしら、何か……あつたような気がするんだけど……）

霞んでしまった夢の情景に首を捻るが、思い出せないのなら大し

た事ではなかろうと意識の外へ追い出し、ルイズは微笑み返した。

「……そうね、貴方はいつでも私の味方で居てくれたわ」

「そうだね。僕も君に相応しい男になろうと必死だった。何があっても君を守る貴族になって君を迎えに行くんだと誓って、一生懸命軍務に奉公したもののさ」

「本当に領地には帰ってこなかったものね。お父上がランスの戦で亡くなられて……」

「ああ。陛下は父を良くご存知だったし、特別に計らって戴けたお陰で魔法衛士隊にも入隊出来た。色々苦勞はしたけれど、ようやくあの日の誓いを果たせる日が来たよ」

ルイズにとって、ワルドは初恋の人だった。

同時に、夢に見るまで思い出せなかったくらい遠い日の思い出の人でもあった。

婚約者だと言うのも父同士が交わした戯れのような約束にしかすぎない。けれどそんなあやふやな絆を支えに、彼は今日まで頑張っていたのだと言う。

ワルドの事を好きか嫌いかと問われれば、間違いなく好きに傾く。しかしそれは、家族や友人に向けるような「好き」であり、恋人に向けるそれとは違う。

このままでいいのだろうか、そんな思いがルイズの中で渦をまく。彼の預かり知らぬ事とは言え、彼女は既に真つ当な貴族とは言い難い。運命に立ち向かう誓いを立てた『冒険者』と言う立派な『異端』なのである。

自分の都合に彼を巻き込みたくはない。けれど彼の思いに喜びを感じる自分も居て、ルイズはどうしていいのかよく解らなくなっていた。

「お互い久しぶりに合うんだ、この旅は良い機会さ。」

一緒に旅を続けていれば、昔みたいに打ち解けられるよ」

「……そうね。焦らずのんびりと行きましよう。お互いのためにもね」

いつの間にか昔の口調に戻っていた事に、ルイズは気付いていなかった。

乗馬はただ馬に跨がっていればいいと言うものではない。縦横無尽に揺れる馬の背で、馬に負担がかからないように進みたい方向へ誘導しなければならないからだ。

少なくとも初心者が馬を全力で走らせるなんて真似、無謀以外の何者でもない。

日もすっかり落ち、重なりかけた月明かりが照らし出す山道で、乗り馴れぬ馬の背に揺られてぐったりしたトモはそんな事を思う。

「もう一日近く走りっ放しだぞ？　どうなってるんだ、魔法衛士隊は化け物か」

「で、でも一応私達に合わせては下さっている様ですよ？

ほら、付かず離れずの距離を保っていますし」

乗り馴れているとは言え、こんな強行軍は初めてのギーシュが同じくぐったりしながら漏らした台詞に、こちらは多少余裕のあるシエスタがフォローを入れる。

時折こちらを振り返っては速度を緩め、大きく引き離さない様に

調節しているらしいワールド達を見ながら、トモは今後の展開を思い出す。

確か原作ではラ・ロシェールの入口付近で傭兵による待ち伏せがあり、それを凌いだ一行をチェルノボーグの監獄から脱走したフリーケが襲撃する……そう言う筋書きになっていた筈だ。

だが原作とは違い、フリーケはこちら側に付いた上で学院に残して来ている。元々才人達の一件が無ければ『ロングビル』が『フリーケ』だと知られる事は無かったのだからレコンキスタとの接触も有り得ない、と言うのが彼の見立てであった。

（後は彼の出方次第になりますね。

ご主人の牽制が上手い具合に効いている様ですが、どこまで通用するやら）

原作ではそれこそ一行を置いてけぼりにする勢いだったが、馬の交換を待ったり無理の無い速さに留めたりと一応気遣ってくれているらしい。

要所要所でルイズが口を出しており、その度に悪戯を叱られた悪ガキのようなバツの悪い笑顔を浮かべながら、それでも尚ルイズを口説くワルド。

その姿を見ながらトモは思う。

そのマメさを別のところで発揮すれば、少なくとも原作のような小悪党ルートなど辿らずに済んだものを、と。

だが上手く立ち回りさえすればワルドも仲間へ引っ張り込める。彼の母親が狂気に捕われた大隆起、そしてロマリアの陰謀。これを餌に使えば懐柔も容易に出来るだろう。

何れにせよ今はワルドの出方を待つしかない。これまでとこれからのあらましを知っているだけに、何とももどかしい話だった。

「これは、何とも……はあ……」

「あ、ほら、ラ・ロシェールの入口が見えてきましたよ！」

この分なら夜明け前くらいには着きますから、もう少しの辛抱です！」

思わず溜め息を吐くトモを見て、疲れているのだと勘違いしたシエスタが遠くに霞む溪谷を指差して励ます。その言葉にのろのろと頭をもたげて指差された方角を見やれば、確かに険しい山々の合間に明かりがぼつりぼつりと灯っているのが見えた。

「……私の目には山にしか見えませんが、どこが『港町』なんでしょうか？」

さも初めて見るかの様に振る舞うトモ。

少し白々し過ぎるかと思ったが、この二人には通じたようだった。

「おや、君はアルビオンを知らないのかい？」

「……ああ、そう言えばトモさんはロバ・アル・カリイエ出身でしたっけ。」

それならばご存じないかもしれませんね」

呆れ顔のギーシュと、トモの出自を思い出して納得するシエスタ。そんな二人に内心苦笑しながら、トモは小芝居を続ける。

「あの山の向こうに海があるとか？」

「いや、見ての通り此処から先は山しか無いよ」

「じゃあ船はどこから出るんです？」

「ラ・ロシェールからに決まっているだろう？」

トモの質問攻めにギーシュは一つ一つ丁寧に答えるが、肝心の所

はばかしたまま。シエスタはと言うと、吹き出しそうになるのを必死に堪えて微妙な表情になっている。

山道を直走り、やがて東の空がぼんやりと明るくなってラ・ロシエールの街並がはつきり見えるようになった頃、突如ルイズの警告が二人に届く。

『気を付けて！ 怪しい連中が待ち伏せてる！』

「止まりなさい、ギーシュ君！ 敵襲です！！」

「えっ？ 何だって！？」

咄嗟に馬を止めたトモ達の制止に戸惑うギーシュ。聖印を持たないが故にルイズの警告が届かず、やや離れて立ち止まった彼めがけて火の点った松明が投げ込まれた。

「う、うわあっ！？」

「ギーシュ君、今行きます！ シエスタさん！」

「はいっ！」

松明の炎に驚いて激しく暴れ出した馬から放り出され、転がり落ちた彼の頭上に矢の雨が降り注ぐ。鋭い鏃の切っ先に己の死を予感し、ギーシュは思わず目を閉じる。

しかし今にも頭蓋を貫こうとしていた矢は白刃に振り払われた。それぞれの獲物を握り締めたトモとシエスタが彼を庇って矢の雨に立ち塞がったのだ。

「ミスタ・グラモン、私の後ろに！」

凄まじい早さでデルフリンガーを振るうトモに、信じ難い勢いでモップを振り回すシエスタ。二人に叩き落とされた矢が音を立てて地面に突き刺さる。

それを目の当たりにしながらギーシュは悔しさに顔を歪めた。

二人とも彼を弱者として扱っている。確かに冒険者に比べればギーシュなど話にならないだろう。だがギーシュとて望んでこの任務に加わった身だ、この扱いは彼に取って屈辱の極みと言っても良かった。

「くっ、ワルキューレさえ、攻撃さえ届けば………!!」

だが敵は切り立った崖の向こう、ゴーレムでは手も足も出ない。同様にトモの剣もシエスタのモップも届かず、状況はかなり不利だった。

にも拘らず、二人の表情には焦りの色が無い。彼らには聞こえていたからだ。

『みんな大丈夫!?!』

『重傷者は無し、ギーシュ君が軽傷を負った程度です! それより敵の迎撃を!』

『ああそれは大丈夫よ、っとシエスタ! 右から五本来るわよ!』

『判りました! でも大丈夫って、何がですか!?!』

『まあ仕掛けはしてあるから………って次! 左から六斉射!』

『お任せを!』

そう、トモとシエスタには聖印を通じて頼りになる司令塔の声が届いていたのだ。

その事を知らず歯噛みするギーシュの目前で風が揺らめき、小さな竜巻が矢を弾き飛ばす。ルイズと共に空を舞うワルドの援護であった。

だがトモ達に取っては余計なお世話であろう。遠距離攻撃に欠けるこの面子で唯一の遠隔攻撃持ちが守りに走っても意味が無いのだから。

それはワルドも理解していた。彼は涼しい顔の婚約者に「僕達は奴らを討とう」と提案するも、ルイズはそれを否定する。

「ああ、それは大丈夫よ。もうすぐ来るんじゃないかしら？」

何が？、と言う彼の疑問は即座に驚愕に取って代わる。

何故か矢が彼らとは逆方向の上空に向けて放たれ、先程と同じく小さな竜巻がそれを弾き飛ばす。けれど魔法を放ったのはワルドではない。

「おや、風の呪文じゃないか」

「風？ ……ああ、あの二人ですか！」

ほどなくして崖の上から弓手が転がり落ち、大きな影が舞い降りて来る。はたして見覚えのある風竜の背に乗っていたのは、これまた見覚えのある二人組だった。

「ハアイ、お・待・た・せ！」

「お待たせ、じゃありませんよ。何しに来たんですか、キュルケさん？」

予想通り、そこに居たのはキュルケとタバサであった。だが原作と違い二人とも制服姿の上、簡単な旅装までしている。トモはこれも原作改編なのだろうか、と思いながら怒っている風を装って二人に詰め寄った。

「それはもちろん、助けに来たに決まってるじゃないの。」

……ゴメン嘘。だから無言で剣を構えないで、お願い」

「まあ、出発にもたついた辺りでバレるかな、とは思ってましたが」

「俺の出番これだけかよ!」と不満げなデルフリンガーを鞘に納めて溜め息を吐く。

転がり落ちた際に強かに身体を打ち付け、うめき声を上げてのたうち回っているところをギーシュに『練金』で拘束される男たちを指差し、キュルケは口を尖らせる。

「何よう、結果的に助かったんだしいじゃないの。

……うん、私が悪かった。だからそのナイフしまって、怖いから」

「……朝、貴方達とその貴族が出掛けようとするのを私が目撃した。

後を着けようとしたらキュルケも着いて来た。だから悪いのは私」
「ちよつと、タバサ!？」

あくまでぐらかそうとするキュルケを押さえ、タバサが事の真相を暴露する。

彼女は自分に足りないと言う『冒険者の資格』を探るため、出来る限りルイズ達に付き合う事になっていた。そして今朝、こそこそと旅支度を整えて出掛けようとする彼女達を目撃した時、タバサはある計画を思い付く。

ルイズ達『冒険者』がこぞって出掛けるとしたら、それは『クエスト』以外に有り得ない。ならば先回りして彼女達の『クエスト』を間近で観察し、何が足りないのかを知る手掛かりにしよう、と。

慌てて旅支度を揃え、朝食がまだたとねるシルフィードを杖で脅していざ出立と言う時、同じく旅支度を整えたキュルケが現れて同行を申し出たのだ。

『貴女が何か背負っているのは知っているわ。

でも困ってる親友を見捨てる程、ツェルプストーの女は薄情じゃないのよ!』

これは自分の問題だと説得するタバサに、キュルケが叩き付けた台詞がこれだ。

シルフィードの背中に陣取って頑として降りようとしないう彼女に、これ以上の説得は無意味と悟ったタバサは渋々彼女を連れてトモ達を追いかけ……

「……で、追い付いてみたら襲われてたから、恩を売る絶好の機会だと思って……」

「あいつらを一人残らず焼き払う、と激怒するキュルケを宥めるのには苦労した」

「ちょっ！ 何でバラすのよタバサ!？」

……まあ、そんな訳で誰にとっても意外な援軍として活躍する事になったのだ。

しれっとするタバサに顔を真っ赤にしたキュルケが詰め寄るのをにやにやと見物していたトモだったが、ふと先程のルイズの言葉を思い出して首を傾げる。

「そう言えば、何でご主人はキュルケさん達が来るって解ったんですか?」

「そう言えばそうですね。……もしかして、見えていたとか?」

「まさか! シルフィードには高いところを飛んでもらっていたし、そのグリフォンが貴女達の所に降りてから私達も動いたのよ?」

「そうそう気付かれる筈が……」

「それは僕も気になっていたな。ルイズ、何を根拠に彼女達の援軍を予測したんだい?」

「見える限りでは何も無かったと思うが……」

この場面で援軍が来ると知っているのはトモだけの筈、普通はこ

んな都合の良い展開が起こるなんて想像すらしない。

だがそんな当たり前の疑問に、ルイズは一同が思いもしなかった答えを出した。

「別に？ この二人ならここら辺で出て来るんじゃないかなって思っただけよ」

「「「「……………あ？」」「」」「」」

その言葉に呆気にとられる一同。

呆然とする彼らに、ルイズは悪戯小僧の笑みを浮かべてネタばらしをする。

「大した事じゃないわ。

私がやったのは着替えに戻った時、タバサに私達の姿を見せただけだもの」

「……………あっ！ じゃああの時、わざわざ遠回りしたのって……！？」

思い当たる節があったのか、シエスタが驚愕の声を上げる。

そしてタバサは、いや、ワルドとギーシュを除く全員がルイズの策略を理解した。

タバサが冒険者にご執心なのは皆知っている。そんな彼女がルイズ達の旅立ちを見逃す筈がないであろう事も容易に想像がつく。

だからルイズはわざと自分達の姿を彼女に目撃させたのだ。

「それにタバサが来るなら十中八九、キュルケも着いて来る筈よ。

貴女の性格なら首を突っ込んで来るのは確実だしね」

「……………け、けど、そんなあやふやな根拠だけで確信出来るものなのかい？」

ワルドの問いに、彼女はちらりと目を向けて言葉を重ねる。

「根拠ならありますわ。彼女の使い魔……シルフィードが」

「シルフィードが？」

「ええ。追いかける手段が無ければ諦めもつくでしょうが、彼女達にはシルフィードが居ます。ならば追いかけないと言う選択は取りませんわ。

タバサのシルフィードなら私達に見つからないように後を着けるのなんて簡単でしょうし、何より馬に合わせてゆっくり進む私達を見失うなんて有り得ませんもの」

「なんと！ あれも策の内だったのかい！？」

ルイズの策士ぶりに驚くワルド。

それとは対照的に、トモはあくまでも冷静に指摘を入れる。

「だったら最初から同行を求めれば良いでしょうに。一体何故そんな事を？」

だが彼女はその言葉に首を振る。

「あのね、キュルケ達は留学生……国外からのお客様なのよ？ 万一の事があつたら外交問題だし、何より王家の秘事に関わってもらふ訳にいかないわ。

でも自発的に後を着けて来る分には何かあってもこっちの責任にはならないでしょう？ 勝手に着いて来た訳だし、最悪逮捕拘束もありじゃない？」

余りに酷い発言に目を丸くする一同。キュルケに至っては「そんなに嫌われていたのね……」と影を背負う始末。しかしその中でトモだけは彼女の真意を見抜いた。

「成程、見つからない様にするのではなくてわざと見つかり易くする事で逆に彼女達の行動を縛った訳ですか。確かにいくら言い含めたところで大人しくしている御仁でもありませんし、ならばいつそ逮捕と言う手段を行使した方が確実でしょうね。」

「……そんなに心配でしたか？　彼女達の身の安全が」
「「「「……はい？」」「」」「」」

トモの台詞に再び目を丸くする一同。

そしてルイズはと言うと、右手で顔を押さえて「あちゃあ……」と漏らしていた。

「やっぱり判っちゃったか……、出来ればバラさないで欲しかったんだけど」

「偽悪趣味も程々に願いますよ？　恩を押し付ける輩よりは断然マシですが」

ルイズが危惧していたのは彼女達の不在を知ったタバサの反応であつた。

タバサが『冒険者』に固執している事は知っている。そんな彼女が『冒険者』の手掛かりである自分達を見失った時、どのような行動に出るのか……それを怖れたのだ。

あちこち探しまわる程度ならばまだ良い。だけど一番怖いのは、ルイズ達がアルビオンへ向かった事を知った場合だ。内乱のさなかのアルビオンで、幾ら腕が立つとは言え一学生の、しかも見目麗しき女生徒が無事で済む確率は低い。

ならば最初から同行を申し出るか？　それこそ愚策だ。ルイズ自身が言った通りタバサ達は国外からの留学生、ましてキュルケはゲルマニア人なのである。彼女を関わらせるのは任務の内容的にもよ

ろしくない。

彼女達を同行させる選択肢をルイズは一番最初に切り捨てていた。

『同行はさせるわけにはいかない。けれど目を離す訳にもいかない』

まさに二律背反。そこでルイズは一計を案じる。

必要なのは彼女達の安全を確保する事であり、そして一番安全な場所と言えば――逆説的ではあるが、牢獄の中であろう。

ちよつとやそつとではびくともしない頑丈な建物に、厳戒な監視網。警戒する対象が中か外かの違いはあれど、少なくとも中に居る限り安全は保障される。

だからといっていきなり投獄する訳にはいかない。それこそ外交問題になってしまう。

彼女達を牢獄に放り込む根拠があり、しかも簡単に放免出来るような罪状のでっち上げ、その為にルイズが選んだのが『自分達を追いかける』と言う策であった。

ルイズが語った通り極秘任務を探るのは重大な罪となり得る。とりあえず身柄を拘束するには充分であろう。そして任務が終わってから訴えを取り下げれば良いのだ。

もちろん無実の罪になるので謝罪と賠償は必須だが、任務に巻き込まれて死亡と言う最悪の結果さえ回避出来ればやりようはある。

そう考えたルイズは悪役を演じる決意を固めた。自分の貴族としての体面は傷付くし、キュルケ達との交流も途絶えるだろうが、それでも彼女達を失うよりは良い。

それが彼女の行き着いた答えであった。

「ご主人は役者には向いてませんね。割とバレバレでしたよ？」

「そりゃ貴方と比べたら大部分の人間は役者に向いてない事になるわよ。」

あーあ、折角の作戦が……」

朗らかに殺伐とした会話を交わす主従の姿に、呆氣に取られていた一同が再起動を果たす。そして一同を代表するかの様にキュルケが二人に詰め寄った。

「ちよちよちよ、ちよつと待って！ それってつまり、襲われる事も織り込み済みってこと！？ 貴方達一体何処へ何をしに行くのよ！？」

「それなんだけど……、おそらく襲撃を受けるのはラ・ロシエールに着いてからだと思ってたのよね。この時期アルビオンに向かう貴族なんて警戒されて当然だもの」

「アルビオン！？ あの内乱真っ最中の国へ！？」

目的地を知って蒼くなるキュルケ。

タバサも衝撃を受けたようで、顔色が若干白くなっていた。

「でも、実際に襲われたのはラ・ロシエールに入る前だわ。

これはもう確実に情報が漏れているわね」

「ふうむ……。おそらくだが、僕の不在から嗅ぎ付けられたんだろう。

ルイズの危惧が当たってしまったな」

（どの口がそれを言うんですか。面の皮が厚いにも程がありますよ？）

ルイズの懸念にワルドが同意する。トモは内心でワルドの狸振りに呆れていたがそれを飲み込み、二人に提案を出した。

「問題はどの程度まで知られているのか、ですね。連中を問いただして探りましょう」

「そんなに素直に話すかしら？」

「多分自分達の出自を誤摩化して来るでしょうね。」

おそらく物取りでも名乗って来るんじゃないでしょうか」

「貴族相手に物取り？　しかも一目で魔法衛士隊と判る相手に？」

……有り得ないでしょ、そんなの」

トモの意見を即座に却下するルイズ。

と、そこへ会話に入れなかったので襲撃者を尋問していたギーシュが戻って来た。

「子爵、あいつらはただの物取りだと言っています。捨て置いても問題は無いかと」

「「「「「……………」」」」」」

有り得ないことがあつさり有り得た事に、一同は言葉を失う。

その沈黙をどう取り違えたのか、「ふふん、僕に任せてくれればこの通り！」とふんぞり返るギーシュにトモはデコピンを叩き込んだ。

「あからさまに言い訳じゃないですか！」

「ぶふえっ!？」

体力6のデコピンの威力よりも、折角の手柄を暴力で返された事に抗議するギーシュはさておき、ルイズ達は拘束された男たちに向き合った。

「……さて、君たちの素性を訊かせてもらおうか」

「へっ、あっちの兄ちゃんにも言っただろう？　俺達やただの物取りさ」

「……もうすぐ夜明けですよ？　こんな時間に出没する物取りが居

る訳無いでしょう」

改めてワルドが尋問を開始する。早速はぐらかす男達の矛盾を指摘するトモ。

「……へっ、これくらいの時間の方が獲物も油断するってモンだぜ」

「だったら宿屋や野宿している旅人を襲った方が確実でしょうに。」

こんな時間にほっつき歩くような旅人なんてそうそう居ませんよ」

「……………へっ、朝一番の船に駆け込む奴らは良いカモなんだな」

「だったら商隊を狙うでしょうが。あからさまに貴族の、それも幻獣に騎乗している人間を襲う博打、ただの物取りがすると思いで？」

「……………へっ、貴族様ならたんまりと金を持ち歩いているかな」

「だったら何で攻撃を中断したんですか？ メイジ相手に攻撃の手を休めるなんて、反撃して下さいと言っているようなもののなに」

「……………」

言葉を重ねるうちにどんどん男達の顔色が悪くなって行く。

だがどんなに矛盾を指摘されても、彼らは自分達が物取りである
としか言わない。

暫く丁々発止の遣り取りが続き、不毛な言い争いの風体を醸し出した辺りでワルドが遮る様に発言する。

「もういい、僕に任せたまえ。」

何、魔法衛士隊でもこんな奴らは良く相手にしていたから慣れている」

「…………ふむ。では後はお任せします」

そう言ってトモと入れ替わったワルドは杖を抜き、青白い光を纏

わせる。風系統の軍人が好んで使う『エア・ニードル』の魔法だ。
そしてワルドはそれを躊躇い無く男の手に突き刺した。

「ぐわああああああっ?!?!?」

「なっ!?!」

突然の凶行にトモは度肝を抜かれた。

激痛で蹲る男を見下し、ワルドは冷たい声で尋問を開始する。けれどそれは先程までトモが行っていたような『温い』ものでは無かった。

「さて、お前達に許されるのは二つだけだ。真実を語って生き延びるか、黙秘を貫き全身を切り刻まれて死ぬか……好きな方を選びたまえ」

「ひいひいっ、話す! 全部話すから命だけは助けてくれ!!」

執行人の眼前に引っ立てられた死刑囚の如く、怯え切った男達がいとも簡単に口を割る。

自分達は傭兵で、ラ・ロシエールで怪しい二人組に雇われた事、片方は滅多に見えない美人で、もう片方は白い仮面を被った正体不明の人物だった事。

高額の報酬につられて引き受けた事、此処を『グリフォンに乗った貴族』が通りかかったら襲うよう命じられた事、だが決して殺してはいけない事、『グリフォンに乗った貴族』以外は皆殺しにして構わない事、そして逃げたら殺すと脅された事……。

「……それで全部か? 隠し立てするならその首刎ねてやるまでだが」

「本当だ! これで全部なんだ、嘘は言ってねえ! 信じてくれ!」

その必死な姿に嘘は言っていないと判断したワルドが一行に向き直る。

「どう思う？」

「……『グリフォンに乗った貴族』って言うのはワルド様の事ね。姫様の護衛が単独で動いたのを知って、揺さぶりをかけたところかしら」

「だとしたら、任務については知られていない可能性が高いな。

……同行者を殺して後の出方を見るつもりだったのかな？」

「仮面を被った人物と言うのはアルビオンの貴族派でしょうね。

自分達の正体を探られない様に変装を……って、どうしたの？
顔色が悪いわよ？」

ワルドと証言の内容を考察していたルイズが黙ったままのトモに気付いて声をかける。『エア・ニードル』が突き立った手を押さえ、悶える男を見詰めていたトモは、その言葉に我に返ったように慌てて会話に加わった。

「いえ。何でもありません。……そうですね、ご主人の見立てが正解だと思います。

おそらく時間稼ぎも兼ねているんでしょうが」

「時間稼ぎ？」

「そうです。先程ご主人が言われた通り、連中は私達をラ・ロシェールで迎撃するつもりなのでしょう。その為の兵力をかき集める時間が欲しかったんだと思いますよ」

「成程、斥候を兼ねた足止めと言う事か。まんまと嵌ってしまったな」

頭を掻きむしり、悔しげに言い捨てるワルド。そんな彼を冷めた

目で見るとモだった、ルイズの「だったら急ぎましょう」の言葉に頷くと再び馬に跨がる。

目指すラ・ロシェールの街までは後少し。馬三匹とグリフォンに風竜を足した一行は街の灯りを目指し、山道を駆け抜けて行った。

※ヤナギダ・トモ（柳田 智） 種属／ヒューマン…6

HP…14／14 MP…8／11 SP…10／10 ※数値

は現在値／最大値

EXP…15 所持金…5エキュール

進行中クエスト

- ・ルイズを守る（期限…ルイズの卒業まで）
- ・手紙の奪還（期限…アンリエッタの婚姻まで）

※ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール
種属／ヒューマン…4

HP…10／10 MP…10／14 SP…10／10 ※数値
は現在値／最大値

EXP・・18 所持金・・151エキュー20スウ

進行中クエスト

・手紙の奪還（期限・・アンリエッタの婚姻まで）

※シエスタ 種属／ヒューマン・・5

HP・・13／13 MP・・9／10 SP・・10／10 ※数値は

現在値／最大値

EXP・・9 所持金・・4エキュー

進行中クエスト

・手紙の奪還（期限・・アンリエッタの婚姻まで）

エネミーデータ

・傭兵団（弓）・・LV1 敏捷値・・2／攻撃値・・6／防御値・・3

HP／MP・・20／10

主に弓矢を使う雇われの兵士達。トループ（※1）として扱う。

忠誠心は低く、報酬に見合わない仕事なら逃げ出してしまう。所謂ザコ。

・保有スキル／矢の雨（※2）・・LV1／破れかぶれ（※3）LV2

第十九話 襲撃（まちぶせ）（後書き）

用語解説

（※1）集団を1体のエネミーとして扱うこと。1トループは約10人。

（※2）矢を一斉に放ち、広範囲に渡って攻撃する弓技。

レンジ遠距離、範囲内の対象全体に物理ダメージ（LV）d6を与える。

（※3）一か八かの捨て身の攻撃をする自爆技。発動にはMPを2倍消費する。

レンジ密着、物理ダメージを（LV）倍にするが、防御値を0にする。

これを使用したターンはパッシブも含め、一切の行動が出来ない。

※選択ルール…範囲攻撃（採用にはGMの許可が必要）

・複数の対象を同時に攻撃出来るルール。

中心となる目標から指定されたレンジ内にいるエネミーを攻撃対象に追加出来る。

第二十話 休息（ひとやすみ）

「痛え、痛えよ……、畜生、あの白仮面野郎！ 話が違うってんだ、くそつたれ！」

「……ふん、足止めにもならんとはな」

ルイズ達が立ち去っても傭兵達の拘束は解けず、身動き出来ずに転がされた彼らはただただ呻くのみ。そんな彼らに酷く見下し切った声が掛かる。いつの間にか白い仮面を付けた雇い主が男達の傍に現れていた。

「手前え、何が『相手は素人』だ！ 無茶苦茶手強いじゃねえか！
！」

その姿を見るや、男は唾を飛ばして噛み付く。だが怪人はそれに構う事無く、懷から短刀を引き抜き一閃。風の刃が青銅の鎖を切り裂き、彼らは自由を取り戻した。

「契約はまだ有効の筈だ。街で待機している連中と合流し、手筈通り襲撃をかける」

それだけ言うと白仮面は踵を返す。その背中に傭兵達は絶縁状を叩き付けた。

「冗談じゃねえ！ 俺はこの仕事を降り……」

いや、叩き付けようとした男がそれを言い切る前に一陣の風が吹く。そして男は永遠にその台詞の続きを口にする事が出来なくなつた。

何か重たいものが落ちる音が響く。そして次の瞬間、盛大な水音を立てながら男の身体はゆっくりと地面に倒れ伏した。

……その頭部にあるべきものを無くした姿で。

「ああっ！？ ジョーンズ！！」

「て、手前え！ 一体全体、何のつもりだ！！」

突然の事に呆気にとられた傭兵達が仲間が倒れた音で我に返る。とは言え得物であった弓はルイズ達に取り上げられていたので、今の彼らは徒手空拳。

対する怪人が握るのはレイピアのような杖剣。その切っ先を男達に突付け、白仮面は低く唸る様に吐き捨てた。

「逃げたら殺すと言った筈だ。それとも俺に勝つつもりか？ 丸腰の貴様らが」

『ぐっ……』

言葉に詰まる傭兵達。

彼らとて戦場を駆け抜けた傭兵、メイジを相手取ったとしても充分に渡り合う自信はある。けれどそれは装備や作戦が十二分に整っていた場合の話であり、人数に優るとは言え素手で、しかも凄腕のメイジを相手取るのは無謀としか言い様が無い。

両手を挙げて降参の姿勢をとる傭兵に、彼らの雇用主は満足そうに頷くと言葉を続けた。

「……奴らの實力を見誤っていたのはこちらも同じだ。今回の失敗は見逃してやる。だが二度目は無いぞ？ 怖じ気づいてこの場で俺に殺されるか、それとも仕事を続けるか……好きな方を選べ」

その日、貴族や豪商御用達の老舗『女神の杵』亭は早朝から慌ただしかった。

こんな時間だと言うのに貴族が五人も押し掛けて来たのだ。従者も二人付いている。

貴族が従者を連れて歩くのは当たり前、しかし押し掛けて来た貴族はほぼ身一つの上に馬三頭にグリフォンと風竜が一匹ずつと言う纏まりの無い構成。まして主より従者の数が少ないとくれば誰とて怪しむ。

面倒事を嫌った店主は丁重に断ろうとして、その中に有名人の姿を認めて固まった。

「急で悪いが密命でね。済まないがすぐに部屋を用意してくれるかな？」

相部屋で構わないから」

魔法衛士隊隊長ワルド子爵、トリスティンでも有数の実力者の言葉が決め手となり、『女神の杵』亭は時ならぬ客人を迎え入れようと天地をひっくり返す大騒ぎとなった。

「なんだか申し訳ないですね。私達の所為でこんな大騒ぎになってしまっ」

「ほほほ本当にそそそうですねねね」

「……もうちょっと楽になさいなシエスタ」

一生懸命眠気と戦う従業員を見たトモがそう漏らす。その隣では一生縁がなかった筈の高級宿にガチガチに緊張したシエスタが震えていた。

そんな彼女をルイズが宥めているうち、乗船交渉のため『棧橋』へ出向いていたワルドが戻って来る。

「……アルビオン行きの船は明後日、いやもう明日だな。とにかく明日にならないと出ないそうだよ」

「あら、どうして今日は船が出ないんですの？ ……ええと、ミスタ？」

席に着くなり困った顔で告げるワルドに理由を尋ねようとしたキュルケが言葉に詰まる。今更ながらワルドの名前を聞くのを忘れていたのを思い出したのだ。

ワルドも名乗っていなかった事に思い至り、苦笑いしながら自己紹介をする。

「女王陛下の魔法衛士隊、グリフォン隊の隊長ワルド子爵だ。君たちとは？」

「あら、これはご丁寧に。私はゲルマニアからの留学生でキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーと申します。こちらに居るのがガリアからの留学生でタバサ。二人ともルイズの級友ですわ」

キュルケの自己紹介を聞いたワルドが片眉を上げ、ルイズを見る。その視線に気が付いた彼女は肩を竦めて頷いた。

「……成程、何やら深い事情がありそうだから追求は止めておこう。だが此処から先は王家の秘事に関わる事だからね。済まないが一休みしたら学院に戻ってくれないだろうか？ さもなくば先程ルイズ

が言った通り、衛士に逮捕してもらうしか無いんだが」

「それは先程の問いに答えていただけたら考えますわ、ミスタ・ワルド？」

ワルドの言葉にキュルケが噛み付く。恋多き彼女にしては珍しい反応である。

「今夜は『スヴェル』の月夜だろう？」

明日の朝、アルビオンが最もう・ロシエールに近付くんだ」

「ふむ、ならば今日はゆっくり休めますね。とりあえず昼まで一眠りしましょう。昼食をいただいてから情報収集に務め、夕方またここに集合。これで宜しいですか？」

トモの提案に一同首を縦に振る。襲撃と強行軍の疲れもあって、全員とにかく早く休みたかったのだ。それを見たワルドが鍵束を取り出す。

「とりあえず貴族用が三部屋と従者用が一部屋取れた。部屋割りだがミス・ツエルプストーとミス・タバサが相部屋、ギーシュ君が一人部屋でどうだろう？ トモ君とシエスタ君は済まないが偽装の為だ。従者用の部屋で良いかね？」

「今更偽装も意味ないとは思いますが了解しました。シエスタさんは？」

「え？ あ、こ、困ります！ 流石に男の方と同室は……、あ、いえ、トモさんが嫌って訳じゃないですよ？」

従者にしては態度の大きいトモ達に、その正体を推測しているのであろうひそひそ話に興じる従業員達を横目で見ながらトモはシエスタに話を振る。

同意を求められた彼女が真っ赤になってわたわたしているのを見

て、キュルケが苦笑いしながら助け舟を出した。

「じゃあシエスタは私達のところにいらっしやいな。タバサも良い？」

「……問題ない」

ワルドに睨まれ、慌てて立ち去る従業員を見送りながらタバサは生返事を返す。

と、そこでトモが名を呼ばなかった人物に気付いた。

「あ、ご主人はどうするんですか？」

「僕と同室だ」

その言葉にギョツとするルイズ。キュルケ達も啞然としてワルドを見た。

「あ、あの、ワルド様？ それはまだ早過ぎると思いますわ。ほら、私達まだ結婚している訳じゃありませんもの」

顔を赤くしながら抗議するルイズをひたと見据え、ワルドは理由を告げる。

「大事な話があるんだ。二人きりで話がしたい」

「午後の探索に支障がない程度でお願いしますよ？ では……」

「あっ……」

その遣り取りに動じる事も無く、トモは鍵束の一つを拾い上げて部屋に向かう。

慌ててルイズが呼び止めようとするが既に遅く、その後ろ姿は従者向けの部屋が並ぶ区画に消える。一瞬こちらを振り向くが、その

表情を窺い知る事は出来なかった。

「……どうしたの、彼？ 何だかちょっとおかしいわよ？」

「そうだね。普段なら『幼女趣味とは随分なご趣味ですね』位は言
いそうブあっ!？」

鉄扇の一撃を喰らい、床と同じ一枚岩から削り出されたテーブル
に沈むギーシュ。いつの間にか彼の後ろに回り込み、折り畳まれた
鉄扇を首筋に叩き込んだルイズがその美貌に相応しい可憐な笑みを
浮かべて一同を見る。

「あらあら、ギーシュったらこんなところで寝ちゃうなんて……。
さあワルド様、彼を部屋まで送りがてら私達も参りましょう？」

「「「イエスマム!!!!」」」」

ワルドを含めた全員が直立不動で敬礼を返す。タバサでさえそれ
に逆らえなかった。

重たい鉄扇で貴族の子女らしく優雅に口元を隠して「ほほほ」と
笑ってみせるルイズが、かつて敵対したどんな相手よりも遥かに恐
ろしかったのだ。

（笑顔は本来攻撃的なものだというけど、あれはそんなチャチなも
のじゃ断じて無い）

ギーシュを『レベテーション』で持ち上げ、びくびくしながら歩
くワルドに着いて行く桃色の後ろ姿を見送りながら、タバサは「今
ならミノタウロスや火竜と戦っても怖く無い」と言う確信を得てい
た。

まだ目を覚まさないギーシュを文字通り部屋に叩き込み、ルイズ
達の姿がこの宿で一番上等な部屋に消えていくのを見届けた一同か

ら安堵の溜息が漏れる。

「……私、これからはルイズをからかうの、止めるわ」

「あの、穏便にミス・ヴァリエールを起こす方法、ご存じありませんか？」

ダラダラと脂汗を流しながら今後の付き合い方を模索するキュルケとシエスタに、タバサは額に滲んだ冷や汗を拭き取りながら「諦めろ」と言おうとして……、不意に思考の海に沈んだ。

（それよりも、彼は一体……？）

先程の襲撃以降、トモの様子がおかしいのは皆気付いている。

……けれどタバサは何となくその理由を察していた。

（……でも、それは有り得ない。本当にそうだったとしても、私達に出来る事は無い）

それは彼女にも覚えがある感傷だった。それを乗り越える為には尋常じゃない苦労が伴うが、乗り越えられれば案外楽なものである。

だが彼にその方法が使えるだろうか？ 彼が『冒険者』、決して諦めないことが信条の人間である以上、その道を選ぶとは到底思えない。

そこまで考えが及んだところで、タバサはとある可能性を思い付く。

『冒険者である事』と『タバサのようになる事』は、もしかしたら水と油の様に相反すると言う事ではないのか？

ひょっとしたら、彼の言う『冒険者の資格』とはそう言う事なのだろうか？

「……？、どうしたのタバサ？」

だとしたら期待外れにも程がある。タバサがそれを『諦めた』のは、それを犠牲にしてでも成し遂げたい『目的』があったからに他ならない。その覚悟こそ彼女の支えであった。

非情に徹する事を良しとしない『冒険者』の道は、彼女にとって何の意味も無い。

「ちょっと、タバサ、顔色が悪いわよ？どこか痛いのか？」

けれど彼が使ってみせた秘薬、あれだけは別だ。

どんなに高級な『水の秘薬』だろうとそれは魔法の効果を高める為のものであり、メイジが居なくてはただの水。しかし彼が使った秘薬は飲み干すだけで傷を癒した。それも重傷だった彼を即座に戦線復帰させるほど強力に、だ。

そう言った『冒険者』の秘薬の中にはタバサが求める効能を持つものもあるかも知れない。それを『諦める』のはまだ早い。

「タバサ、ねえタバサ？」

「ミス・タバサ、どうされました？」

問題は他にもある。ルイズ達が使っていた秘薬は『冒険者』にしか扱えない。

だが、それとなく聞き出したところトモの故郷では『冒険者』の活躍により一般人も恩恵を受けていたと言う。タバサはそこに光明を見出す。

（『神器』は駄目でも、『クラススキル』なら……）

ハルケギニアの医療は『水』の系統頼り。タバサも『水』と『風』

ではあるが、彼女は治癒術を得意としていない。だが『冒険者』には治療に特化したクラスがある。

それに覚醒さえしてしまえば……

（私の『目的』を果たす事が、出来るかも知れない……！）

先日のサンク勝負、あの時はイカサマを見抜けずに後一步まで追い詰められた。しかし今度の相手はちんけなイカサマ野郎とは違う。正真正銘凄腕のギャンブラーだ。

この勝負においてルイズ達は『切り札』だ。タバサに配られた手札は少なくとも、この『切り札』なら場をひっくり返すだけの力がある。

（……やはり暫くは彼らと付き合う必要がある。この遠征で、彼らからどれだけのものを引き出せるかが鍵）

とりあえずの方針を固め、思考の海から還って来たタバサの頬に柔らかい何かが当てられる。それがシエスタの掌であると認識する間もなく、その見掛けからは想像もできない剛力のビンタがタバサの小さな身体を吹き飛ばした。

「ぶほっ!？」

「ああっ!？ ちょっとシエスタ、やり過ぎ、やり過ぎ!!！」

「ええっ!？ ででででも、気付けにはこれが一番だって曾祖父ちゃん……!!！」

冒険者中最大の筋力を誇る武闘派メイドの目の覚めるような一撃は、逆にタバサの意識を刈り取った。椅子から吹っ飛んだ親友の惨状にキュルケは愕然とし、曾祖父譲りの気合い入れが齎した惨劇にシエスタは戸惑う。

そんな三人の様を遠巻きに見ていた従業員達の顎がかくんつ、と落ちる。貴族に手をあげる従者と言う有り得ないものを見たからだ。

「……ミス・ツエルプストー、ミス・タバサは多分お疲れになられたんだと思います。」

あの強行軍の直後に先刻のミス・ヴァリエールの剣幕では……」
「それもそうね。私も何だか疲れちゃったし、もう休みましょう。そうしましょう」

従業員達の視線に気付いたシエスタが平静を取り繕い、それに気付いたキュルケも追隨する。良く見ればキュルケは冷や汗を流し、シエスタは若干青ざめていたのだが。

「と、とにかくミス・タバサをお連れしましょう……よつと」

誤摩化す様にタバサと一行の荷物を抱え、シエスタは指定された部屋に向かう。

「ミス・ツエルプストー、申し訳ありませんがドアを開けていただけますか？」

「……仕様が無いわね。ちょっと待ってて、今開けるから」

二つあるベッドの片割れにタバサを横たえる姿は、兄弟の面倒を見るうちに身に付いた母性溢れる仕草も相俟って、遊び疲れた子供を寝かし付けるお母さんにしか見えない。キュルケはその光景を微笑みながら見守る。

「……何か？」

「いいえ、何でも無いわ。……このままじゃ眠れそうに無いな、っ
て思っただけよ」

「そうですね、それでしたら何か頂いて来ましようか？」

「それくらいなら自分で頼めるわよ。それよりタバサの事、お願いね」

そう言つてキュルケは先程から遠巻きに彼女達を見ていた従業員達に向かう。真直ぐ自分達に向かつて来る彼女に慌てて姿勢を正す従業員達に、キュルケは「楽にしてて良いわよ」と言いつつ軽めの酒を頼む。

「それでしたらヴァンシヨ（※ホットワインの事）が宜しいかと」

春も半ばを過ぎたとは言え、山間部にあるラ・ロシエールはまだ肌寒い。いささか季節外れではあるがヴァンシヨの温もりは有り難かった。

「じゃあ、それを三杯持つて来てもらえるかしら？」

「さ、『三杯』ですか？ ……いえ、承りました。すぐにお部屋にお持ちします」

お願いね、といって踵を返すキュルケの後ろ姿を従業員達は惚けた様に見送る。

いや、従業員達は実際に呆氣に取られていたのだ。

『貴族を張り倒す従者』と『それを咎めない貴族』と言う、決して有り得ないものを目撃したが故に。そしてごく自然に従者と酒を酌み交わす貴族の存在に。

キュルケもシエスタも意識して振る舞っている訳ではない。フーケ追撃、いや決闘の日以来の付き合いでお互い遠慮が無くなった、それだけだ。

最低限の礼儀こそ守るものの、彼女達の関係は『友達』と言って差し支えない。特にフーケ戦以降の関係は、秘密を共有する『戦友』とも言えた。

先程の暴挙にしても、キュルケはシエスタに悪意が無い事ぐらい承知している。むしろ純粋な善意の行動であり、いつものじゃれ合いの延長だと思っていない。

だが事情を知らぬものから見れば、それはやはり『有り得ない』
としか言えない。

ハルケギニアにおいて平民と貴族を隔てる断崖は絶対に乗り越えられぬもの。特にトリステインではそれが顕著だ。

なにせ貴族と平民が同じ席に付くことすら不敬とされるのだから。だから尚更その『不敬の極み』をあつさりと許すキュルケと、それを平然と受け入れるシエスタが理解出来ない。キュルケの口ぶりから察するに、気絶させられた少女もそれを受け入れるのだろう。

（あの奔放な振る舞いからしてトリステインの貴族様じゃ無さそう
だけど……）

従業員は蜂蜜と砕いた香辛料を入れた赤ワインを火にかけながら考える。

地味なコートを羽織った従者も随分気安く貴族に接していたし、おそらくその主であろう少女がメイドにかけていた気遣いはまるで手のかかる姉妹に向けるそれだ。

（——あれを羨ましいと思うのは、間違ってるのかね？）

貴族と平民、従者と主、そんな関係を超えたような彼女達の在り方。

もしもそれが彼女達だけではなく、自分達も含めたハルケギニア

の全てで繰り広げられたなら、それはどれほど優しい世界なのだろうか？

そこまで考えたところで従業員は苦笑する。平民は貴族に従うもの、それがブリミル降臨から六千年もの間変わらぬ『常識』なのだ。

（そうさ、あの嬢ちゃん達が『非常識』なだけなんだ。あたし達には関係無いよ）

ワインを煮立たせないように注意深く見守り、香辛料の香りが十分に移った事を確認してから暖めた陶製のカップに注ぐ。マドラーの代わりにシナモンで軽くかき混ぜれば『女神の杵』亭オリジナルレシピのヴァンショの出来上がりだ。

出来上がった『三杯』のヴァンショを慎重に運ぶ従業員はそう結論付ける。けれどその瞳には諦観以外の何かが微かに揺らめいていた。

貴族向けだけあってルイズ達の部屋は一際豪華な造りをしている。天蓋付きの大きなベッドが並び、一階と同じく一枚岩から削り出された机には手の込んだレースのクロスが掛けられていた。

ワルドは平民なら銘柄を見ただけで震えが止まらないであろう高級銘柄のワインを惜しげも無く開封し、陶製の酒杯に注ぐ。

「折角だから一杯やろう。ルイズもそこに座ると良い」

「そうね。このままじゃ眠れそうにないし、寝酒と言うには時間が

おかしいけれど」

勧められるままに席に着いたルイズ。ふと窓の外を見やれば、そこにはすっかり白んだ空と夜明けと共に動き始めた街の姿があった。

「どうしたんだいルイズ？ 何か見えるのかい？」

「ええ。見えますわ。今日を生きる為に『戦う』人々の姿が」

『戦う』——良家の子女から出たとは思えない物騒な比喻に、それを聞いたワルドの眉が寄る。けれど当のルイズはそれに気付かない。

一瞬の静寂。それを破ったのはワルドの問い掛けであった。

「……殿下から預かったものは、きちんと持っているかい？」

「大丈夫。指輪も手紙も、ここに」

そう言ってルイズは自らの薄い胸を押さえる。そこに感じる硬い感触に安心しながらも、それを預かったときの事を思い出す。

『姫様、幾ら何でも指輪だけで身分証明しろと言うのは無謀ですわ。まして戦時下の事、疑わしきは処刑と言う事も有り得ますもの』

ルイズの指摘に不備を自覚したアンリエッタはその場で手紙をたためる。そして書き終えたそれを読み返し、哀しげに首を振り……再びペンを取ろうとした所をルイズに阻止された。

『それだけはいけません。証拠を残してしまえば、振り出しに戻ってしまいます』

『……でも、私は自分の気持ちに嘘は吐けません。国を憂いてもこの一文だけは』

『駄目です!』

思わず怒鳴りつけたルイズに王女は二、三度瞬きをした後、その目を伏せる。

『ルイズ……貴女は誰かを愛した事が無いからそう言えるのだわ。本気で好きになったのなら、他の何物を捨てても良いと思うものよ。私にとってそれがウェールズ様ただだけ、この気持ちを裏切る事は出来ないわ』

それはどれほど強い決意だったのだろうか。先刻までめそめそ泣いていたとは思えない力強い眼光を受け、思わず怯むルイズ。

しかしルイズとて譲れない。事はアンリエッタのみならず、このトリステインに生きるものの全ての未来が掛かっているのだから。

必死に説得を試みるルイズと頑なアンリエッタ。結局王女を説き伏せたのは、

『証拠を残さないのなら、ご主人に言伝すれば良いのではないでしようか?』

と言うトモの一言であった。

「姫様を説得するのは苦勞したわ。ええ、本当に……」

「ううむ……そんな事が……」

ルイズの語る王女の狂態に若干引くワルド。まあ、その前の不敬極

まりない遣り取りを知れば彼もひっくり返っただろうが、流石にそこまでは教えていない。

「……そ、それで、殿下の伝言とは一体なんだったんだい？」

「それはお教え出来ません。私に言伝を預けて下さった姫様の信頼を裏切れないもの」

（……あんな伝言、誰にも言えないわよ）

内心苦々しく思いながらも、あくまでにこやかな表情を崩さない。そんなルイズに「それもそうだね」と返し、ワルドは自分の杯を掲げた。ルイズも自分の杯を取る。

「何に乾杯するべきなのかしら？」

「そうだね……僕達の再会と、任務の成功を祈念してと言うのはどうだろう？」

悪くないわね、と言ってルイズは杯を合わせた。

豊かな香りが口腔を経て肺を満たし、心を落ち着かせる。

けれど何か物足りない。何かがひと味欠けている様に思えてならないのだ。

それを見つければ出そうと思惑の海に入りかけたルイズを、ワルドの一言が引き止めた。

「しかし驚いたよ。ツェルプストー嬢の件もそうだが、任務に出る前の用意周到さや姫様の説得……、一体どこでそんな事を覚えたんだい？」

ルイズは言葉に詰まる。まさか『冒険者になったからです』などとは言えない。

だから彼女は自分の使い魔に丸投げした。

「彼に……、トモに色々聞いたの。彼の故郷はいろいろ変わった風習があるから、考えさせられる事も多いわ」

「そういえば彼はロバ・アル・カリイエで何でも屋をやっていたそうだね。成程、だったら色々知っていてもおかしくないか」

素直に信じてくれた事に安堵しつつも、彼を騙していることにルイズは一抹の罪悪感を抱かざるを得ない。

とは言え『実は異端ですよオホホ』とでも告げた日には、彼女の一族郎党がまとめて没落する。その中には当然ワールドも含まれていた。

（そうよ、これは彼の為でもあるんだから……）

必死にルイズが自己弁護を行っている、ワールドが遠い目をして語り始めた。

「本当に驚いたよ。あの小さなルイズが、いつの間にか成長していったんだからね。」

覚えているかい？ 昔、君のお屋敷の中庭で交わした約束の事を」

そう言われたルイズが思い出すのは、やはりあの夢である。相変わらず最後の方が思い出せないが、子爵らしき少年との語らいは間違えようが無い。

「……あの、池に浮かんだ小舟の事かしら？」

「そうだ。君はご両親に怒られたあと、いつもあそこでいじけていたからね。」

まるで捨てられた子猫のように……」

ワールドが語る昔話に、ルイズは思わず吹き出した。成程、捨て猫とは上手い例え話だ。少なくともあの当時、彼女が味わっていた絶望は正しくその通りだったのだから。

「ふふっ、変な事ばかり覚えていらっしやるのね。

でもあの頃はお母様に叱られる度、自分は要らない子なんだって思っていたもの。

お姉さまが優秀だったから比べられてばかりだったし」

自虐気味のその言葉を、ワールドは首を振りながら否定する。

「それは違うさルイズ。確かに君は失敗ばかりしていたけれど、僕は君が凄いメイジになるってことを確信していたよ。君は誰にも無い魅力を放っていた。そう、始祖ブリミルのような偉大なメイジになる、そんな予感を感じさせてくれるんだ」

「……それって、異端の発言よワールド様？

いくらなんでも、始祖と並ぶようなメイジなんて言い過ぎでしょうに」

ルイズは呆れながら嗜める。その台詞で冷静に戻ったらしく、ワールドは赤くなった頬を掻きながら残ったワインを一息で煽った。

「……済まないルイズ、どうも熱くなっていたようだ。でもこの気持ちは本物さ、きっと君は偉大なメイジになれるだろう。僕も並のメイジじゃないからそれが判る。

……信じられないかい？」

ルイズは首を縦に振る。きっとこれは彼流の冗談だと思っていたからだ。

—— 続けて放たれたワルドの言葉を耳にするまでは。

「ならば証明しよう。ルイズ、この任務が終わったら僕と結婚して欲しい」

「……………え？」

唐突なプロポーズに、ルイズの思考が停止した。それに構わず、ワルドは台詞を続ける。

「僕は魔法衛士隊の隊長では終わらない。

いずれは国を……、このハルケギニアを動かすような貴族に成りたいと思っている。

そんな僕が認めたんだ。君はきっと、歴史に名を残す素晴らしいメイジになれるって。

僕の一生を賭けても良いくらいにね」

一旦言葉を切り、ワルドはルイズに熱の籠った視線を向ける。

「君ももう十六だ。自分の事は自分で決められる年齢だし、お父上も許して下さる。

ずっとほったらかしだった事は謝るよ。けれど、全ては君に相應しい貴族になる為だったんだ。君の隣に立つ為に、僕の青春を国に預けてまでしてね」

「ワルド、様……」

「君の婚約者だなんて、言えた義理じゃないのも判っている。

……それでも、僕には君が必要なんだ、ルイズ」

ルイズは混乱している。突然の事に頭がオーバーヒートを起こしていた。

けれど彼女の冒険者としての部分が冷静に警告を発する。

ワルドはずっと自分を愛していたと言う。では自分は、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールはどうだろうか？

『本気で好きになったのなら、他の何物を捨てても良いと思うものよ』

王女の言葉が甦る。自分はあそこまで一途にワルドの事を愛せるだろうか？

……考えるまでも無い。無理だ、無理に決まっている。ルイズは冒険者の事をワルドに告げていない。だがワルドを本当に愛しているのなら、王女のように冒険者を止めてしまえば良いのだ。

そう、『諦めない』と言う運命神との誓いを反古にするだけで、ルイズが持つ冒険者の資格は跡形も無く消え失せる。それをしないのは、彼女が冒険者に未練があるから、

——即ち、ワルドを本当に愛していないだけなのではないか？
そんな思いが彼女を踏みとどまらせていた。

「……どうやらいきなり過ぎたようだね。返事は今でなくてもいいよ。でも、この度が終わるまでには君の気持ちも僕に傾く筈さ」

俯いたまま黙り込むルイズを見て、ワルドも流石に性急過ぎたと感じたらしい。

苦笑いしながら返答期限を先延ばしにしてくれた彼を見て、ルイズは申し訳なく思う。

「それじゃあ、もう寝ようか。午後からも忙しくなりそうだしね」
そう言うと、ワルドはルイズのおとがいに手をかける。

それが唇を合わせる仕草だと思い出したルイズはそつと身を離す。

「……それは、まだ早過ぎましたよ?」

「……そうみたいだね。まあ、急がないよ僕は」

キスを拒絶されたにも拘らず優しく微笑むワルドに若干の罪悪感を覚えながらも、何故かルイズはほっと胸を撫で下ろしていた。

「ハーブティーも悪くないんですが、食後にはやはりコーヒーが欲しい所ですね」

「あら、貴方の国じゃ『はあぶていー』って言うの、これ?」

中天より西寄りに傾いた日の光に照らされた『女神の杵』亭の一階、夜は酒場となるホールにて遅めの昼食を摂るルイズ達一行。食後の一杯を傾けつつ朗らかに雑談を交わすトモとキュルケ、だが他の面々の表情はあまり良いとは言えない。

「基本的に日本で飲まれていたのは緑茶ですね。『茶の樹』と言う木の葉っぱを摘んで揉み解した後、蒸して乾燥させたものです。発酵させて作る紅茶とか、半分だけ発酵させた烏龍茶とか色々種類があるんですよ。」

で、コーヒーと言うのは……」

「……君たちは余裕だね。疲れてはいないのかい?」

お茶談義に花を咲かせるトモ達を見て、若干青い顔色のギーシュが問う。

それも無理は無かろう。何しろつい先程、彼はトモ達に叩き起こされたばかりなのだから。幾ら一眠りしたとは言え、強行軍の疲れが抜けた訳ではなかった。

「疲れていない訳じゃありませんがね、一晚二晩の徹夜には慣れています。」

この程度なら問題ありません」

「私もよ。ギーシュ、貴方だって夜遊び位した事あるんでしょう？この程度で根を上げてちゃ男が廢るわよ？」

「よよよ夜遊びなんてててしてなないささささ」

何やら凶星を突かれたらしく、判り易くどもるギーシュを生暖かい目で見ると一同。

そしてトモが空気を入れ替える様に手を叩き、今後の進退を決める会議が始まった。

「さて、まずは情報収集から始めましょう。子爵、船の手配はお済みですか？」

「ああ。明日の朝一番に出航する船にねじ込んだよ。貨物船だから乗り心地までは保障出来ないが、緊急時だ。贅沢は言えんよ」

トモの問いにワルドが答える。

「それは重畳。では、出航までに半日と一晚の余裕がある訳ですが……」

「余裕は無いと思うわよ。むしろ今すぐ出立したいくらいだわ」

「……それは、どう言う意味だい？」

トモの台詞を遮り、ルイズは懸念を示す。その言葉にギーシュが首を捻った。

だが他の面々はその意味に気が付いたらしい。トモが顔を覆って天を仰ぐ。

「あのね、私達を襲った奴らは時間稼ぎを狙っていたのよ？　じゃあ、何の為に時間が欲しかったと思ってるの？」

「それはもちろん僕たちを迎撃するため——っ!？」

ルイズの説明に、一拍遅れてギーシュもその意味を理解した。

「そうよ、連中は『ラ・ロシェールで』『私達を』『迎撃したいのよ？』だったら『今』、『ここにいる』『私達を見逃す筈ないでしょう？』

そう、言わばこの地は敵陣そのものと言えるのだ。だのに彼らは見張りも立てずに惰眠を貪るという、隙だらけの行動をとってしまった。

襲撃を受けなかったのは幸運としか言い様がない。……いや。

「襲撃がなかったのは、向こうも戦力を整える時間が必要だったから。」

そう考えると半日と一晚は長過ぎる」

メイジ殺しは事前の準備が生死を分ける。

魔法を使う隙を与えない圧倒的な物量に綿密な作戦、人海戦術に必要な頭数揃え……

半日もあれば相当な準備が整えられるだろう。さらに半日与えられれば尚更だ。

そして気の緩みがちな深夜は奇襲には最適な時間帯である。

悪条件も此処まで揃えばいっそ清々しい。

「本当ならもっと早く気付くべきだったわ。不覚をとったわね」

ルイズがそれに気付いたのは、いつになく優しくシエスタに起こされた直後である。

彼女の明晰な頭脳なら早々に気付いていてもおかしくなかったが、プロポーズの件でテンパっていたルイズにそれを期待するのは酷と言うもの。とは言え危機的状況には変わりない。ルイズの話に聞き入っていた一同も渋面を作って考え込む。

「出航を急がせるのは？」

「無理だな。風石の積み込みが終わるのは明日の朝になるらしい。どんなに急がせても今日の夜までは動かせないだろう」

「それにアルビオンの情報は必須です。下手をしたら敵陣のど真ん中を突っ切る羽目にもなりかねませんし、少なくとも王子様の居場所位は把握しておかないと」

ギーシュの提案をワールドが否定し、更にトモが情報収集の必要性を訴える。

「手分けしてって訳にはいかないわ。

戦力の分断なんて、どうぞ襲って下さいって言ってるようなものよ」

「ふむ、ならば君たちは街中で情報収集に回ってくれたまえ。無論、全員でだ」

ルイズの懸念にしばし考え、一行全員での行動を促すワールド。

「判りました。子爵はどうなされますか？」

「僕なら単独でも何とかなる。出航を急かすついでに『棧橋』で情

報集めをしよう」

「なっ!?! 単独行動は危険だって、先刻ミス・ヴァリエールが……!?!」

トモの疑問に応えたワルドの台詞にシエスタが驚愕する。
しかしワルドは飄々とした態度を崩さない。

「確かにそうだが、僕はこれでも『風』のスクウェアだからね。
逆に単独の方が都合がいいのさ」

「……成程、固まって行動するよりは有効ね。
でもワルド様、余分な騒動はなるべく避けてくださいね?」

ワルドが言いたい事を察したルイズが釘を刺す。
以前ギトーにも語ったように『風』の本領はその早さにある。殲滅力では『火』に一步譲るものの、対人戦闘では他の追隨を許さない。

言い換えれば『風』の早さに着いて行けない味方は足手纏いでしかないのだ。

だからと言ってわざわざ敵に喧嘩を売る必要は無い。ルイズの忠告の意味を理解してか、ワルドは苦笑いしながら首肯した。

「判っているさ。さて、他に意見はあるかね?」

「……いえ、それで行きましょう。ご主人も宜しいですか?」

「そうね……そうしましょう。じゃあ夕刻に此处で集合ってことで
そう言ってルイズは席を立つ。

それにつられて皆が立ち上がりかけた所で、ワルドが思い出した
様に呼び止めた。

「ああ、ルイズと……使い魔君はちょっと待ってくれるかな?」

「え？」

「構いませんが、何か？」

呼び止められた二人を真直ぐ見返しながら、ワルドは何でも無い
事に様に告げた。

「いやなに、ちょっと僕と決闘して欲しくてね」

※ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール
種属／ヒューマン…4

HP…10／10 MP…13／14（※1） SP…10／10

※数値は現在値／最大値

EXP…19 所持金…151エキュール20スウ

進行中クエスト

・手紙の奪還（期限…アンリエッタの婚姻まで）

第二十話 休息（ひとやすみ）（後書き）

用語解説

（※1）休憩による回復後の数値になる

第二十一話 激闘（さぐりあい）

ワルドに導かれた一行が辿り着いたのは、空樽や空き箱が山と積まれた中庭の物置き場であった。かつての栄華を示す苔むした旗立台を見上げ、ワルドはこの宿の成り立ちを語り始める。

「もともと『女神の杵』亭はアルビオンからの侵攻に備える為の砦だったんだよ。この練兵場もその名残さ。古き良き時代、かのフィリップ三世の治下ではここでよく貴族が決闘したそうだよ」

「それはまた、物騒なお話ですね」

どこか懐かしむような、あるいは羨望するかのような語り口。それに返されたトモの台詞に、彼は苦笑いしながら首を振る。

「まあ実際はくだらない事で杖を抜き合ったそうだよ。例えば女を取り合うとか」

「……何処であつても男というのは変わりませんねえ」

呆れるトモだったが、その言葉にはほんの少しだけ共感が混じっていた。

「何処であろうと男の矜持は変わらんさ。名誉と誇りに人生を賭け、惚れた女に命を賭ける、それが許された時代も確かにあったのだから」

「確かに。男と少年の違いは玩具の値段でしか無い、なんて格言もありますしね」

違いない、と朗らかに笑い合う男二人を呆れた様に眺めるルイズ。その視線に気付いたのか、ワルドは少しだけバツが悪そうな顔を

した。

「済まないね、ルイズ。でも、僕の背中を預ける相手の实力を知らなければ、今後の任務にも差しさわるからね」

「それは判りますけれど……突然決闘なんて言い出すから驚きましたわ」

彼女がここに居るのは介添人を頼まれたからである。

いざとなったら身を挺してでも止めると覚悟を決めていたルイズだが、以外に気安い二人の態度には呆れるばかりであった。

「言葉が足りなかったようだね、それについては謝るしか無いよ。

……けれどこれは重要なことなんだ」

「作戦を立てるにも何処まで出来るかを知らなければ話になりませんからね」

「その通り！ 準備はいいようだね。では……」

「あ、少々お待ちを。どうせならそれらしく行きましょう。

私の国の作法じゃないんですが、面白い決闘の作法があるんです」

そう言うとトモはデルフリンガーを抜き、斜め上に突き出す様に掲げた。

「こうやってお互いの武器を交差させて、そのまま五歩ずつ離れて……」

五歩目を踏んだ所で振り向いて決闘開始、と言う物です。

時代物の演劇で良くやっていたんですが、子供の頃は憧れましたね。

近所の悪餓鬼共とつるんで良く真似ていましたよ。

そう、『さあ、ここからは遅い奴が死ぬだけだ』ってね」

遠い目で語るトモに少しだけ目を丸くしたワールドだったが、直ぐに破顔して頷く。

「くくく、確かに『男と少年の違い』は大した差じゃないね。
子供のお遊戯と一緒にされるのは癪だが……『早さ比べ』なら話は別だ」

そして杖剣を掲げ、デルフリンガーに交差させる。

「その話、乗ろうじゃないか！ 精々楽しませてくれ、使い魔君！」
「お誉めに与り恐悦至極。そのご期待に見事応えて見せましょう！」

少年の様に無邪気な笑みを浮かべ、二人は一步目を踏み出す。

「五」

キュルケが苦笑いを浮かべる。良い年をした男達が子供染みた理由で激突する姿に。

「四」

ギーシュが歯噛みする。互いの誇りを掛けたあの場所に自分が居ない悔しさで。

「三」

タバサが呆れた様に嘆息する。お遊びのような戦いに臨む生温い男達を見て。

「二」

シエスタが固唾を吞んで見守る。運命に戦いを挑む自分の姿を男達に重ねて。

「一」

ルイズが喉を鳴らす。どちらにも負けてほしく無い自分に気付いて。

そして――

「――ゼロ！」

決闘は始まった！

烈風がぶつかり合う。

振り向き様にデルフリンガーを振りかぶって突進したトモを、同じく杖剣を構えたワルドが迎え撃ったのだ。

「……早い！」

「お互い様です！」

膚力を注ぎ込んで剣を振り抜くトモ。意外に馬鹿力なそれを受け、ワルドの身体は羽根の様に宙に舞う。

すかさずトモが追撃を掛けるが、しかしワルドには届かない。咄嗟の『レビテーション』で浮かぶ彼の身体は、デルフリンガーの切っ先よりも高い位置にあった。

ならば、とトモは僅かに沈み込む。だが跳躍の前兆を察したワルドが『エア・ハンマー』を放つ。不可視の筈の風の塊を、けれどトモは手にした剣で受け流す。

そして魔法を放ったワルドはマントを翻して優雅に着地、距離を取りつつ体勢を整えた。

此処まで僅か数秒足らず。瞬き程の合間に起きた攻防に、ルイズ達は瞠目する。

「確か魔法は同時に使えない筈では？」

「何、空中にいる内に『レビテーション』を解いただけさ。

後は着地までに『エア・ハンマー』を撃てば良いだけのこと」

トモの疑問にワルドは軽口で返す。

とは言え、あの一瞬で二つの魔法を唱えるなど並のメイジでは不可能だろう。けれどワルドはそれを実践した。どうやら魔法衛士隊隊長の肩書きは伊達ではないらしい。

そのワルドは、相対して初めて知ったトモの実力に舌を巻いている最中だった。

剣士に取って間合いは重要な要素である。どんな威力であろうと当たらなければ意味が無く、故に剣士との勝負なら『レビテーション』は定石と言っても良い。

しかしトモの強さは予想外であった。『風』メイジに追い付く速さと人間を軽々と弾き飛ばす剛力を兼ね備えた剣士に、ワルドは作戦を改める。

（あの早さではこの距離を維持出来ない！ 遠距離攻撃は諦めるしか無いか！）

その一方、トモはいつもの薄笑いを浮かべながら、内心で大いに焦っていた。

（まさか『レビテーション』にあんな使い方があったとは……！
原作知識に頼り過ぎましたか！？）

先程の『レビテーション』は空を飛ぶ為では無く、飛び上がる為の補助……言わばジャンプ台の代わりである。

使うのは跳ね飛ばされた一瞬だけ。そして空中高く浮かんだワールドは『レビテーション』を切り、自由落下の最中に『エア・ハンマー』を詠唱したのだ。

高低差を活かした詠唱の時間稼ぎ、原作では見せた事の無い荒技であった。

「おいおい、旦那と互角たあとんでも無えな！　その上魔法まで使って来るたあ、こりゃ流石に旦那も勝ち目無いかもよ？」

「……インテリジェンスソード？　変わった剣を使っているね」

突然喋り始めたデルフリンガーに驚いたのか、ワールドが目丸くする。

だがトモはそれに応えず、無言でデルフリンガーを正眼に構え直した。対するワールドも半身を引き、杖剣を突付ける様に構える。

互いの剣先が微妙に揺れ、一定のリズムを刻む……それが不意に乱れた！

（（来る！））

トモの胸に迫る鋭い切っ先を、デルフリンガーの鎧に滑らせてずらす。そのまま打ち込まれた斬撃は、けれどワールドに届くことなく

宙を切った。

本来そこにある筈の標的を失って体勢を崩したトモに再び杖剣が迫るが、素早く切り上げられた刃に再び阻まれる。

そして大上段に振りあげられた剣が正面から振り下ろされ、ワルドもそれを受けるべく杖剣を頭上に翳そうと……

(……違う！)

いや、その寸前でワルドは杖剣を跳ね上げる。それは済んだ金属音を響かせて右から迫る白刃を受け流す。

日本に古くから伝わる剣術の型の一つ、『霞』の秘剣。これ見よがしに振り上げられた剣はただのフェイント、そこから横薙ぎに繰り出された本命の斬撃を読み切られ、トモの目が驚愕に開かれた。無論ワルドが日本の剣術を知る筈も無い。彼は己の直感に従って杖剣を振るっただけだ。けれど一連の遣り取りは、ワルドをして冷や汗を浮かべるに充分なものだった。

どちらとも無く間合いを取って仕切り直す。

この手番はワルドが先手ターンを取った。

フェンシングの様に突き出される杖剣の切っ先を捌き切るトモに、袈裟斬りに振り下ろされるデルフリンガーを薄紙一枚ほどの見切りで躲すワルド。

まるで二人掛かりの剣舞のようなそれは、一步読み違えただけで血が流れる斬撃の応酬である。試し合い(……)とは言えそれを見ている観客達、特にルイズにとっては心臓に悪い光景であろう。けれど、とルイズは思い返す。あの慎重な詐欺師が何故、このような理のない試合を受けたのだろうか？、と。

あの決闘やフーケ追撃、そしてアンリエッタ訪問の時でさえ、トモは自らの利を得るための工作をしている。ならばこの決闘ごっこ

も何らかの思惑があるに違いない。

だがルイズには彼の目的が判らない。もしかしたら本当に戦力評価のためなのかも知れないが、それを素直に信じるほど今の彼女は愚鈍では無くなっていた。

思考を巡らせるルイズを余所に、戦いは増々激しくなっていく。

最早何度目になるのか、横薙ぎに振るわれる刃を絶妙な見切りで受け流し、再び突きの体勢に戻ろうとしたワルドの表情が驚愕に染まった。

受け流された剣尖はトモの背後を指していた。だがその切っ先はそのままに、剣が真直ぐ突き出される――ワルドに向かって。

「ぐっ!？」

迫り来るデルフリンガーの柄頭を、ワルドは身体を捻って躲す。しかし無理矢理な躲し方に体勢が崩れてしまう。その隙を見逃さず、トモは長剣を大上段に振りかぶる。

しかしその剣は振るわれることはなかった。

「うおっ!？」

跳ね上げられる様にして襲い掛かって来る杖剣の切っ先。ワルドが崩れた体勢のまま身を捻り、一回転して切り上げたのである。

杖剣を柄で受け止めるトモ、そしてワルドはそのまま転がって距離を空ける。

そして再び突きの姿勢を取る彼に対し、トモはデルフリンガーを左の腰だめに構えて半身を前に乗り出した。

「あっ、あの構えは!」

「……勝負に出たわね」

その構えに見覚えのあるシエスタとルイズがそれぞれ驚きと期待に声を上げる。

それだけではない。その構えを知るキュルケとタバサは元より、それを知らぬ筈のギーシュや相對するワールドもまた、そのただならぬ気配に息を呑む。

「……それは、何だい？」

僅かに震えの混じったワールドの問い掛けに、トモは一言で返す。

「……拔刀術」

そう、それこそは彼の現行最大の必殺技たる『居合い斬り』の構えであった。

独特の反りを持つ日本刀の長所を最大限に生かし、足の運びから腰の捻り、手の返しから呼吸に至るまでを一息のうちに収める、日本剣術の絶技。

トモの口から漏れる呼気が静まり返った練兵場に飮する。幽玄の如きそれが不意に途絶え——刹那のうちに爆発する！

「いええええええいっ！」

練兵場を揺るがす気合いと共に、白光が弧を描く。あまりの速さに、デルフリンガーの白刃が光にしか見えなくなる。

されど三日月に歪んだ『閃光』を迎え撃つワールドもまた『閃光』であった。

「『エア・ハンマー』っ！——！」

「何いっ!?!」

轟音と共に現れた見えざる戦鎚がトモを、否、『ワールド』を弾き飛ばす。

跳ね上がった空気の塊に、ワールドが後方へ吹き飛んで行く。そして目標を失った白刃が空しく空を薙いだ。

「馬鹿な！ 一体いつの間にルーンを！？」

デルフリンガーの驚愕の声、されどそれはこの場に居る全員の代弁でもあった。

……いや、一人だけワールドの行動に心当たりがある。それは他でも無い、攻撃をかわされたトモ自身だ。とは言え、彼もまたワールドの行動に度肝を抜かれていたのだが。

そしてそれは大きな隙となってワールドの目前に晒された。

「『エア・カッター』っ！！」

「！、しまった！」

放たれた魔法はトモの右手に握られた剣を正確に射抜く。大技を放った直後で握力の緩んだ右手は、その衝撃に耐えられなかった。風の刃に弾かれ、吹き飛んで行くデルフリンガー。そして無手になったトモの喉元に杖剣が突付けられる。

「……勝負有り、だな」

杖剣を握るワールドが不敵に笑う。対するトモはいつもの無表情じみた薄笑いに、少しでも疑問の色が浮かんでいた。

それに気付いたのだろう。ワールドは先程の対決で何をしたのかを明かす。

「魔法衛士隊のメイジは杖を剣の様に扱ってルーンを詠唱するんだ。その中の一つに、小さな動作の合間を縫って気付かれない様に詠唱する術がある。もっとも君が余りに素早いものだから苦労したがね」
「……成程、それは気付きませんでした。それにこちらの思惑も見抜かれていたようですし、まさに完敗というやつですね」

そう、トモははワルドを自分の領分である接近戦に持ち込み、ルーンを唱える暇を与えなかった。如何なるメイジとて魔法を使うにはルーンを唱えねばならず、詠唱中はそれに集中するために隙だらけとなるのだから。

一方のワルドも彼の狙いは読んでいた。故に彼は『レビテーション』で距離を取ろうとしたのだ。間合いを外せば剣士の振るう剣はメイジに届かない。

その彼の計算を狂わせたのはトモの異常な素早さと、一人一人を跳ね飛ばす化け物じみた魔力である。最初の一撃を受け、それを知ったワルドは即座に魔法戦を止めて剣術勝負に持ち込んだ。しかしそれはワルドの罠だった。

『風』の魔法には剣の攻撃力を上げる『エア・ニードル』と言う魔法がある。杖剣を好むメイジなら必ず取得しているであろうそれを、ワルドは一度も使わなかった、いや『使えなかった』。

何故ならワルドは『エア・ハンマー』のルーンを既に唱えていたからだ。

「詠唱の隙を狙うのは『メイジ殺し』にとって初歩中の初歩だからね。だから裏をかいて先にルーンを唱えておいたんだ。

……こんな使い方をするとは思っても見なかったけれど」

自爆のダメージが残っているのだろう。ふらつきながら苦笑を浮かべるワルドの言葉に、トモは嘆息しながら天を仰ぐ。

「……やれやれ。ずいぶん意表を突けたと思っていたんですが、そこまで見切られていたとは……」

「正直言ってここまで追い詰められるとは思っても見なかったよ。特に最後の一撃、あれが決まっていたらと思うとぞっとするね。」

……誇って良いぞ、君程の剣士は今まで見た事が無い。剣の腕だけなら君は最強だ」

「それはどうも。ですが負けは負け、本当に魔法と言うのは厄介ですね」

その言葉を聞き、ワルドは頷く。

「そうだな。幾ら剣の腕が立とうと、魔法がある限り剣士はメイジに勝てない。」

今後の参考にしたまえ」

「……是非、そうさせて貰いますよ」

決着が着いたと判断したのだろう。二人の元へ皆が駆け寄る。

口々にやり過ぎを諫める声や敢闘を讃える言葉、そして怪我の心配を掛けて来るキュルケ達を押し分け、ワルドはルイズに語りかけた。

「……これで判ったろうルイズ。どんなに強くとも、平民の彼では君を守れない」

「だって貴方は魔法衛士隊の隊長じゃないの。強くて当たり前でしょう？」

「そうだよ。けれど僕達が行くのはアルビオンだ。敵を選ぶ余裕なんて無い。」

それとも君は強力な敵を目の前にして、私達は弱いのです、だから杖を収めて下さいなんて言うつもりかい？」

「……呆れた。それを言うためにこんな決闘を持ち掛けたの？」

ワルドの物言いに呆れるルイズ。己の強さを誇示したいが為にここまでするなぞ、子供の癩癩と変わらない狼藉であろう。

それを指摘されたワルドがぼつの悪そうな顔をする。畳み掛けようとしたルイズを押し止めたのは、先程まで死闘を演じていたトモであった。

「ご主人、子爵の言うこともそうです。とりあえずお互いの実力も測れたでしょうし、治療を受けたら早速情報収集へ行きましょう」

その言葉にルイズはとりあえず矛を収め、タバサにワルドの治療を頼む。回復薬は冒険者にしか効果が無いし、どう見ても勝者である筈の彼の方が重傷に見えたからだ。

目の前で行われた超人バトルに興奮したシエスタや敢闘精神に感動するギーシュ、無謀な決闘に少し呆れた様子のキュルケと無言で治療を始めるタバサを余所に、ルイズは一人謎の違和感を感じていた。

溪谷に挟まれたラ・ロシェールでは、午後の日差しもどこか陰りを帯びている。

それは一本外れた裏通りにある『金の酒樽亭』を、より陰鬱な雰囲気に彩っていた。

「あいつら無茶苦茶だ、冗談じゃねえ!!」

「ジョーンズがやられた、だと……!!? 畜生!!」

『金の酒樽亭』に先遣隊の面々が逃げ込んで来たのはつい先程のこと。

そして伝えられた仲間の死に様は、傭兵達を驚愕させるのには十分過ぎた。

「糞っ! あいつら殺してやる!!」

「どうやってだ? あいつらがどこに居るかも判らねえのに!!」

「けどよ、このままじゃ俺達もジョーンズみてえに殺されるかも知れねえんだぞ!!」

「……殺しはしない。お前達が俺の命令に従う限りはな」

いきり立つ傭兵の背後からかけられる声。ざわめいていた酒場が一瞬で静まり、そして一斉に声の出元……はね扉に顔を向ける。

そこに居たのは白い仮面を被った人影と、その一歩後ろで佇む妙齢の女性。今の今まで話題に上がっていた雇い主、その本人達であった。

「手前えっ! よくものこのこと——」

「馬鹿、やめろ!! 死にたいのか!?!」

激昂して踊り掛かろうとする傭兵を、周りに居た仲間が止める。

もみ合う男達を尻目に、背後の女が進みでてその手に抱えた袋を机に放り投げた。前金よりも大きな袋が、それに見合った重たい響きを立ててテーブルを揺らす。

緩んだ口から大量のエキュー金貨が零れ落ちた。

「前金の倍だ。無論死んだ男の分も含めてある。仕事に成功したら

「これの三倍出そう」
『んなっ!?!』

その言葉を聞いた途端、店内に居た全ての男達の動きが止まる。殴り掛かろうとしていた男さえ、驚愕のあまり呆然としていた。

「……どういう事だ?　こんなにポンポン金を出すなんて、手前ら一体何モンなんだ?」

傭兵を取りまとめていた古参の男が漏らした疑問に、白仮面は首を振る事で答えた。

「相手について調べが足りなかったのはこちらの落ち度だ。相手はスクウェア、魔法衛士隊の隊長にトライアングルが二人。その内一人はシュヴァリエだ。」

その上無名だが腕の立つ『メイジ殺し』が二人に、とんでもなく頭の切れる参謀役が付いている。かなり手強いぞ」

「ま、魔法衛士隊の隊長だと!?!　なんだその連中は!?!」
「馬鹿言うな!　そんな奴らに勝てる訳無いだろうが!!!」

余りと言えば余りの事に、傭兵達はこの世の終わりが来たかの如く騒ぎ出す。

当然であろう。スクウェアで魔法衛士隊の隊長といえはあの『閃光』の事だろうし、シュヴァリエ持ちのトライアングルはそれだけで脅威になる。しかも『メイジ殺し』に参謀が付いて来るとなれば最早軍隊と変わらない。

敵に回すには最悪の布陣、それを相手にすると言っているのだ、この雇い主は!

だが傭兵達の罵詈雑言にもたじろぐ事なく、白仮面は余裕ある態

度を崩さない。

何しろこの怪人達は、そんな最悪の敵に対抗する手段を用意していたのだから。

「安心しろ。今夜の襲撃にはお前達だけじゃなく、彼女も付いて行く。」

貴様らは彼女の襲撃を援護するだけで良い」

男の言葉を受けた女がフードを撥ね除ける。零れ落ちる『緑色』の長い髪を払い、女は未だ騒ぎ続ける傭兵達に向かって名乗りを上げた。

「あたしはロングビル、いや、アンタ達にはこう名乗った方が判り易いか。

……『土くれ』のフーケ、ってね！」

『『土くれ』エ！？』

トリステインにその名を轟かす大盗賊に、男達の驚愕の声が唱和する。

その反応に女……フーケは大きく頷くと、傭兵達にある作戦を提案した。

「……ってのがアタシの作戦さ。簡単だろ？」

「た、確かに簡単だし、実際にそいつらを引き受けるのがアンタ達だっただけのは判った。

けど、何なんだ？ 何をするつもりなんだアンタ達は！？」

『ひよっ子に毛が生えた程度のメイジを襲う』、大金と共に持ち掛けられたそれは簡単な仕事の筈だった。しかし相手は手強く、逃げ出した仲間は本当に殺された。

そして今度はあの『土くれ』が仲間だと言う。此処までくればどんなに巡りの悪い頭の持ち主でも「これはヤバイ」と思い始めるだろう。

しかし仮面と『土くれ』はその言葉を取り合わず、淡々と告げる。

「……金は充分に払う。逃げ出さなければ殺しもしない。だがな……」

そこまで言うと、白仮面は傭兵達を睨み付けた。

仮面に隠されて見えない筈の目に射抜かれた男達の背に冷たいものが走る。

「……逃げるのならば、裏切るのならば……貴様らの命は無いものと思え」

壊れた様に首を縦に振る傭兵達を横目に見ながら、フーケは『右腕』をさする。

先程の『作戦』は偽装である。彼女の本命はルイズ達一行との接触だ。

けれど、とフーケは自分の雇い主を盗み見る。相変わらず白い仮面に隠されたその顔を窺うことは出来ない。

（……こいつの出方が今ひとつ掴めないのが不安と言っちゃ不安だね。あの『冒険者』達でもちょっとヤバいかも知れないし）

見せしめに傭兵を惨殺した顛末は彼女も聞き及んでいる。むしろこの怪人が一人しか殺さなかったことの方が以外であった。

（とにかくあの子たちに接触することが第一だよ。それから後は……ぶっつけ本番だね。まさに『大博打』だよ）

不安はある。焦りもある。けれどフーケはそれを怖れない。
その姿はまるでこれから相對するであろう『冒険者』を彷彿とさせていた。

※ヤナギダ・トモ（柳田 智） 種属／ヒューマン…6

HP…14／14 MP…10／11 SP…10／10 ※
数値は現在値／最大値

EXP…16 所持金…5エキュール

進行中クエスト

- ・ルイズを守る（期限…ルイズの卒業まで）
- ・手紙の奪還（期限…アンリエッタの婚姻まで）

※ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール
種属／ヒューマン…4

HP…10／10 MP…12／14 SP…10／10 ※数
値は現在値／最大値

EXP…20 所持金…151エキュール20スウ

進行中クエスト

- ・手紙の奪還(期限…アンリエッタの婚姻まで)

エネミーデータ

- ・『閃光』のワルド…LV6 敏捷値…6／攻撃値…10／防御値…4 HP／MP…20／20

トリステイン騎士の頂点、魔法衛士隊「グリフォン隊」の隊長。衛士達のエースであり、実戦経験も豊富な『風』のスクウェアメイジである。

- ・保有スキル／エア・ニードル(※1)…LV3／エア・ハンマー…LV2／

エア・カッター…LV2／レビテーション…LV1

第二十一話 激闘（さぐりあい）（後書き）

用語解説

（※1）杖を中心に風の刃を纏わせる『風』魔法。

『風』属性ダメージに（Lv）d6を加算する（クリティカル値に1Lv）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2033n/>

ゼロの使い魔 ～使い魔は冒険者～

2011年11月20日05時07分発行